

栃木県埋蔵文化財調査報告第338集

川戸釜八幡遺跡・石仏遺跡

—国土交通省による湯西川ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査—

2011.3

栃木県教育委員会
財とちぎ生涯学習文化財団

かわど かまはちまん いしほとけ
川戸釜八幡遺跡・石仏遺跡

—国土交通省による湯西川ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査—

2011.3

栃木県教育委員会
財とちぎ生涯学習文化財団



遺跡遠景（東上空から撮影）



遺跡遠景（湯西川を挟み向かって左側が川戸釜八幡遺跡 西上空から撮影）



川戸釜八幡遺跡近景（南東上空から撮影）



石仏遺跡遠景（東上空から撮影）



川戸釜八幡遺跡 SI-395 完掘全景（北から撮影）



川戸釜八幡遺跡 SI-395 出土石冠



H14(c) 地区 石棺墓群完掘全景 (西から撮影)



SK-362 確認状況 (西から)



SK-362 完掘状況 (西から)



SK-362 側壁復元状況 (北から)



SK-363 完掘状況 (西から)



H17(a) 地区 石棺墓群完掘全景 (南西から)



SK-396 完掘状況 (北東から)



SK-397 完掘状況 (北東から)



SK-398 完掘状況 (南から)



SK-399 完掘状況 (北東から)



川戸釜八幡遺跡 SI-104 出土石器



川戸釜八幡遺跡 出土石器 (石剣・石棒類・独鈷石)

序

栃木県の北西に位置する日光市は、県土の約4分の1の面積を占めます。そのほとんどが日光国立公園に含まれ、四季を通じて変化に富んだ自然環境に恵まれています。また、当地区は本県最大の流域面積をもつ鬼怒川の最上流域にあたり、渓谷や大小の様々な滝などの景観、良質な温泉地にも恵まれ、観光地として大きく発展してきました。

このたび、国土交通省による湯西川ダム建設に先立ち、事業地内に所在する仲内遺跡、川戸釜八幡遺跡、石仏Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡の取り扱いについて、関係機関と協議の上、平成10年度から記録保存を目的とした発掘調査を行ってきました。

本報告書は、このうち川戸釜八幡遺跡・石仏遺跡に係わる調査成果をまとめたものです。本書が県民の皆様にとって、郷土の歴史を理解する一助になるとともに、各方面において広くご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から報告書作成に至るまで、多大なるご協力をいただきました国土交通省関東地方整備局湯西川ダム工事事務所、日光市教育委員会などの関係機関、並びに関係各位に対しまして、厚くお礼申し上げます。

平成23年3月

栃木県教育委員会
教育長 須藤 稔

例 言




1. 本書は、栃木県日光市湯西川字川戸平地内に所在する川戸釜八幡遺跡及び日光市湯西川字フリウギ・長沢ミネ地内に所在する石仏Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡の発掘調査報告書である。発掘調査は、国土交通省関東地方整備局による、湯西川ダム建設関連工事に伴う事前調査である。
2. 発掘調査は平成10～19年度の10カ年に渡って実施し、栃木県教育委員会事務局文化財課の指導により財団法人栃木県文化振興事業団が、また平成12年度からは組織改編により新たに発足した財団法人とちぎ生涯学習文化財団が国土交通省関東地方整備局と受託契約を締結し、埋蔵文化財センターが調査を実施したものである。
3. 発掘調査から整理作業・報告書作成までの担当者は、以下のとおりである。

平成10年度（発掘調査）		主任	旭山 久
調査第二課	課長 中山 晋	主任	片根義幸
	主任 植木茂雄	平成16年度（発掘調査・整理作業）	
	技師 片根義幸	調査第二担当	係長 田熊清彦
平成11年度（発掘調査）			主査 植木茂雄
調査第二課	課長 田熊清彦		主任 片根義幸
	主任 植木茂雄	平成17年度（発掘調査・整理作業）	
	技師 片根義幸	調査第二担当	係長 藤田典夫
平成12年度（発掘調査）			主査 植木茂雄
調査第二担当	係長 田熊清彦		主任 片根義幸
	主査 植木茂雄	平成18年度（整理作業）	
	主任 片根義幸	調査第二担当	係長 藤田典夫
平成13年度（発掘調査）			主査 塚本師也
調査第二担当	係長 田熊清彦		主任 福田智保
	主査 丹野哲久	平成19年度（発掘作業・整理作業）	
	主査 木村雅人	調査第二担当	副主幹 藤田典夫
	主査 植木茂雄		主査 片根義幸
	主任 旭山 久		主任 福田智保
	主任 片根義幸	平成20年度（整理作業）	
平成14年度（発掘調査）		調査第二担当	係長 芹澤清八
調査第二担当	係長 田熊清彦		主査 片根義幸
	主査 植木茂雄		主任 藤田直也
	主査 丹野哲久	平成21年度（整理作業）	
	主査 木村雅人	整理第二担当	副主幹 田代 隆
	主任 旭山 久		主査 片根義幸
	主任 片根義幸		主任 藤田直也
平成15年度（発掘調査・整理作業）		平成22年度（報告書作成）	
調査第二担当	係長 田熊清彦	整理第一担当	副主幹 田代 隆
	主査 木村雅人		主査 片根義幸

4. 本書は第3章第4節5-(3)と第5章第1節-2を田代隆が執筆し、その他の執筆と編集は片根義幸が行った。
5. 国家標榜の移設・航空写真・測量は中央航業株式会社に委託し、遺構の写真撮影については調査担当者が行った。遺物の写真撮影は調査担当者が行い、一部小川忠博氏に委託した。
6. 本遺跡に係わる石器石材鑑定の内訳鑑定については、バリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。また、川戸釜八幡遺跡石器付着物の分析、薬化石樹種同定については、株式会社パレオラボに委託した。石冠の彩色物質鑑定については、国立歴史民俗博物館永嶋正春氏に依頼した。
7. 発掘調査の実施並びに報告書の作成にあたっては、栃木県教育委員会文化財課の指導を受けると共に、日光市教育委員会、新井和之、大塚達朗、永嶋正春、塙 静夫、(敬称略)の御指導・御協力を賜った。
8. 発掘調査協力者は次のとおりである。(順不同・敬称略)
- 阿久津勝枝 阿久津一枝 阿久津勝子 阿久津清美 阿久津キマ 阿久津幸司 阿久津タイ
 阿久津ツメヨ 阿久津定吉 阿久津トシエ 阿久津秀夫 阿久津葵 阿久津ミトリ 阿久津美和
 阿久津裕 阿久津岩次 阿部サチ 阿部サツ 阿部征子 阿部正司 阿部久次 阿部浩 阿部好子
 阿部リン 新井照子 新井トキ 池田龍夫 大井美保子 大井ムツ子 大島うつえ 大島金次
 大島ステ 大島達也 大島トモ子 大島福三郎 大島光子 大瀬洋子 君島邦子 君島純子 君島スイ
 君島ナヲ 鈴木映子 鈴木キヌ 鈴木五郎 鈴木八重子 高山吉三郎 高山恵子 鶴羽テイ子 鶴羽宣子
 鶴羽雅己 鶴羽ミナ子 手塚博 中川秀子 中川利男 中川康 中山秀吉 中山ゆき江 長谷川貴壽
 伴文彦 伴光弘 福田彰 森兎子 山氏キノウ 山氏登美子 山城正夫 山口ケン子 山口達也
 山口敏行 山口胤寿 山口亨 山口ハナ 山口平男 山口レイ子 吉野真弓 吉原保
9. 整理作業・報告書作成作業の参加者は次のとおりである。(順不同・敬称略)
- 石口優子 石濱有希子 出井百合子 白井美智子 大島美智子 大谷小龍 大山美智子 菅野路子
 谷村貼美 鶴見里子 豊原あき子 野口昌子 野澤教子 野中由加子 広瀬裕美 福田貴子 谷田貝武子
 米野裕子 松本美穂 村田沙織 茂呂由美
10. 本遺跡の調査概要については埋蔵文化財センター年報、栃木県埋蔵文化財保護行政年報等で報告されているが、本書をもって正式報告とする。
11. 本遺跡に係わる出土遺物・実測図・写真等の資料は、財団法人とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センターで保管している。

凡 例

遺構

1. 川戸釜八幡遺跡の略号はKR-KH (KURIYAMAMURA KAWADOKAMAHACHIMAN)、石仏遺跡の略号はKR-IB (KURIYAMAMURA ISHIBOTOKE) である。
2. 発掘調査時の遺構は、遺跡ごとに堅穴住居跡：S1、土坑：SK、その他の不明遺構：SXの略号で表し、種別によらず確認された遺構順に1, 2, 3, …と番号を発番した。本報告掲載にあたっては、調査時に付された遺構番号を原則踏襲した。また、調査時に発番したひとつの番号で重複が明らかとなった遺構については、新しい時期の遺構からA・B・Cのアルファベットを付して区別した。
3. 遺構実測図は原則として、堅穴住居跡：縮尺1/60、土坑：縮尺1/40、配石遺構：縮尺1/30で掲載した。竪及びカマドなどについては、縮尺1/30に拡大して掲載した。
4. 遺構実測図中に示したスクリーントーンは、地山 、焼土または加熱による硬化面 、カマドの構造である粘土  を表す。
5. 遺構実測図中の断面水準線の数値は、海拔標高を示す。
6. 本書の座標値は平成10年度から複数年度に渡って実施されており、国土座標第IX系（日本測地系）による座標値で運用していた。平成14年4月より施行の測量法改正によって世界測地系に変更となったが本書においては日本測地系による座標値を引き続き採用している。遺構実測図に示した方位は、国土座標第IX系（日本測地系）による座標北である。

遺物

1. 遺物実測図は大きさに応じて、縄文土器は1/3、1/4、1/5、1/6とした。縄文時代の石器は石鏃2/3、尖頭器・石錐・石匙・搔削器類・剥片1/2、石錘・打製石斧・磨製石斧・磨石類1/3、石皿1/5、石剣・石棒類1/2、1/3、石製品1/2、1/3とした。また、土師器は1/4、鉄製品は1/2・1/3、の縮尺で掲載した。
2. 土器断面図のうち、縄文時代で網をかけたものは胎土に繊維を含むものである。また、土器内面及び外面に赤・黒色塗彩が施されていたものや、石器の表面に付着物が認められるものはスクリーントーンで示した。
3. 縄文土器の拓影で両面のものは、左に外面、右に内面を示した。
4. 遺物観察表及び計測表における法量の [] は推定値、() は残存値を表す。
5. 遺物出土位置図内の土器番号及び写真図版内の遺物番号は、遺物実測図の番号と一致する。
6. 遺物写真図版の縮尺は不統一である。

目 次

序	
例言	
凡例	
第1章 調査に至る経緯	
第1節 調査の経緯	1
第2章 遺跡の位置と環境	
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	5
第3章 川戸釜八幡遺跡	
第1節 発掘調査の方法と基本土層	7
第2節 発掘調査の経過	9
第3節 発掘調査の概要	13
第4節 縄文時代の遺構と遺物	
1. 竪穴住居跡	15
2. 土坑	68
3. 伊跡	73
4. 石棺墓	74
5. 遺構外出土遺物	
(1) 土器	84
(2) 土製品	129
(3) 石器・石製品	138
第5節 古代以降の遺構と遺物	
1. 竪穴住居跡	185
2. 土坑・墓坑	191
3. 小穴	221
4. 遺構外出土遺物	222
第4章 石仏遺跡	
第1節 発掘調査の方法と概要	223
第2節 縄文時代の遺構と遺物	
1. 土坑	228
2. 遺構外出土遺物	
(1) 縄文土器	232
(2) 石器	237
第5章 調査の成果	
第1節 川戸釜八幡遺跡縄文時代の遺構と遺物について	
1. 遺構	
(1) 竪穴住居跡	239
(2) 石棺墓	243
2. 遺物	
(1) 石鏃・石鏃について	245
(2) アスファルト付着石器について	246
付 編 自然科学分析	
第1節 川戸釜八幡遺跡出土石器の石材について	253
第2節 川戸川八幡遺跡から出土した石器・土器黒色付着物の材料分析	259
第3節 川戸川八幡遺跡出土炭化石の樹種同定	264

挿 図 目 次

第 1 図 事業概要図	1	第 61 図 SI-411 遺物実測図 (1)	66
第 2 図 事業地内遺跡位置図	2	第 62 図 SI-411 遺物実測図 (2)	67
第 3 図 遺跡位置図	3	第 63 図 SK-237・268・407～410・413 実測図	69
第 4 図 栃木県地形図	4	第 64 図 SK-237・268・407・408 遺物実測図	70
第 5 図 周辺道路	6	第 65 図 SK-409・410 遺物実測図	71
第 6 図 川戸釜八幡遺跡試掘トレンチ及び調査区配置図	7	第 66 図 SK-413 遺物実測図	72
第 7 図 川戸釜八幡遺跡基本土層図	8	第 67 図 SX-232 実測図	73
第 8 図 グリッド配置図	11	第 68 図 SX-232 遺物実測図	73
第 9 図 川戸釜八幡遺跡周辺地形図	14	第 69 図 石棺墓配置図	74
第 10 図 SI-104 実測図	15	第 70 図 石棺墓形式図	75
第 11 図 SI-104 遺物実測図 (1)	16	第 71 図 石棺墓長軸方位	76
第 12 図 SI-104 遺物実測図 (2)	17	第 72 図 SK-330・358・361・364・365・369 実測図	78
第 13 図 SI-104 遺物実測図 (3)	18	第 73 図 SK-362 実測図	79
第 14 図 SI-104 遺物実測図 (4)	19	第 74 図 SK-363 実測図	80
第 15 図 SI-104 遺物実測図 (5)	20	第 75 図 SK-366・368・370・396 実測図	81
第 16 図 SI-104 遺物実測図 (6)	21	第 76 図 SK-397・398・399 実測図	82
第 17 図 SI-104 遺物実測図 (7)	22	第 77 図 SK-400・401・402 実測図	83
第 18 図 SI-267A・B 実測図 (1)	23	第 78 図 SK-396・398・399・400 遺物実測図	83
第 19 図 SI-267A・B 実測図 (2)	24	第 79 図 遺構外出土器実測図 (1)	85
第 20 図 SI-267A・B 遺物実測図	25	第 80 図 遺構外出土器実測図 (2)	87
第 21 図 SI-379 実測図 (1)	26	第 81 図 遺構外出土器実測図 (3)	88
第 22 図 SI-379 実測図 (2)	27	第 82 図 遺構外出土器実測図 (4)	89
第 23 図 SI-379 遺物実測図 (1)	28	第 83 図 遺構外出土器実測図 (5)	90
第 24 図 SI-379 遺物実測図 (2)	29	第 84 図 遺構外出土器実測図 (6)	91
第 25 図 SI-379 遺物実測図 (3)	30	第 85 図 遺構外出土器実測図 (7)	92
第 26 図 SI-379 遺物実測図 (4)	31	第 86 図 遺構外出土器実測図 (8)	95
第 27 図 SI-379 遺物実測図 (5)	32	第 87 図 遺構外出土器実測図 (9)	96
第 28 図 SI-379 遺物実測図 (6)	33	第 88 図 遺構外出土器実測図 (10)	97
第 29 図 SI-379 遺物実測図 (7)	34	第 89 図 遺構外出土器実測図 (11)	98
第 30 図 SI-379 遺物実測図 (8)	35	第 90 図 遺構外出土器実測図 (12)	99
第 31 図 SI-379 遺物実測図 (9)	36	第 91 図 遺構外出土器実測図 (13)	100
第 32 図 SI-380 実測図	37	第 92 図 遺構外出土器実測図 (14)	101
第 33 図 SI-380 遺物実測図	38	第 93 図 遺構外出土器実測図 (15)	102
第 34 図 SI-381 実測図	39	第 94 図 遺構外出土器実測図 (16)	103
第 35 図 SI-381 遺物実測図 (1)	40	第 95 図 遺構外出土器実測図 (17)	104
第 36 図 SI-381 遺物実測図 (2)	41	第 96 図 遺構外出土器実測図 (18)	105
第 37 図 SI-381 遺物実測図 (3)	42	第 97 図 遺構外出土器実測図 (19)	106
第 38 図 SI-395 実測図	43	第 98 図 遺構外出土器実測図 (20)	107
第 39 図 SI-395 遺物実測図 (1)	44	第 99 図 遺構外出土器実測図 (21)	112
第 40 図 SI-395 遺物実測図 (2)	45	第 100 図 遺構外出土器実測図 (22)	113
第 41 図 SI-395 遺物実測図 (3)	46	第 101 図 遺構外出土器実測図 (23)	114
第 42 図 SI-395 遺物実測図 (4)	47	第 102 図 遺構外出土器実測図 (24)	115
第 43 図 SI-395 遺物実測図 (5)	48	第 103 図 遺構外出土器実測図 (25)	116
第 44 図 SI-403A・B 実測図 (1)	50	第 104 図 遺構外出土器実測図 (26)	117
第 45 図 SI-403A・B 実測図 (2)	51	第 105 図 遺構外出土器実測図 (27)	118
第 46 図 SI-403A・B 遺物実測図 (1)	52	第 106 図 遺構外出土器実測図 (28)	119
第 47 図 SI-403A・B 遺物実測図 (2)	53	第 107 図 遺構外出土器実測図 (29)	120
第 48 図 SI-403A・B 遺物実測図 (3)	54	第 108 図 遺構外出土器実測図 (30)	121
第 49 図 SI-403A・B 遺物実測図 (4)	55	第 109 図 遺構外出土器実測図 (31)	122
第 50 図 SI-403A・B 遺物実測図 (5)	56	第 110 図 遺構外出土器実測図 (32)	123
第 51 図 SI-403A・B 遺物実測図 (6)	57	第 111 図 遺構外出土器実測図 (33)	124
第 52 図 SI-403A・B 遺物実測図 (7)	58	第 112 図 遺構外出土器実測図 (34)	125
第 53 図 SI-403A・B 遺物実測図 (8)	59	第 113 図 遺構外出土器実測図 (35)	126
第 54 図 SI-404 実測図 (1)	60	第 114 図 遺構外出土器実測図 (36)	127
第 55 図 SI-404 実測図 (2)	61	第 115 図 遺構外出土器実測図 (37)	128
第 56 図 SI-404 遺物実測図 (1)	62	第 116 図 遺構外出土器実測図 (1)	130
第 57 図 SI-404 遺物実測図 (2)	63	第 117 図 遺構外出土器実測図 (2)	131
第 58 図 SI-404 遺物実測図 (3)	64	第 118 図 遺構外出土器実測図 (3)	132
第 59 図 SI-404 遺物実測図 (4)	65	第 119 図 遺構外出土器実測図 (4)	133
第 60 図 SI-411 実測図	65	第 120 図 川戸釜八幡遺跡石葺分層図 (1)	139

第121回	川戸釜八幡遺跡石器分期図(2)	140	第165回	SK-142・144・146～153・155～160実測図	206
第122回	遺構外出土石器(石鏟)実測図(1)	141	第166回	SK-161～168・171・173・174・180・182・184 ～187・191・193・194・196・211実測図	207
第123回	遺構外出土石器(石鏟)実測図(2)	142	第167回	SK-212～219・223・224・228・448実測図	208
第124回	遺構外出土石器(尖頭器)実測図	143	第168回	SK-220～222・225～227・229・230・233 ・236・242・245・449・450実測図	209
第125回	遺構外出土石器(石鏟)実測図	143	第169回	SK-243・244・246・248・249・251・253 ～255・257・258・263・264・266実測図	210
第126回	遺構外出土石器(石鏟)実測図	144	第170回	SK-301～303・308実測図	211
第127回	遺構外出土石器(楕圓形)実測図(1)	145	第171回	SK-304～307・309・310実測図	212
第128回	遺構外出土石器(楕圓形)実測図(2)	146	第172回	SK-311～321・323～326実測図	213
第129回	遺構外出土石器(使用痕のある剥片)実測図(1)	147	第173回	SK-327～329・332～337・339～342・344 ～346・348～351実測図	214
第130回	遺構外出土石器(使用痕のある剥片)実測図(2)	148	第174回	SK-352～354・356・357・359・374～378 ・385～389実測図	215
第131回	遺構外出土石器(磨製石斧)実測図	149	第175回	SK-383・384・390～394・414 ・416・417実測図	216
第132回	遺構外出土石器(打製石斧)実測図(1)	150	第176回	SK-418～427・429～435・440・451 ・452・454～461実測図	217
第133回	遺構外出土石器(打製石斧)実測図(2)	151	第177回	SK-442・453・462～466・468実測図	218
第134回	遺構外出土石器(石杖)実測図	152	第178回	SK-467・469～474実測図	219
第135回	遺構外出土石器(瓦状石器)実測図	152	第179回	SK-307・309・310・321遺物実測図	219
第136回	遺構外出土石器(石鏟)実測図	153	第180回	SK-353・388遺物実測図	220
第137回	遺構外出土石器(磨石類)実測図(1)	154	第181回	P-1～18実測図	221
第138回	遺構外出土石器(磨石類)実測図(2)	155	第182回	古代以降遺構外出土遺物実測図	222
第139回	遺構外出土石器(磨石類)実測図(3)	156	第183回	石仏I遺跡基本土層図	223
第140回	遺構外出土石器(磨石類)実測図(4)	157	第184回	石仏遺跡トレンチ配置図	224
第141回	遺構外出土石器(磨石類)実測図(5)	158	第185回	石仏II遺跡基本土層図	225
第142回	遺構外出土石器(磨石類)実測図(6)	159	第186回	石仏III遺跡基本土層図	226
第143回	遺構外出土石器(磨石類)実測図(7)	160	第187回	石仏I遺跡遺構配置図(1)	226
第144回	遺構外出土石器(磨石類)実測図(8)	161	第188回	石仏I遺跡遺構配置図(2)	227
第145回	遺構外出土石器(石皿類)実測図(1)	162	第189回	石仏I遺跡SK-23・25・30・32～40実測図	229
第146回	遺構外出土石器(石皿類)実測図(2)	163	第190回	石仏I遺跡SK-41～44・46～53実測図	230
第147回	遺構外出土石器(石剣・石棒類)実測図	164	第191回	石仏I遺跡SK-23・51・52遺物実測図	231
第148回	遺構外出土石器(銚形石・石製品・軽石製品・玉類・ 不明石製品)実測図	165	第192回	石仏I遺跡遺構外出土石器実測図(1)	232
第149回	SI-1実測図	185	第193回	石仏I遺跡遺構外出土石器実測図(2)	233
第150回	SI-1カマド実測図	186	第194回	石仏I遺跡遺構外出土石器実測図(3)	235
第151回	SI-1遺物実測図	186	第195回	石仏I遺跡遺構外出土石器実測図(4)	236
第152回	SI-382実測図	187	第196回	石仏I遺跡遺構外出土石器実測図(1)	237
第153回	SI-405実測図	188	第197回	石仏I遺跡遺構外出土石器実測図(2)	238
第154回	SI-406実測図	189	第198回	川戸釜八幡遺跡縄文時代住居跡集成	241
第155回	SI-428実測図	190	第199回	熊内縄文時代晩期型住居跡集成	242
第156回	SK-1～10実測図	197	第200回	川戸釜八幡遺跡石棺墓集成	244
第157回	SK-11～18・30実測図	198	第201回	石鏟を転用した石鏟	245
第158回	SK-19～29・36実測図	199	第202回	アスファルト付着の石器	247
第159回	SK-34・35・37～42実測図	200	第203回	アスファルト出土遺跡分布図	249
第160回	SK-43～51実測図	201	第204回	川戸釜八幡遺跡から日本海へ続くルート	250
第161回	SK-65～69・74・77・78・81～83・95実測図	202			
第162回	SK-85～88・90・91・94・96・98～103 ・106～109実測図	203			
第163回	SK-111～120・123実測図	204			
第164回	SK-121・122・124・126～128・131・132・134 ～137・139～141実測図	205			

表 目 次

第1表	周辺部の遺跡一覧表	5	第11表	古代以降土坑出土銭貨観察表	220
第2表	調査経過一覧	12	第12表	古代以降土坑出土遺物観察表	220
第3表	石棺墓一覧	76	第13表	古代以降小穴一覧	222
第4表	土製品計測表	134	第14表	古代以降遺構外出土遺物観察表	222
第5表	遺構外出土石器計測表	168	第15表	石仏I遺跡遺構一覧	228
第6表	遺構外出土石器計測表	172	第16表	石仏I遺跡遺構外出土石器計測表	238
第7表	古代以降型穴住居跡一覧	190	第17表	川戸釜八幡遺跡縄文時代住居跡一覧	239
第8表	SI-1出土石器観察表	191	第18表	石鏟転用石鏟一覧	245
第9表	古代以降型穴住居跡出土鉄製品観察表	191	第19表	アスファルト付着の石器一覧	248
第10表	古代以降土坑一覧	191			

図 版 目 次

巻頭図版一

- 遺跡遠景 (東上空から撮影)
- 遺跡遠景 (西上空から撮影)

巻頭図版二

- 川戸釜八幡遺跡近景 (南東上空から撮影)
- 石仏遺跡遠景 (東上空から撮影)

巻頭図版三

- 川戸釜八幡遺跡 SI-395 完掘全景 (北から撮影)
- 川戸釜八幡遺跡 SI-395 出土石冠

巻頭図版四

- H 14(c) 地区石棺墓群完掘全景 (西から撮影)
- SK-362 確認状況 (西から)
- SK-362 完掘状況 (西から)
- SK-362 側壁復元状況 (北から)
- SK-363 完掘状況 (西から)

巻頭図版五

- H 17(a) 地区石棺墓群完掘全景 (南西から)
- SK-396 完掘状況 (北東から)
- SK-397 完掘状況 (北東から)
- SK-398 完掘状況 (南から)
- SK-399 完掘状況 (北東から)

巻頭図版六

- 川戸釜八幡遺跡 SI-104 出土石器
- 川戸釜八幡遺跡 出土石器 (石剣・石棒頭・独站石)

図版一 川戸釜八幡遺跡 縄文時代 (遺構)

- 川戸釜八幡遺跡近景 (南東上空から撮影)
- SI-104 完掘状況 (南西から)
- SI-104 土層堆積状況 (西から)
- SI-267A・B 完掘状況 (南から)
- SI-267A 炉跡 (南から)

図版二 川戸釜八幡遺跡 縄文時代 (遺構)

- SI-379 完掘状況 (南から)
- SI-379 土層堆積状況 (南から)
- SI-380 土層堆積状況 (北西から)
- SI-381 土層堆積状況 (南から)
- SI-381 完掘状況 (西から)

図版三 川戸釜八幡遺跡 縄文時代 (遺構)

- SI-381 完掘状況 (南から)
- SI-395 完掘状況 (北から)

図版四 川戸釜八幡遺跡 縄文時代 (遺構)

- SI-395 炉跡 (西から)

- SI-395 遺物 (浅鉢) 出土状況 (北から)
- SI-395 遺物 (球頸型石冠) 出土状況 (南から)
- SI-395 遺物 (石籠型石冠) 出土状況 (北から)
- SI-403A・B 完掘状況 (北から)

図版五 川戸釜八幡遺跡 縄文時代 (遺構)

- SI-403A・B 土層堆積状況 (西から)
- SI-403A 炉跡 (南東から)
- SI-404 完掘状況 (西から)
- SI-404 全景 (人物入り) (西から)
- SI-404 土層堆積状況 (南から)

図版六 川戸釜八幡遺跡 縄文時代 (遺構)

- SI-411 完掘状況 (東から)
- SK-237 遺物出土状況 (南東から)
- SK-237 土層断面 (南東から)
- SK-268 完掘状況 (北から)
- SK-407・408・409 完掘状況 (東から)
- SK-410 遺物出土状況 (北東から)
- H 14(c) 地区 石棺墓群完掘状況 (西から)
- H 14(c) 地区 石棺墓群完掘状況 (南東から)

図版七 川戸釜八幡遺跡 縄文時代 (遺構)

- H 14(c) 地区 石棺墓群完掘状況 (北から)
- SK-330 完掘状況 (南から)
- SK-358 完掘状況 (南から)
- SK-361 完掘状況 (西から)
- SK-364 完掘状況 (西から)

図版八 川戸釜八幡遺跡 縄文時代 (遺構)

- SK-362 蓋石確認状況 (南から)
- SK-362 完掘状況 (南から)
- SK-362 完掘状況 (西から)
- SK-362 完掘状況 (北から)
- SK-362 埋葬状態の復元 (南から)
- SK-362 掘方 (南から)
- SK-362 蓋石
- SK-362 壁石

図版九 川戸釜八幡遺跡 縄文時代 (遺構)

- SK-363 完掘状況 (西から)
- SK-363 完掘状況 (東から)
- SK-363 完掘状況 (北から)
- SK-363 掘方 (北から)
- SK-365 完掘状況 (西から)
- SK-366 完掘状況 (南から)
- SK-369 完掘状況 (南から)
- SK-370 確認状況 (南から)

図版一〇 川戸釜八幡遺跡 縄文時代 (遺構)

- H 17(a) 地区 石棺墓群完掘状況 (南西から)

- SK-396 確認状況 (北東から)
SK-396 完掘状況 (北東から)
SK-397 確認状況 (南東から)
SK-397 完掘状況 (北東から)
- 図版一一 川戸釜八幡遺跡 縄文時代 (遺構)
SK-398 完掘状況 (南から)
SK-398 遺物出土状況 (南西から)
SK-399 確認状況 (南から)
SK-399 調査風景 (北東から)
SK-399 完掘状況 (北東から)
SK-400 確認状況 (南西から)
SK-401 完掘状況 (南東から)
SK-402 確認状況 (南東から)
- 図版一二 川戸釜八幡遺跡 古代以降 (遺構)
SI-1 遺物出土状況 (北から)
SI-1 カマド跡 (北から)
SI-1 遺物 (鉄鏝) 出土状況 (南東から)
SI-382 カマド跡 (西から)
SI-382 遺物 (刀子) 出土状況 (西から)
- 図版一三 川戸釜八幡遺跡 古代以降 (遺構)
SI-382 完掘状況 (南から)
SI-405 完掘状況 (西から)
- 図版一四 川戸釜八幡遺跡 古代以降 (遺構)
SI-405 カマド完掘状況 (西から)
SI-405 石組施設 (西から)
SI-406 完掘状況 (北西から)
SI-406 遺物 (鉄鏝) 出土状況 (北西から)
SI-406 遺物 (鉄製品) 出土状況 (北から)
- 図版一五 川戸釜八幡遺跡 古代以降 (遺構)
H 11(a)地区 SK-18～29・429～435 完掘状況(南から)
SK-111 完掘状況 (南から)
SK-301 完掘状況 (南から)
SK-302 完掘状況 (南から)
SK-303 完掘状況 (南から)
- 図版一六 川戸釜八幡遺跡 古代以降 (遺構)
SK-383 完掘状況 (北から)
SK-384 完掘状況 (南から)
SK-394 完掘状況 (西から)
SK-353 遺物 (石臼) 出土状況 (南から)
SK-307 埋葬人骨出土状況 (東から)
SK-307 遺物 (永楽銭) 出土状況 (東から)
SK-309・310 埋葬人骨出土状況 (東から)
SK-453 埋葬人骨出土状況 (西から)
- 図版一七 石仏1遺跡 縄文時代 (遺構)
石仏1遺跡 第2トレンチ拡張区全景 (北東より)
石仏1遺跡 第4トレンチ拡張区全景 (東から)
- 石仏1遺跡 SK-51 遺物出土状況 (東から)
石仏1遺跡 包含層遺物 (磨製石斧) 出土状況
石仏1遺跡 包含層遺物 (土器) 出土状況 (北から)
- 図版一八 川戸釜八幡遺跡 縄文時代 (遺物)
SI-104 出土土器
SI-267A・B 出土土器
- 図版一九 川戸釜八幡遺跡 縄文時代 (遺物)
SI-379 出土土器
- 図版二〇 川戸釜八幡遺跡 縄文時代 (遺物)
SI-395 出土土器
SI-404 出土土器
SK-410 出土土器
SK-398 出土土器
SX-232 出土土器
- 図版二一 川戸釜八幡遺跡 縄文時代 (遺物)
遺構外土器 272・274・308～311・382・392
- 図版二二 川戸釜八幡遺跡 縄文時代 (遺物)
遺構外土器 393・395・397・398・419・429・430
・435・455・456・458・459・464
- 図版二三 川戸釜八幡遺跡 縄文時代 (遺物)
遺構外土器 465・466・468・469・531・532・546
・558
- 図版二四 川戸釜八幡遺跡 縄文時代 (遺物)
遺構外土器 581・584・650・653・726・731
- 図版二五 川戸釜八幡遺跡 縄文時代 (遺物)
遺構外土器 732・735・761・821～823・827・830
・831・915
- 図版二六 川戸釜八幡遺跡 縄文時代 (遺物)
遺構外土器 860・862・863・868・882・912
- 図版二七 川戸釜八幡遺跡 縄文時代 (遺物)
遺構外土器 884～904・908
- 図版二八 川戸釜八幡遺跡 縄文時代 (遺物)
遺構外土器 943・946・948・950・955
土製品 (土偶・土版・土鏝・有孔円盤)
- 図版二九 川戸釜八幡遺跡 縄文時代 (遺物)
SI-104 出土土器 (石鏝・石鏝・石匙・插削器類
・磨製石斧・石鏝・磨石頭)

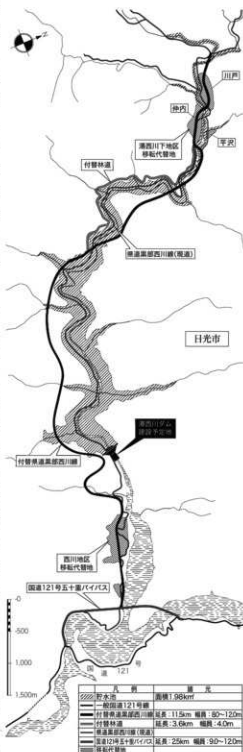
- 図版三〇 川戸釜八幡遺跡 縄文時代 (遺物)
SI-104 出土石器 (打製石斧・磨石類)
SI-379 出土石器 (石鏃・尖頭器・石錐・石匙・搔削器類)
- 図版三一 川戸釜八幡遺跡 縄文時代 (遺物)
SI-379 出土石器 (石錐・磨製石斧・磨石類・石剣・石棒類・磗器)
- 図版三二 川戸釜八幡遺跡 縄文時代 (遺物)
SI-380 出土石器 (石鏃・石錐・搔削器類・石錘・石剣・石棒類)
SI-381 出土石器 (石鏃・石匙・打製石斧・石錘)
SI-395 出土石器 (石鏃)
- 図版三三 川戸釜八幡遺跡 縄文時代 (遺物)
SI-395 出土石器 (石鏃・尖頭器・石錐・搔削器類・使用痕のある剥片)
- 図版三四 川戸釜八幡遺跡 縄文時代 (遺物)
SI-395 出土石器 (石錘・石冠)
SI-403A・B 出土石器 (石鏃)
- 図版三五 川戸釜八幡遺跡 縄文時代 (遺物)
SI-403A・B 出土石器 (石鏃・尖頭器・石錐・石匙・彫器・搔削器類)
- 図版三六 川戸釜八幡遺跡 縄文時代 (遺物)
SI-403A・B 出土石器 (搔削器類・使用痕のある剥片・石核・石錘・磨製石斧・打製石斧・小礫)
- 図版三七 川戸釜八幡遺跡 縄文時代 (遺物)
SI-404 出土石器 (石鏃・搔削器類・使用痕のある剥片)
SK-409 出土石器 (磨石類・石皿)
- 図版三八 川戸釜八幡遺跡 縄文時代 (遺物)
SK-413 出土石器 (石錐・搔削器類・打製石斧・石錘)
SX-232 出土石器 (石皿)
遺構外石器 石鏃 (1)
- 図版三九 川戸釜八幡遺跡 縄文時代 (遺物)
遺構外石器 石鏃 (2)
- 図版四〇 川戸釜八幡遺跡 縄文時代 (遺物)
遺構外石器 石鏃 (3)
遺構外石器 尖頭器
- 図版四一 川戸釜八幡遺跡 縄文時代 (遺物)
遺構外石器 石錐
遺構外石器 石匙 (1)
- 図版四二 川戸釜八幡遺跡 縄文時代 (遺物)
遺構外石器 石匙 (2)
遺構外石器 搔削器類 (1)
- 図版四三 川戸釜八幡遺跡 縄文時代 (遺物)
遺構外石器 搔削器類 (2)
- 図版四四 川戸釜八幡遺跡 縄文時代 (遺物)
遺構外石器 搔削器類 (3)
遺構外石器 使用痕のある剥片 (1)
- 図版四五 川戸釜八幡遺跡 縄文時代 (遺物)
遺構外石器 使用痕のある剥片 (2)
- 図版四六 川戸釜八幡遺跡 縄文時代 (遺物)
遺構外石器 磨製石斧
- 図版四七 川戸釜八幡遺跡 縄文時代 (遺物)
遺構外石器 打製石斧 (1)
- 図版四八 川戸釜八幡遺跡 縄文時代 (遺物)
遺構外石器 打製石斧 (2)
- 図版四九 川戸釜八幡遺跡 縄文時代 (遺物)
遺構外石器 棍状石器
遺構外石器 石核
遺構外石器 石錘
- 図版五〇 川戸釜八幡遺跡 縄文時代 (遺物)
遺構外石器 磨石類
- 図版五一 川戸釜八幡遺跡 縄文時代 (遺物)
遺構外石器 石皿 (1)
- 図版五二 川戸釜八幡遺跡 縄文時代 (遺物)
遺構外石器 石皿 (2)
遺構外石器 石剣・石棒類 (1)
- 図版五三 川戸釜八幡遺跡 縄文時代 (遺物)
遺構外石器 石剣・石棒類 (2)
遺構外石器 独站石・石製品・軽石製品・玉類・不明石製品
- 図版五四 川戸釜八幡遺跡 古代以降 (遺物)
土師器
鉄製品
石製品
銭貨
- 図版五五 石仏 I 遺跡 縄文時代 (遺物)
SK-51 出土土器
遺構外石器 石鏃・磨製石斧・石皿・磨石類

第1章 調査に至る経緯

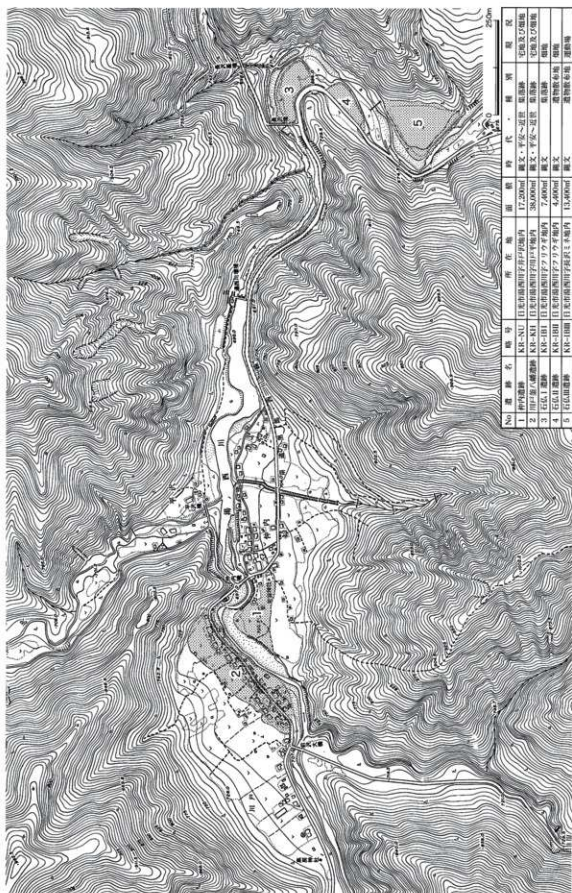
第1節 調査の経緯

首都圏としての発展がめざましい鬼怒川や利根川下流域では、近年の急速な都市化や生活様式の変化に伴い、水の需要が増えるなどの問題が浮上している。こうした状況のなか、湯西川ダムは日光市西川地内に建設予定のダムで、鬼怒川及び利根川下流域における洪水被害の軽減、栃木県田川沿岸約2,000haの水田・畑地の灌漑、また宇都宮市を始め千葉県、茨城県などへの水道用水供給、工業用水取水等を主な目的とし、鬼怒川上流域における4番目の直轄多目的ダムとして計画された。当ダム建設の経過については、昭和47年4月から予備調査を開始し、以後、基本計画の告示、水源地域対策特別措置法に基づく「指定ダム」としての告示、自然公園法に基づく包括協議の同意、土地・物件調査等を経て、平成6年度には関連工事に着手し、平成23年度の完成を目指している。

一方、ダム建設に係わる埋蔵文化財の取り扱いについては、昭和59年10月に建設者（現国土交通省）関東地方建設局湯西川ダム工事事務所から県教育委員会文化課（現文化財課）に照会があり、所在分布調査が実施された。その結果、中内・川戸釜八幡・石仏の3遺跡を確認し、この結果を昭和60年1月18日付けで回答した。ダム建設が具体化した平成8年度、当初の確認調査から12年が経過しているため、平成8年6月に再度、文化課による詳細な所在分布調査が行われた。その結果、新たに縄文時代の遺物が散布する2地点を加えた5遺跡（石仏Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・中内・川戸釜八幡）の総面積約80,400㎡を確認し、この結果を平成8年6月17日付けで回答した。当初の計画では、この所在分布調査の結果から平成9年度内に文化課による各遺跡の試掘調査が行われる予定であったが、土地交渉の遅れから10月の協議により、試掘調査は中止となった。このため、平成10年度以降、移転代替地造成及び付替県道に係る緊急度の高い遺跡から順に試掘と本調査を合わせ財団法人栃木県文化振興事業団（現財団法人とちぎ生涯学習文化財団）が行うこととなった。これに基づき、平成10年3月には建設者・文化課及び事業団の三者協定締結、4月には埋蔵文化財発掘調査の委託契約を締結すると共に、地権者の承諾のもと8月から川戸釜八幡遺跡の試掘調査を開始する運びとなった。



第1図 事業概要図



第2図 事業地内遺跡位置図

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

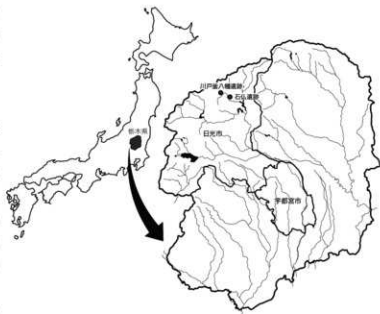
栃木県は関東平野の北部、いわゆる北関東のほぼ中央に位置し、北は福島県、西は群馬県、南は群馬県と一部埼玉県、東は茨城県に接する内陸県である。地形的には阿武隈山地の南に連なる八溝山地などのある東部山地、関東平野の最奥部となる中央部平地、帝釈山地と連なる足尾山地及びこれらの間の那須火山帯からなる西部山地に大別され、南流する河川を含めた全体の形状は南に開けた地形をなしている。

川戸釜八幡遺跡・石仏遺跡は、栃木県日光市湯西川川内に所在する。日光市は栃木県の北西端に位置しており、平成18年3月20日に2市2町1村（旧今市市、旧日光市、旧藤原町、旧足尾町、旧栗山村）の合併により新行政区として誕生した。合併後の市域は県土面積の約1/4を占め、西は群馬県片品村、北は福島県檜枝岐村及び南会津町と接している。地形は標高200mほどの平坦な市街地から2,000mを超す山岳地域まで起伏に富んでおり、また日光国立公園を中心とする山間部の多くは、水源涵養や自然環境保全等の機能を担う振興山村地域に指定されているほか、一部の地域は水源地域にも指定されている。

本遺跡が所在する旧栗山村地区は、県都として本県の中央部に位置する宇都宮市の北西約70kmの距離にあり、旧村域の東端を栃木県益子町から福島県会津若松市を経て山形県米沢市に至る国道121号線が南北に貫通する。これに主要地方道川俣温泉―川治線及び県道黒部西川線が東西方向で接続し、山間の集落を結ぶ主要な交通路となっている。また、東部鉄道鬼怒川線を介して新藤原駅と会津高原駅（福島県南会津郡南会津町）を結ぶ野岩鉄道会津鬼怒川線が国道121号線と並行して敷設され、首都圏と東北地方を結んでいる。

当地は林野面積が全体の約95%以上を占めており、またその大半が日光国立公園に含まれる県内有数の山岳地である。各集落は鬼怒川とその支流である湯西川両河川に沿った河岸段丘上の僅かな平地地に点在する渓谷型の山村であり、宅地及び農地の割合は全体の1%程度にすぎない。このため、豊富な森林資源を生かした林業をはじめ、高冷地野菜、特用林産物、木工芸品などを主な生業としている。また、上流域には川俣、奥鬼怒、湯西川などの温泉が数多くあり、鬼怒川や湯西川あるいはその支流が刻み込んだ渓谷や大小様々な滝、五十里ダム、川治ダム、川俣ダムなどによって人工的に作り出された湖などの多様な景観とともに、平家落人伝説も加え近年秘境的観光地としてその価値を高めている。

遺跡周辺の地形を概観すると、本地域は鬼怒川水系の源流域にあたり、旧村域の中央部を西から東に流れる鬼怒川によって北部及び西部の帝釈山地と南部の日光火山山地に大別できる。帝釈山地は主峰である帝釈山（標高2,060m）をはじめ、男鹿岳、荒海山、安ヶ森山、田代山、黒岩山、鬼怒沼山など標高1,500～2,000m級の山々が連なっており、



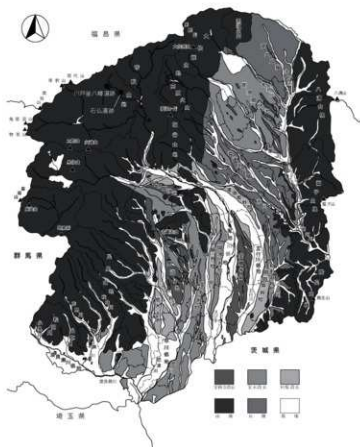
第3図 遺跡位置図

木・福島両県の県境をなし、利根川及び阿賀野川水系との分水界になっている。地質的には、古生代から中生代の堆積岩と白亜紀の花崗岩及び第三紀の火山活動によって噴出した流紋岩類が広く分布しており、比較的なだらかな山容を形成している。山頂付近には高層湿原も多く田代山には田代山湿原、鬼怒沼山と物見山の中間には鬼怒沼湿原が形成される。日光火山山地は、最高峰（標高2,483 m）の女峰山をはじめとする成層火山や小真名子山、太郎山、於呂俱羅山、山王帽子山などの標高2,000 mを超える山々からなる。これらの火山はいずれも第四紀に活動したものであり、その溶岩類や火山破砕物によって第三紀及びそれ以前の岩石を不整合に覆っており、溶岩円頂丘や溶岩台地などの火山地形がみられる。

こうした地形環境のなか、旧栗山村地区周辺の気候は背後に控える山々が脊梁山脈となる峠の一部をなしており、日本海側気候から太平洋側気候へ移行する接点にあたる。標高が高いため県内で最も寒冷であるが、夏の最高気温は30°C近くにも達する。冬季の気象条件は厳しく、最低気温は-15°C程度にもなり、寒暖の差が激しい内陸性気候である。降水量は山地への気流の上昇などによって平野部より年間を通じて多く、冬季は北西季節風が山岳部まで及んで積雪量が多い豪雪地帯となる。

本地域の植生は山地帯から亜高山帯までの標高に応じた植物の分布がみられる。村城の大部分はブナやミズナラを主とする落葉広葉樹林が占め、初夏の新緑から秋の紅葉など美しい景観となっている。また沢筋にはトチノキ、サワグルミ、カツラ、ハルニレなどの溪畔林が発達している。奥鬼怒や日光火山山地域には、コマツガ、アスナロ、オオシラビソなどの亜高山帯針葉樹林がみられるほか、特徴的なものとして林床にチシマザサの繁殖が顕著であり、ハイイヌガヤ、チョウジギクなどの多雪条件による日本海型の植生が認められ、県内でも特殊な植物相が成立している。また、大小48の沼からなる鬼怒沼湿原には、県内ではここだけに産するホロムイソウなどの高山植物が確認されている。これらの森林などには、ツキノワグマ、ニホンジカ、ニホンカモシカなどの大型哺乳類をはじめ30種に及ぶ多様な動物が生息するほか、クマタカ、オオタカなどの猛禽類、人工湖を生息地とするカモ類など116種の鳥類、また河川にはイワナ、ヤマメ、ニジマス、カジカ、コイ、ワカサギなどの放流魚種を含め12種の魚類が確認されており、豊富な動物相を有している。

今回の調査では、縄文時代の遺構・遺物が多量に発見された。上述した遺跡の立地条件や自然環境は、県北西端に位置する当地域において当時の人々の生活や文化に大きな影響を与えたとはいえよう。



第4図 栃木県地形図

第2節 歴史的環境

現在までに確認されている旧栗山村地区の遺跡は僅か10箇所のみであり、第5図中において近隣の遺跡を含めても20遺跡に満たない数である。これらの遺跡は発掘調査がなされておらず、遺跡の範囲や時代は遺物の表面採集によるものであるが、旧石器時代の遺物は今のところ確認例がなく、当地域の歴史を語るうえで縄文時代がその出発点となる。縄文時代遺物の確認例は、湯西川流域に仲内遺跡(1)、川戸釜八幡遺跡(2)、石仏I遺跡(3)、石仏II遺跡(4)、石仏田遺跡(5)、湯平遺跡(6)の6遺跡、鬼怒川流域に松木平遺跡(7)、日陰遺跡(8)、黒部遺跡(9)、向原遺跡(10)の4遺跡が河岸段丘上に分布する。これらの遺跡からは早期～晩期にかけての遺物が確認されており、その特徴を銘記すれば、まず東北地方南部との関連が指摘できる。特に縄文時代中期以降は、大木式土器文化の影響が強くなり、また南関東を中心として関東地方全域に分布する同時期の加曽利E式土器文化圏との接点になっており、両文化の影響を受けた土器が数多く出土している。この影響は縄文時代後期にも引き継ぎられ、両文化を取り込んだ特異な様相を示すが、晩期になると南関東地方の影響はあまり伝播せず、東北地方の亀ヶ岡式文化圏に取り込まれるといった特徴が看取される。また、当地域は中期の馬高式土器や後期の三十桶葉式に代表される北陸系土器の確認例が多く、その出土量は県内においても際立っており、東北地方南部を介した日本海側との関連を強く示している。

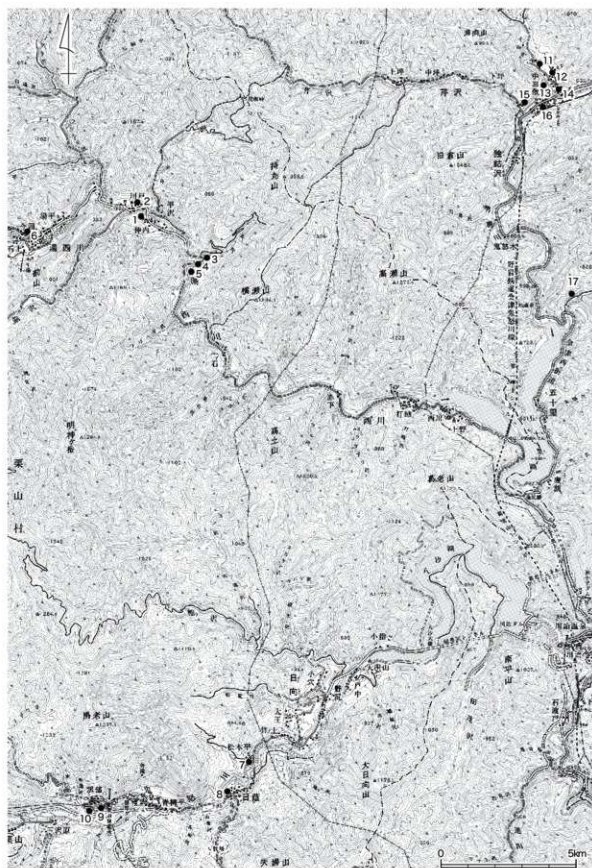
弥生時代の遺跡は2箇所が確認されており、縄文時代後期から晩期の遺物が多く出土する黒部遺跡(9)や向原遺跡(10)から弥生時代中期前半に比定される土器が確認されている。しかし、弥生時代中期後半から平安時代に至る遺構・遺物は皆無に等しく、今回の開発による発掘調査で平安時代末期の竪穴住居跡及び土師器や鉄製品などの遺物が仲内遺跡(1)、川戸釜八幡遺跡(2)の両遺跡から僅かに確認されたにすぎない。このように、弥生時代以降の遺跡数が減少する背景には、本地域の周辺一帯が急傾斜面をもつ山裾が広がる山がちな地形であるため、水稲耕作に適した土地が少なく、主たる生産基盤を持ち得なかったことなどがひとつの要因として挙げられる。なお、古代律令制下の旧栗山村地区は塩屋部に属していたが、「和抄沙」にみられる郷は設置されていないようである。

第2章参考文献

- 栃木県史編さん委員会 1984 『栃木県史 資料編 考古一』 栃木県
 栃木県企画部土地対策課 1998 『土地分類基本調査 川治』
 栗山村史編さん委員会 1998 『栗山村史』 栗山村
 藤原町史編さん委員会 1980 『藤原町史 資料編』 藤原町

第1表 周辺の遺跡一覧

No.	遺跡名	所在地	時期	種別	備考
1	仲内	日光市湯西川仲内	縄文・平安～近世	集落跡	平成11～13年度及び平成18～20年度調査。縄文時代中期後半を中心とした集落跡
2	川戸釜八幡	日光市湯西川川戸	縄文・平安～近世	縄文	平成10～19年度調査。縄文時代後期後半～晩期中葉を中心とした集落跡
3	石仏I	日光市湯西川ワラウギ	縄文	集落跡	平成13年度調査。縄文時代中期～中期の遺物が出土
4	石仏II	日光市湯西川ワラウギ	縄文	散布地	平成12年度調査。縄文時代遺物散布
5	石仏田	日光市長沢3ヶ	縄文	集落跡	昭和54年度の村営運動場造成時に縄文時代の遺物が出土。平成12年度調査
6	湯平	日光市湯西川湯平	縄文	集落跡	中期(阿玉台・E1)～後期(堀之内I)の土器、石鎌・石巻・石斧等の石器が出土
7	松木平	日光市日向松木	縄文・弥生	散布地	時期不明
8	日陰	日光市日陰	縄文	散布地	縄文時代後期前半を中心に多量の遺物が散布
9	黒部	日光市黒部	縄文・弥生	集落跡	縄文時代後期～晩期、弥生時代中期の遺物が出土
10	向原	日光市黒部向原	縄文・弥生	散布地	時期不明
11	湯の原	日光市中三放	縄文	散布地	縄文時代後期(堀之内I)土器・石器などの遺物が出土
12	中道	日光市中三放中道	縄文・弥生	散布地	縄文時代後期を中心とした遺物が出土
13	中柳	日光市中三放中柳	縄文・弥生	集落跡	縄文時代中期～後期の遺物が広範囲に散布。弥生時代中期の甕が出土時に出土
14	横内	日光市中三放	縄文・弥生	集落跡	中期(E1)～後期(堀之内I)の土器・石器のほか、弥生中期土器出土
15	中三放小学校敷地内	日光市中三放	縄文	集落跡	三放小学校新築工事の際に早期～後期の遺物が出土
16	湯本端	日光市中三放	縄文	集落跡	中期後半(注田)～後期にかけての土器、土甕などの遺物が出土
17	大堀沢	日光市五十平大堀沢	縄文	集落跡	調査遺跡であったが、明治35年の暴風雨により崩壊。晩期(大堀C2)の土器が出土



第5図 周辺の遺跡

第3章 川戸釜八幡遺跡

第1節 発掘調査の方法と基本土層

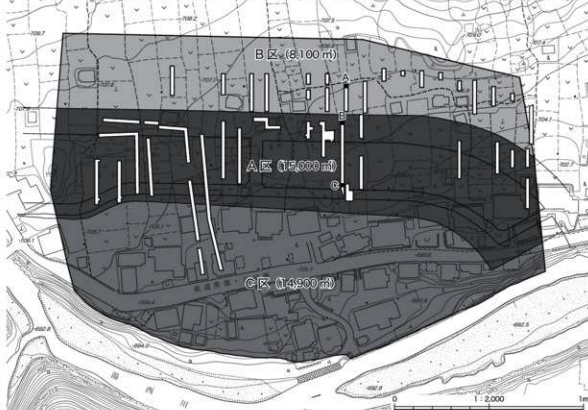
川戸釜八幡遺跡の発掘調査は、総面積約 38,000 m² に対し、付替泉道及び移転代替地部分を A 区 (約 15,000 m²)、付替泉道北側の移転代替地部分を B 区 (約 8,100 m²)、公共用地部分を C 区 (約 14,900 m²) として計画した。調査は先ず、緊急度の高い A・B 両地区の遺構・遺物の広がりや所属時期の把握などを目的とし、試掘調査から本調査へという手順で行った。C 区については、大部分が宅地や旧泉道部分に当たるため、遺構が存在する可能性が低いことから工事立ち会い及び慎重工事で対応することとした。

試掘調査は、トレンチ掘りにより遺構確認面まで重機で掘り下げる方法を取り、各年度における用地交渉の進捗及び工事計画合わせ可能な部分から順次行っていた。調査の経過については次節で述べるが、A・B 両地区の総面積 23,100 m² のうち、試掘実施面積は 18,910 m² で全体の約 82% を対象とした。

試掘は基本的に幅 2m のトレンチを 10m 間隔で、等高線とほぼ直交するように設定した。試掘調査全体のトレンチ総長は約 740m、面積は約 1,500 m² で試掘実施面積の約 8% に相当する。

試掘調査に際しては、平成 10 年度の調査着手時に遺構・遺物の出土層位及び基本土層を把握するため、対象地区内中央部のトレンチを人力で深掘し、基本層序の確認にあたった (第 7 図)。以後、この結果をもとに試掘び本調査を進めていくこととなったが、調査地内における土壌の堆積状況は、各トレンチにおいて厚さに違いがみられたもののほぼ同質であり、その特徴を簡略的に述べれば以下のとおりである。

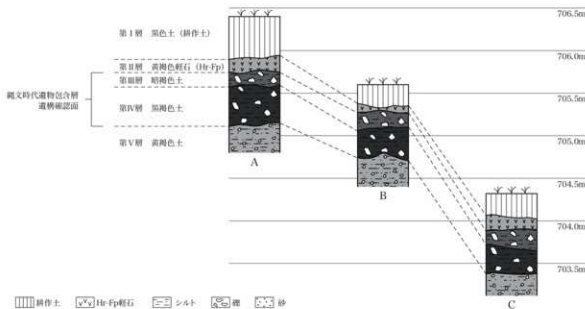
第 1 層は現表土で層厚約 25 ~ 50 cm あり、後世の耕作によって再包括された縄文時代から近世の遺物を含んでいる。第 2 層は亜角礫を少量含んだしまりのない砂質土壌である。土壌分析の結果、6 世紀中葉頃に降



第 6 図 川戸釜八幡遺跡試掘トレンチ及び調査区配置図

下したHr-FPであることが判明している。層厚は最も厚い調査区の北側で20 cm前後の堆積が認められ、降下したテフラが比較的良く保存された状態で確認できる。これに対して、調査区の中央では耕作によって削滅され、第III層内に少量混交するのみの部分がある。第II層以下は全体的に亜角礫を多く含む第III層暗褐色シルト層が25 cm前後、第IV層黒褐色シルト層が30～50 cmの厚さで堆積し、第V層黄褐色シルト層となる。このうち、遺構・遺物が確認できる層位は第III層上位～第V層上位で、本遺跡の主要な縄文時代遺物包含層がこれに相当する。古代以降の遺構については、縄文時代の包含層を掘り込んでつくられており、第II層から確認することが可能であった。このように試掘調査の結果、当遺跡における文化層は2面ないしは3面あるものと考えられたため、各層位毎に調査を行うこととした。また、遺構・遺物の分布に関しては、調査地全域に点在してみられるが、特に縄文時代の遺構・遺物は東半分に集中することが明らかとなった。このため、本調査の範囲については、対象地区の中央から東側を中心に調査区を設定して進めることとした。なお、本調査の実施面積は、8,170 m²で、A・B両地区を合わせた対象面積の約35%を行ったことになる。

表土除去は時間的な制約から、まず古代以降の遺構確認面である第II層まで重機を使用し、この段階で人力による確認面の精査に切り替え、それと同時にグリッドを設定した。調査グリッドは業者に委託して基準点及び水準点の測量を行い、国家方眼座標第IX系のX=+107.14 m、Y=-19.67 mの交点を起点として、10m四方のグリッドを設定した。また、グリッドの東西ラインにはアラビア数字を、南北ラインにはアルファベットを付し、東及び南方向に昇順となるよう設定した。縄文時代の調査は、第II層上面の遺構精査後、10 mグリッドを四分割した5 mグリッドにより包含層を掘り下げ、層内に存在する遺物の取り上げや遺構の確認、精査という手順で行った。各遺構について住居跡を例にとって調査基準を述べれば、確認段階でプランが解るものについては壁に対して南北に直行する二本のセクションベルトを残して覆土を掘り下げ堆積土の観察を行った。ベルト除去後は遺物を取り上げ、炉跡や竈跡、柱穴の掘り込みなど住居内施設の精査にあたった。炉跡や竈跡については、半截ないしは形状によって任意にベルトを設定して掘り込むとともに、原則とし10 mグリッドを更に細分した1 m四方のグリッドを用いて1/10の平面図を作成しレベルを記録した。また、土層の状況・遺物出土状態・遺構掘り上がり状態については、それぞれ写真撮影を行い記録保存した。



第7図 川戸釜八幡遺跡基本土層図

第2節 発掘調査の経過

川戸釜八幡遺跡の発掘調査は、前述のとおり用地交渉の進捗及び工事計画に合わせ、平成10年度から19年度までの都合10年間に渡り試掘及び本調査を部分的に実施してきた。本節では調査の経過を一覧表に示すと共に、単年度毎の主な作業内容を簡略的に記す。

平成10年度(試掘調査) 当初の計画では、A区全域の15,000㎡を対象に試掘を行う予定であったが、借地交渉が難航したため調査可能なA区中央部分を中心に調査を実施した。試掘調査に先立ち、建設省立ち会いのもと6月5日に調査範囲の境界を確認し、8月3日からトレンチ掘削に着手することとなったが、重機搬入路の同意が得られないため、表土を人力により除去して作業を進めた。9月上旬からは遺構の性格や時期を把握するため、部分的にトレンチを拡張し一部の遺構を掘り込むと共にトレンチの端を深掘りし、堆積土の状態や縄文時代遺物包含層の確認にあたった。11月19日には航空写真撮影を行い、遺構の精査を進めたが、12月初旬の降雪のため調査が困難となり、同月10日をもって10年度の発掘調査を終了した。

平成11年度(本調査) A区中央部の釜八幡神社を挟んだ東側(H11a地区)と西側(H11b地区)両地区の約2,300㎡を対象とした。調査は8月2日から開始し、重機により第Ⅱ層上までの表土除去を行った。第Ⅱ層上の遺構を調査した後、縄文時代の包含層を掘り下げた。この結果、H11a地区からは縄文時代遺物の集中がみられたが、H11b地区からは殆ど出土しなかった。中内地区の調査が急務であるため、10月14日をもって終了し、同月15日からからは、中内遺跡の試掘を開始した。

平成12年度(遺構確認) A区に関しては、5月8日から6月2日までH11a区の隣接地700㎡(H13a地区)の表土除去を人力で行った後、遺構確認作業を行った。B区に関しては、7月25～28日にかけてほぼ全域にあたる8,000㎡を対象に重機で試掘トレンチの掘削を行った。試掘は幅2mのトレンチを10m間隔で等高線とほぼ直交するように、南北の座標に沿って17本設定した。試掘調査の結果、釜八幡神社北東側で時期不明の土坑数基を確認したのみであり、また遺物も出土しなかった。このほか、東端部分の1,100㎡(H14c地区)と西端の600㎡(H13b地区)の表土除去を行った。B区の試掘調査終了後、中内遺跡の調査が急務となり、また7月31日～8月1日には石仏Ⅱ遺跡、9月18～20日には石仏Ⅲの試掘調査に1パーティーを投入したため、遺構の掘り込みと包含層の掘り下げは行わなかった。

平成13年度(試掘調査・本調査) 5月7～11日に石仏Ⅰ遺跡の試掘調査を行い、次いで6月1日より中内遺跡の本調査と並行して12年度に表土除去した西端約600㎡(H13b地区)、釜八幡神社東側の約700㎡(H13a地区)を併せた約13,000㎡の本調査を実施した。調査は10月12日まで行ったが、東端部分の1,100㎡が中内遺跡の調査を優先したため未了となった。このほか、9月5～13日に用地買収が終了し、緊急に追加となったA区からC区にかかる工費用搬入路部分(対象面積約2,940㎡)の試掘を行った。

平成14年度(試掘調査・本調査) 平成12年度の試掘調査で遺構を確認した部分の800㎡(H14a地区)と、同年に表土除去の完了している部分約700㎡(H14c地区)の本調査を行った。また、H14a地区の南東部(H14b地区)、釜八幡神社北側の付け替え泉道部分、遺跡西側のH11b地区とH13b地区間の都合3カ所(対象面積2,470㎡)の試掘を行った。調査は5月16日から試掘トレンチ及び調査区の設定、5月20日より表土除去・試掘トレンチの掘削に着手した。H14a地区については近世の土坑数基を確認したのみで、包含層内の遺物も少なく6月10日で終了した。H14a地区の調査終了後、6月12日から試掘調査を開始し、H14b地区からは近世の墓坑2基のほか縄文土器・石器などを確認した。また、遺跡西側の調査では東西1本、南北3本のトレンチ(総長91m)を設定し重機による掘削を行った。調査の結果、墓坑1基と数基の土坑を確認したが遺物等は出土しなかった。また、釜八幡神社北側隣接地にもトレンチを設定し人力による掘削を行ったが、

大部分が後世の擾乱を受けており遺構・遺物は確認できなかった。試掘調査終了後、7月からH14c地区の調査を開始し、南に向かう斜面の上方で縄文時代後期の石棺墓11基、近世の土坑・小穴群等を確認した。調査は途中、9月3日から石仏1遺跡の本調査と並行して進め、11月19日に終了した。なお、B区については、12年度及び14年度の試掘で遺構・遺物を確認した部分の調査は終了し、これ以外の部分については記録すべき埋蔵文化財はないものと判断したため、本調査の対象から除外した。

平成15年度(試掘調査・本調査) 釜八幡神社南側及び東側の隣接地約750㎡(H15b地区)と、H13a地区の南側及び東側隣接地約1480㎡(H15a地区)を併せた約2,230㎡の本調査を実施した。また、本調査に加えてH14c地区の南側で一部C区にかかるA地区東端部分約900㎡の試掘を実施した。調査は6月16日より表土除去作業及び試掘溝の掘削から着手した。試掘に関しては、H14c地区で縄文時代の石棺墓群を確認しており、位置的にも遺構の広がりが予想されたが、宅地造成に伴う倒土により遺構は確認できなかった。本調査については、H15a地区で縄文時代及び古代の竪穴住居跡、H15b地区では近世の土坑等を確認した。遺構の調査終了後には、縄文時代遺物包含層の掘り下げを行い、11月28日に調査を終了した。

平成16年度(本調査) A区東側付特異道部分の約280㎡(H16地区)が対象である。重機による表土除去後、6月1日より遺構確認及び各遺構の掘り込みを開始した。調査箇所は遺跡の北縁にあたるため、出土した遺構・遺物は少なく7月9日に調査を終了した。

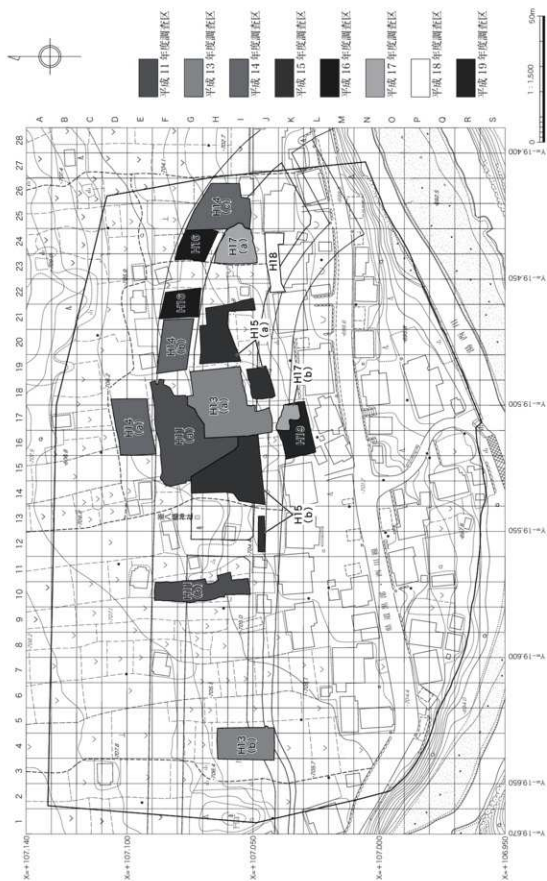
平成17年度(本調査) A区東端部で石棺墓群を確認したH14c地区の西側隣接地約200㎡(H17a地区)と遺跡の中央部に相当する村道部分及び公共用地部分の約300㎡(H17b区)が対象である。調査は6月9・14日に重機で表土除去を行い、16日からH17a地区、7月8日からはH17b地区の遺構確認にも着手した。調査の結果、H17a地区からは石棺墓7基、H17b地区からは縄文時代晩期の竪穴住居跡1軒を確認し、それぞれの遺構の精査を行い8月24日に17年度の調査を終了した。

平成18年度(本調査) H17a地区南側の約100㎡が対象である。6月より開始した中内遺跡農地部分の調査と並行して10月10日から調査を開始した。幅5m、長さ20mの狭い調査範囲に対し、まず重機による表土除去を実施した。北側の隣接部分である斜面の上方を以前に調査した際、表土の厚さが20～30cmであったので、今回も同様の状況を想定した。しかし、1m50cm以上掘り下げて、ようやく遺物包含層に達した。危険な深さとなったため、重機で少しずつ遺物を取り上げながら第V層まで掘り下げたが遺構は確認されず、同26日に埋め戻しを行い調査を終了した。

平成19年度(本調査) 建物や樹木などがあるため調査が未了となっていた、旧村道隣接地及び公共用地部分(C区)の約200㎡(H19地区)が対象である。調査は5月24日から重機による表土除去を開始し、6月4日からは人力による遺構の確認作業を行った。調査の結果、縄文時代晩期の竪穴住居跡3軒、古代の竪穴住居跡3軒などを確認した。6月13日からは遺構の掘り込み・精査を行い、9月26日をもって10年間に渡り行ってきた川戸釜八幡遺跡A・B両地区の現地調査を終了した。

平成16～21年度(整理・報告書作成) 整理作業・報告書作成は各遺跡の調査と並行して行い、4月から12月までを現地での発掘調査、1月から3月までを整理作業に重点を置き、主に出土遺物の水洗・注記のほか、遺構図作成や写真の整理作業を行った。

現地調査終了後、土器については分類・接合作業を行い、遺構内及び包含層出土土器との後接合も試みた。このうち、掲載土器に関しては、器形復元可能なものを中心に選定して図化することとした。石器について、特に剥片石器に関しては、出土した全てに対して器種毎の分類後に写真撮影を委託し、これを基に実測を行った。また、石器石材に関しては、産出地を推定するため肉眼鑑定を委託した。遺構図に関しては、現地で作



第8図 グリッド配置図

成した平面図と断面図を修正し、デジタルトレース・編集作業を行った。

本年の報告書作成作業に関しては、原稿執筆、遺構・遺物の版組、写真図版作成、作表などを主な作業として行い、3月末日の本報告書の刊行をもって川戸釜八幡遺跡の調査はすべて完了となる。



発掘調査風景



整理作業風景

第2表 調査経過一覧

調査工程	平成10年度				当初面積	実施面積	平成11年度				対象面積	完了面積
	4～6月	7～9月	10～12月	1～3月			4～6月	7～9月	10～12月	1～3月		
試掘調査					6,000 m ²	4,600 m ²						
本調査											5,500 m ²	2,300 m ²
整理作業												
報告書作成												
調査工程	平成12年度				当初面積	実施面積	平成13年度				対象面積	実施面積
	4～6月	7～9月	10～12月	1～3月			4～6月	7～9月	10～12月	1～3月		
試掘調査					8,000 m ²	8,000 m ²					2,940 m ²	2,940 m ²
本調査					2,400 m ²	0 m ²					2,400 m ²	1,300 m ²
整理作業												
報告書作成												
	※表土除去のみ											
調査工程	平成14年度				当初面積	実施面積	平成15年度				対象面積	実施面積
	4～6月	7～9月	10～12月	1～3月			4～6月	7～9月	10～12月	1～3月		
試掘調査					3,200 m ²	2,470 m ²					900 m ²	900 m ²
本調査					4,300 m ²	1,510 m ²					2,700 m ²	2,230 m ²
整理作業												
報告書作成												
調査工程	平成16年度				当初面積	実施面積	平成17年度				対象面積	実施面積
	4～6月	7～9月	10～12月	1～3月			4～6月	7～9月	10～12月	1～3月		
試掘調査					280 m ²	280 m ²					500 m ²	250 m ²
本調査												
整理作業												
報告書作成												
調査工程	平成18年度				当初面積	実施面積	平成19年度				対象面積	実施面積
	4～6月	7～9月	10～12月	1～3月			4～6月	7～9月	10～12月	1～3月		
試掘調査					300 m ²	100 m ²					200 m ²	200 m ²
本調査												
整理作業												
報告書作成												
調査工程	平成20年度				当初面積	実施面積	平成21年度				対象面積	実施面積
	4～6月	7～9月	10～12月	1～3月			4～6月	7～9月	10～12月	1～3月		
試掘調査												
本調査												
整理作業												
報告書作成												
調査工程	平成22年度				当初面積	実施面積					対象面積	実施面積
	4～6月	7～9月	10～12月	1～3月								
試掘調査												
本調査												
整理作業												
報告書作成												

第3節 発掘調査の概要

川戸釜八幡遺跡は、湯西川源流地域の左岸に位置し、特丸山（標高 1365.5 m）南西山麓の河岸段丘上に立地する。調査対象地区は、蛇行して東流する湯西川によって形成された、南に突出する段丘上の約 38,000 m²である。遺跡の標高は、最も高い調査区の北側で 706.3 m ほどで湯西川に向かって緩やかな傾斜をもち、最も低い調査区の南側とでは約 2 m の比高がある。調査前は山際の大部分が畑地として耕作されており、湯西川沿いの南側部分は宅地及び県道によって地形の一部が削平を受けている。今回の調査で確認した遺構は、縄文時代後・晩期と古代から近世にかけてのもので、湯西川を南に望む段丘の平坦面から縁辺にかけて発見した。

縄文時代の遺構は竪穴住居跡 10 軒（石圍炉 1 基含む）、土坑 7 基、石棺墓 18 基などである。調査の結果、居住域と墓域が明確に区別された構造の集落跡であることが明らかとなった。

竪穴住居跡は 10 軒確認したが、このうち住居内施設などから建て替えが想定されるものが 2 軒ある。これらの住居群は、湧水点を中心に地形に沿って弧状の配置をとるが、遺構の広がりには更に南側の宅地及び県道部分へ延びていたものと推測できる。後期の住居跡は柱跡と床面のみ確認となったが、晩期の住居跡については、直径 5～6 m 前後の隅丸方形ないしは楕円形を基本とするもので、掘り込みもしっかりしていた。なかでも遺存状態の良い SI-395・403 の住居内からは、晩期中葉の土器に伴い多量の剥片石器とその製作剥片が出土している。また、SI-395 の床面からは完形の浅鉢のほか、炉を挟んだ東西の壁際から形態の異なる石冠が 1 点ずつ出土している。このうちの石製型石冠は、黒漆地にベンガラで赤色塗彩が施された優品である。

縄文時代の所産と判断できた土坑は少なく、僅か 7 基のみである。平面形は円形と楕円形のものがあがり、遺物が少なく時期の決定は難しいが、SK-237 は後期中葉、SK-410 は晩期に比定可能な遺物が出土している。

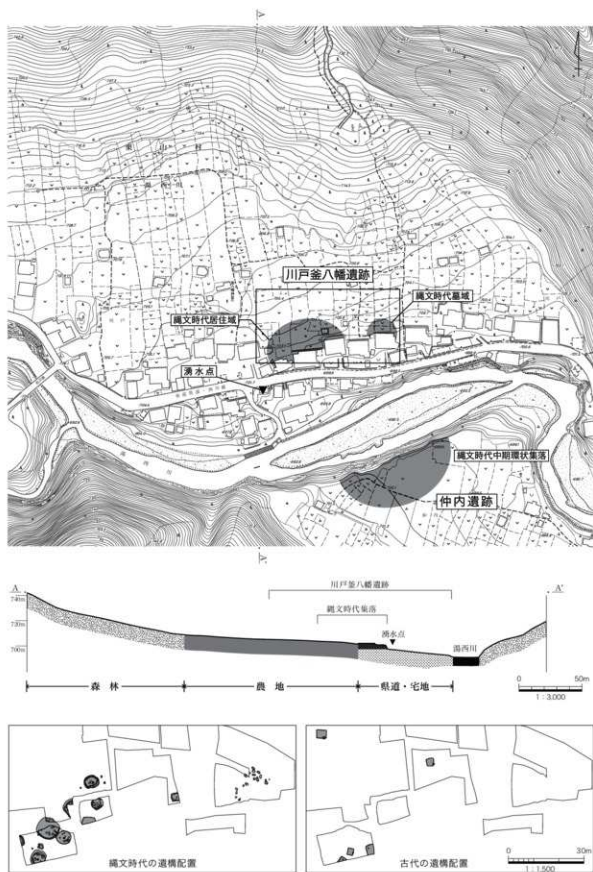
墓域は住居群の約 20 m 東に位置し、石棺墓 18 基で構成され、湯西川に面して径約 15 m の範囲で弧状に展開する。これらの石棺墓は、土坑内に板状の湖石や河原石を方形状に組んだもので、蓋石を伴うものもある。遺物は極めて少ないが、後期中葉～後葉の土器片が出土している。

遺物は遺構内外から土器と石器などが遺物収納中箱換算で約 120 箱分出土した。土器は覆土や地山に多量の礫が含まれるため、摩耗しているものや破片資料が多い。包含層からは後期中葉から後葉を主体に、早期前半から晩期後葉までの土器が出土している。特に後期後半の土器については、加曾利 B 式・安行式などの関東系土器に加え東北系土器の出土が顕著であるが、晩期の土器については大洞式系土器が大部分を占めている。石器・石製品は 577 点が出土している。なかでも石鏃の出土数が群を抜いており、次いで磨石類、搔削器類の出土数が多い。また、装着材として石鏃や石錐、石匙などの基部にアスファルトが付着したものが多数認められた。このほか、土偶・土版・耳環・土鍾・円盤などの土製品が出土している。

古代から近世にかけての遺構は竪穴住居跡 5 軒、土坑（墓坑含む）300 基、小穴などを確認した。遺物は土師器・漆器・鉄製品・石臼・砥石などが出土している。

古代の竪穴住居跡は主軸方向や規模、カマドの構造において共通した特徴を持つ。規模については、一辺が 4 m 前後の大型のもの、2.5～3 m の小型のものに大別できる。大型のものは南壁東寄りに、小型のものは東壁南寄りの位置にそれぞれ石組のカマドが備わる。遺物は土師器甕形土器のほか、鉄鏃・刀子などの鉄製品が出土している。所属時期に関しては、遺物の年代から 9 世紀後半から 10 世紀前半頃のものと思われる。

土坑は遺物を伴わないものが殆どで、時期比定は困難であるが、概ね近世以降の所産と思われる。平面形は、円形や楕円形の土坑が圧倒的に多く、覆土は単層で埋め戻しと判断できるものも少なくない。また、特徴的なものとして、覆土内に多量の河原石や礫が底面付近で密に纏まったものがある。遺物の伴出する土坑は僅か 7 基のみであり、このうち SK-307・309・310・388・453 は近世の墓坑と考えられる。



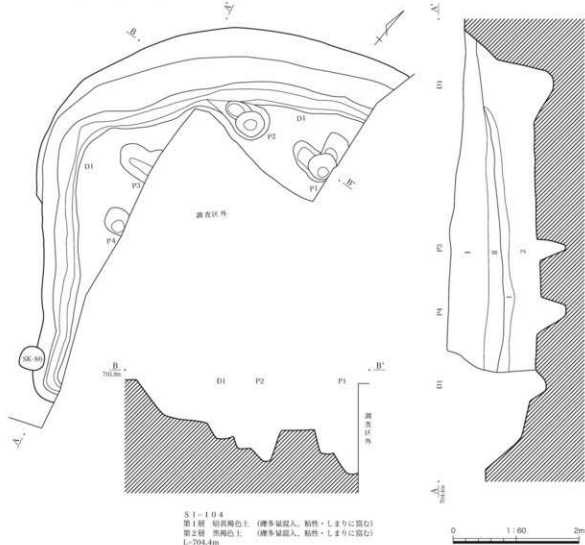
第9図 川戸釜八幡遺跡周辺地形図

第4節 縄文時代の遺構と遺物

1. 竪穴住居跡

SI-104 (第10～17図、図版一・一八・二九・三〇)

位置 平成13年度調査区の最も南端に位置するI-17・J-17グリッド内の第V層上で確認した。北壁・及び西壁の周囲を調査したのみであり、住居跡の大半が調査区外となる。重複関係 南西コーナーでSK-86に切られる。規模・形状 調査した部分からの判断となるが、規模は推定で東西5.78m、南北5.88mの楕円形ないしは隅丸方形を基調としたプランを想定する。壁・壁溝 確認面からの深さは80cm前後で床面から外傾して立ち上がる。壁溝は幅18～36cm、深さ8cmほどで、南西コーナーで途切れるが各壁際を巡っている。床面の状況 第V層を床面としてほぼ平坦に構築している。調査した部分の床面は周縁部に当たるため、特に明確な踏み固めは確認できなかった。また、炉跡は確認できなかったが、調査区外に存在する可能性が考えられる。柱穴 4個のビットを確認した。各々の平面形は50cm前後の円形で床面からの深さはP1が最も深く70cm、P2が50cm、P3・P4が40cmほどである。覆土 住居内の覆土は大きく2層に分層可能で、全体的に第IV層と同質の礫を多量に含んだ黒褐色土に覆われる。出土遺物 縄文土器218点、土製品3点(腕輪2、円盤1)、石器30点(石鏃10・石錐1・槌削器類5・石匙3・打製石斧1・磨製石斧1・



第10図 SI-104実測図

磨石類7・軽石1・石錘1)を图示した。これらの遺物は、覆土第2層内の上位から床面付近にかけて出土したものである。出土した土器は小破片が主体で、後期中葉から晩期中葉までの破片を含んでいる。

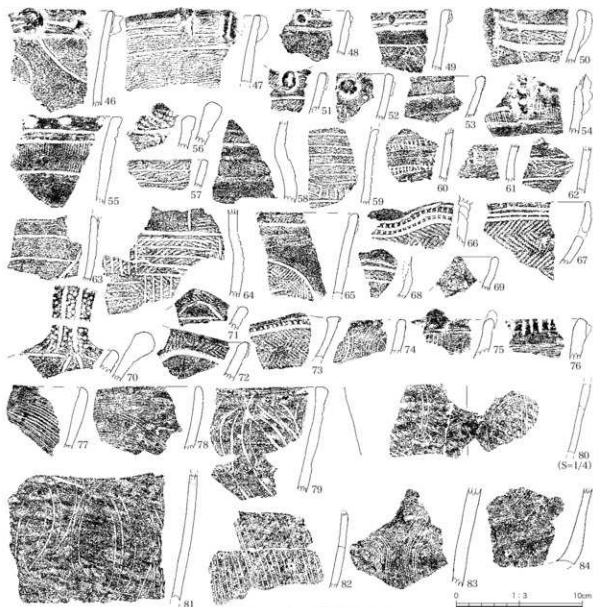
1～45は関東系後期中葉から後葉の土器である。1・2は横帯文を配す土器である。1は横帯文を対弧文で区切り、2は横帯文に斜線を施している。3・4は口縁に一段のキザミ目帯を配し、6は口縁部に縄文帯、7



第11図 SI-104 遺物実測図(1)

～10は沈線を施す。11・12は横位・斜位の沈線、13～16はキザミ目列や弧状の縄文帯がみられる体部片である。17～45は曾谷式・後期安行式に比定される帯縄文系土器である。17～19は隆起帯縄文にキザミのない貼瘤がみられ、24・25にはブタ鼻状突起、26は縦、27は横方向のキザミを施した突起が付く。28・29は縄文地に凹線を引いて帯縄文を作出する。36～45は安行式の粗製土器である。36～38はキザミを加えた組縄文で、39～41は付点と集合斜線で構成されるもの、42～44は集合斜線のみ施される。

46～84は東北系後期後葉の土器である。46～52は貼瘤がみられる口縁部片、53～63は横帯文のみられる土器である。53～59は横帯に縄文を施す。59・60は横帯にキザミを、62・63は横帯に条線を施す。64は縦横の集合沈線を組み合わせるもの、65は弧状の縄文帯を配す口縁部片、66は2条のキザミ目帯で縄文部と無文部を区切る。67は口縁に3条の沈線を巡らし、以下、羽状縄文を施す。68～73は波状をなす口縁部片で、70は口縁部に横キザミのある突起を配している。71・72は口縁に縄文帯を、73は口縁にキザミ目帯を巡らせる。74～84は粗製土器で楕円状工具による条線を施す。



第12図 SI-104 遺物実測図(2)

85～203は晩期大洞式土器である。精製土器のモチーフには、横方向の入組文(85～88)、羊歯状文(89～91)、2溝間の截痕文(92)、陽彫による大隈竹文(93～99)、クランク状の入組文(114・115)などがある。また、復元個体である106～113、120の土器は雲形文をモチーフとするもので、器形は鉢・浅鉢が多くを

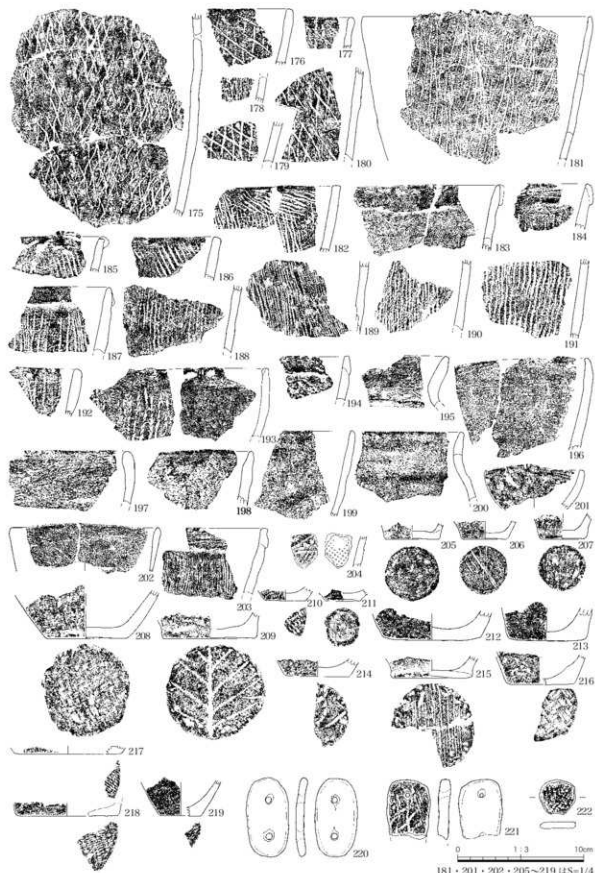


第13図 Si-104 遺物実測図(3)

0 1.3 10cm
 99・106～110・113
 114・118～120はS=1/4



第14図 SI-104遺物実測図(4)

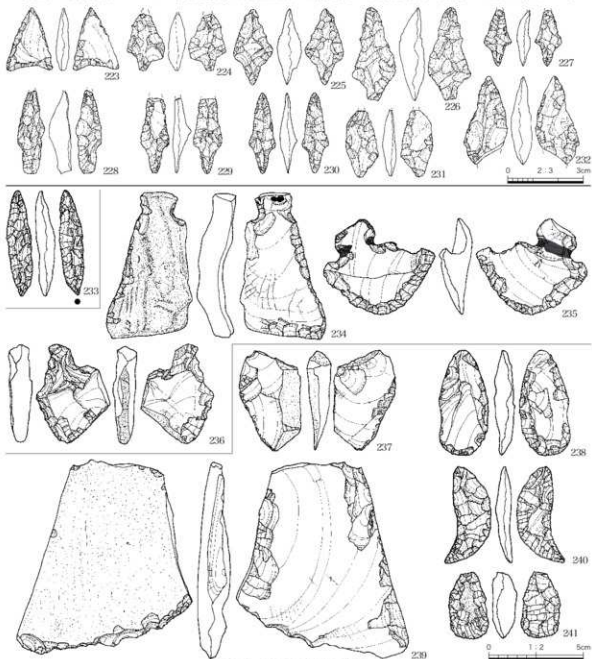


181・201・202・205~219 1/4S=1/4

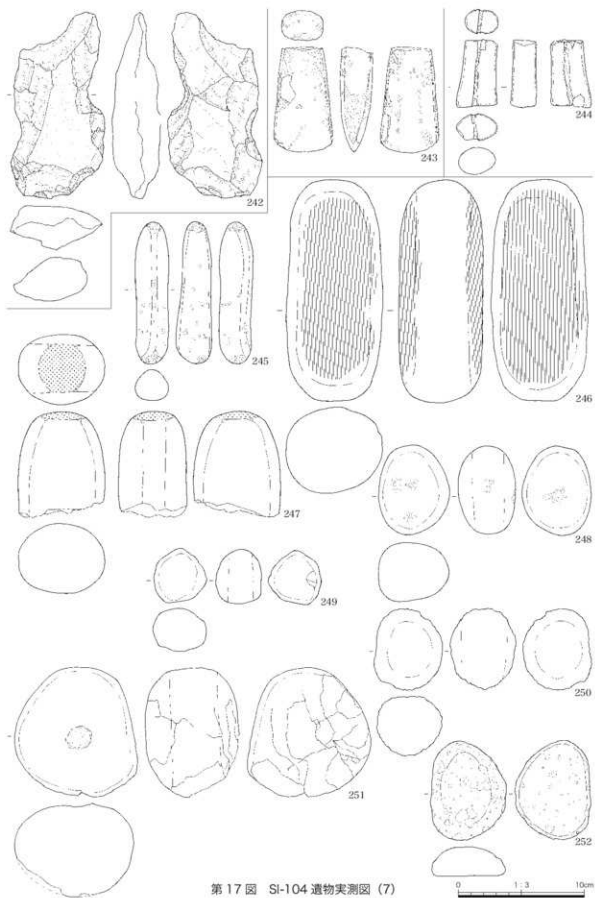
第15図 SI-104 遺物実測図(5)

占める。97には赤色塗彩が残る。118の浅鉢の口辺及び119の鉢の頸部には溝底の刺突がみられる。116・117は数条の沈線を巡らす口縁部片、100～105は壺・注口土器・台付土器などの破片である。121～202は半精製及び粗製土器を掲載した。121～129は口辺に沈線、130～133は口辺に沈線と刺突、134・135は口辺に隆帯と沈線を巡らす。139～157は縄文のみがみられる破片である。141・142はS字状結節縄文、143は羽状縄文、144は眼鏡状結節縄文が施される。148～157は口縁から縄文を施すもので、154～156の口辺にはキザミが加えられる。158～163は折り返し口縁の土器、164・165は口縁部下にキザミを施し、166・167は口縁部下にキザミを加えた隆帯を巡らす。168～179は単軸絡条体による網目状捺糸文が施されるもので、183・184・187は複合口縁をなす。195～202は単口縁の無文土器、203は細い条痕が施される。

本住居の所属時期については、復元個体や出土土器の主体を占める晩期中葉の大洲C2期と考えたい。



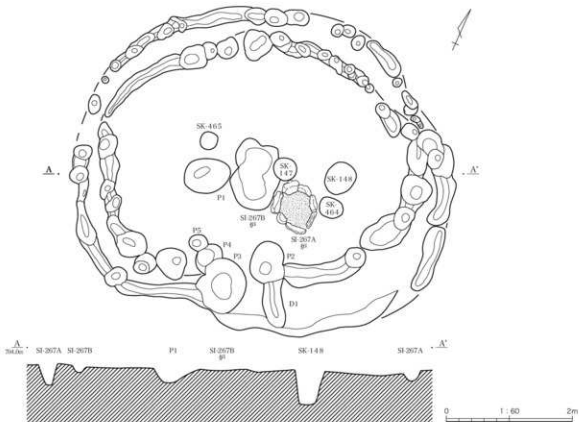
第16図 SI-104 遺物実測図(6)



第 17 図 SI-104 遺物実測図 (7)

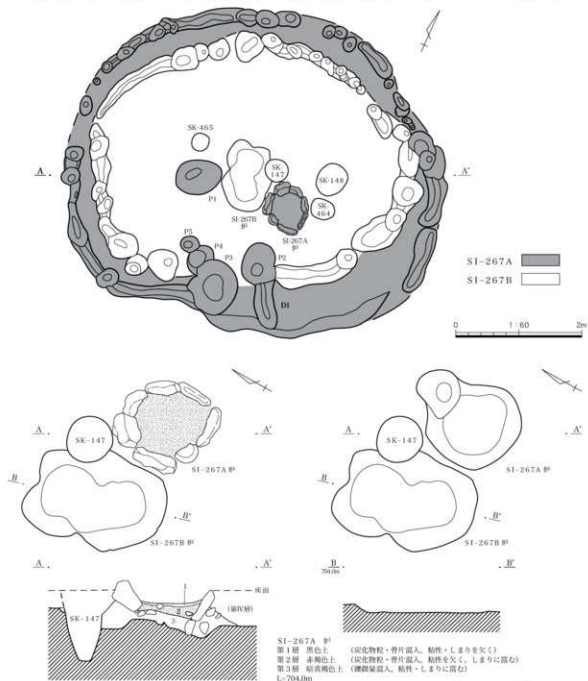
SI-267A・B (第18～20図、図版一・一八)

位置 縄文時代住居群の最も北側に位置するH-18・I-18グリッド内で確認した。包含層を掘り下げた段階で第IV層の黒褐色土内で炉を確認し、また、第IV層除去後の第V層精査時において検出した、二重に巡る壁溝の存在から住居の拡張・建て替えを想定した。ここでは、拡張後の住居跡をSI-267A、拡張前の住居跡をSI-267Bとして記載する。重複関係 SK-134・140・141・144・146・147・148・165・266・464・465の土坑と小穴P7・8と重複する比較的遺構の密度が濃い部分である。重複する遺構は、いずれもHr-Fp降下以降に構築されたものであり、本跡より新しい時期のものである。規模・形状 遺存する壁溝から判断して、SI-267Aは東西6.1m、南北5.2m、SI-267Bは東西5.3m、南北3.9mのそれぞれ楕円形をなしており、SI-267Bの壁を40～50cm外側に拡張しているが、特に南壁の東半部を大きく広げている。壁・壁溝・床面の状況 住居構築時は竅穴の形態を示すものと考えられるが、その掘り込み面は上位の遺物包含層内に存在するため、本住居跡確認時には包含層の掘り下げにより、床面及びその上方に係わる壁などは既に失われていた。このため、掘方面における周溝の痕跡及び一部の柱穴を確認したのみである。内側を巡るSI-267Bの周溝は幅20～40cm、深さ5～10cmが遺存しており、壁際をほぼ全周する。SI-267Aの壁溝は幅20～30cm、深さ10～30cmで南壁の東半部を除き巡っている。床面は炉跡の確認面から判断して第V層より20cm前後上方の第IV層内を平坦に構築して床面としていたものと思われる。柱穴 住居内から合計5個のピットを確認した。いずれも円形ないしは楕円形で、確認面からの深さはP1が20cm、P2・3が35cm、P4が27cm、P5が最も深く50cmである。位置関係から主柱穴と判断できるものは確認できなかったが、SI-267Aの南壁に直交する溝(D1)と接続するP2とこれに対峙するP3・4は、出入口施設に係わるものと考えられる。覆土 第IV層と同質の礫を多量に含む黒褐色土に覆われる。炉跡 遺存する炉跡はSI-267Aに付随する



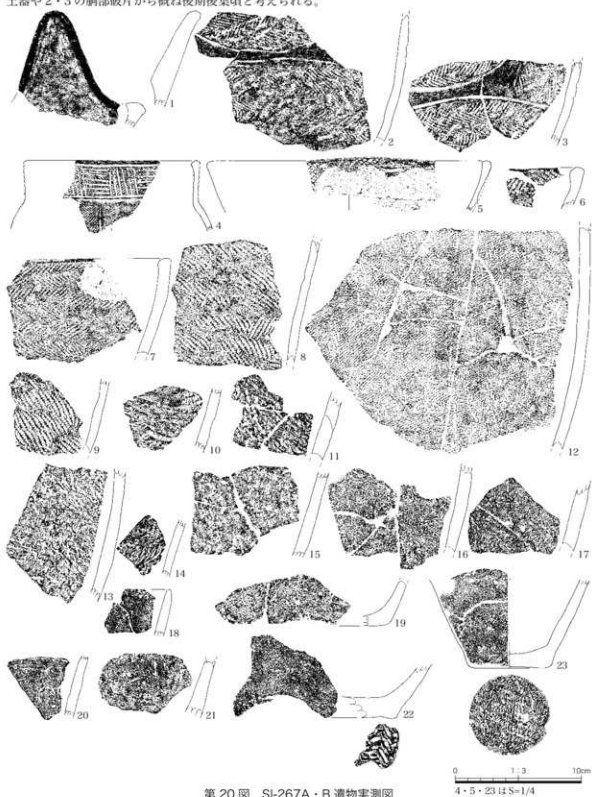
第18図 SI-267A・B実測図(1)

もので、住居の中央からやや東寄りに設けられている。一辺の長さが60cm前後の石囲炉で、比較的扁平な河原石や割石をやや外傾気味に立てて設置し、方形状に組んでいる。炉石は火熱により脆くなっており、また内部には炭化物や骨片が混入する焼土の堆積がみられるが、熱による底面の焼土化はあまり認められない。また、SI-267Aの炉の西側には長軸1m×70cm、確認面からの深さが5cmほどの浅い窪みがあり、被熱痕や覆土の状況からSI-267Bの炉の掘方と考えられる。出土遺物 炉の確認後に住居と判断したため、本住居跡のものとして取り上げた遺物は土器片二十数点と極めて少ない。時期的には、後期中葉から後葉の破片が含まれる。1は内面が肥厚する波状口縁深鉢形土器の波頂部片で、内外面とも丁寧なミガキが施される。2・3は磨消縄文を有する割部破片で、弧状の沈線で区画した内部に羽状縄文を充填する。4は口縁部が直立す



第19図 SI-267A・B 実測図(2)

る深鉢形土器で、口縁部は二本の沈線区画内に縄文を充填した後、横走する数条の沈線を縦線で区切るモチーフが描かれ、胴部には縦位の区画帯に羽状縄文を充填する。5～14は縄文のみが施されたもの、15～23は無文土器で、22・23の底部には網代痕が残る。本住居の所属時期については、形状の理解できる4の深鉢形土器や2・3の胴部破片から概ね後期後葉頃と考えられる。



第20図 SI-267A・B 遺物実測図

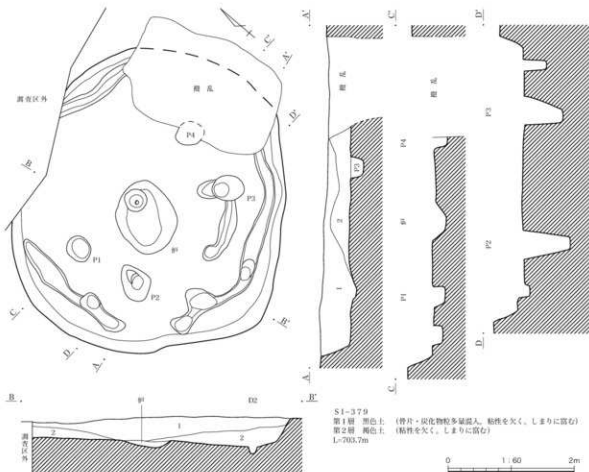
SI-379 (第21～31図、図版二・一九・三〇・三一)

位置 I-18・J-18・I-19・J-19 グリッド内に位置する。重複関係 他の遺構との切り合いはないが、北壁の北東コーナーから中央部にかけて擾乱を受けており、また北西部分は調査区外となる。規模・形状 東西4.84m、南北4.34mで、各コーナーがやや丸みを帯びた隅丸の方形ないしは楕円形のプランである。

壁・壁溝 床面からやや外傾して立ち上がる。確認面からの深さは最も深い南側で40cm、その他の部分で35cmほどが遺存する。壁溝は幅18～35cm、深さ10～15cmで、西壁及び南壁中央部で途切れる以外は壁際を巡っている。床面の状況 第V層の黄褐色土を床面としてほぼ平坦に構築しているが、地山に含まれる礫が尖出し凸凹している部分がある。特に踏み締めなどによって硬化した部分は認められない。柱穴 住居内から合計4個のピットを確認した。各々の平面形は長軸が50cm内外の楕円形で、床面からの深さはP1・P4が20cm前後、P3・P4が60～70cmであり、南側が深く掘り込まれている。

覆土 住居内堆積土は大きく2層に分層した。全体的によく締まっており、炭化物・骨片を含み、また礫や河原石の混入が目立つ。炉跡 本来は石囲炉であるが、炉石が抜き取られている。114×94cm、床面からの深さ12cmの楕円形の掘方が遺存する。掘内の覆土は焼土ブロックと炭化物を少量含み、堀方底面の北側は火熱による赤化や硬化面が若干認められる。出土遺物 床面より若干浮いた覆土第1・2層内から多量の土器片と石器が出土した。

このうち、縄文土器253点、土製品6点(土鍋1・円盤4・土鍾1)、石器42点(石鎌11・尖頭器2・石錐2・石匙1・搔削器類5・磨石類9・石剣・石棒類1・礫器1・磨製石斧1・石鍾8・石皿1)を図示した。



第21図 SI-379実測図(1)

土器は殆どが小破片で合計629点出土しており、時期的には後期後葉から晩期前葉までの破片を含んでいる。また、図示した1・2の2点のみであるが、中期後半に比定される土器が混入している。

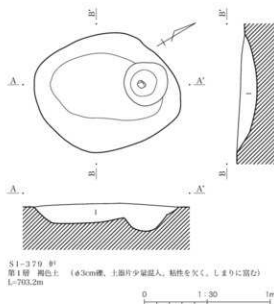
石器に関しては、特徴として石錘と磨石の出土数が比較的多い点が挙げられる。

後期後葉の土器には、安行式と東北系の新地式がみられる。東北系後期後葉の土器は、精製土器100点と粗製土器43点が出土している。3～36は鉢形土器で、3～10は弧線連結文がみられるものである。4は口縁部から胴部上半部が復元可能な深鉢形土器で、棒状工具の押捺による2本のキザミ目が施された突起が1つ残存する。口縁部にはこの突起を起点に弧状の沈線が巡り、沈線間の下部に三叉文を配している。11～15は横帯文と貼瘤が施されるもので、15は縦の貼瘤に横位のキザミを加える。16～23は横位の縄文帯もしくは無文帯がみられる。24・25は横帯内に刺突もしくはキザミ目を施し、26は無文地に横位の沈線、27は刺突列と斜位の沈線を巡らす。28は縄文地に横位の沈線、29～31は楕円形の無文帯がみられる。30・31は楕円形無文帯の間にキザミを伴う弧状の隆帯が貼付される。32は縄文地に雑な波状沈線を施す。33は縦位の縄文帯、34は縦位の弧線文、35・36は三叉文がみられる。37～44は注口及び壺形土器である。37は口縁部の縄文帯に2対の小きな貼瘤がなされ、38は口縁部と括れ部に横位の沈線が巡る。39・40は体部の貼瘤を起点に弧線連結文が展開する。43・44は注口土器である。43の注口は体部との接合部で剥離し、44は注口の根本を粘土で補強した部分から破損している。45～65は粗製土器で、45～50は無文地に簡素な沈線文、51～65は歯歯状工具による条線文を施す。

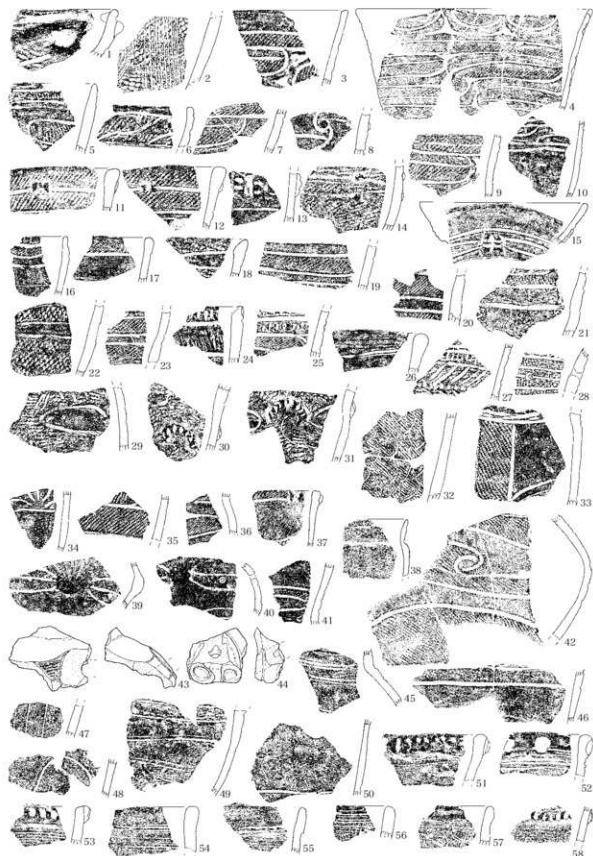
後期安行式土器は精製土器が109点、粗製土器が8点の合計117点出土している。66～102は帯縄文系精製土器で、66～71は隆起帯縄文とキザミのない縦位の貼瘤がみられる。72・73は隆起帯縄文上にキザミを施す。74～77は斜線充填文やキザミ列などが施される体部破片である。78・81は瓢形土器、82は無文地に貼瘤のみがみられる。83は口端にキザミを配し、以下縦位の沈線を施す。84～86は低平な隆起帯縄文にブタ鼻状の貼瘤が付く。87～91の口縁部片は激しい被熱により器面が発砲状に剥離する。所謂「発砲土器」であり、本住居跡からは不掲載を含め46点が出土している。92～95はブタ鼻状の突起が付く体部破片、96～99は隆帯を消失した隆起帯縄文とキザミのある縦位の貼瘤がみられる。100・101は隆起帯縄文が沈線間のキザミ目列へと転化した土器、102は縦刻みのある貼瘤が施される。

103～115は入組文系土器である。103～105は三叉文がみられる破片、106・107は無文地に弧状の沈線でモチーフを描く。108は楕円形土器の屈折部分、109は口縁に横刻みのある貼瘤を配す。110は船隻状の磨消文が施される。111は口縁に縄文帯を配し、口端に低い突起が付く。114は付台ミニチュア土器の脚部。115は口縁部が短く外反するやや大形の鉢形土器で、全体の約1/3が残存する。頸部と体部中位を巡る横位沈線によって区画された上段には「く」の字状の磨消文を配し、下段は互連弧充填縄文が展開する。

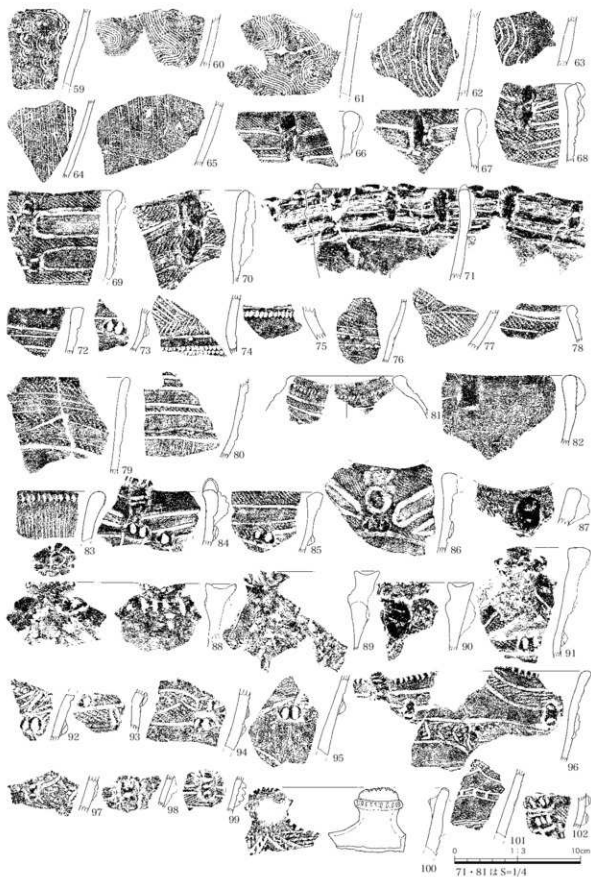
116～122は安行式の粗製土器である。116～118は折り返し口縁の土器。119は地文に縄文を施し口縁に列点を巡らすもの、120は口縁に列点を巡らし以下に斜線を施す。



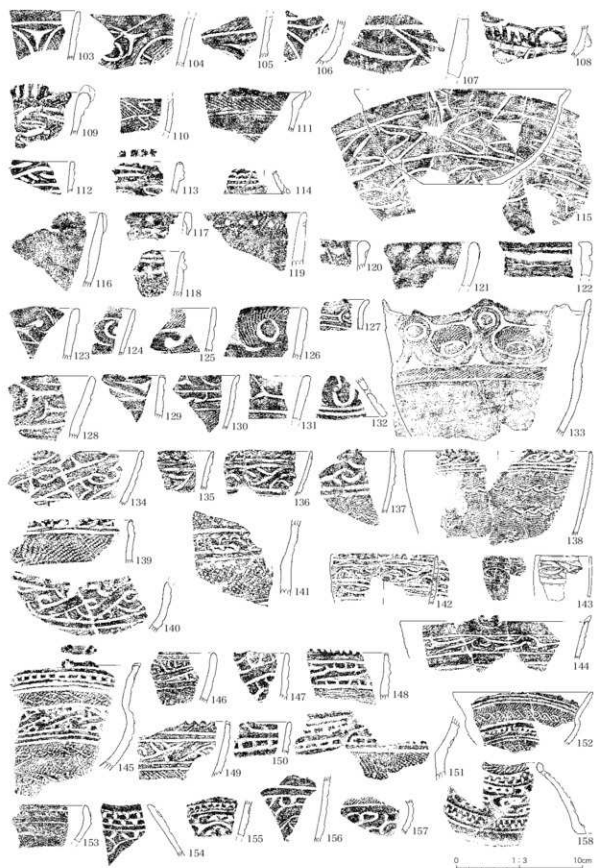
第22図 SI-379実測図(2)



第23図 SI-379 遺物実測図(1)

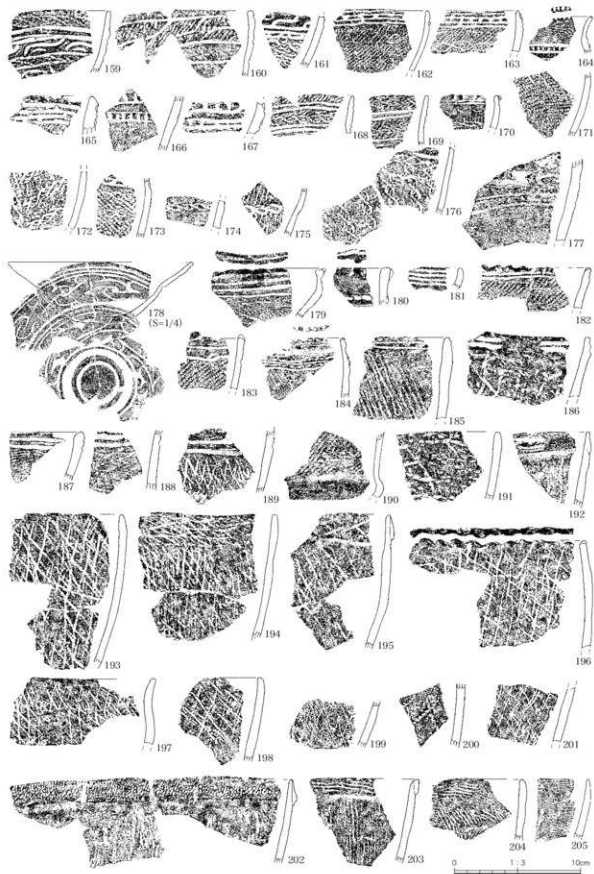


第24図 SI-379 遺物実測図(2)

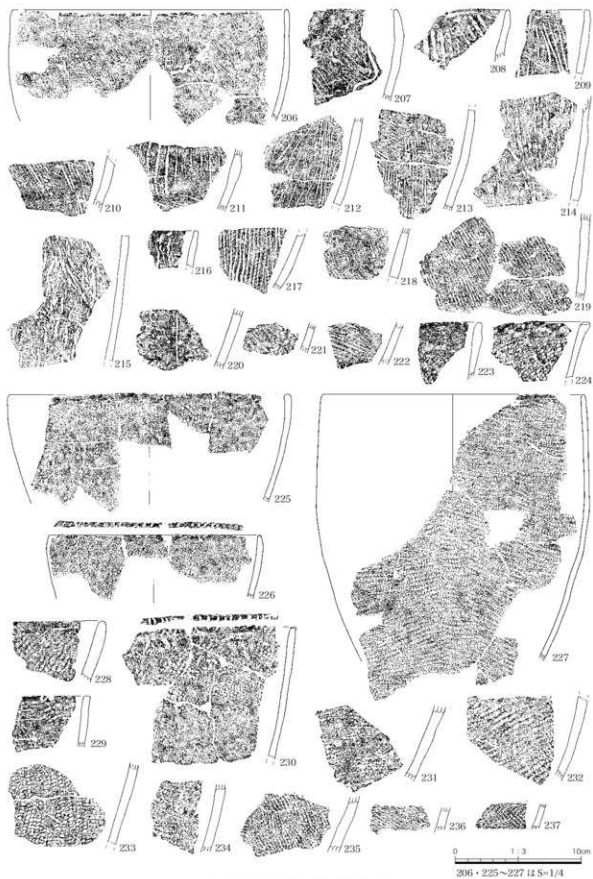


第25図 SI-379 遺物実測図(3)

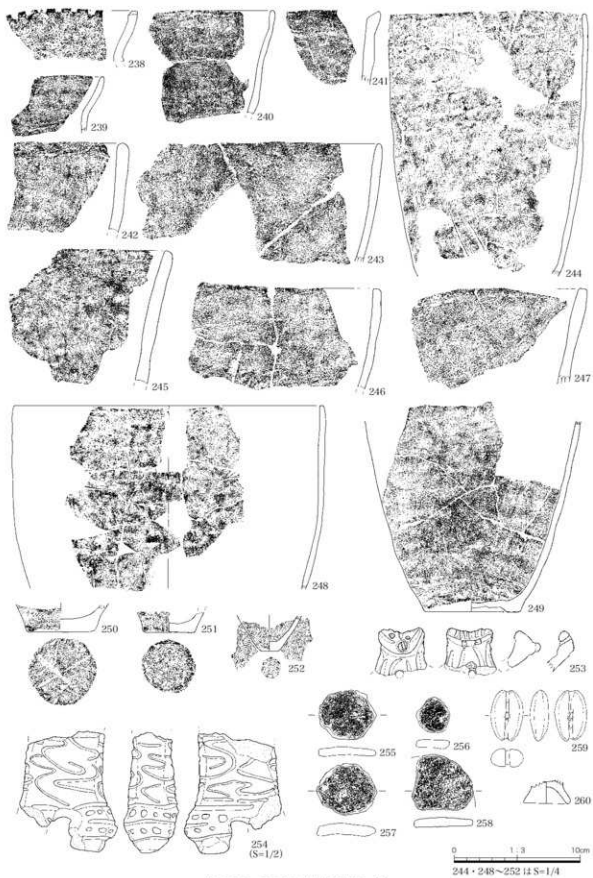
114・115・133・138・
142~144・152はS-1/4



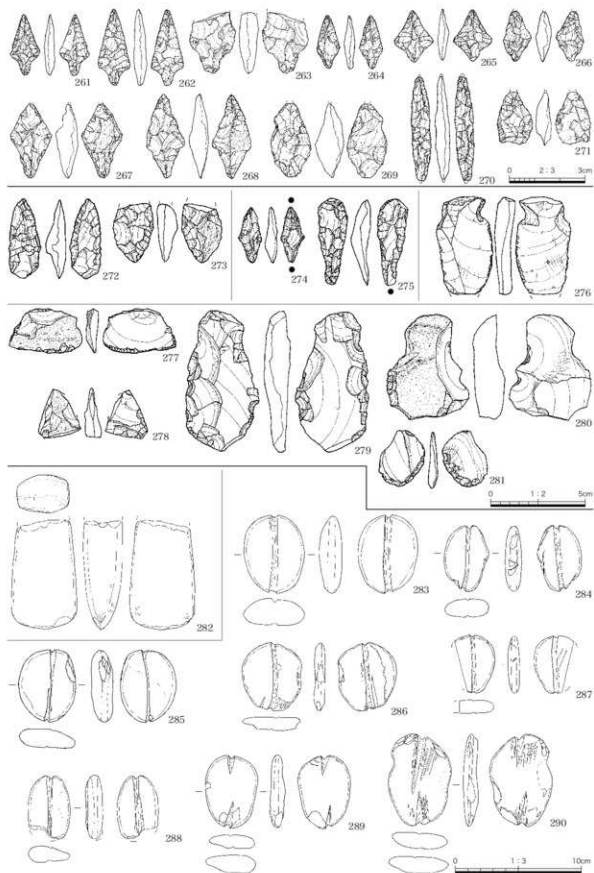
第26図 SI-379 遺物実測図(4)



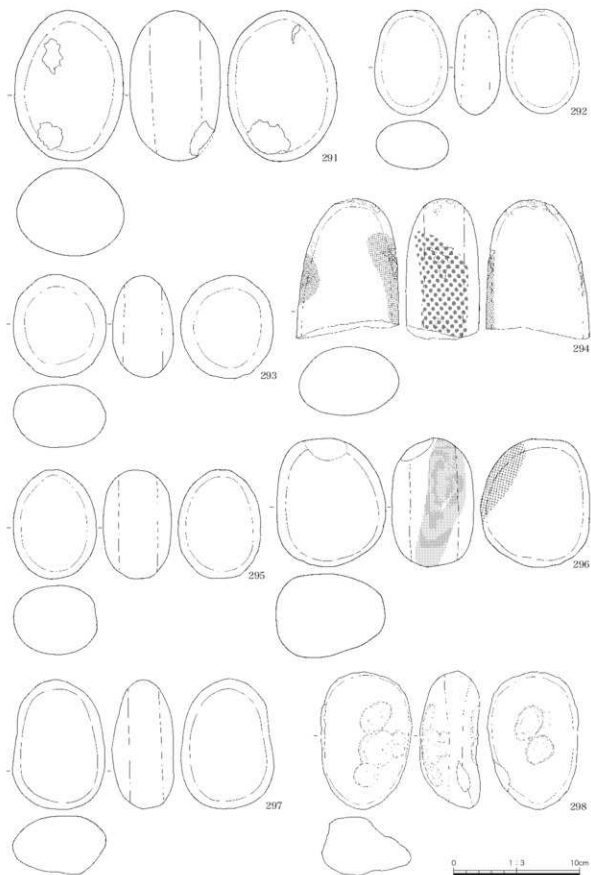
第27図 SI-379 遺物実測図(5)



第28図 SI-379 遺物実測図(6)

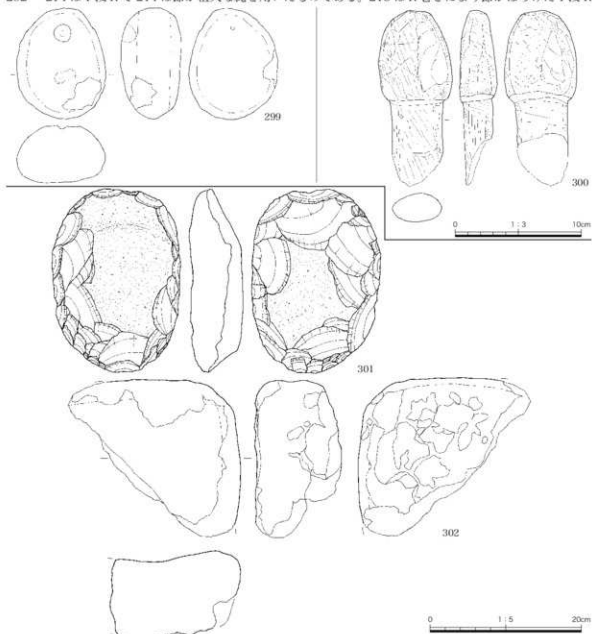


第29図 SI-379 遺物実測図(7)



第30図 SI-379 遺物実測図(8)

晩期大洞式土器は、精製・半精製土器が140点、粗製土器が207点の合計347点で、出土数の約55%を占める。123～133は三叉文・玉抱き三叉文などがみられるものである。133は口縁部から胴部中位の約1/4が遺存する深鉢形土器で、口縁部には山形突起とB突起、胴部上半には玉抱き三叉文が展開する。134～144は横方向の入組文、145～158は半歯状文、159～161はクランク状の入組文、162～167は二溝間の截痕文がみられるもので、これらの胴部には横方向の縄文ないしは結節縄文が施される。168～176は眼鏡状結節縄文が施される。177～178は陽彫による大腿骨文などが施されるもの、179は雲形文、180は溝底の刺突がみられるもの、181は横位に密な沈線を施す。191～249は粗製土器などを掲載した。191～201は単軸絡条体第5類による網目状燃糸文を施す土器である。191～197は1段R、198・199は1段L、200は2段LR、201は0段rの縄を用いる。202～219は単軸絡条体第1類による燃糸文を施す土器である。202～214は1段Rで214は節が粗大な縄を用いたものである。215はR巻きにより節がぼらけた1段R



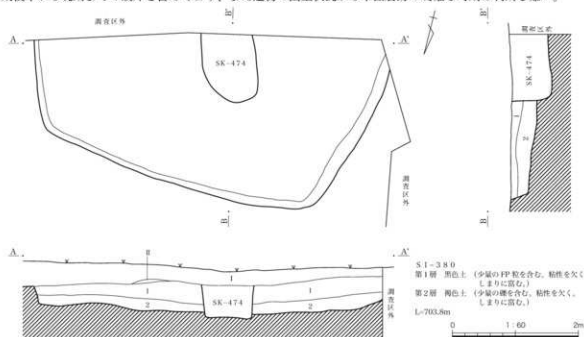
第31図 SI-379 遺物実測図(9)

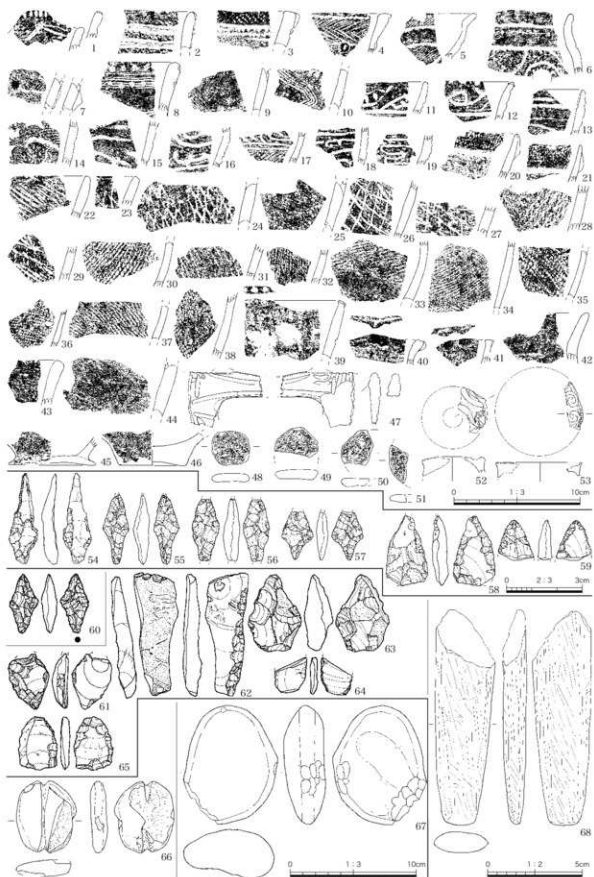
の縄を用い、216・217は1段L、218・219は0段rの縄を用いたものである。220～222は擦痕文、223～230は口縁部から縄文を施すものである。238～248は口縁から無文の土器で、238は口縁端部にキザミを施す。250には木葉痕、252には網代痕が残る。254の土偶の体部には沈線で雲形文風のモチーフが描かれており、晩期のものであろう。円盤は255・256・258が無文、257は縄文のみが施された破片を用い、周囲を打ち欠いて整形したものである。259は小判形の土鍾で凹線の中央部に円孔を穿っている。

本住居の所属時期については、後期後葉に比定される土器の混入がみられるものの、復元個体及び出土数の主体をなす晩期前葉大洞BC式の範疇と考えられる。

SI-380 (第32・33図、図版二・三二)

位置 J-18グリッドの第V層上で確認した竪穴住居で、15年度調査区の最も南に位置しており、住居のほぼ南半分が調査区外に延びるため未調査である。本住居跡の北側約3mにはSI-379が位置しており、また大部分が未調査であるSI-104とは北西3m前後と近接した位置にある。重複関係 住居の中央部分で近世の土坑SK-474に切られる。規模・形状 南側の大半が調査区外のため北側部分からの判断となるが、規模は一辺の長さが5m前後の方角を基調としたプランを想定する。壁・壁溝 確認面からの深さは25cmほどが遺存しており、床面からはほぼ垂直に立ち上がる。調査区外との接点における堆積土の観察では、耕作による削平が第II層以下まで及んでいるため、上方の掘り込み面を確認することができなかったが、他の住居跡と同様に包含層を掘り込んで構築していたものと考えられる。壁溝は存在しない。床面の状況 第V層の黄褐色土を床面としてほぼ平坦に構築している。比較的軟弱であり硬化した部分などは特に認められない。また、炉や柱穴などの住居内部施設などは確認できなかった。覆土 住居内の覆土は大きく2層に分層した。各層とも礫の混入がみられ、全体的によく締まっている。出土遺物 50点ほどの土器片と48～51の土製円盤4点、52・53の彫刻が施された耳飾りの破片2点、石器15点(石鏃6・石錐1・石鍾1・挿刺器類5・石剣・石棒類1・磨石類1)が覆土中から出土したのみで、床面出土の遺物は認められなかった。土器は概ね後期後半から晩期までの破片を含んでおり、また遺物の出土状況から本住居跡の明確な時期は判断し難い。

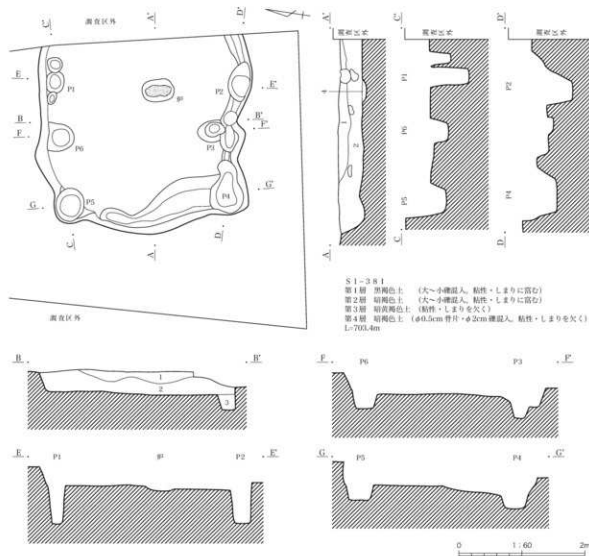




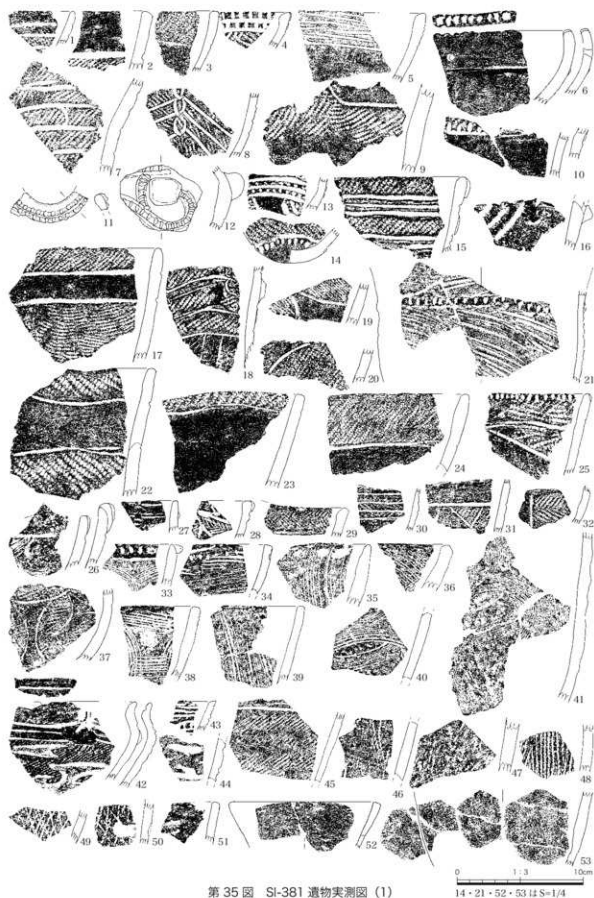
第33図 SI-380 遺物実測図

SI-381 (第34～37図、図版二・三・三二)

位置 H-21・22 グリッドの第V層上で確認した竪穴住居であり、弧状に展開する縄文時代住居群の最も東に位置する。住居東壁部分は調査区外に延びるため未調査である。他の遺構と重複はない。規模・形状調査した部分からの判断となるが、規模は一辺の長さが3m前後の方角を基調としたプランを想定する。壁・壁溝 確認面からの深さは30cmほどで、床面からほぼ垂直に立ち上がる。壁溝は幅20cm、深さ10cmほどで西壁及び南壁際を巡っているが、西壁際の南半分は幅が広く70cmほどある。床面の状況 第V層の黄褐色土を床面としてほぼ平坦に構築しているが、地山に含まれる礫が突出し凸凹している部分がある。特に踏み締めなどによって硬化した部分は認められない。柱穴 ビットは南北の壁際に3基ずつ、合計6基が確認されており、それぞれが対峙した位置にある。床面からの深さはP1・P2が50cm以上の深さがあり、P3・P4が30cm前後、P5・P6が20cm前後で東側が深く掘り込まれている。覆土 住居内の覆土は大きく2層に分層した。各層とも全体的によく締まっており、大小の礫を含んでいる。炉跡 地床炉で住居中央のやや南寄りを設置されている。東西3.6cm、南北5.4cmの楕円形で、床面から8cmの掘方を持つ。炉内の覆土は焼土粒と骨片を少量含んでおり、底面は全体的に火熱による赤化や硬化面が若干認められる。出土遺物

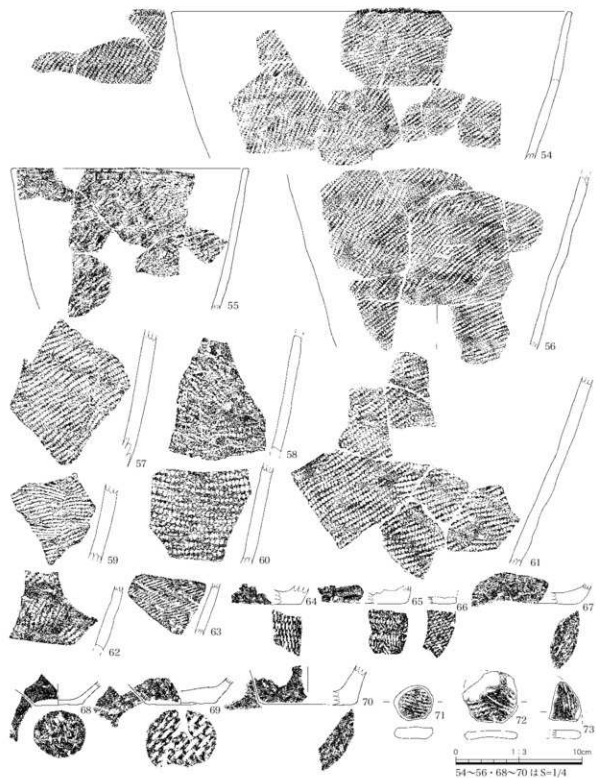


第34図 SI-381 実測図

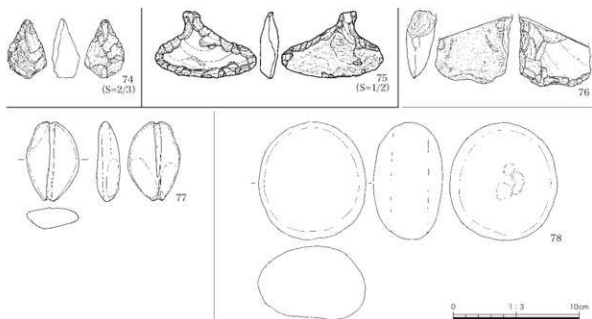


第35図 SI-381 遺物実測図(1)

遺物は数十点の土器片と石器5点（石鏃・石匙・打製石斧・石錘・磨石類各1点）などが覆土中から出土したのみである。土器は後期中葉～後葉の加曾利B式から後期安行式、東北系の新地式のほか、晩期中葉大淵式までの破片を含んでいる。各時期の遺物量は後期後半のものが多く、明確な時期は判断し難い。



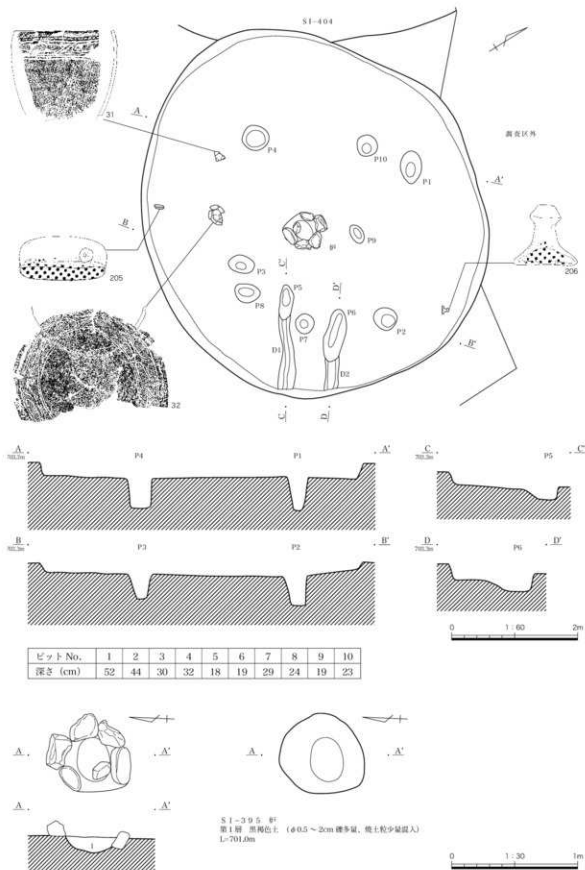
第36図 SI-381 遺物実測図(2)



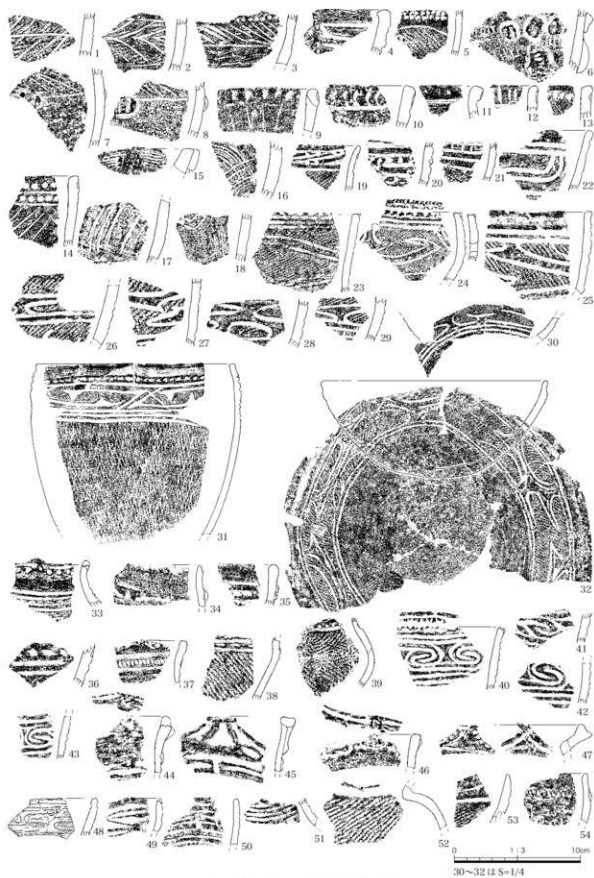
第37図 SI-381 遺物実測図(3)

SI-395 (第38～43図、図版三・四・二〇・三二～三四)

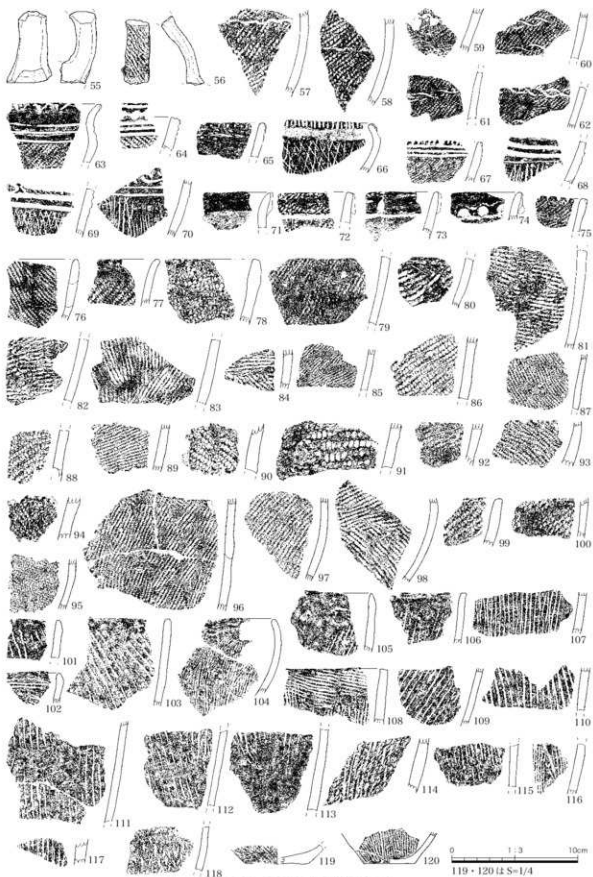
位置 K-17グリッド内に位置する。重複関係 西側で縄文時代のSI-404を切って構築している。規模・形状 東西6m、南北5.3mの北西方向に主軸をとる、やや南北に長い円形ないしは楕円形の竪穴住居跡と考えられる。壁・壁溝 壁は残りのよい部分で確認面から約25cm遺存しており、床面からほぼ垂直に立ち上がる。壁溝は存在しない。床面の状況 床面は包含層及び覆土と同質の黒褐色土で貼床がなされており、覆土と同時に掘り下げてしまったため観察することができなかった。床面は炉跡の確認面から判断して掘方面より5～10cm前後上方を平坦に貼床していたものと思われる。柱穴 住居内から、合計10個のビットを確認した。このうち、主柱穴に相当するビットは深さが掘方面から30cm以上あるP1～P4の4本柱で構成される。各ビットの平面形は40cm前後の円形ないしは楕円形で、各柱穴間の距離は2.5m前後であるが、P3～P4間が2m前後と短く、各柱穴を結んだ形状は台形となる。また、南壁に直交する溝(D1・D2)と接続するP5・P6及びP7は、出入口施設に係わるものと考えられる。覆土 第四層と同質の黒褐色土に覆われる。炉跡 住居跡のほぼ中央に設けられた円形の石囲炉で、西側の緑石が取られた状態で確認した。規模は長軸66cm、短軸60cmで、掘方内に河原石や角礫をやや外傾気味に立てて巡らしている。内部には焼土の堆積がみられないものの、緑石や底面には熱による赤化が僅かに認められる。出土遺物 土器は覆土内から万遍なく出土しており、小破片が主体であるが器形が復元できるものを含め約700点、重量にして11.8kgが出土した。また、覆土内からは流紋岩や頁岩、玉髓を主体とする多量の石器製作剥片が出土している。土器は晩期中葉のものが主体であるが、数は少ないものの1～3の後期中葉の破片や後葉の安行式(4～14)、東北系の新地式(15～18)など、後期の土器が全体の約5%ほど混入する。19以下には出土土器の主体をなす晩期大割系の土器をまとめた。19～21は2溝間の蔽痕文、22～32は雲形文及びそれに類するモチーフがみられるものである。31の深鉢は床面からの出土で、口縁部～胴部中位の1/4が残存する。刺突を伴う2本の沈線と3本の沈線間に雲形文が展開し、胴部には網目状燃糸文が施される。32はほぼ完存する浅鉢形土器で床面から口縁部を下にした状態で出土した。口縁は無文で短く外反し、以下、2本の沈線間に雲形文が描かれる。体部はケズリ後にナデを施す。33～36は溝底の刺突が、37～39は2溝間に刺突が



第38図 SI-395 実測図

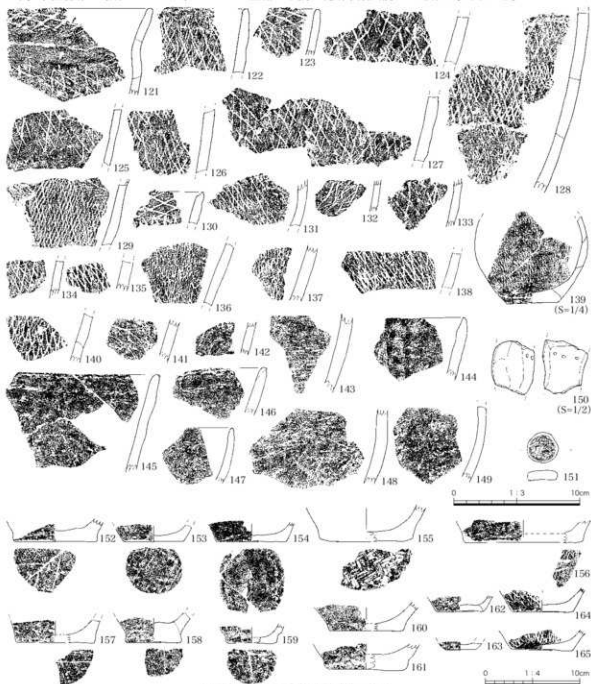


第39図 SI-395遺物実測図(1)

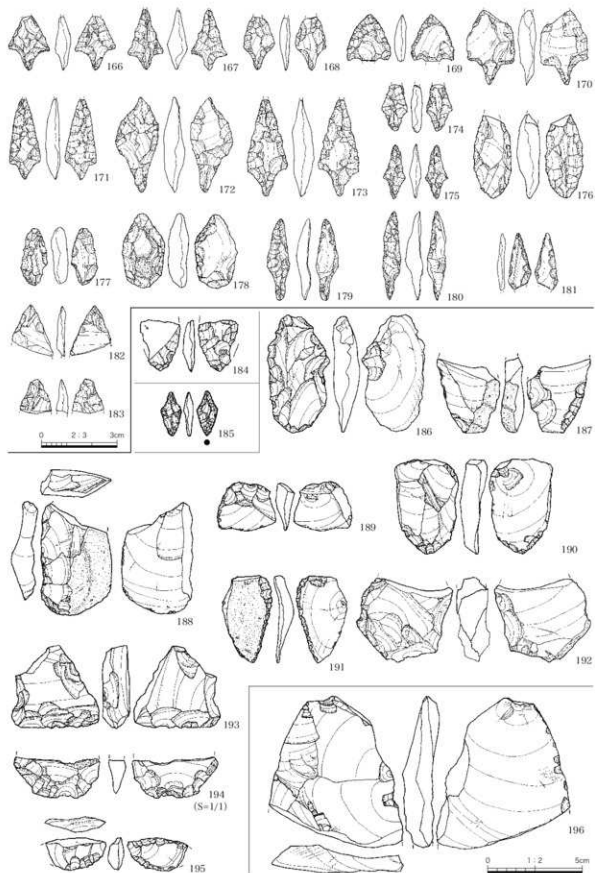


第40図 SI-395遺物実測図(2)

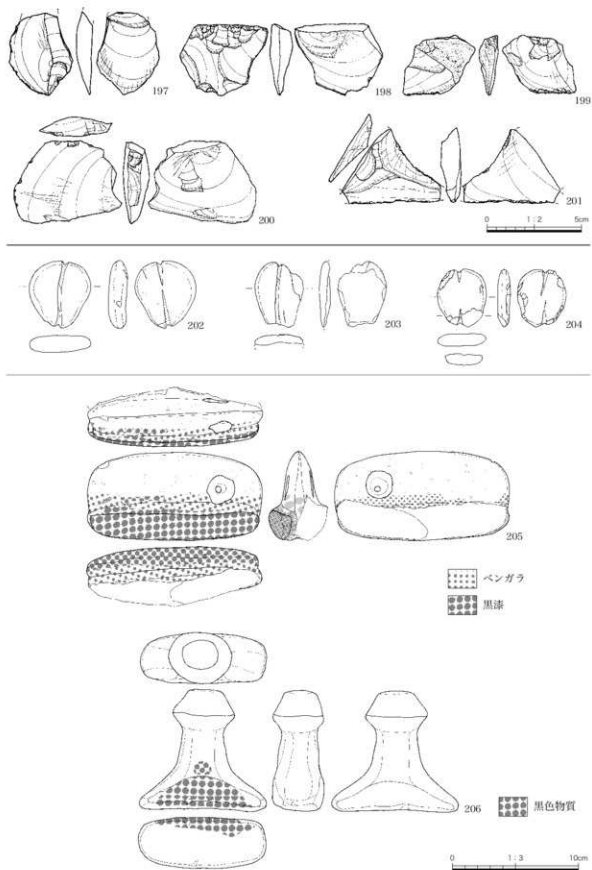
施される。40～43は入組化した雲形文、44～47は眼鏡状付帯文、48～51は工字文風の文様がみられる。52は体部に縄文がみられる壺形土器、55・56は橋状の釣手と思われる。57～59はS字状結節縄文、60～62は眼鏡状結節縄文が施される。71以下には粗製土器、底部片などを掲載した。71～74は折り返し口縁の土器、75～143は縄文のみがみられるもので、I段Rの縄を用いた網目状燃糸文を施す土器の出土量が多い。141～143は擦痕文、144～149は無文土器である。このほか、土製品として土偶の脚部1点、円盤1点、石器・石製品41点（石鏃18・尖頭器1・石錐1・搔削器類10・使用痕のある剥片6・石冠2・石錘3）が出土した。このうち、205の石鏃型と206の球頭型の石冠は、東・西壁際の床面で対峙した位置から出土している。本住居跡の時期については、31・32の土器から概ね晩期中葉大洞C2式期と考えられる。



第41図 SI-395遺物実測図(3)



第42図 SI-395 遺物実測図(4)

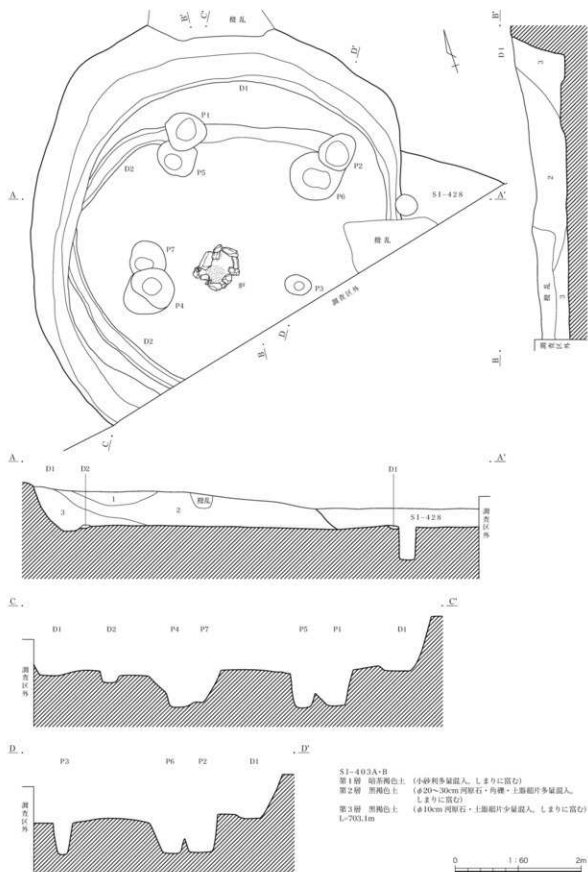


第43図 SI-395 遺物実測図 (5)

SI-403A・B (第44～53図、図版四・五・三四～三六)

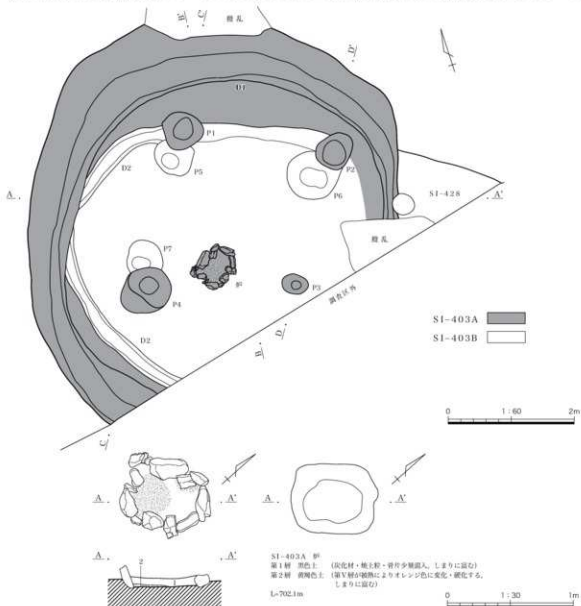
位置 縄文時代住居群の最も南側に位置するK・L-16グリッド内で確認した。住居の南壁と東壁の半分が調査区外に延びるため未調査である。重複関係 古代の堅穴住居跡SI-428に切られる。また、住居の中央は南北に走る水道管により攪乱を受けている。規模・形状 東西5.8m、南北は推定で6m内外の北東方向に主軸をとる楕円形ないしは隅丸方形を基調とした堅穴住居跡であるが、壁溝や柱穴の位置関係などにより、住居の建て替え・拡張が考えられる。ここでは、拡張後の住居跡をSI-403A、拡張前の住居跡をSI-403Bとして記載する。壁・壁溝 SI-403Aの壁は床面からやや外傾して立ち上がる。確認面からの深さは最も深い北側で80cm、その他の部分で60cmが遺存する。SI-403Bは壁溝から判断すると、SI-403Aの壁から70cmほど内側を巡る幅30cm、深さ10～15cmの溝が相当するものと考えられる。床面のレベルはほぼ同じで、直径約4.5mほどの方形基調のプランと思われる。SI-403Aの壁溝は西壁中央部で旧住居の壁溝と重複しながら幅50～60cm、深さ30cmで壁際を巡っていたものと思われる。床面の状況 第V層の黄褐色土を平坦に構築して床面としているが、地山に含まれる礫が突出し凸凹している部分がある。特に踏み跡などによって硬化した部分は認められないが、全体的に締まりがある。柱穴 住居内から合計7個のビットを確認した。いずれも床面からの深さが45～55cmの円形ないしは楕円形である。このうち、位置関係からSI-403Bの壁溝と重複するP1・P2と住居の南側で東西にそれぞれ対峙するP3・P4の4本がSI-403Aの主柱穴と考えられる。SI-403Bは東側壁溝の内側で対峙するP5・P6・P7が主柱穴に相当するものと考えられる。南東部の柱穴については、P3が新旧の両段階にわたり共有されていた可能性がある。覆土 自然堆積で大きく3層に分層できる。第IV層と同質の黒褐色土内には河原石や礫、土器片が多量に混入する。炉跡 遺存する炉跡はSI-403Aのほぼ中央に設けられている。72×58cmの方形石囲炉で、比較的扁平な河原石や礫石を立てて設置するが、東の側石は平らな面を下にして組んでいる。炉石は火熱により脆くなっており、また内部には炭化物や骨片が混入する焼土の堆積がみられ、底面の焼土化は南側が顕著である。出土遺物 土器は覆土第2層内において多量の礫や河原石と共に万遍なく出土しているが器形を復元できる個体は皆無で、小破片を主体に約5,000点、重量にして約42kgが出土している。時間的には晩期中葉の大割式が殆どであり、僅かに後期中葉から後葉の土器片約40点が混入している。1～30は後期に比定される一群である。1～3は口縁部に並行する沈線区画が多段に施され、4は矢羽根状の沈線が施される加曾利B式、5～18は櫛歯状工具により条線文が施される新地式の粗製土器である。19～26は安行式の精製土器で、20は口縁部に縦位の貼瘤がみられ、23・25・26にはブタ鼻状突起、19は縦方向のキザミを施した突起が付く。27～30は口縁部に隆帯を貼付し、刺突・押圧が加えられる同粗製土器である。

31以下には晩期大割式土器を掲載した。精製土器のモチーフには、三叉文(31～36)、S字状などの横位に連繋するモチーフを描くもの(37～43)、羊歯状文(44)などがある。45～56は横位の縄文帯がみられる破片であり、45～50は二溝間の截痕文、51～54は眼鏡状結節縄文が施される。また、57～68は陽影的手法によるX字状・K字状・大罫文などがみられ、赤色塗彩されたものが多い。69・70は広い無文地に細い縄文帯でモチーフを描く。71～85は雲形文およびそれに類するモチーフがみられる。86～89は溝底の刺突、90～99は二溝間に刺突が施される。100は口縁が「く」字状に折れる小型の壺形土器である。括れ部に巡る横位2条の沈線間には羊歯状文風の斜沈線が展開する。109～119は横位の沈線が複数条みられる破片で、109～113・115精製土器の文線帯上端、114・116～119は半精製土器である。120は横位の沈線が1条みられる口縁部破片。121の台付土器の脚部及び122の口縁部にはキザミ目列が巡る。123～125は無文及び縄文地の口縁部に突起を配した非装飾的な土器である。130は注口土器の破片で、注口は割



第44図 SI-403A・B実測図(1)

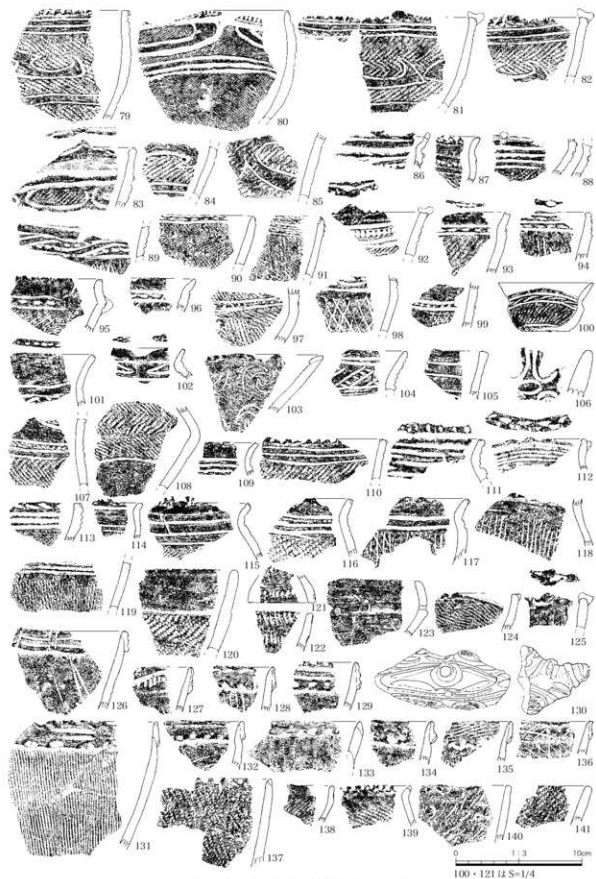
部が「く」字状に屈曲し内傾する部分に付けられている。注口の上下及び左右に丸く厚めの貼付けを施し、貼付けを結ぶ沈線で菱形状のモチーフを描く。体部には雲形文が展開する。126以下には晩期の粗製土器を掲載した。126～136は折り返し口縁の土器である。126～129・131・132は口縁の折り返し部に沈線やキザミを施す。133・134は無文、135は単軸絡条体第1類による燃糸文が、136には単軸絡条体第5類による網目状燃糸文が施される。137～242には縄文のみがみられる破片をまとめた。137～139の口端には刺突・キザミが施される。140～152は無節縄文が施されるものである。140～144は1段Lの横位施文、145～148は1段Lの縦位施文、149は1段Rの横位施文、150は1段Lの斜め施文による条が横走する無節縄文である。151・152は1段Lの縄を縦位・横位に施文した異方向縄文である。153～169は単節縄文が施される土器である。153～157は2段LRの横位施文、158～160は2段RLの横位施文、161は2段LRの縦位施文がなされる。162は2段LRの斜め施文により条が横走するもの、163は2段RLの斜め施文により条が縦走するものである。164は2段LRの縄を縦位・横位に施文した異方向縄文、165は2段RLの縄を縦位・横位に施文した異方向縄文、166～169は2段LRとRLの縄の横位施文による羽状縄文である。170～172



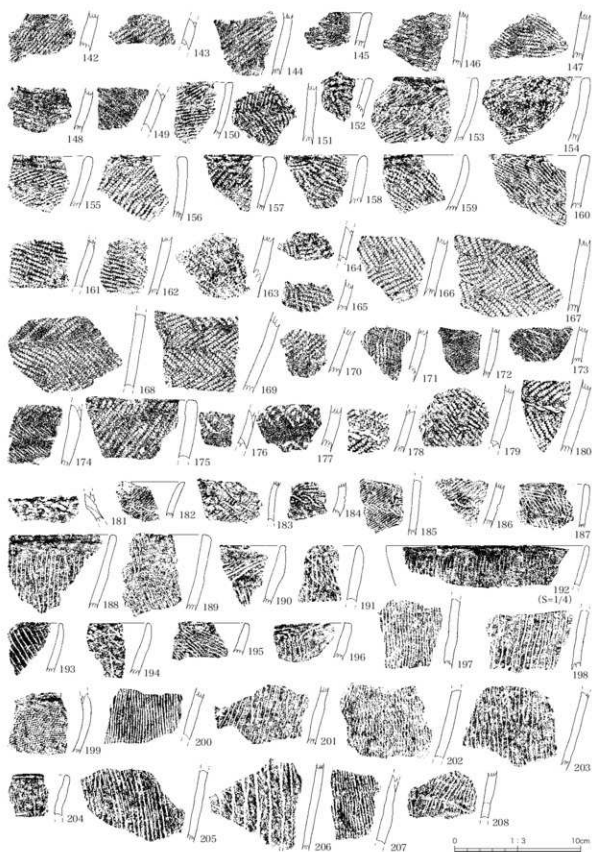
第45図 SI-403A・B実測図(2)



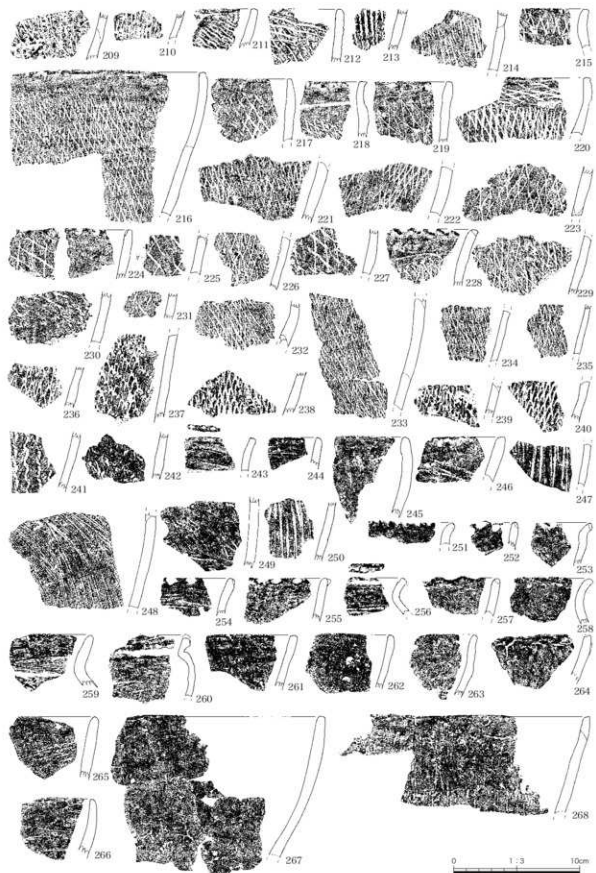
第46図 SI-403A・B遺物実測図(1)



第47図 SI-403A・B 遺物実測図(2)



第48図 SI-403A · B 遺物実測図 (3)



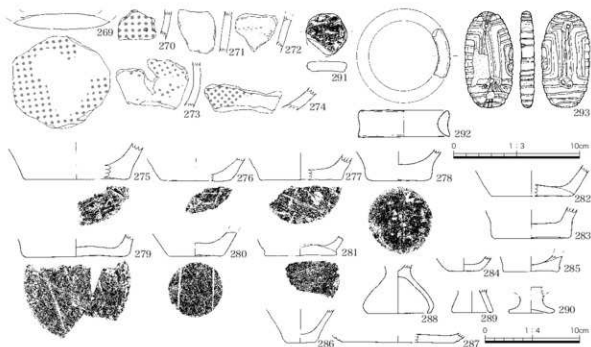
第49図 SI-403A・B遺物実測図(4)

は複節縄文が施される土器である。170は3段LRLの横位施文、171は3段LRLの縦位施文、172は3段RLRの縄を縦位・横位に施した異方向縄文である。173・174は直前段反摺り、175は前々段反摺りLRRの横位施文、176・177は附加条縄文、178～181はS字状結節縄文、182～186は眼鏡状結節縄文である。187～214は単軸絡条体第1類による摺糸文が施される破片である。187～203は1段R、204～208は1段L、209・210は0段r、211・212は0段ℓ、213は2段LR、214は2段RLの縄を用いた単軸絡条体によるものである。215～240は単軸絡条体第5類による網目状摺糸文がみられる破片である。215～223は1段R、224～227は1段L、228・229は1段RとLの縄を用いる。230は2段RL、231は2段LR、232～233は0段rの縄を用いた単軸絡条体によるものである。234～240は単軸絡条体第6類による網目状摺糸文がみられる破片である。234・235は1段R、236は1段L、237～240は0段rの縄を用いた単軸絡条体によるものである。241・242は単軸絡条体第3類によるS字状文がみられる破片である。243～250は擦痕文が施されるもの、251～268は口縁部から無文の土器で、251～257の口端には刺突が施される。269～274は赤色塗彩された体部破片、275～289は底部破片で、288～289は台付土器の台部などである。278は網代痕、275・276は木葉痕が残る。

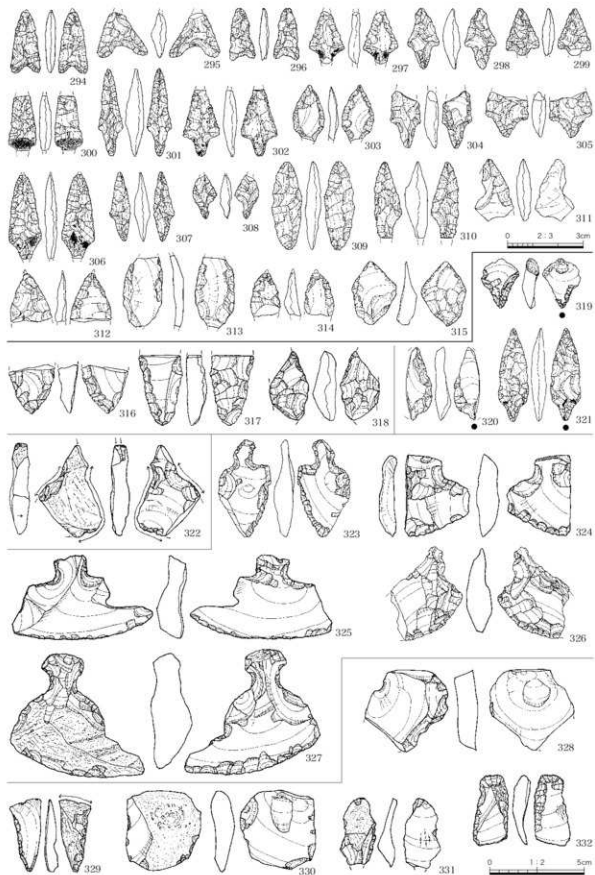
土製品は3点が出土している。291の円盤は無文土器の周囲を打ち欠いて形状を整えたもの、292は全体の約1/6が残存する耳環で、断面形は内側に突出する凸レンズ状をなす。293は平面形が小判形の土版で、中央に引かれた縦線の両端（上端部は1孔、下端部は2孔）には両面から穿孔がなされ、その両脇には外側に折れる屈曲線を配し、周縁部及び両先端部には横位の沈線を施したモチーフが描かれる。

石器は、石鏃・石匙・搔削器類などの剥片石器を主体に12種、61点が出土しており、また覆土内からは流紋岩や頁岩、玉髓を主体とする石器の制作剥片も多数みられる。石器の特徴的なものとして、石鏃のなかには、基部にアスファルトの付着するものや錐に転用したものが認められる。また、322は剥片の先端に細長い槌状の剥離が施されており、グレイバー的な用途も考えられる。

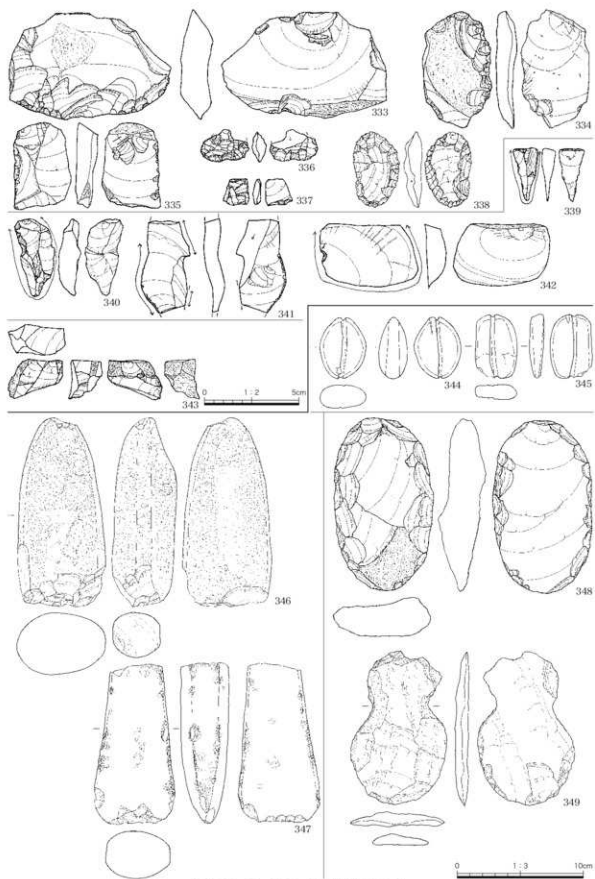
本住居跡の所属時期は、出土した土器の主体をなす晩期中葉の大割C2式期と考えられる。



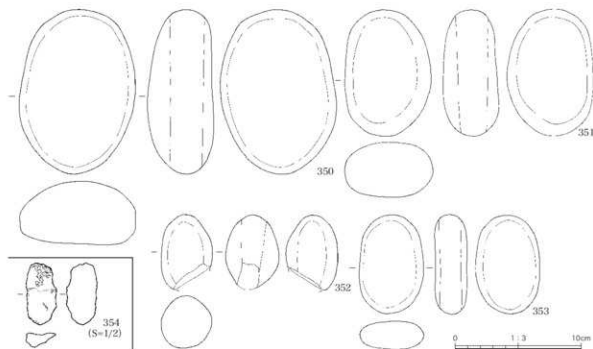
第50図 SI-403A・B 遺物実測図(5)



第51図 SI-403A・B遺物実測図(6)



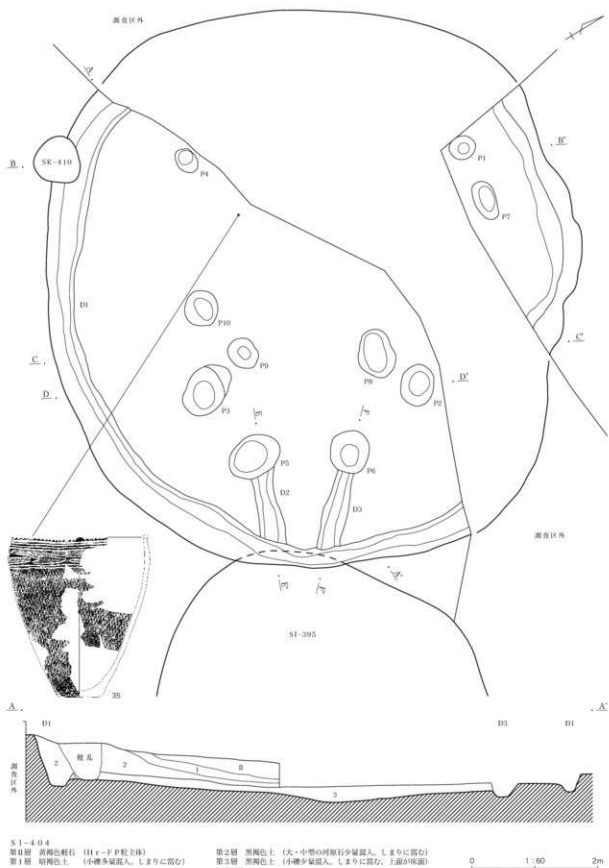
第52図 SI-403A・B遺物実測図(7)



第53図 SI-403A・B遺物実測図(8)

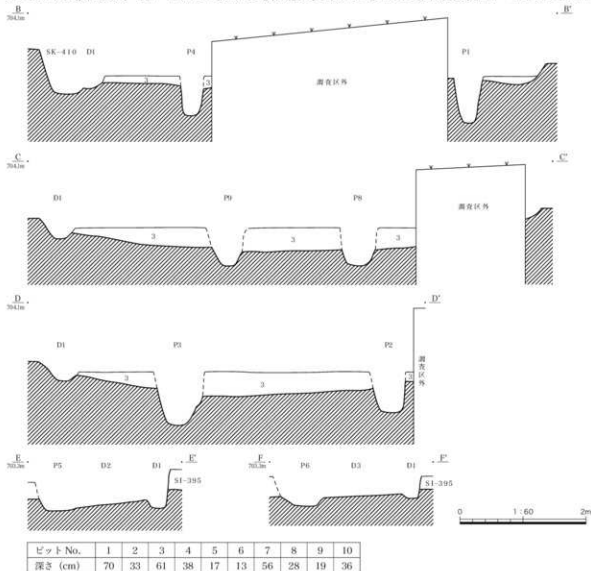
SI-404 (第54～59図、図版五・二〇・三七)

位置 J・K-17 グリッド内に位置する。西壁から北壁の東半分にかけての部分が、平成13年度と19年度調査区の境界部分のため未調査である。重複関係 南東部で縄文時代の竪穴住居跡SI-395に切られる。また、新旧は明確ではないが、南西コーナー付近で縄文時代の土坑SK-410と重複する。規模・形状 調査した部分から推測して8.8m×8.5mの北西方向に主軸をとる楕円形ないしは隅丸方形を基調とした竪穴住居跡と考えられる。壁・壁溝 壁は確認面から20cm前後が遺存しており、床面からやや外傾気味に立ち上がる。壁溝は平成13年度の調査で確認できなかったが、19年度の調査により壁腹をほぼ全周していたものと思われる。床面の状況 床面は覆土と同時に掘り下げたが、土層断面の観察により、第IV層を平坦に構築して床面としていたことが認められた。柱穴 住居内から、合計10個のビットを確認した。このうち、主柱穴に相当するビットはP1～P4の4本柱で構成される。各柱穴間の距離は4m前後であるが、P2～P3間が3.5m前後と短く、各柱穴を結んだ形状は台形となる。また、南壁に直交する溝(D2・D3)と接続するP5・P6は、出入口に係わる施設と考えられる。覆土 自然堆積で3層に分層できる。住居廃絶後、第1層上の窪んだ部分にHr-Fpがレンズ状に堆積する。炉跡 調査した部分の住居内からは確認できなかった。出土遺物 土器は覆土内から万遍なく出土しており、小破片が主体であるが器形が復元できるものを含め約2,000点、重量にして19.5kgが出土した。時間的には晩期中葉を主体に、後期安行式(1～9)や東北系の新地式(10～18)が全体の約2%程度含まれる。19～51は大割式の精製土器で、19～21は横方向に展開する入り組み文が施される。22・23は貼り瘤を起点とし、沈線を横位に展開させる。24～26は二溝間の截痕文、27は横方向に入り組んだ磨鏡縄文、28は削り取るような磨消帯がみられる。29～35は雲形文が見られる破片である。35は器形復元可能な破片で、住居中央部の床面からやや浮いた状態で出土した。36～38は頸部を巡る沈線の溝底に刺突が施され、39～41は眼鏡状付帯文がみられる。42・43は口端にキザミ目を有し、以下横位の密な平行沈線が施される。44・45は口端のキザミ目以下に施される横位沈線が殊

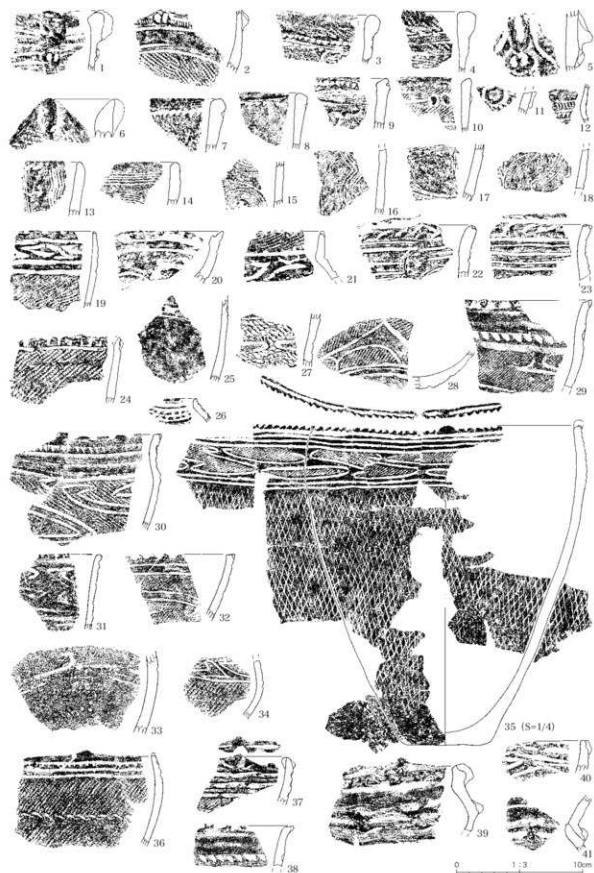


第54図 SI-404実測図(1)

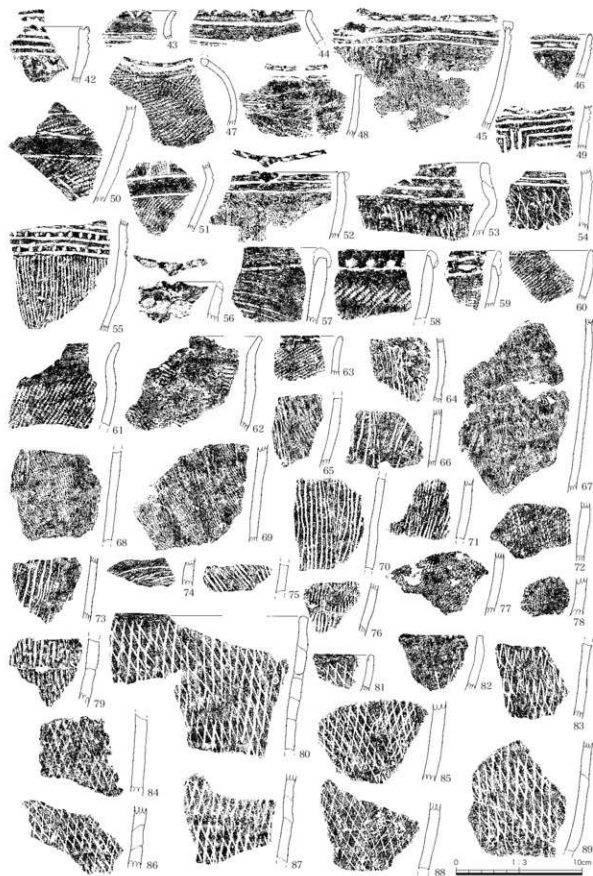
らである。46は口縁下の二溝間に横長の刺突を巡らす。47は縄文のみがみられる壺形土器の体部破片、48は口端にキザミ目を有し、以下縄文地に横位の不規則な沈線が施される。50・51は横位の磨消縄文がみられる。52～54は口縁部下に横位の平行沈線を巡らし、以下燃糸文を施す。55は口縁部下に横位の沈線とその間の截痕を巡らし、以下燃糸文を施す。56～139は粗製土器である。56～59は折り返し口縁の土器、60～63は口縁から縄文のみを施すもので、63の口端にはキザミが施される。64～70は単軸絡糸体第1類による燃糸文を施す土器である。64～70は1段R、71～73は1段L、74は0段r、75は0段l、76・77は2段LR、78・79は2段RLの縄を用いる。80～96は単軸絡糸体第5類による網目状燃糸文を施す土器である。80～89は1段R、90・91は1段L、92・93は0段r、94・95は2段LR、96は2段RLの縄を用いる。97～101は単軸絡糸体第6類による網目状燃糸文を施す。102～104は擦痕文、105～111は口縁から無文の土器であるが、109は頸部に横位の沈線が、110・111は口端にキザミが施される。112は無文の蓋形土器で、端部付近には孔が3つ設けられるが、このうちの1つは貫通していない。113はキザミを加えた隆帯が巡る。114～122は単節斜縄文のみがみられる体部破片である。114～116は2段LRの横位施文、117は2段LRの縦位施文、118・119は2段RLの横位施文、120は2段RLの縦位施文、121・122は2段LR



第55図 SI-404実測図(2)



第56図 SI-404 遺物実測図(1)

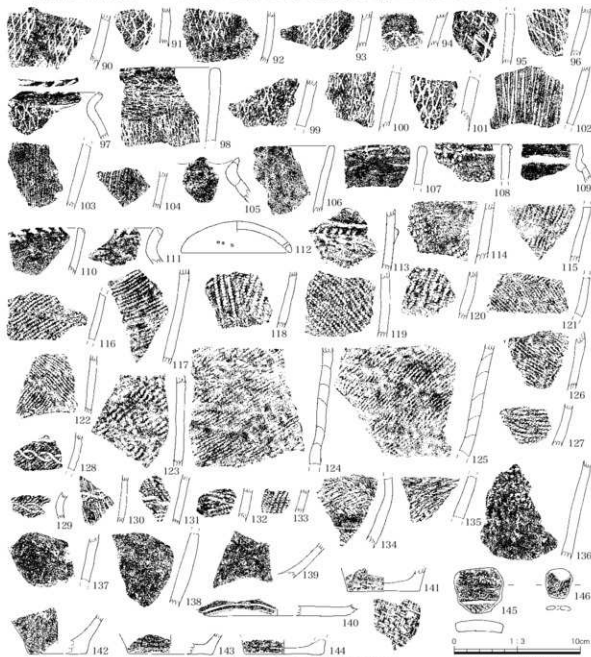


第57図 SI-404遺物実測図(2)

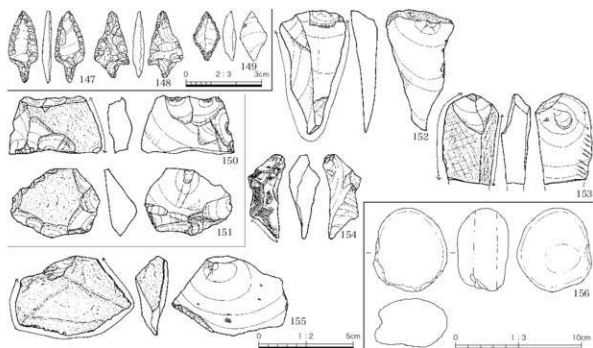
とRLの横位施文による羽状縄文が施される。123～127は無節斜縄文のみがみられる体部破片である。123～125は1段Lの横位施文、126は1段Rの横位施文、127は1段Lの斜位施文により条が横走するものである。128～130は眼鏡状結節縄文、131・132はS字状結節縄文がみられる破片である。133～136はその他の縄文がみられる破片で133・136は複節縄文、134・135は直前段反摺りと思われる。137～139は無文の体部破片、140～144は底部破片で、140は底部直上に横位の沈線を巡らす。141は底面に網状痕を有し、142～144は無文である。

このほか、土製品として円盤2点(145・146)、石器10点(石鏃3・搔削器類2・使用痕のある剥片4・磨石類1)が出土している。154の使用痕のある剥片にはアスファルトの付着が認められる。

本住居跡の所属時期については、35の土器から概ね晩期中葉の大洞C2式期と考えられる。



第58図 SI-404 遺物実測図(3)



第59図 SI-404 遺物実測図(4)

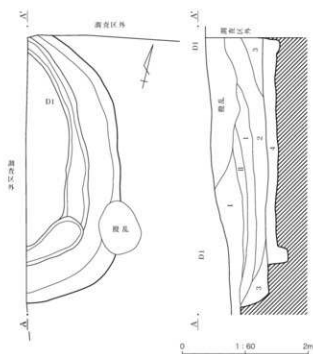
SI-411 (第60～62図、図版六)

位置 縄文時代住居群の最も西側に位置するK-15・16グリッド内で確認した。住居の西半分は調査区外に延びるため未調査である。

重複関係 他の遺構との切り合いはないが、南東コーナーが電柱の攪乱を受けている。

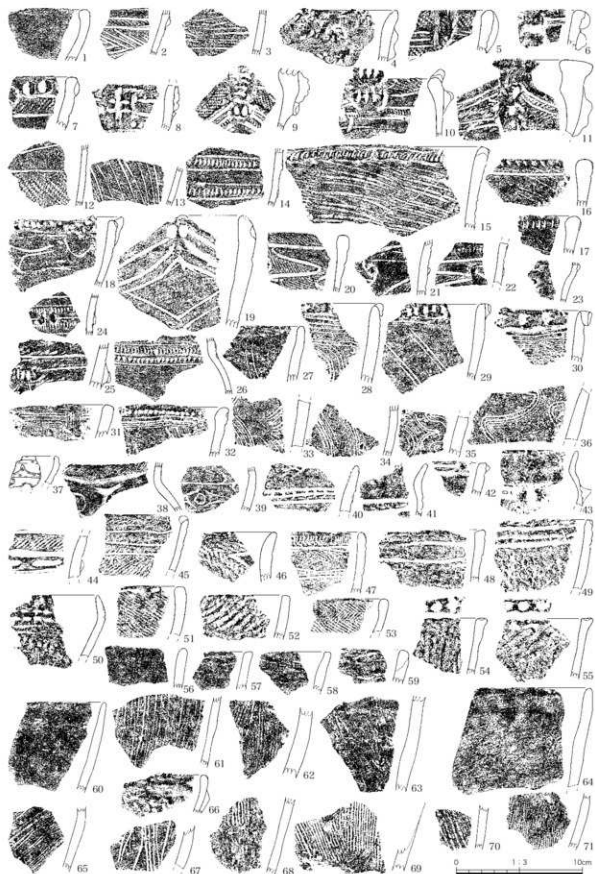
規模・形状 調査区内において確認した部分から判断して、長軸4mほどの楕円形ないしは隅丸方形のプランを想定する。壁・壁溝 床面からやや外傾して立ち上がる。確認面からの深さは20cmほどであるが、調査区外との接点においてはより上方の掘り込み面を確認することが可能である。土層断面の観察による壁高は50cm前後である。壁溝は幅20～30cm、深さ15cm前後で壁の内側を巡っており、その位置関係から住居の拡張・立て替えが考えられる。

床面の状況 床面は拡張前の床面を黒褐色土で15cmほど上方を平坦に貼床している。炬や柱穴などの住居内部施設等は確認できなかった。覆土 自然堆積で3層に分層できる。



SI-411
 第1層 黒色土 (埋地表上、しまりを欠く)
 第2層 黒褐色粘石 (H r-F P 粘)
 第3層 黒褐色土 (小礫多量混入、しまりに富む)
 第4層 黒褐色土 (大・中河卵石少量混入、しまりに富む)
 第5層 黒褐色土 (第4層と同質で河卵石を含まない、小礫多量混入、しまりに富む)
 第6層 黒褐色土 (小礫・炭化物粒・焼土粒少量混入、しまりに富む)
 L=703.9m

第60図 SI-411 実測図



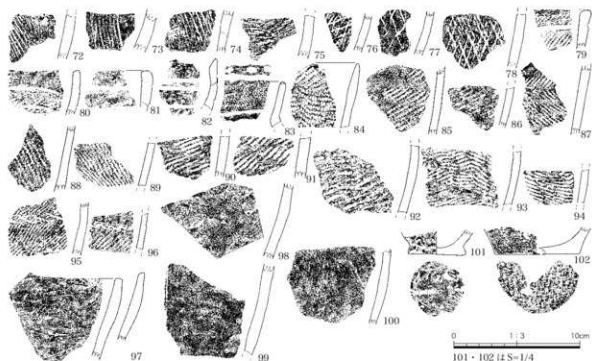
第61図 SI-411 遺物実測図(1)

住居廃絶後、第1層上の窪んだ部分に Hr-Fp がレンズ状に堆積する。出土遺物 出土遺物は土器片のみであり、後期中葉から晩期中葉までの土器を含む約 822 点、重量にして約 9 kg が出土した。

後期の土器は中葉に比定される 1～3 の破片、後期安行式 (4～18)、新地式 (21～36) の精製・粗製土器が全体の約 8% 程度混入する。晩期では前葉から中葉の土器があり、精製土器の出土は全体の約 2% と少なく、半精製もしくは粗製土器が 90% を占める。19・20 は蛇山式系の精製土器。19 は波状口縁深鉢形土器で、波頂部下に沈線で菱形区画文を施す。37～46 は大洞式の精製土器で、37～39 は入組文や三叉文などをモチーフとする前葉の土器、41～44 は眼鏡状付帯文、45・46 は磨消帯がみられる中葉の土器である。

以下には、半精製・粗製土器をまとめる。47・48 は口縁に沿って横位の沈線を巡らす土器。47 の口縁にはキザミが施され、内面には炭化物が付着する。49 は網目状摺糸文を地文とし、口縁に数条の沈線を巡らせる。50 は口縁に 2 段の列点を巡らす。51～53 は口縁から縄文を施す土器で、51 は 2 段 RL の横位施文、52 は 1 段 L の横位施文、53 は 0 段多糸の 2 段 LR と RL の横位施文による羽状縄文が施される。54～60 は無文の口縁部破片で 54・55 の口端にはキザミが施される。61～65 は擦痕ないしは浅い条線を施す土器。66～75 は単軸絡糸体第 1 類による摺糸文がみられる破片である。66～71 は 1 段 R、72 は 0 段 r、73・74 は 0 段 l、75 は 2 段 LR の縄を用いる。76・77 は単軸絡糸体第 5 類による網目状摺糸文、78 は単軸絡糸体第 6 類による網目状摺糸文が施される。79～83 は横位の沈線がみられる小破片。84～96 は縄文のみが施される体部破片である。84～86 は 2 段 LR の縄の横位施文、87・88 は 2 段 RL の縄の横位施文、89 は 2 段 LR と RL の縄を用いる。90～94 は 1 段の縄を用いた無節縄文で、90～92 は 1 段 L の縄の横位施文、94 は 1 段 L の縄の縦位施文、93 は 1 段 L の縄を縦位・横位に施文したものである。96 は S 字状結節縄文、95 は眼鏡状結節縄文が施される。97～100 は無文の破片、101 は木葉痕、102 は網代痕が残る底部破片である。

本住居跡の所属時期については、土器の小破片が主体で各型式が覆土第 1・2 層内に混在する状況から明確な時期は判断し難いが、出土遺物の主体をなす後期末から晩期初頭と考えられる。



第 62 図 SI-411 遺物実測図 (2)

2. 土坑

SK-237 (第63・64図、図版六)

位置 I-19 グリッド内で確認した。規模・形状 開口部は90×87cm、底面は60×44cmの方形ないしは楕円形を基調とするが、北側が突出する不整形である。壁 確認面である第V層からの深さは28cmあり、やや外傾して立ち上がる。底面は凸凹があるが概ね平坦である。覆土 暗褐色土主体の1層で、小礫と土器片の混入が認められる。出土遺物 土坑内から後期中葉から後葉の縄文土器片19点が出土している。時期については纏まって出土した1個体分(13～16)の土器から後期後葉頃と考える。

SK-268 (第63・64図、図版六)

位置 H・I-19 グリッドにまたがって確認した。規模・形状 開口部で109×74cm、底面は82×62cmの長方形を基調とするが、南側がやや乱れて丸みを帯びる。壁 確認面である第V層から37cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。壁面から底面にかけては、地山に含まれる礫が突出し凸凹している。覆土 暗褐色土主体の1層で、小礫が少量混入する。出土遺物 土坑内からは縄文土器片6点が出土している。

SK-407 (第63・64図、図版六)

位置 K-16 グリッド内に位置し、SK-409に切られる。規模・形状 開口部で約80cm、底面は40cm前後の円形を基調とする。壁 第IV層から45cmの深さがあり、壁面から底面にかけては、地山に含まれる礫が突出し凸凹している。壁はやや外傾して立ち上がる。覆土 黒褐色土主体の1層で、小型の河原石が少量混入する。出土遺物 土坑内からは縄文土器の小破片35点が出土しており、このうちの10点を図示した。石器は石錘1点が出土している。時期については出土土器から概ね後期後葉頃と考える。

SK-408 (第63・64図、図版六)

位置 K-16 グリッド内に位置し、SK-409に切られる。規模・形状 遺存する部分から推測して、開口部で90×70cm、底面は55×47cmの楕円形と考える。壁 確認面から50cmの深さがあり、壁は外傾して立ち上がる。底面はほぼ開口部に近い形状に構築され、壁面から底面にかけては地山に含まれる礫が突出し凸凹している。覆土 黒褐色土主体の1層で、小型の砂利が少量混入する。出土遺物 土坑内からは縄文時代後期後半と考えられる微細な縄文土器片10点のみで、このうち3点を掲載した。

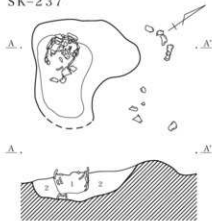
SK-409 (第63・65図、図版六・三七)

位置 K-16 グリッド内に位置し、SK-407・408を切って構築している。中央を南北に水道管による擾乱を受けている。規模・形状 開口部で222×180cm、底面は140×122cmの楕円形を基調とする。壁 確認面から57cmの深さがあり、壁は外傾して立ち上がる。底面はほぼ円形に近い形状で平坦に構築されているが、壁面から底面にかけては、地山に含まれる礫が突出し凸凹している。覆土 黒褐色土主体の1層で、小型の河原石が多量に混入する。出土遺物 土坑内からは縄文土器片3点、石皿1点、磨石類1点が出土している。時期については出土土器から概ね後期後葉頃と考える。

SK-410 (第63・65図、図版六・二〇)

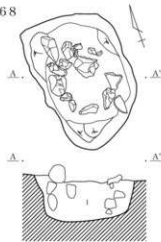
位置 K-16 グリッド内に位置する。SI-404と重複するが、新旧は明確にできなかった。規模・形状 開口部で76×74cm、底面は46×33cmの円形を基調とする。壁 壁は外傾して立ち上がる。底面はほぼ円形に近い形状で平坦に構築されているが、壁面から底面にかけては、地山に含まれる礫が突出し凸凹している。覆土 黒褐色土主体の1層で、小型の河原石が少量混入する。出土遺物 後期中葉から晩期に及ぶ縄文土器片46点が出土しており、このうちの13点を図示した。Iは覆土中位で口縁部を下にした逆位の状態が出土した。口縁部部に連続刺突とB突起を配す無文の晩期粗製土器で、内外面とも煤が付着する。

SK-237



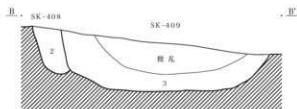
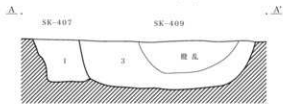
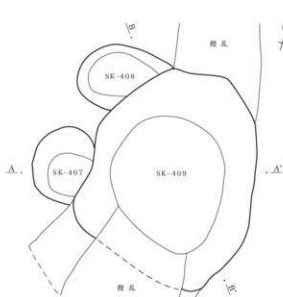
SK-237
第1層 黒褐色土 (φ1~3cm 礫混入、粘性を欠く、しなりに富む)
第2層 灰褐色土 (φ1~4cm 礫混入、粘性を欠く、しなりに富む)
L=704.0m

SK-268

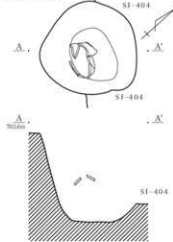


SK-268
第1層 灰褐色土 (小礫・黄褐色シルト粒少量混入、しなりに富む)
L=703.7m

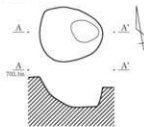
SK-407・408・409



SK-410

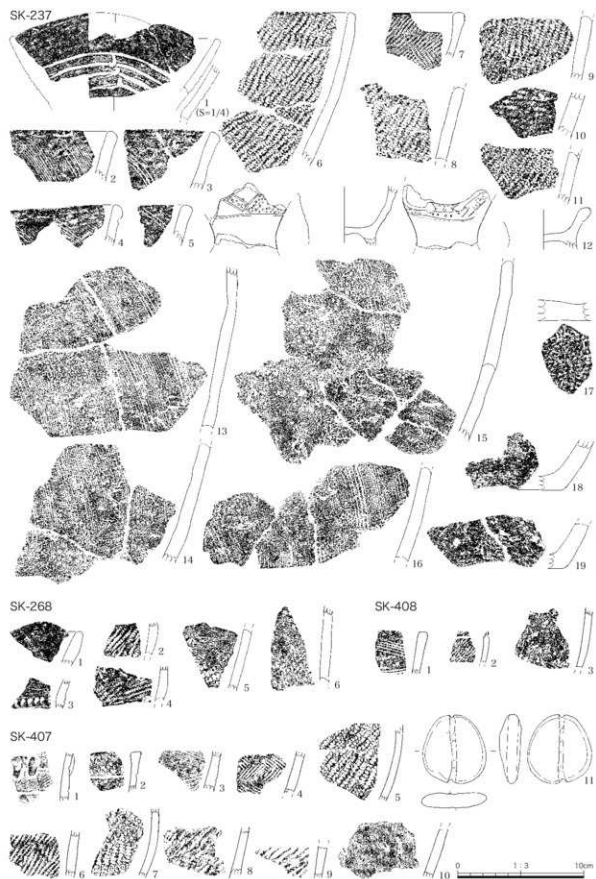


SK-413



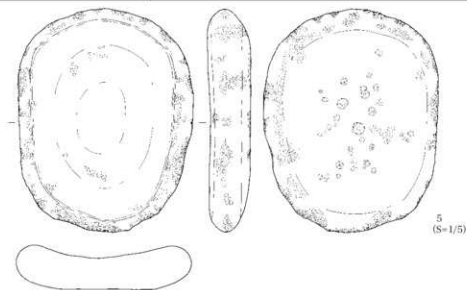
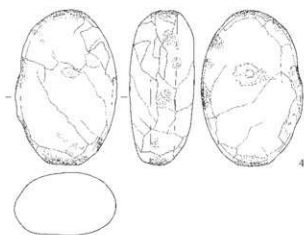
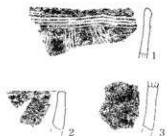
SK-407
第1層 黒褐色土 (河卵石少量混入、しなりに富む)
SK-408
第2層 黒褐色土 (小砂利・黄褐色シルト粒少量混入、しなりに富む)
SK-409
第3層 黒褐色土 (φ5cm 河卵石多量混入、しなりに富む)
L=703.3m

第63図 SK-237・268・407~410・413実測図

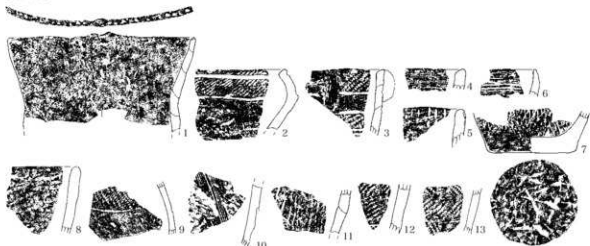


第64図 SK-237・268・407・408 遺物実測図

SK-409



SK-410



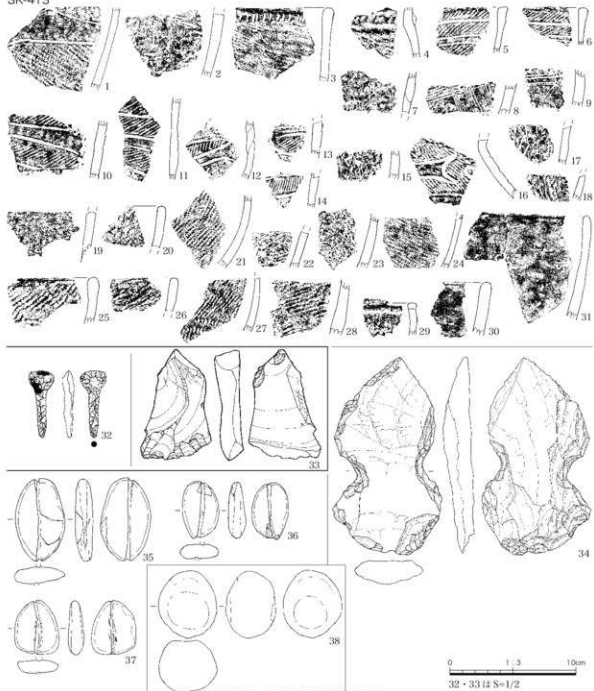
0 1:3 10mm
SK-410の1・7はS=1/4

第65図 SK-409・410 遺物実測図

SK-413 (第63・66図、図版三八)

位置 K-16 グリッド内に位置する。規模・形状 開口部で67×57cm、底面は30×23cmの楕円形を基調とする。壁 確認面から48cmの深さがあり、壁は西側が外傾して立ち上がるが、東側はほぼ垂直である。底面はほぼ円形に近い形状で平坦に構築されているが、壁面から底面にかけては、地山に含まれる礫が突出し凸凹している。覆土 黒褐色土主体の1層で、小型の河原石が少量混入する。出土遺物 覆土内から後期後葉を主体に後期中葉から晩期に及ぶ縄文土器片122点が出土している。石器は7点(石錐1・石錘3・掻削器類1・打製石斧1・磨石1)が出土しており、32の石錐基部にはアスファルトの付着が認められる。

SK-413



第66図 SK-413 遺物実測図

3. 炉跡

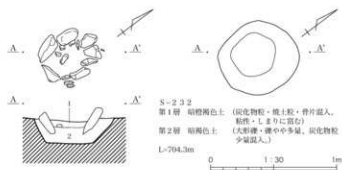
SX-232 (第67・68図、図版二〇・三八)

K-17 グリッド内で確認した石囲炉で、本来は住居に付随する施設と考えられるが、住居の壁は包含層と同時に掘り下げ破壊されており、また、床面精査時には柱穴や壁溝等の痕跡が確認できなかったため、単体の炉として掲載した。位置的には縄文時代住居群の北側、西側にSI-104、東側にSI-267が近接しており、SI-267とは重複していた可能性が高い。

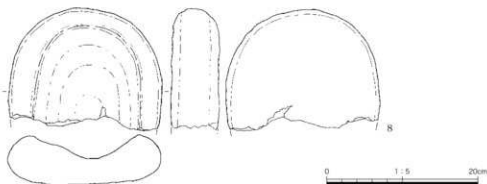
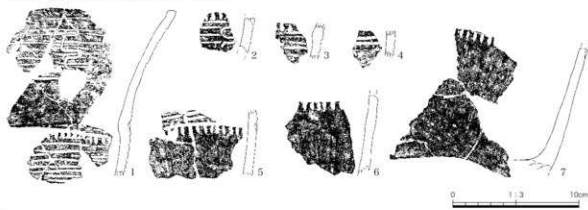
規模は長軸50cm、短軸40cmで、掘方内に比較的扁平な河原石や割石のほか、破損した8の石皿をやや外傾気味に立てて設置し、方形状に組んでいる。炉石は火熱により脆くなっており、また内部には焼土粒や炭化物、骨片の混入がみられるが、熱による底面の焼土化はあまり認められない。

遺物は炉内及びその周囲から出土した、土器片7点、炉の側石として使用されていた石皿片1点を図示した。

1は平口縁の深鉢形土器で、口縁部と胴部には横走る多重沈線(＋口縁部には縦位の蛇行沈線)を施す。頸部には、括れ部にキザミ目列が巡る磨消区画を有する。5～7は横位のキザミ目列が巡る胴部下半から底部付近の破片で、同一個体と思われる。本遺構の所属時期については、土器の特徴から後期中葉と考える。



第67図 SX-232 実測図



第68図 SX-232 遺物実測図

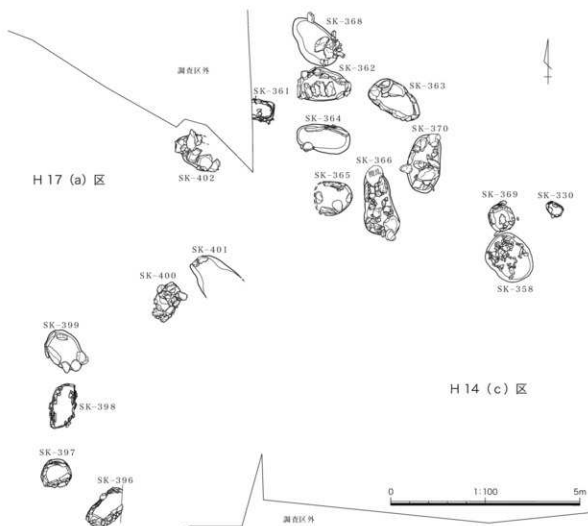
4. 石棺墓 (第69～78図、図版六～一一・二〇)

平成14年度及び17年度の調査で石棺墓17基からなる墓域を確認した。墓域は住居群の約20m東に位置しており、湯西川に面して径約15mの範囲で弧状に展開する。墓域の南側については、14年度の調査結果から位置的にも遺構の広がりが予想されたため15年度に試掘を行ったが、耕作や宅地造成によって第V層まで削平されており遺構は確認できなかった。これらの石棺墓は上面形態や規模、使用石材などのほか、主軸方向についても幾つかのグループに分けることが可能である。本項では、個々の石棺墓について実測図を掲載し、観察においては以下の項目で分類して一覧表に示した。

本遺構群の確認面は基本土層第Ⅲ～第Ⅳ層内であるが、耕作や後世の攪乱により破壊されているものが多く、また構造上では掘方内に壁石を立て掛けるように配置したものであるため、壁石が傾いているものも少なくない。このため、計測値については、残存状況から構築時の状態を勘案して復元値を可能な限り示すこととした。規模に関しては、使用石材の形状によって大きさに差異があるため内法を計測した。また、深さに関しては、残存する壁石の高さと掘方から復元して示した。

形態分類・使用石材

平面形態及び使用石材により、以下の4つに大別した。当遺跡周辺の地山には多数の段丘礫が含まれているため、墓の構築材との区別が困難なものもあるが、石棺を構成する主要石材には火山礫凝灰岩板状節理の



第69図 石棺墓配置図

板石が使用されており、風化による剥落や破損が著しいものの、確認作業の段階で石組を判断する基準となった。この火山礫凝灰岩は当地域の基盤層で、本遺跡の東へ約200m離れた川沿いの段丘上で露頭が確認されている。また、凝灰岩の板石と共に用いられる流紋岩やチャートなども湯西川河床で採集可能な石材である。

A類：板石（板状節理の凝灰岩）を使用し、方形に組むものである。長さ50cm×40cm前後、厚さ10cm前後の凝灰岩板石を各片1枚づつ使用し、方形に組んだ比較的小型の石棺墓で、SK-330・369・397・400の4基がある。このうち、SK-397には凝灰岩板石による蓋石が認められる。

B類：板石（板状節理の凝灰岩）を使用し、長軸2枚、短軸1枚で長方形に組むものである。基本的には、A類の壁石を長軸辺に2枚使用した形態である。規模は内法で長軸120cm前後、幅50cm前後の長方形をなす石棺墓である。SK-363・396・398を典型とし、遺存状態は悪いがSK-361・366・368・402を含む都合7基がある。このうち、SK-363・396には板石と河原石による蓋石が認められる。

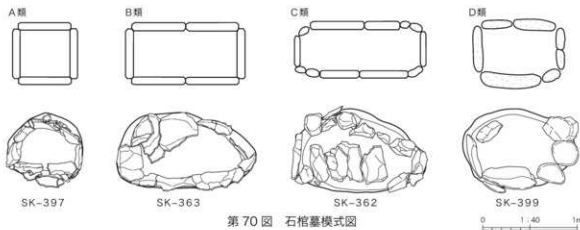
C類：板状節理の凝灰岩と河原石を使用し、長方形に組むものである。凝灰岩板石と扁平な河原石を組み合わせた石棺墓で、SK-362・364・365の3基が該当する。SK-362は長軸となる東西の壁石に凝灰岩の板石を2枚、南北の壁石に1枚を配しB類と同形態をとるが、コーナー部に河原石を「ハ」字状に据えて丸みを持たせ楕円形に近い形状となる。また、SK-364は北壁のみ完存しており、長さ50～60cmの板状の河原石と凝灰岩板石を1枚づつ組み合わせている。SK-365は北壁に長さ60cmほどの凝灰岩板石が1枚残存しており、南壁は板状の河原石が元の位置を留めている。また、SK-362からは蓋石が上方から割れて石棺中に落ち込んだ状態で確認した。蓋石は90×60cmほどが接合し一枚の板状となる凝灰岩の板石である。

D類：扁平な大型の河原石を使用し、長方形に組むもので、今回の調査ではSK-399の1基のみである。使用する石材の違いはあるが、形態的にはC類と類似しており、やや楕円形に近い形状である。東壁の一部が抜き取られているが、壁石は大型で扁平な河原石を西壁で大小2個、北壁で1個配し、南壁では幅の短い石を2個並べ北壁と長さを合わせている。確認面で60×40cmの蓋石の一部を確認している。

これら石棺墓の規模についてみると、内法で一辺が40・50cmのほぼ方形のものが4基（A類）、長軸100～120cm、短軸40～50cmの長方形のものが13基（B・C・D類）あり、大きさの傾向としては大・小2つに分けられる。深さは壁石から判断してA類が30cm前後、B・C・D類が40～50cmと考えられる。

主軸方向

座標系のグリッド北を基準に長軸方向をみると、全体の傾向として大半が北西方向に配置されたものが多く、N-40°～65°-W内に集中する。若干のばらつきはあるが、概ね以下の4つに大別できる。なお、出土遺物から頭位方向の推定が可能なものは確認できなかった。



第70図 石棺墓模式図

a類：主軸をほぼ東西方向にとる一群で、SK-361・362・364・365・402が該当する。B類2基、C類3基の5基で構成され、平面的には石棺墓群の中央部に分布する。

b類：主軸をほぼ南北方向にとる一群で、SK-366・370とやや離れた西側の398が該当し、若干西に傾くがSK-369も本群に含めた。A類1基、B類2基、不明1基の都合4基で、a類の東側に纏まりをみせる。

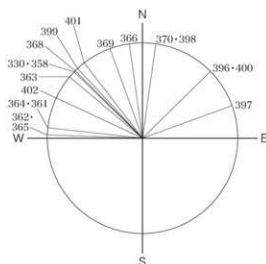
c類：主軸をほぼ北東方向にとる一群で、SK-396・397・400が該当する。A類1基、B類1基の2基で構成され、石棺墓群の西側に分布する。

d類：主軸をほぼ北西方向にとる一群で、SK-330・358・363・368・399・401・402の都合7基が該当する。A類1基、B類3基、D類1基、他2基で構成され、主に石棺墓群の外周部に展開する。

長軸方位と形態別に際立った特徴は認められないが、規模との関係では各方位内で数基単位の大型（B・C・D類）石棺墓に小型（A類）石棺墓1基のみが付随する傾向がみられる。また、石棺墓の配置に関しては、墓域の総体として弧状の展開をみせるが、列状の配置や方向軸の統一性は認められない。

出土遺物

石棺墓内から出土した遺物は極めて少ない。出土数は縄文土器片46点で、SK-396・398・399・400の4基から出土している。SK-398で器形の復元可能な深鉢形土器が底面から出土しているが、その他のものは小破片で石棺内に流れ込んだ可能性が考えられるため、出土土器から時期の特定は難しい。概ね後期中葉頃を中心とした時期を想定できるが、明確な位置づけは行い難い。



第71図 石棺墓長軸方位

第3表 石棺墓一覧

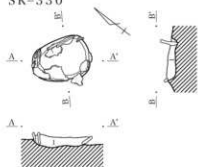
[]：復元値、()：残存値 単位：cm

遺構番号	位置	形状	規模(内法) 長軸×短軸	深さ	使用石材	分類	主軸	残存状況・特徴	備考
SK-330	I-25	方形	[30×25]	(10)	板状節理 凝灰岩	A	d	東壁の大部分を欠損。長軸に30cm、短軸に20cmの石材を使用し方形に組んでいる。遺存する壁は南壁が外側に倒れた状態である。	
SK-358	I-25	楕円形	130×110	20	不明	不明	d	卵石は覆土により散取られている。土内に卵石の破片のほか、10～20cm大の礫・河原石が多数散れ込む。	
SK-361	H-24・ 25	長方形	(52)×[40]	20	板状節理 凝灰岩	B	a	西半分が調査区外のため未調査。東西壁に50～60cm(×2枚か)、南壁に40cmの石材を1枚使用し方形に組んでいる。遺存する壁は北壁が外側に倒れた状態である。	
SK-362	H-25	長方形	120×[40]	40～ 50	板状節理 凝灰岩 ・河原石	C	a	南壁が内側に倒れた状態であるが、遺存状態は良好でほぼ復元可能である。 東西の壁石には凝灰岩板石を4枚、南北の壁石には1枚を配し、コーナー部には河原石を斜めに据えて丸みを持たせている。 蓋石は割れて石棺内に落ち込んだ状態で確認した。90×60cmほどが接合し、一枚の板状となる。	蓋石

第4節 縄文時代の遺構と遺物

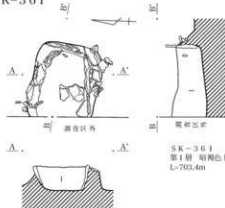
SK-363	H-25	長方形	120 × [50]	40	板状節理 凝灰岩	B	d	南壁石と東壁石の一部が欠損するが、遺存状態は良好ではば復元可能。東壁が内側に倒れた状態である。 東西の各壁は凝灰岩の長さ60×40cmほどの板石を2枚づつ、南北壁には1枚使用し、長い方を横にして方形状に組んでいる。石棺内には幅50×35cm大の扁平な河原石のほか、板石の大型破片が上方から落ち込んでおり、蓋石の可能性が考えられる。	蓋石
SK-364	H-25	長方形	[120×50]	30～35	凝板状節理 凝灰岩 ・河原石	C	a	北壁のみ完存。南壁の一部が残存する。北壁には50～60cmの凝灰岩板石と河原石を組み合わせる。遺存する壁石は北壁が内側に、南壁が外側に倒れた状態である。	
SK-365	I-25	長方形	75×60	30	板状節理 凝灰岩 ・河原石	C	a	北壁には長さ60cmほどの凝灰岩板石が1枚残存しており、また南壁石は板状の河原石が元位置を留めている。	
SK-366	H・I-25	長方形	[120]×40	35	板状節理 凝灰岩	B	b	南北の両壁が後世の擾乱・遺構の重複により欠損する。東西壁石の半分及び南壁の一部が残存。残存部からの推定で、東西各壁は長さ50×30cmほどの凝灰岩薄石を2枚づつ、南北壁には1枚使用し、長い方を横にして方形状に組んでいたものと思われる。覆土内には、壁石の剥離した破片が多数みられる。	
SK-368	H-25	(長方形)	[120×50] ※軸方推定	(20)	板状節理 凝灰岩	B	d	大部分の壁石が抜き取られており、北壁と東壁の一部を確認したのみで、東壁の一部が内側に倒れた状態である。	
SK-369	I-25	方形	[50×40]	(35)	板状節理 凝灰岩	A	c	北壁に40cm、西壁に30cmの板石が残存する。擾乱により、覆土内及び周囲に石材が散乱する。遺存する壁石は外側に倒れた状態である。	
SK-370	H・I-25	長方形か	不明	不明	凝板状節理 凝灰岩 ・河原石	不明	b	側方と石材のみ確認。本来は石棺蓋の形態をとるものと思われるが、擾乱により全ての石は元位置を留めていない。凝灰岩板石と河原石による長方形の石棺と思われる。	
SK-396	I-24	長方形	[100]×50	40	板状節理 凝灰岩	B	c	東壁と南壁の半分が水道管による擾乱を受ける。壁石は風化により剥離が著しい。長軸の各壁は凝灰岩の板石を2枚づつ、短軸には1枚使用し、方形に組んでいる。 確認面では、壁石と同様の凝灰岩板石が上方から落ち込んでおり、蓋石と考えられる。	蓋石 ・土器片 出土
SK-397	I-24	方形	50×40	30	板状節理 凝灰岩	A	c	壁石の風化が著しい。長さ40cmの凝灰岩板石を使用し方形に組んでいる。側石は西壁と南壁が外側に倒れた状態である。石棺内には凝灰岩板石が上方から落ち込んでおり、蓋石と考えられる。	蓋石
SK-398	I-24	長方形	110×60	(15)	板状節理 凝灰岩	B	b	壁石の上部は削平を受け、また南壁は抜かれており、一部剥離した石片が残る。壁石は風化により剥離が著しい。 東西の各壁は凝灰岩板石を2枚づつ、短軸には1枚使用して方形に組んでいる。 東壁の北側コーナー付近から復元可能な土器が出土。	土器片 出土
SK-399	I-24	長方形	[90×50]	[40]	扁平な 河原石	D	d	東壁が抜き取られている。南北の壁石は南方向に傾き、西壁石は外側に傾く。壁石は大型で扁平な河原石を西壁で大小2個、北壁で1個配し、南壁では幅の短い石を2個並べ北壁と長さを合わせている。 確認面で60×40cmの蓋石の一部を確認している。	土器片 出土
SK-400	I-24	方形	[50×50] ※軸方推定	[30]	板状節理 凝灰岩	A	c	大部分が擾乱を受けており、東西及び南壁の石材破片が残存するが本来の位置を留めていない。東西の壁石の下側が内側に崩り落ちた状態である。	土器片 出土
SK-401	I-24	長方形	不明	(20)	扁平な 河原石	不明	不明	北半分の側方と北壁の壁石のみ残存する。残存部分から推定では、長方形の石棺蓋か。	
SK-402	H-24	長方形	不明	[30]	板状節理 凝灰岩	B	a	西壁と南北壁の一部が残存。南壁は内側に、西壁は外側に傾いた状態である。残存部からの推定で凝灰岩板石を用い、長方形に組んだものと考えられる。	

SK-330



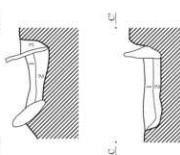
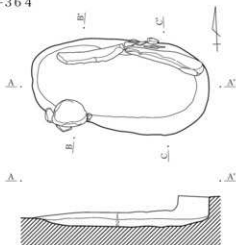
SK-330
第1層 粘褐色土 (小礫・黄褐色シルト粒混入。粘性を欠く。しまりに富む)
L=703.0m

SK-361



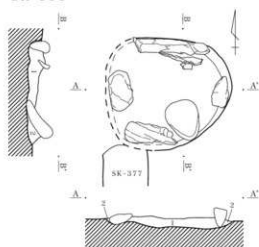
SK-361
第1層 粘褐色土 (しまりを欠く)
L=703.4m

SK-364



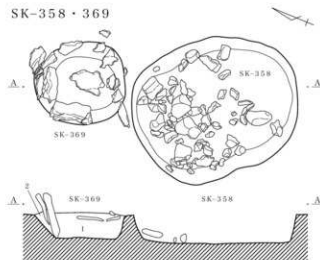
SK-364
第1層 粘褐色土 (φ3cm 礫混入。粘性・しまりを欠く)
第2層 黄褐色土 (楕大～小礫混入。粘性を欠く。しまりに富む)
第3層 粘褐色土 (楕大～小礫・黄褐色シルト粒混入。粘性・しまりを欠く)
L=703.4m

SK-365



SK-365
第1層 黄褐色土 (φ1～5cm 礫混入。粘性に富む。しまりを欠く)
第2層 粘褐色土 (黄褐色シルト粒多量混入。粘性・しまりに富む)
L=703.3m

SK-358・369



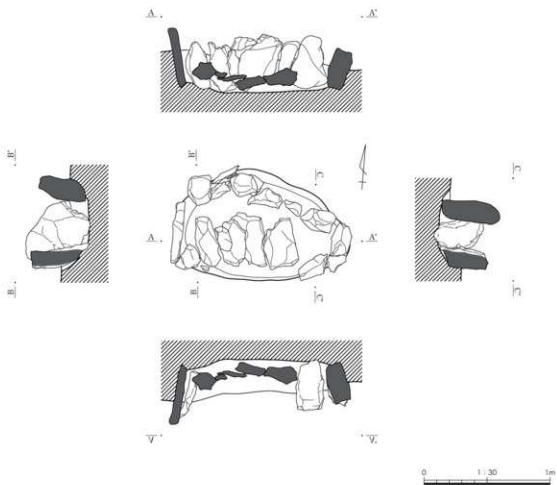
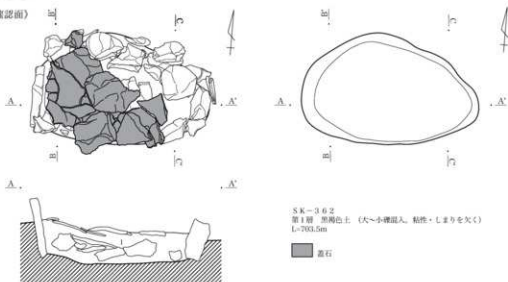
SK-369
第1層 黄褐色土
第2層 粘褐色土 (黄褐色シルト粒多量混入。粘性・しまりに富む)
L=703.1m

0 1:30 1m

第72図 SK-330・358・361・364・365・369実測図

SK-362

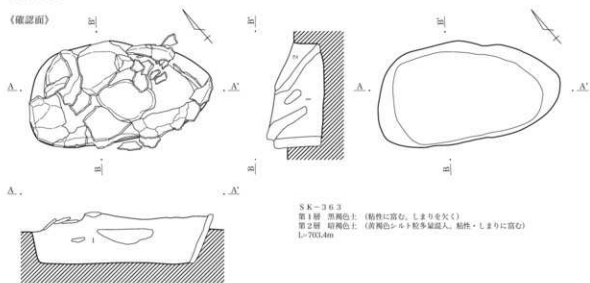
(確認面)



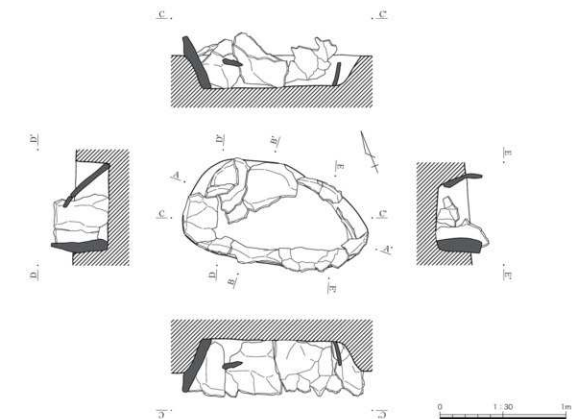
第73図 SK-362実測図

SK-363

《確認面》

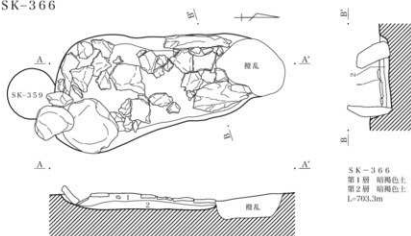


SK-363
 第1層 赤褐色土（粘性に富む。しまりを欠く）
 第2層 黒褐色土（青褐色シルト）较多量混入。粘性・しまりに富む）
 L=703.4m



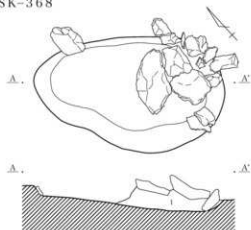
第74図 SK-363実測図

SK-366



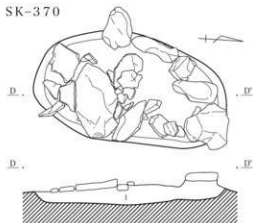
SK-366
第1層 黒褐色土 (小礫多量混入、粘性全欠、しまりに富む)
第2層 黒褐色土 (礫類少量混入、粘性・しまりに富む)
L=703.3m

SK-368



SK-368
第1層 黒褐色土 (礫類少と同質)
L=703.4m

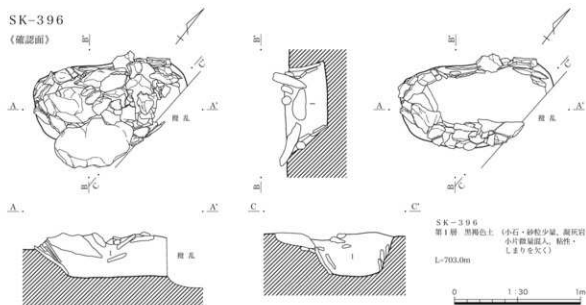
SK-370



SK-370
第1層 黒褐色土 (礫多量混入、粘性・しまりを欠く)
L=703.3m

SK-396

《確認面》

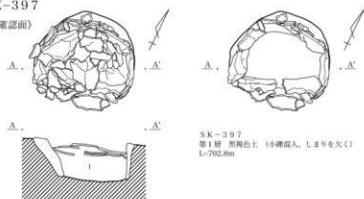


SK-396
第1層 黒褐色土 (小石・砂粒少量、腐敗岩小片微量混入、粘性・しまりを欠く)
L=703.0m

第75図 SK-366・368・370・396実測図

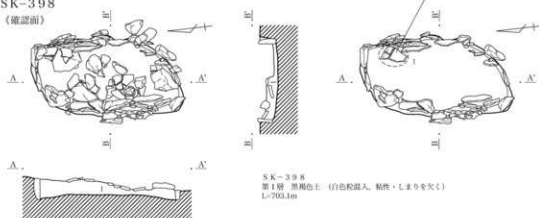
SK-397

《確認面》



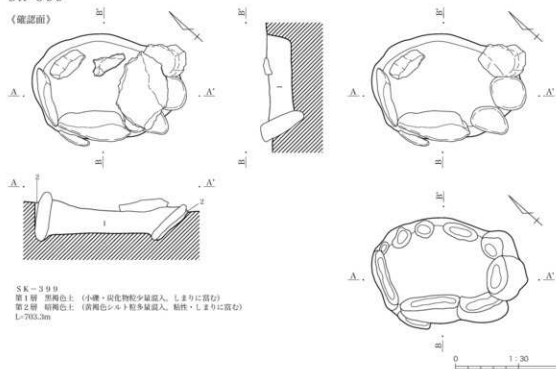
SK-398

《確認面》

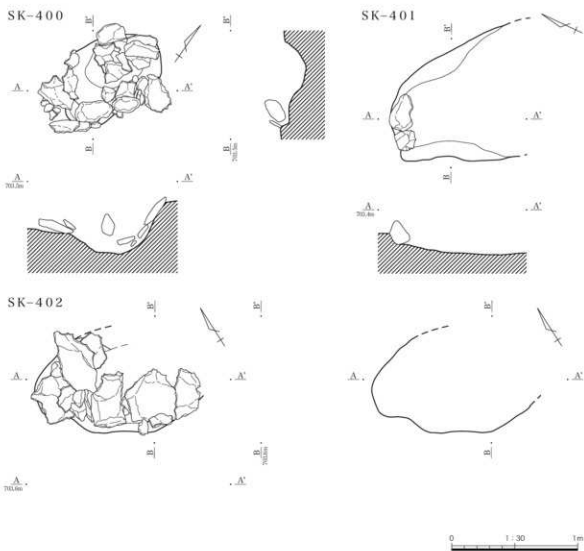


SK-399

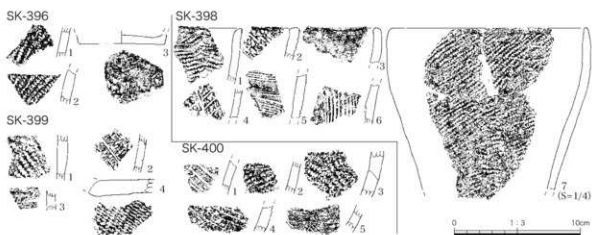
《確認面》



第76図 SK-397・398・399実測図



第77図 SK-400・401・402実測図



第78図 SK-396・398・399・400遺物実測図

5. 遺構外出土遺物

ここでは、遺構に伴わない表土及び包含層出土の遺物を取り上げる。本遺跡の縄文時代遺物包含層は、基本土層第Ⅲ・第Ⅳ層の2層が相当し、縄文土器のほか、石鏃・搔削器類・磨石類を主体に約577点の石器・石製品が、また土偶・土版・耳環・土鍾・円盤などの土製品が出土している。出土した土器は、早期前半から晩期後葉に及んでいるが、その主体となるのは後期中葉から後葉である。遺物の多くは縄文時代の遺構が集中する H13(a)、H15(a)、H17(b)、H19 の各地区から出土したものである。

(1) 土器

第1群 燃糸文系土器

第1類 天矢場式土器 (第79図1～23)

1～6・8は口縁部破片。口縁部の形状は丸頭状を基本とするが、3・8はやや角頭状気味である。外面の調整はいずれも横方向で、胎土内の石英・白色粒の移動による擦痕が顕著にみられるが、8・5はナデ整形が行われ、比較的薄手の造りである。7・9～17・20・21は胴部破片で、ケズリ及びナデ整形により斜位及び横位の擦痕が付く。12・18・19・22は下部に厚みがある底部付近の破片である。本類は胎土に大型の白色粒を多く含み、外面はケズれないしはナデ調整による擦痕が著しい。また、内面は平滑にナデ整形され、色調は外面が橙色及び赤褐色、内面が黒褐色を基調とするものが多い。

第2類 平板式土器 (第79図24～27)

24～27は横位の細擦痕が施された胴部破片。胎土には砂粒と微量の白色粒を含み、焼成は良好である。

第2群 常世1式土器およびそれに類する土器 (第79図28～31)

29は角棒状工具、28は歯齒状工具による刺突列が施される。胎土に砂粒を含む。30は斜位の平行沈線間に円形竹管文を縦位に配している。内面には浅い条痕文がみられる。胎土には砂粒と微量の繊維を含み、焼成は良好である。31は外面に細密な浅い条痕文がみられる。胎土に砂粒を多く含み緻密、焼成は良好である。

第3群 子母口式土器 (第79図32)

32は無文地に細かい棒状工具による刺突列が縦・横に交差する胴部破片。色調は褐色を基調とし、胎土は緻密で砂と微量の繊維を含む。焼成は良好である。

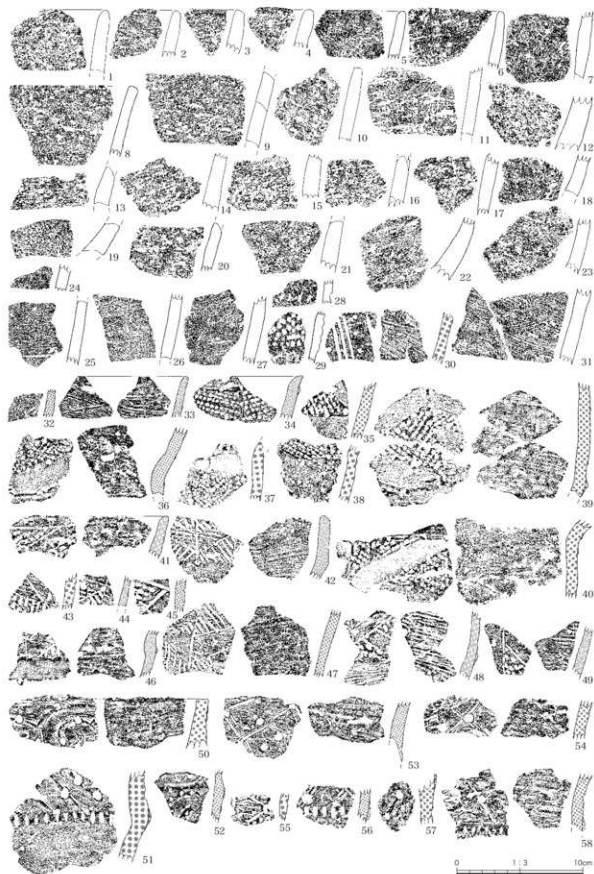
第4群 条痕文系土器

第1類 野島式土器 (第79図33)

33は条痕を地文とし、横位の微隆起線文が施される口縁部破片。条痕は外面が斜位に、内面は横位に施される。胎土には繊維を少量含み、比較的薄手である。

第2類 鶴ヶ島台式～茅山下層式土器 (第79図34～58、第80図59～62・64～67)

34～40は微隆起線による区画内に押引文を充填するもので、地文には内外面とも浅い条痕が施される。文様は微隆起線で菱形や三角形などのモチーフを描き、微隆起線上の接点や変化点に円形竹管を施している。36・39・40は横位の隆帯により上下の区画帯を形成する。胎土には繊維と多量の雲母片を含む。焼成は良好である。41～49は沈線による区画内に押引文を充填する。42・48・49の内面には、深くしっかりとした条痕が施されている。50～52は微隆起線上に刺突を加える。50は角頭状をなす口縁部破片。口唇直下に横位の微隆起線を巡らせ、以下の文様は円または弧状のモチーフを組み合わせている。51はキザミが施された横位の低い隆帯で文様帯を区画する。上段には斜方向の微隆起線上に円形の窪みが施される。ともに外面はナデ整形、内面には浅い条痕文がみられる。焼成は良好で胎土に繊維を含む。53～58は沈線の交点に円形の窪みを加える。沈線文は半截竹管の凹面を用いて2本一組を基本に浅く施文するが、55のように1本引きのものもある。56・58は横位の区画隆帯上にキザミが施される。地文には内外面とも浅い条痕がみられ、胎



第79図 遺構外出土土器実測図(1)

土に繊維を含む。焼成は良好である。59～62は沈線上に刺突を加える。59・60は縦位、61は横位、62は斜位の沈線上に円形竹管による刺突を施している。いずれも内外面に浅い条痕文がみられ、胎土に繊維を含む。65・66は角棒状工具により65は斜め上方、66は横方向からキザミが施される。67は縦位の微隆起線下端に円形の刺突文がみられる。

第3類 常世2式土器 (第80図63・68～79)

63・68～71は口縁部破片。口唇部の形態は70が角頭状で、そのほかのものは先細り気味である。68は口縁直下に絡条体圧痕文を縦位に、以下には羽状に配している。内面には横方向の条痕文が施されている。73は横方向の条痕文を地文とし、口縁直下から間隔を開けて密に施された数条単位の絡条体圧痕を配し、その下端には横位の絡条体圧痕文で区画する。内面には斜め方向の条痕文が施される。76・77の内外面は間隔が狭く施文が浅い条痕文を地文とし、外面に絡条体圧痕文を羽状に施す。本類は胎土に繊維を多量、石英粒を微量に含み、色調は外面が褐色、内面が暗褐色を基調とするものが多い。焼成は良好である。78・79は所謂「胡麻沢タイプ」の土器である。78は口唇部にキザミが付く角頭状の口縁部。口縁に沿って棒状工具による縦位の集合短沈線を加え、以下には櫛歯状工具による刺突列が横位に巡る。内面には横位の条痕が施される。色調にはぶい黄橙を基調とする。胎土には微量の繊維と白色細粒・砂粒を少量含み、焼成は良好である。79は縦位の低い隆帯上に羽状の沈線が加えられ、その脇には棒状工具による刺突がみられる。内面には横位の条痕が施される。色調は褐色を基調とする。胎土には微量の繊維と白色粒・砂粒を含み、焼成は良好である。

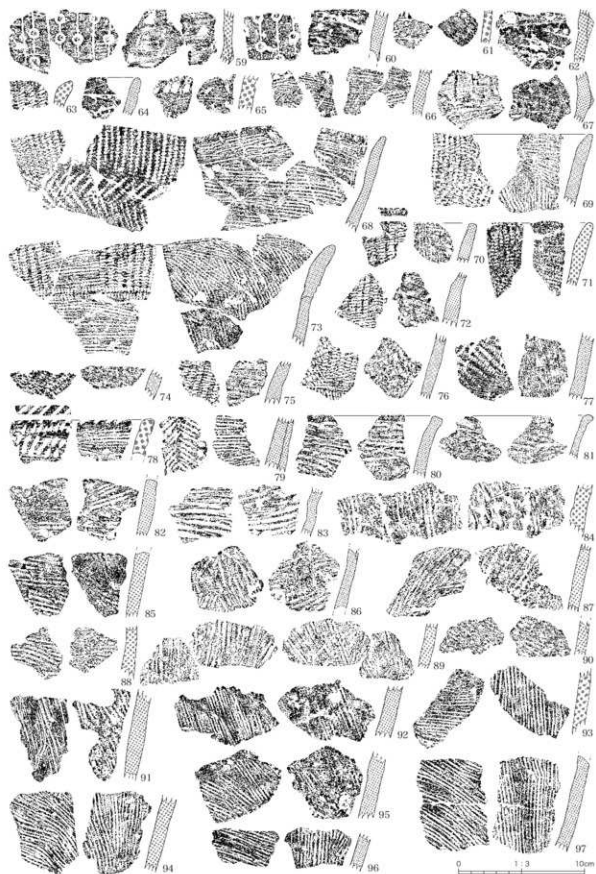
第4類 条痕文のみがみられる土器 (第80図80～97、第81図98～119)

80～99は表裏面に条痕文がみられる。80～90の条痕文は条幅がほぼ等間隔に施される。80・81は口唇部が角頭状をなす口縁部破片で、内外面とも横方向の条痕文が施される。82・85は外面に横方向、内面に斜方向の条痕文が施される。83・88は内外面横方向、84・89は縦方向、86・87・90は斜め方向の条痕文がみられる。90は胎土に微細な雲母片を多く含んでいる。91～99は条幅が等間隔ではないが、深くしっかりとした条痕文がみられるもので、外面は斜方向ないしは横方向、内面は縦方向に施されるものが多い。109～113は条幅が等間隔でなく条痕も浅い。100～108は外面に条痕文、内面は無文となるもの、114～119は外面が無文で内面に条痕を施すものである。本類の胎土には繊維・砂粒・白色粒を含み、また微細な雲母片を含むものもみられる。色調は橙色・褐色・黄橙色・赤褐色等を基調とし、内面は外面と同色か黒褐色のものがある。焼成は良好であるが、繊維を多く含むため脆い感じを受ける。

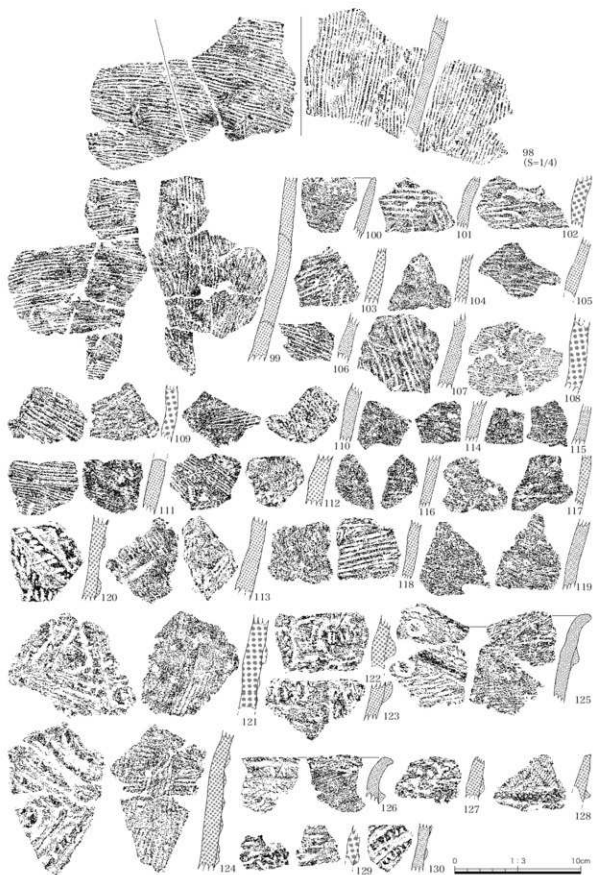
第5群 早期末葉の土器

第1類 隆帯を貼付する土器 (第81図120～130、第82図131～133)

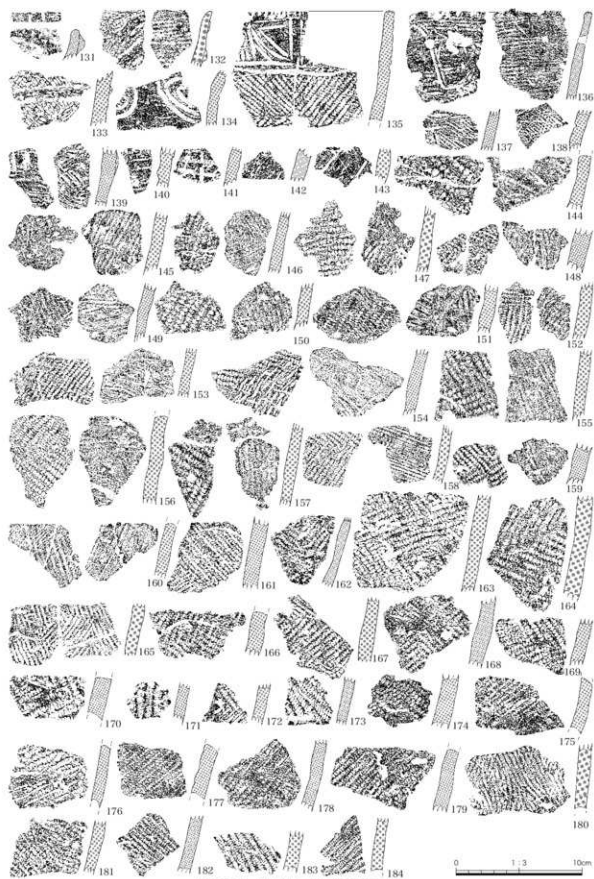
120は無文地に低い隆帯を貼付し、その上にキザミ風の押捺を加えている。色調は褐色を基調とし、胎土は繊維、白色粒を含む。焼成は良好である。121～124は表面の無文地に隆帯と貼瘤がみられる。121・124は同一個体と思われる。キザミを伴う低い隆帯により、菱形ないしは三角形のモチーフを描出し、内部に円形の貼瘤が付される。内面には条痕文がみられる。122・123は縦位及び横位の隆帯によって区画された内部に円形の貼瘤が付される。隆帯及び貼瘤上にはキザミが施される。121・123・124の外面は褐色、内面は黒色、122の内外面は黄橙色を基調とする。いずれも胎土に繊維を多量に含んでおり、繊維の抜痕が顕著にみられる。焼成は不良である。125～127は原体圧痕や円形竹管がみられる。125・126は口端が外に屈曲する口縁部破片で同一個体と思われる。口縁部の形状に沿って断面三角形の横位隆帯を貼付し、文様帯を区画する。区画内には口縁部に沿って1段の繩による側面圧痕が施される。隆帯以下には1段Lの横位施文がみられる。125の波頂部下には円形竹管が縦に配される。内面には浅い条痕がみられる。色調は暗褐色



第80図 遺構外出土土器実測図(2)



第81図 遺構外出土土器実測図(3)



第82図 遺構外出土土器実測図(4)

を基調とし、胎土には繊維、砂粒を含む。焼成は良好である。128～131はキザミを加えた隆帯がみられる。128は口唇部が内削ぎ状をなす口縁部破片。縄文地に断面三角形の横位隆帯を貼付し、その上に縦のキザミを施している。131は無文地に隆帯を貼付するもので、口唇部と隆帯上にキザミを施す。132・133はキザミを加えない隆帯がみられる。132は外面に縄文、内面に条痕を施す。外面には斜行する2条の隆帯が貼付される。133は縄文地文で横位の低い隆帯が巡る。

第2類 口頸部に縦位、横位、斜位の沈線を施し、以下異方向縄文を配す土器（第82図134～138）

135は口唇部が角頭状で端部にキザミが付く。口縁部下には横位の沈線によって区画される文様帯が形成され、さらに向かい合う縦位・横位の沈線により文様帯を分割している。区画内には縦位、横位、斜位の沈線で文様を描出する。以下の胴部には0段多条の縄の異方向縄文により菱形構成をとる。胎土には繊維を多量に含み、抜痕が顕著である。色調は暗褐色基調で、焼成は良好である。134は無文地に楕円ないしは渦巻モチーフが描かれる。136は表裏面の地文に横位の条痕がみられる。口唇端部にキザミが付く。口縁部下には沈線で波状文風のモチーフが施される。胎土に白色粒と繊維を少量含む。焼成は良好である。

第3類 不規則な沈線がみられる土器（第82図139～143）

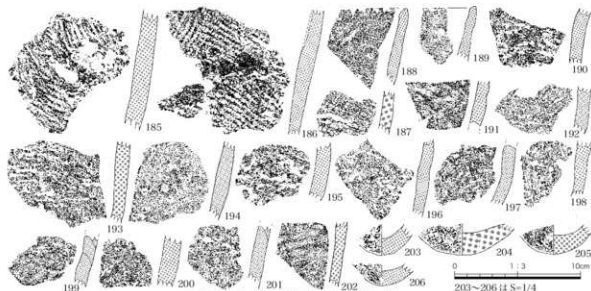
139～143は縦位・斜位・格子状の沈線がみられる。139の地文は表裏面に条痕文が施される。

第4類 外面に縄文、内面に条痕を施す土器（第82図144～160）

144～150は外面に単節斜行縄文、内面に条痕文が施される。146・147・150は2段LR、144・145・149は2段RLの縄文を用いる。151～159は表面に羽状縄文もしくは異方向縄文が施される。160は外面で2段LRの斜行縄文と斜位の条痕を併用する。色調は外面が橙色・褐色、内面は外面と同色または黒色のものが多い。胎土には白色粒・砂粒を含む。焼成は良いが繊維を多量に混入するためやや脆い。

第5類 外面に縄文を施し、内面を無文とする土器（第82図161～184、第83図185～187）

161～172は表面に羽状縄文もしくは異方向縄文、173～184は表面に単節斜行縄文がみられる。175～179・184は2段LR、173・174・180～183は2段RLの縄文である。185は表面で2段RLの斜行縄文と斜位の条痕を併用する。186・187は表面に結節回転文がみられる。内面はナデ整形により概ね平滑であるが、繊維を多く含むため抜痕が著しい。胎土・色調・焼成とも第4類と同質である。



第83図 遺構外出土土器実測図(5)

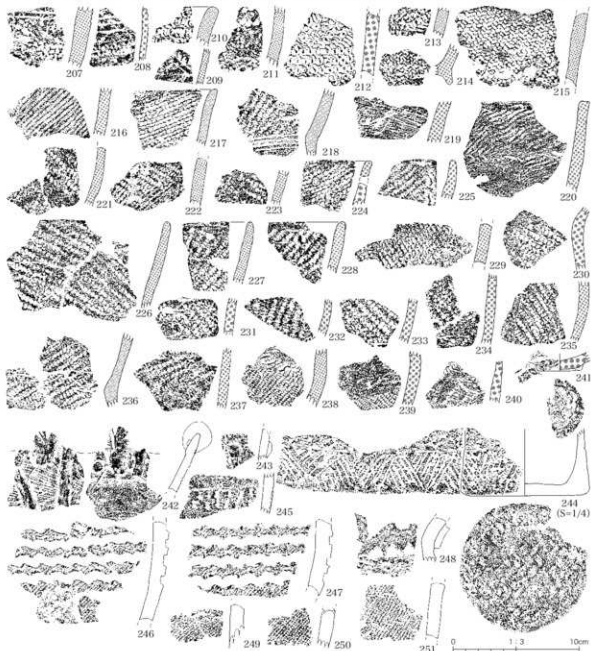
第6類 無文土器 (第83図188～206)

文様を持たない破片をまとめた。器面は丁寧に整形されており、特に188・189・202は平滑であるが、190・195・197・198の体部破片は繊維を多く含む抜痕が著しく凹凸がある。188・189は口縁部破片で端部にキザミが付く。191・194は同一個体で砂粒を多く含む、焼成は良好。203～206は底部でいずれも丸底をなす。203・205の内面は凹凸があり色調は黒褐色、204・206は内外面とも丁寧に整形されている。

第6群 羽状縄文系土器

第1類 関山式土器 (第84図207～217)

207～209は地文に関山式期独特の縄文と半截竹管による平行沈線を施すものである。207は地文に組紐、208・209は同一個体でループ文が施される。210～217は地文に縄文のみがみられる破片。210～213は



第84図 遺構外出土土器実測図(6)

末端環付の縄によるループ文、214・215は組紐が施される。216は0段多条の2段の縄による単節斜縄文、217は直線的に立ち上がる平口縁の土器で、地文に前々段合燃の縄による異条斜縄文が施される。

第2類 黒浜式土器 (第84図218～241)

218は2段LRの単節斜縄文を地文とし、括れ部に半截竹管による横位の平行沈線を巡らす。219は1段Rの縄による燃糸文がみられる。220は口唇端部が角頭状をなす口縁部破片。地文には1段Lの縄による無節斜縄文が施される。221～237は地文に2段の縄を施す破片。221～223は羽状縄文、224～228は単節斜縄文を施す。そのほか、238～240は無文部に特殊な縄文(絡条体圧痕か)がみられるものである。以下には、238は2段RL、239は2段LRの縦位施文が施されており、本群に掲載したが早期に属するものか。241は低い高台を貼付けた様な上げ底状の底部破片である。本群の土器はいずれも胎土に多量の繊維を含み、褐色や暗褐色を基調とするものが多い。焼成は良好である。

第7群 諸磯c式土器 (第84図242～244)

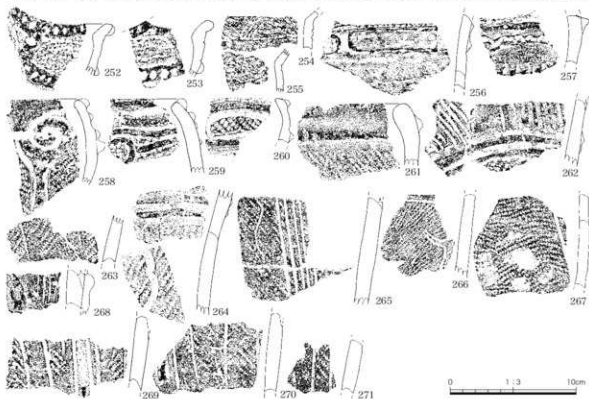
242は内面に粘土紐を貼り付け段状に肥厚させた口縁部破片。口縁部を包むように太めの粘土紐を突起状に貼り付けている。この突起内面側の両脇には円形の小さな貼瘤を施す。また、棒状の粘土紐を内面の段の部分から外面に垂下させる。外面の地文には矢羽根状の沈線を施文する。色調は黄橙色を基調とし、胎土は緻密で砂粒を微量含む。焼成は良好である。244はやや外側に張り出す底部付近の破片。体部外面には、沈線による横位の区画内に方向の異なる斜位の沈線を交互に充填する。底部外面には網代痕がみられる。

第8群 興津式土器 (第84図245)

245は磨消貝殻文が施される胴部破片。胎土に砂粒を少量含み、色調は橙色基調。焼成は良好である。

第9群 大木5式土器 (第84図246～248)

246・247は同一個体で2段LRの単節斜縄文を地文とし、角棒状工具による幅の広い鋸歯状の沈線文が横



第85図 遺構外出土土器実測図(7)

位に展開する。248は括れ部の破片で外面に粘土帯を貼付けた後、三角形に刻み内部を削り取った印刻文で鋸歯状のモチーフを施す。246・247の外面は褐色、内面は褐色を基調とする。胎土には大型白色粒の混入が際だっており、焼成は良好でやや硬質である。

第10群 前期末葉～中期初頭の縄文施文の土器（第84図249～251）

249～251は同一個体で、2段LRの横位施文がなされた後、数段の結節縄文が施される。胎土・焼成・色調とも第9群土器の246・247に類似する。

第11群 阿玉台式土器（第85図252～257）

252・253は波状口縁の波底部付近の破片。キザミの施された隆帯で楕円形の区画を形成する。区画の内側には篋状工具の押しきによる有節沈線を沿わせている。区画内には、252は円形竹管を充填し、253は2条の有節沈線を横位に施す。254・255は括れ部の破片。横位の有節沈線で区画し、内部に4本単位の斜位の有節沈線を交互に配し鋸歯状のモチーフを描く。256は隆帯で楕円形区画文を配した体部破片で、区画の上段に沿って角押文を施している。257は横位に巡る断面三角形の隆帯に沿って交互刺突を施す。以下の体部にはヒダ状圧痕がみられる。本類は胎土に白色粒・砂粒を少量、雲母片を多量に含み、色調は褐色や明赤褐色を基調とするものがある。焼成は良好である。

第12群 加曾利E式期の土器（第85図258～271）

258～260はキャリパー状深鉢形土器の口縁部破片。258は沈線の沿う隆帯で口縁部に渦巻文を施す。胴部は縄文地に渦巻文から沈線の沿う隆帯を垂下させる。259は縄文地に細い隆帯を貼付し渦巻モチーフを描いている。260は沈線の沿う隆帯で設けられた楕円形区画内に縄文を施す。261は微隆起線で区画された縄文部と無文部により文様が展開する。口縁に沿って1条の微隆起線を巡らせ、口縁部を無文としている。262は隆帯とそれに沿う凹線で横位に区画し、頸部に縦位及び斜位の沈線を施す。264は凹線の沿う横位の低い隆帯で文様帯を区画する。263は縄文地に縦位の沈線を施し、265は縄文地に縦位の集合沈線と蛇行沈線を垂下させる。266は横位沈線と棘状モチーフがみられる。267・269～271は縦位の沈線と幅の狭い磨消懸垂文が施される。269・270は縄文地に縦位の隆帯と沈線が垂下する。268は縦位条線地に押捺の施された隆帯が垂下する曾利式系土器である。本類の胎土には、259・261は白色粒、262～264・269～271は雲母片の混入が比較的多くみられる。焼成は良好である。

第13群 加曾利B式土器（第86～91図、図版二一・二二）

本群は後期中葉の加曾利B式に相当するものとして分類した。時期的には、概ね加曾利B2～B3式を主体とするが、曾谷式や安行式などの後続する型式の土器も含んでいる。また、部分的な破片資料が主体であるため、共通する要素が多い同時期の東北系土器と明確に区分するのは困難である。

第86・87図は口縁部に縄文帯や刺突列を施す土器である。第86図は口縁部から頸部までの間を無文とするもので、口縁部直下から無文のもの、口縁直下に縄文帯と沈線を巡らすもの（272～282）、口縁直下に沈線と刺突列を巡らすもの（283～304）がある。

272～282は口縁部に沿って縄文帯を配す土器である。いずれも口縁直下に帯状の縄文帯を配し、以下には無文部と区画する沈線を沿わせている。272～278は波状口縁の深鉢形土器である。272は5単位の波状口縁で頸部の沈線間に連続刺突が巡る。胴部には縄文帯と無文帯を交互に配した横帯文を施している。279～282は平口縁の土器で、282は外に開く口縁形態である。

283～304は無文の口縁部直下に単列ないしは複列の刺突列と沈線を施す土器である。波状縁の土器には端部が肥厚し、波頂部に山形状の小突起が付くものや、緩やかな波状をなすものなどがある。283の口縁部

直下と頸部には、方向の異なる矢羽根状の刺突列を施し、その間を無文としている。以下の胴部には、磨消縄文によりS字ないしは鋸状の曲線のモチーフが展開する。

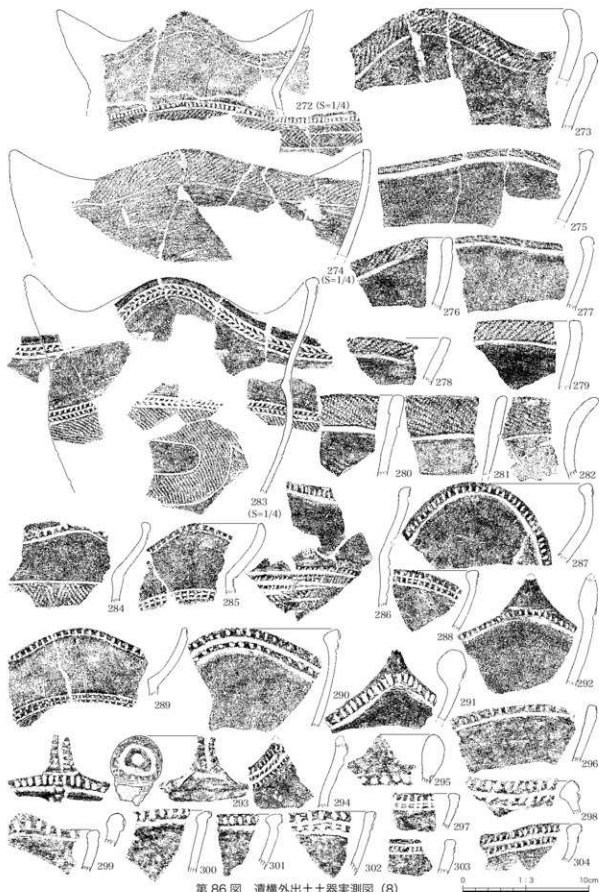
第87図は口縁部から頸部までの間に縄文と無文部を展開させる土器である。口縁部直下には狭い無文部を有するもの、単列ないしは複列の沈線と刺突列を巡らすものがある。また、縄文部と無文部を区画する沈線は、口縁部に沿うものと頸部の区画線に平行するものがある。

305～308は内傾する平口縁の深鉢形土器である。307は口縁部直下に沈線を巡らし狭い無文部を有する。以下には磨消縄文により、入組状の曲線のモチーフが展開する。308は口縁部がやや肥厚し内傾する平口の縁深鉢形土器で、口縁直下と頸部には沈線とキザミ目列が巡る。口縁部と頸部の間には縄文部と無文部が帯状に描かれ、以下の胴部には襷掛け状入組文が展開する。309～311は波状口縁深鉢形土器の復元個体である。309の胴部には互連弧充填縄文が展開する。310と382は同一個体と思われる破片で、第16群土器に含まれよう。311は口縁部に複列のキザミ目が巡る。縄文部と無文部を区画する沈線は、口縁部の形状に沿って山形状をなす。頸部には単列のキザミが施され、胴部には襷掛け状入組文が展開する。

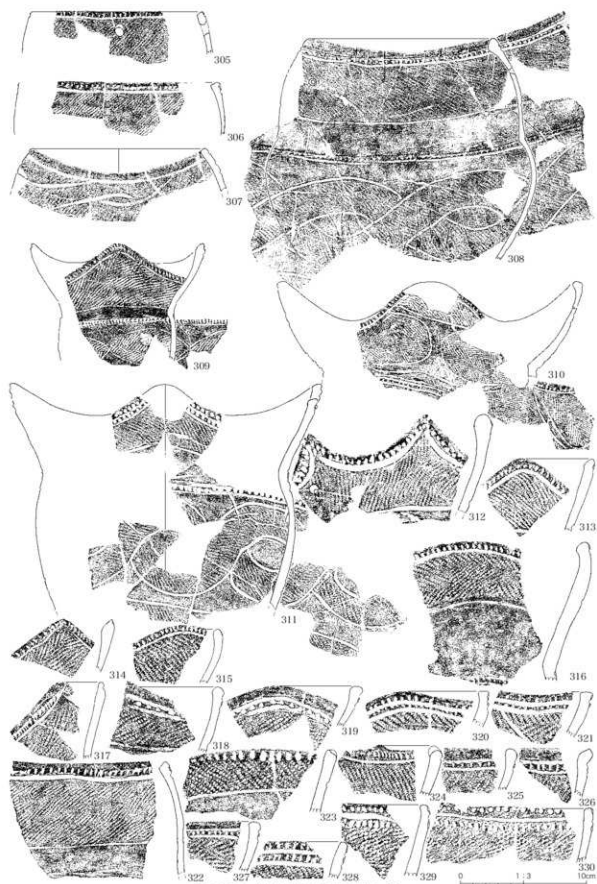
第88～90図は主に沈線で文様を表すものをまとめた。331～349は沈線と縄文による横帯文で文様を表現する土器である。数条の横位平行沈線が施され、所々に蛇行沈線、短沈線、鉤状沈線、円形の刺突などのスリットが加えられる。350～381・392～394・399～418は口縁部～体部に格子目文、横位沈線、斜行沈線、矢羽根状沈線などが施されるものである。350～358は地文の縄文上に格子目文を描く、いわゆる半精製土器である。格子目が細かいもの・粗いもの、幅が狭いもの・広いものと様々である。350は口縁直下に横位の沈線を施し、内部を無文とする鉢形土器、352・356は縄文地に格子目文、351は斜行沈線を施し、括れ部に横位の沈線間を磨消した区画帯が展開する。359・360・362～367は無文地に格子目文を描くものである。364～367は口縁部或いは頸部に磨消区画帯を有するもので、頸部に刺突列を巡らすものもある。368～381は横位ないしは斜位の沈線で文様を描くものである。368・373は口縁部に山形状の突起を有し、口縁直下に連続刺突（キザミ）が施される。369は緩やかな波状をなす深鉢形土器で、口縁直下と頸部にキザミ目列を施す。口縁部には雑な沈線で綾杉状のモチーフが描かれる。372は外面に横位沈線、内面に凹線が巡る。374・375は口縁部下に無文部を有し、以下横位の沈線を施す。392・404～418は矢羽根状あるいは綾杉状の沈線を施すものである。392は8単位の波状をなす深鉢である。口頸部は無文で、頸部には弧状のスリットが入る3条の横位沈線が施される。胴部中位には横位沈線を巡らせ文様帯を区画し、内部に矢羽根状沈線が展開する。393・394・399～403は口縁直下に横位の沈線を施すものである。394は口縁直下に3条の横位沈線が巡る平口縁の深鉢形土器で、口縁部に縦位の瘤が剥かれた痕跡がある。口頸部には瘤を起点に弧線文が展開し、括れ部には沈線間に円形刺突列が施された区画線が巡る。

393・395～399は凹線状の沈線が口縁部を巡る後期後葉の高井東系土器。393は緩やかな波状口縁の深鉢形土器で、波頂部には突起状の貼付が施される。395～398は波状口縁の波頂部に付される高く鋭く立ち上がる円柱状の突起である。395と398は同一個体で、口縁に沿って幅広く太い凹線が巡り、波底部付近には瘤状の円形貼付文が施される。397は突起下に背に沈線を施した縦長で降帯状の貼付を施しており、その両脇には矢羽根状の沈線がみられる。

第91図には壺形土器・注口土器・鉢形土器などをまとめた。419～427・449～453は壺形土器もしくは注口土器である。419は口頸部が長く外傾し、胴部が大きく膨らむ器形の壺形土器である。底部は平底で外面に網代痕がみられ、胴部下位には焼成前の穿孔がなされている。口縁部には並行沈線と組み合う縄文帯を配し、頸部の無文部と区画する。胴部には磨消縄文により連続した鋸状文が展開する。頸部から胴部の所々

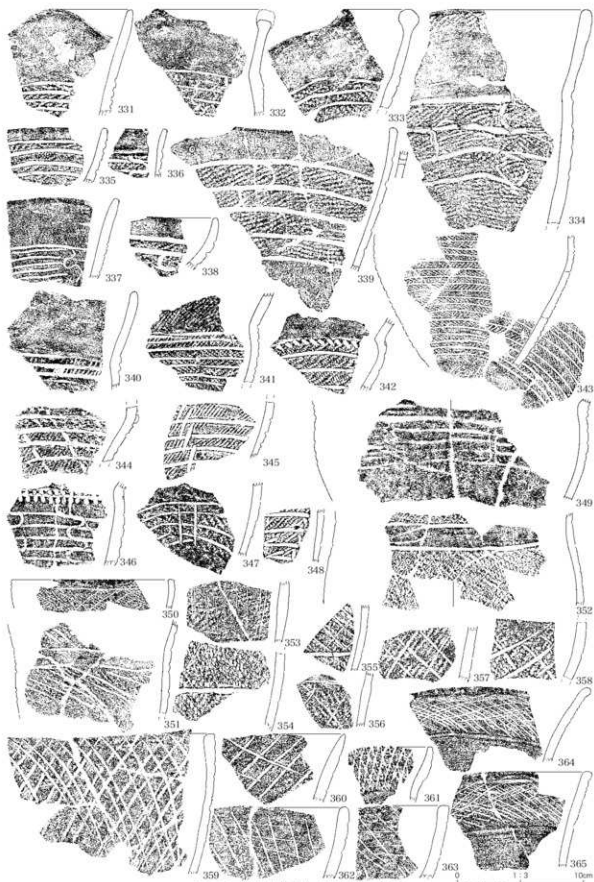


第86図 遺構外出土土器実測図(8)



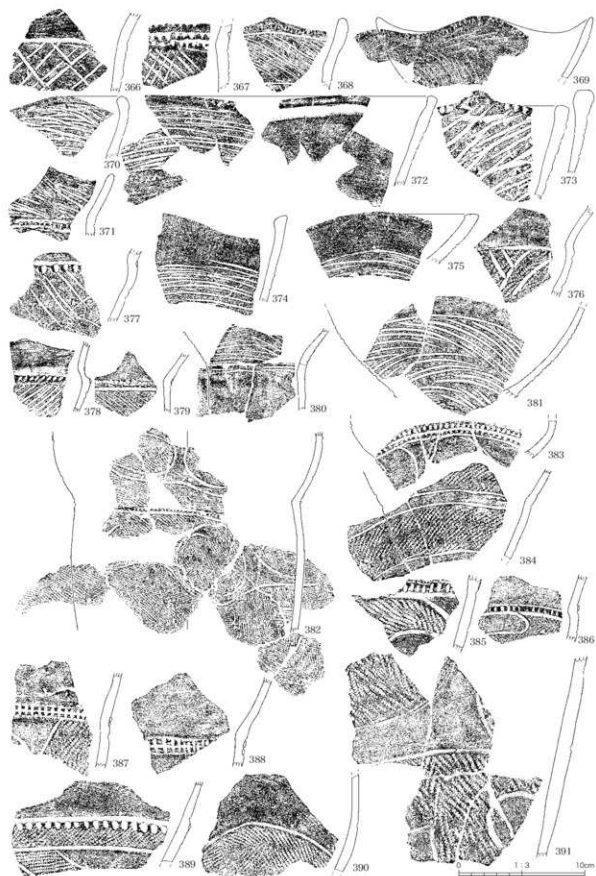
第87図 遺構外出土土器実測図(9)

305~311 1:3
305~311 1:3
305~311 1:3



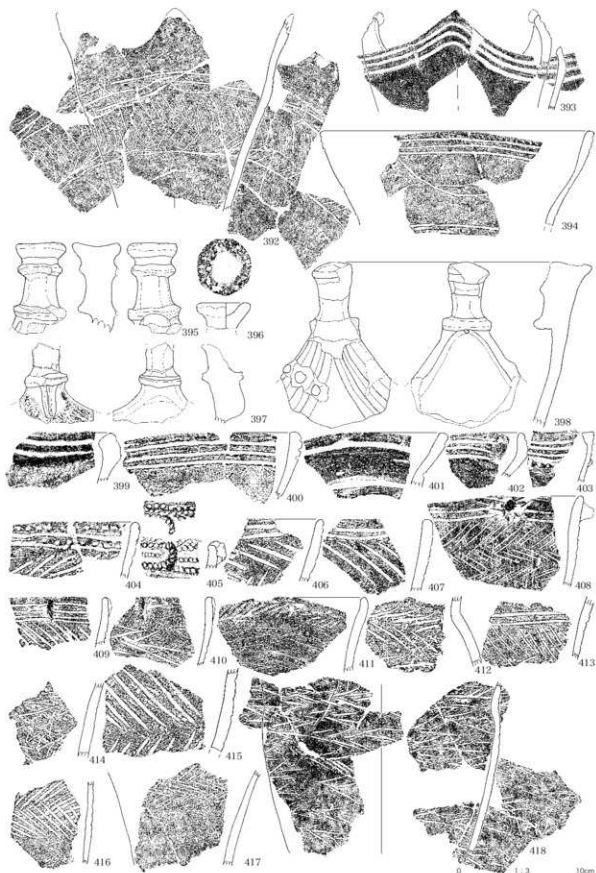
第88図 遺構外出土器実測図(10)

343・349～352はS-1/4



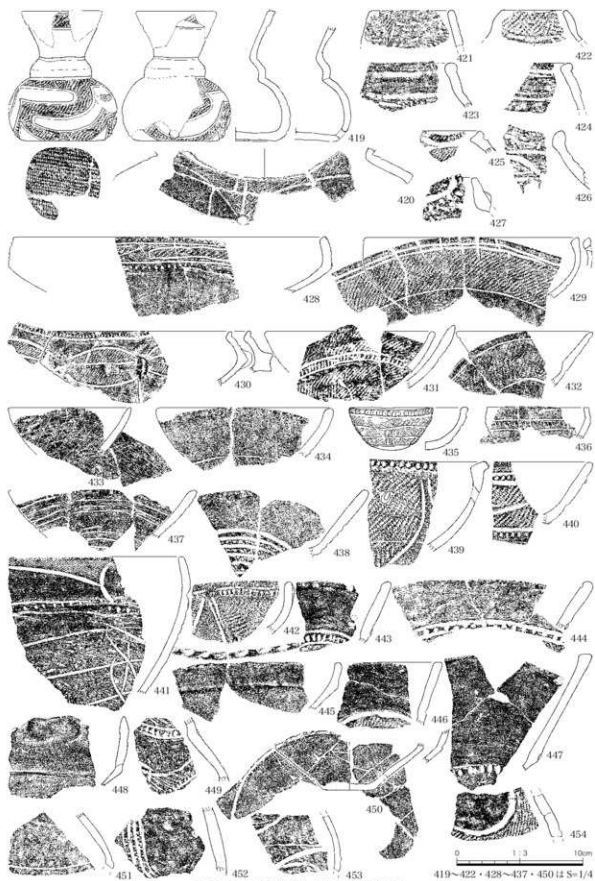
第89図 遺構外出土土器実測図(11)

369・380~384(1/4) S=1/4

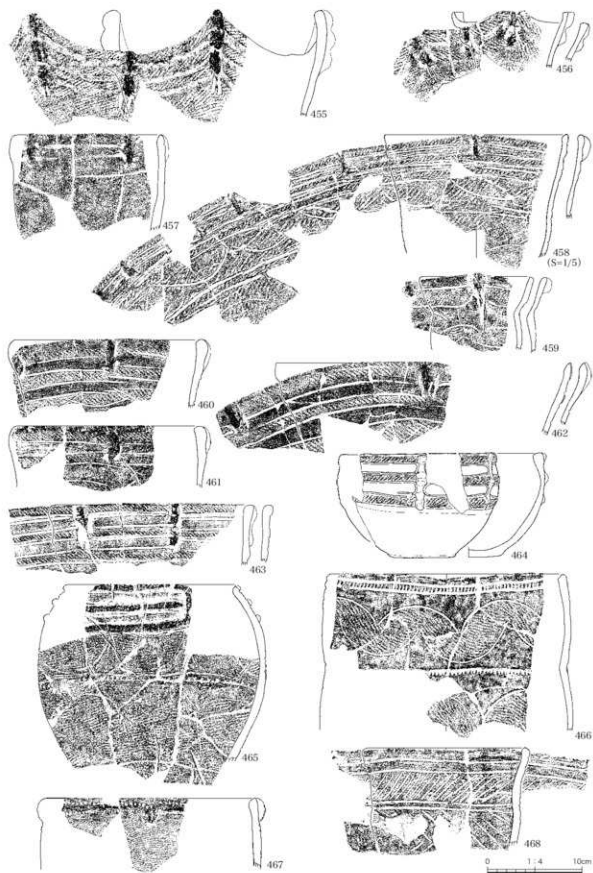


第90図 遺構外出土土器実測図(12)

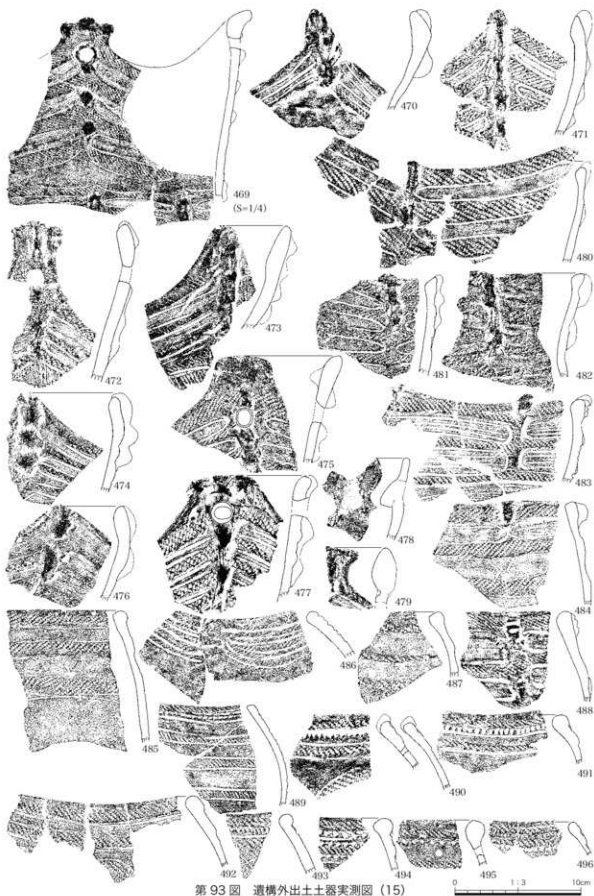
392~394・417・418はS=1/4



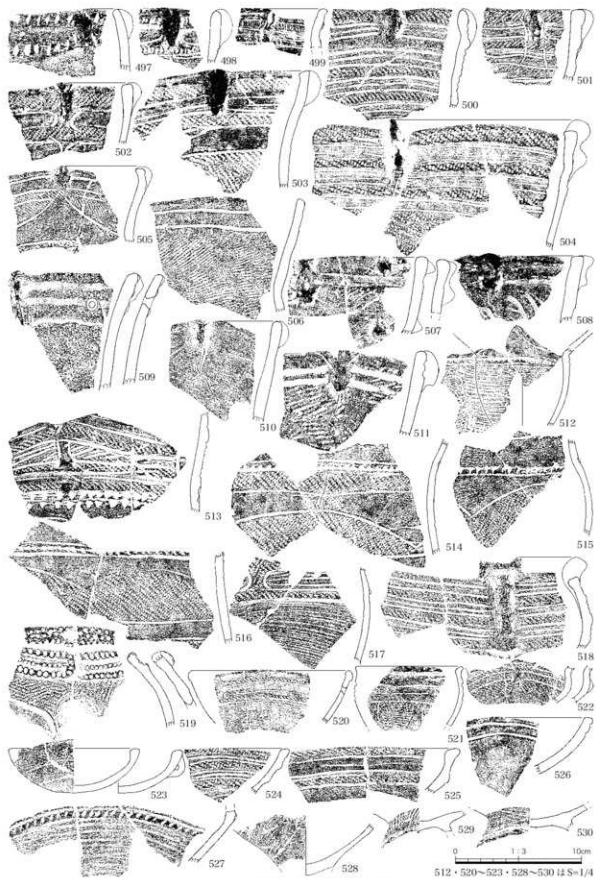
第91図 遺構外出土土器実測図(13)



第92図 遺構外出土土器実測図(14)



第93図 遺構外出土土器実測図(15)



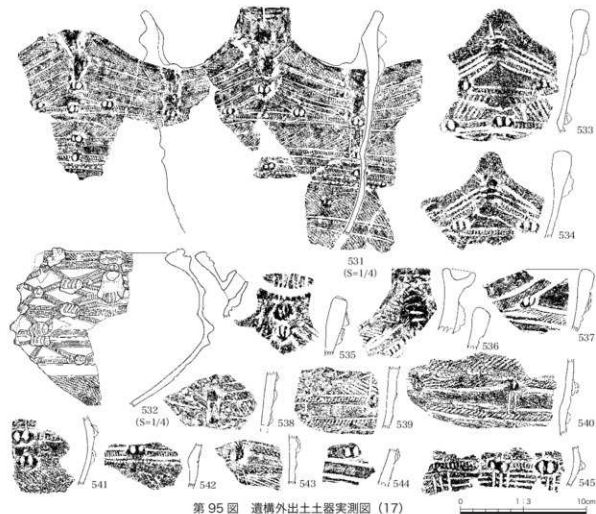
第94図 遺構外出土土器実測図(16)

に赤彩が残る。420は体部がソロバン玉形をなすもので、縦位線を伴う円形刺突を起点に向きの弧線文を施している。449～453は体部から底部の破片で、主に沈線とキザミで文様を描出する。428～448は鉢形土器である。復元個体から器形的には、体部から口縁部に屈曲しないで立ち上がるもの(431・433・434・435・436・437)、体部に括れを有し、口縁部が外傾するもの(432)、体部に丸みを有し、口縁部が内彎気味に立ち上がるもの(429)、体部上位でやや内傾し、頸部を形成するもの(428)がある。文様には区画沈線による縄文帯や無文帯、磨消縄文による曲線的な文様意匠、沈線で文様を描くものなど、深鉢と同様のモチーフが描かれる。また、口縁端部に連続刺突やキザミ目帯が巡るものもある。430は体部がソロバン玉状に屈曲する台付鉢と思われる。口縁端部にキザミ目列を巡らせ、体部には縦割の入る楕円形の貼瘤と中央が窪む円形の突起を交互に配し、その間に横位の沈線を施している。これら突起と貼瘤を起点に上向きと下向きの弧線文を対置させてメガネ状のモチーフを描出し、内部に縄文を充填する。454は台付鉢の脚部と思われる。

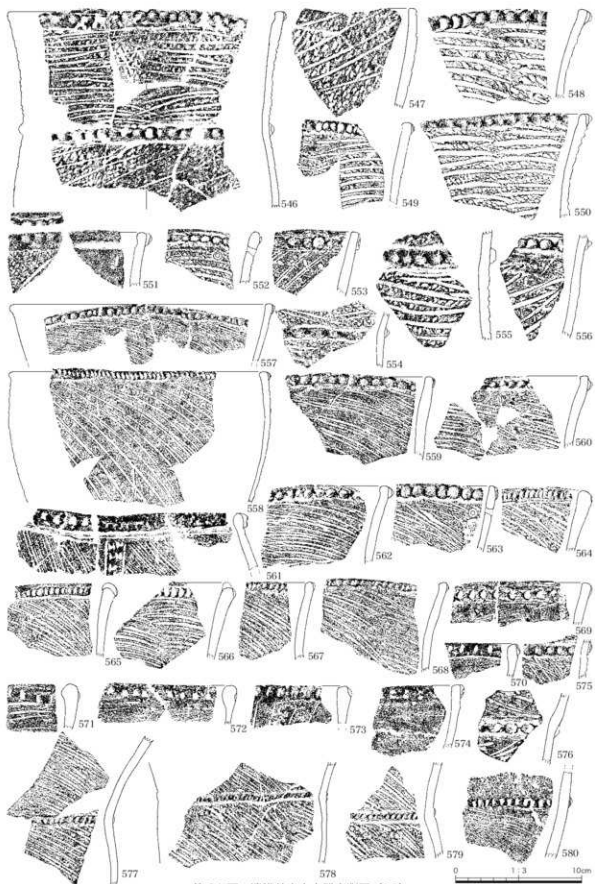
第14群 安行式土器(第92～95図、図版二二・二三)

口縁部に隆起帯縄文を配し所々に縦長の貼瘤が施されるもので、第92図には主に波状及び平口縁の深鉢形土器の復元個体を掲載した。概ね安行1式に比定される。深鉢形土器の文様構成は、口縁部隆起帯縄文、口頭部の弧線文(沈線間の刺突列による頸部区画線)、胴部の互連弧充填縄文を基本としている。

第93図469～483は縦位の貼瘤がみられる波状口縁の土器である。波頂部の突起には三角形をなす山形状のもの、ばち形ないしは扇状のものなどがあり、突起下に貫通孔が設けられる例もある。484～511は平

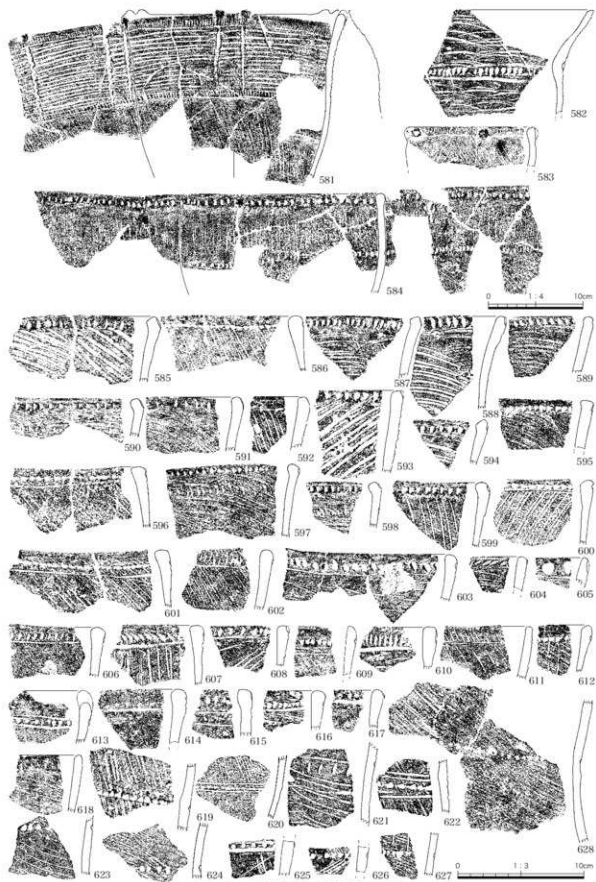


第95図 遺構外出土土器実測図(17)



第96図 遺構外出土土器実測図(18)

546・557・558・578はS=1/4



第97図 遺構外出土土器実測図(19)

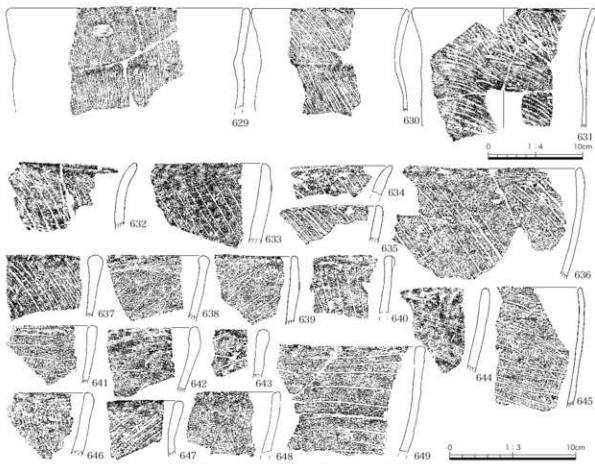
口縁深鉢形土器の破片であるが、504はやや小波状をなすもので、波底部に2山の貼瘤が施される。497～511は口縁部が外傾するもの、484～496は口縁が内傾する瓢形土器の形態をなすもので、口縁部の隆起帯縄文に伴い刺突列が巡るものが多い。512～517は深鉢形土器の体部破片、518・520～526は口縁が内傾する隆起帯縄文の鉢形土器で、518や523のように突起を有するものもある。519は注口土器で横走する隆起帯上にキザミを有し、その内部と口唇上に円形の刺突が施される。527～530は条線を地文とする台付鉢の体部で、527の屈曲部にはキザミの施された隆起帯が巡る。531～545は隆起帯上にキザミを有し、ブタ鼻状のものや縦位ないしは横位のキザミが施された貼瘤が一定間隔でみられるものである。概ね安行2式に比定され、器種は深鉢形土器と注口土器がある。531・533～537は波状口縁の深鉢形土器で、533・534・545は同一個体と思われる。波頂部の形態は、山形状のものとバチ形のものがある。文様構成は波頂部下の口頸部に三角形区画を有し、以下頸部区画線の間に矢羽根状の沈線や磨消帯などを配している。

第15群 後期（関東系）粗製土器（第96～98図、図版二三・二四）

後期中葉以降の所謂「粗線文系」とされる関東系の粗製土器で、器種は深鉢形土器に限られる。

546～556は縄文地に条線が施されるものである。条線の方向は、主に頸部が横方向、体部が斜方向に施されている。口縁部と頸部の屈曲部には、縄文及び条線が施された後に隆帯が張り付けられ、その上に押捺を施している。546・551の口縁部内面には横位の凹線が巡る。

557～580は条線を地文とするものである。口縁部の形態には外傾するものと内傾するものがあり、口縁部と頸部の屈曲部には、押捺・刺突・キザミの施された隆帯が張り付けられる。



第98図 遺構外出土土器実測図(20)

581～628は条線を地文とし、口縁端部や頸部の屈曲部に横位沈線や連続刺突・キザミを施すものである。口縁部が直立または外傾するものが多く、端部が肥厚するものとはほぼ同じ厚さで頸部に至るものがある。581は口縁部に2対6単位の突起を有する深鉢である。口縁直下と頸部の屈曲部にキザミ列を巡らせ、口頸部の区画帯を形成し、その内部に横位の条線を充填する。さらに突起下から沈線による縦位のスリットを施している。584は先端が細く鋭い工具で縦位の条線を施す。

629～649は口縁部及び頸部の屈曲部に装飾を持たず、条線のみが施されるものである。破片が多く器形復元可能なものは少ないが、口縁部の形状は直立または外傾するものが多い。また、端部が肥厚するものとはほぼ同じ厚さで頸部に至るものがある。条線の施文方向は、上述の縦位・横位・斜位に施されるものがあり、沈線の間隔が広いものと密なもの、また条線の種類も浅く幅の広い沈線や鋭い工具で施した比較的深く細い沈線を用いたものがある。629～631は頸部でやや括れ、外傾して口縁部に至る形状である。629・630は頸部外面の括れ部及び内面に丁寧な光沢のあるナデないしはミガキ調整が施されている。630の内面口縁端部には凹線が巡る。

第16群 東北系後期後半の土器

第1類 後期中葉の土器（第99～101図、図版二四）

本群は加曾利B式並行期の土器であるが、第13群と共通する要素が多いため、互いの土器が混在している部分があり、明確に区分するのは困難である。

第99～101図には主に深鉢形土器や鉢形土器の復元個体と口縁部から底部の各破片資料を掲載した。深鉢形土器の口縁部形状は波状口縁と平口縁がある。波状口縁のものは、大波状や小波状のものがあり、波頂部に突起がつくもの（653・671・677・681・686等）もみられる。器形的には残存する復元個体からの理解となるが、口頸部が内彎し頸部から胴部で括れ、胴部に膨らみを有する器形のものや波状口縁深鉢に多い。平口縁の土器は頸部の括れが弱く、口頸部が外傾する器形が主体であり、小突起が付くもの（656・658）もある。これら土器の文様には、口縁部直下に並行沈線と組み合う単列ないしは複列の刺突（キザミ目）列や縄文帯、無文帯が巡る。また、口頸部から胴部の区画文様帯は、口縁部と同様の施文がなされるものが多い。口頸部及び胴部文様帯には、沈線区画の磨消縄文による入組曲線文や弧状文、波状・S字状などのモチーフを描くもの、口縁部に縄文帯、胴部上半に無文帯をもつもの（654・655）、胴部に横位の平行沈線と縦位の蛇行沈線が施されるもの（653）、地文の縄文のみのもの（656）などがある。縄文には単節及び無節の斜行縄文のほか、異種原体を用いた同方向施文により羽状縄文を施す土器が多く、0段多条の原体が多用される。

第2類 後期後葉～末葉の土器（第102～105図、図版二四・二五）

本類は後期後葉～末葉の貼瘤を多用する、いわゆる新地式に属する土器群である。第102図721～730は主に沈線による区画内に条線で文様を施す深鉢形土器をまとめた。平口縁と波状口縁がある。口唇部の形態は角頭状と内削ぎ状のものがあり、突起が付されるものが多い。文様の特徴は、口縁部に平行して櫛歯状工具による条線文帯が巡るもの、無文帯が巡るものなどがあり、以下の文様帯内には条線を充填する。また、727のように口縁部や突起に沿って沈線を巡らせ、以下の頸部から胴部に横位や斜位の条線を施すものもある。突起の形状は肥厚する山形の大突起と瘤状の小突起がある。突起の上端や裏面には縦割スリットが入るものがあり、外面の突起下には瘤が付される例が多い。726は波頂部に欠損する深鉢形土器である。波底部には縦割の入る大型突起とその両脇に小型突起を配している。頸部には沈線による入組帯状文、胴部には横位の平行沈線を施し、括れ部から胴部上位には横位の条線を充填する。胴部中位の無文帯を挟んで下位には、縦位及び斜位の条線を充填する。口縁の大型突起下、頸部入組屈曲部、胴部横位条線帯に丸瘤が付される。

731～734は縦位・横位、クラック状の磨消帯が施される土器である。731は口縁部に最大径を有し、胴部に括れを持たず、底部に向かって窄まる器形の深鉢形土器である。口唇部に3個1対の上端に縦割の入る瘤状の突起を4単位配している。口縁直下に縄文帯を巡らせ、頸部には横位の磨消帯で区画し、更に内部を縦と横の磨消帯で分割しているが、幅が狭くなる部分やズレている部分がある。内部には羽状縄文を充填する。732～734は胴部にクラック状の磨消帯がみられる深鉢形土器である。732は頸部から胴部の括れ部に無文帯と縄文帯を配し、胴部にはクラック状の入組文が施される。

第103図には口縁部に突起を配すものうち、条線以外のものをまとめた。文様の特徴としては、口縁直下に並行して縄文帯(1～数条)が巡り、以下の頸部に無文帯や入組文などが施されるもの、また無文の突起などを掲載した。突起付の平口縁と波状口縁のほか、突起の付かない平口縁の土器もある。口縁部及び突起の形状は上述の条線充填土器とほぼ同様である。復元個体からみた深鉢の器形は、口縁部が外傾し胴部から頸部で括れ、胴部に膨らみを持つ形状である。735～737は口縁直下と括れ部に縄文帯を配し、頸部が無文部となる平口縁の土器である。口唇部には、735は上端に押捺が施された幅広の突起と小突起を交互に、737は縦割のある小突起を等間隔に配している。735・736の括れ部には貼瘤が付され、胴部には入組文が展開する。738は頸部に入組帯状文を描く例で突起下の縄文帯には縦割のある瘤が付される。739は突起付波状口縁の深鉢形土器である。口唇部には大きさの異なる突起を有しており、波頂部には大型突起とその両脇に上部縦割のある瘤状の小突起、また波底部には山形の中型突起が施される。突起下には丸瘤が付される。

第104図には主に沈線で文様を描く土器をまとめた。弧線連結文、格子目文、矢羽根状文などのほか、特徴的なものとして横位の平行沈線を縦位線で区切るもの(760・763・767～776・781)がある。

第105図には前面に貼瘤がみられる破片を掲載した。貼瘤の形状には、丸瘤や平瘤、横長や縦長、弧状、ボタン状のもの、円形の刺突のあるものなどがあり、他の種類の瘤と組み合わせて用いる例が多い。これらの貼瘤は、区画帯内や文様の起点、連結部に付されるのが一般的である。783は口頸部に弧線連結文が展開するものである。モチーフの連結部には2つの縦割が入る瘤が付される。784は区画文内に連続刺突を施すもので、口唇部に小型突起と口縁直下の横位刺突列中央に丸瘤が付される。785・788・798・802・804・807・808・810は縦長の瘤が見られるものである。785は頸部に連弧状の区画文を描くもので、弧線の連結部に縦割の入る縦長の瘤を配している。786は口頸部に横位線、胴部に格子状のモチーフを浅く雑な沈線で施している。787は無文地に2段の瘤列がみられるもので、内面の口縁部から体部上位に炭化物が、外面には煤が付着する。789は横長の瘤と丸瘤、803は三日月形の瘤と丸瘤を組み合わせている。795・796は同一個体の波状口縁深鉢形土器である。口縁直下の区画内には刺突列が巡り、波底部には外側に張り出す突起が付される。頸部には丸瘤を伴う弧線連結文が展開する。

第3類 その他の土器(第106図、図版二五)

後期中葉から後葉の鉢形土器・壺形土器・注口土器などをまとめる。殆どが破片であり、器形が窺えるものは少ない。820は底部に焼成前の穿孔がなされる筒状の土器で、破片を図上復元した。連続したキザミを施す3列の隆線を口頸部・胴部中位・胴部下位に巡らせ文様帯を区画する。区画内には同様の隆線(2列)により弧状の区画を施し、内部に羽状縄文を充填する。821は口頸部がやや内傾し、胴部が大きく膨らむ器形の壺形土器である。口縁部に無文部を有し、胴部は1段Lの縄文を横方向や斜方向(胴下半部は縦方向)に施した後、縦位の磨消帯を等間隔で施している。頸部には同原体の末端を押し付け、横方向に施文する。822は口縁部が長く直立する器形の壺形土器である。頸部の縄文帯上には縦割の入る2個1対の瘤を4単位配し、その間に円形の平瘤を施している。826は大きな瘤が付される無文の鉢形土器、823～825・827～

830・832・833の小型の器種は壺形土器もしくは注口土器と思われる。823の体部には4単位の瘤を配した後に横位の沈線を充填する。底部はやや上げ底気味である。828・830は注口土器で、ミガキが施された器面に円弧を基本とした文様を浅い沈線で描いている。830の体部側面には、縦割と2つの盲孔が施された瘤が付される。831は体部に平行沈線間を磨消した無文帯が巡る台付鉢で、口縁部から体部内面、脚台部内外面ともに横位のミガキが施される。836と844は同一個体の台付鉢である。口縁部には縦割の施された突起が配される。口縁部と体部下位には、沈線による横位区画内に斜位の沈線を充填し、矢羽根状のモチーフを施す。器面は内外面ともミガキが施され、突起下及び体部下位に豆瘤が付される。838～858は壺形土器ないしは注口土器の口頸部及び体部破片である。856は弧線文の連結部に縦割の施された瘤が付される。857・858はミズ腫状の隆沈線で弧線文を施すもので、857の隆沈線上には細かなキザミがみられる。

第17群 東北系粗製土器 (第107～109図、図版二五・二六)

櫛歯状工具による条線文が施された土器で出土数は多い。器種は口縁部が直立または内傾し、口頸部に最大径を持つ器形の平口深鉢形土器や鉢形土器に限られる。条線は6～8単位の細かな櫛歯状工具を単位としている。器面調整は、ケズリや粗いナデが施された無文地に施文するものが殆どであるが、860・861は地文の縄文にナデ整形を行った後に条線を施している。口縁部から条線文が描かれるもののほか、口縁部に沿って一単位の条線を巡らせ以下に文様を描くもの、また、これに加え連続した刺突や押捺が施されるものや突起が配されるものなどがある。体部に描かれる条線文は、蛇行線、弧線、斜線などを基本とするが、これらが方向を変えて組み合わせられるなど、幾何学的な文様を描くものも認められる。

第18群 晩期土器 (第110図884～903、図版二七)

晩期中葉の大洞C2式を主体に前葉の大洞BC式まで後葉の大洞A式までの土器が出土している。本遺跡で確認した住居跡の時期は概ね本群の範疇であるが、遺構内と同様に器形が何える遺存状態が良好なものではなく破片が殆どであり、また出土数も少ない。第110図884～902には主に精製・半精製土器を掲載した。器種としては、深鉢形土器・浅鉢・壺形土器・注口土器などがある。

884は三叉文を施すもので、第16群第2類土器の可能性もある。885～887・899は壺ないしは注口土器の体部破片。885・886は陽刻的な半櫛歯文が施されるもので大洞BC式に比定される。887は対向する弧線間に菱形の沈線を配している。899の外面には赤彩が残る。888・889は面取りした口唇部に装飾を持ち、体部に陽刻的な雲形文が施される大洞C1式の浅鉢である。890・893・891の深鉢形土器、892・894・895・898の浅鉢は平面的で崩れた雲形文が展開する大洞C2式に相当する。896は口縁部にA突起、897はB突起が配され、頸部には沈線による入り組み文が展開する深鉢ないしは壺で、大洞C2～A式に比定される。901～903は沈線や隆線、浮線文を施すもので、大洞A式段階のものであろう。901は有肩の深鉢と思われる破片を図上復元した。口縁部に橋状把手、頸部に無文部を有し、口縁部直下と頸部無文部を挟んだ屈曲部に菱形の浮線文が展開する。内面には口縁部に沿って沈線を巡らせ、把手部分は三叉状に挟まれる。901の胴部は擦痕文(条痕)、902は1段Rの縄を用いた襷糸文が施される。

第19群 後期～晩期の粗製土器

該当する型式名が特定できない後期から晩期の粗製土器をまとめた。これらの土器は、該期土器の主体をなしており、全体のおよそ8割を占めている。大きくは縄文が主文となるものと無文土器がある。器種は深鉢形土器・鉢形土器・壺形土器・台付土器・高坏形土器などがあり、大型の深鉢形土器が多くを占めている。

第1類 縄文が主文となるもの (第110図904～907・909～912、第111・112図、図版二五～二七)

904～907、910は網目状襷糸文が施されるものである。904は口縁部が内湾する器形の深鉢形土器で、

口縁部断面にキザ目列が施され、その下に2条の横位沈線を巡らせている。905・906は無文の折り返し口縁下端に押捺が加えられ、910は折り返し口縁上に施文される。911は捺糸文が施されるもので、折り返し口縁上及び体部に施文され、折り返し口縁下端には押捺を加えている。909は小型の鉢形土器で口縁部に連続刺突が加えられる。912は口縁部が短く外反する深鉢形土器である。口縁部に無文帯を有し、端部に2対4単位の突起を配している。以下の体部には2段RLの横位施文を施す。909・912とも内面に炭化物が付着する。これらの土器は、南奥を中心に分布する晩期大洞系の土器と考えられる。

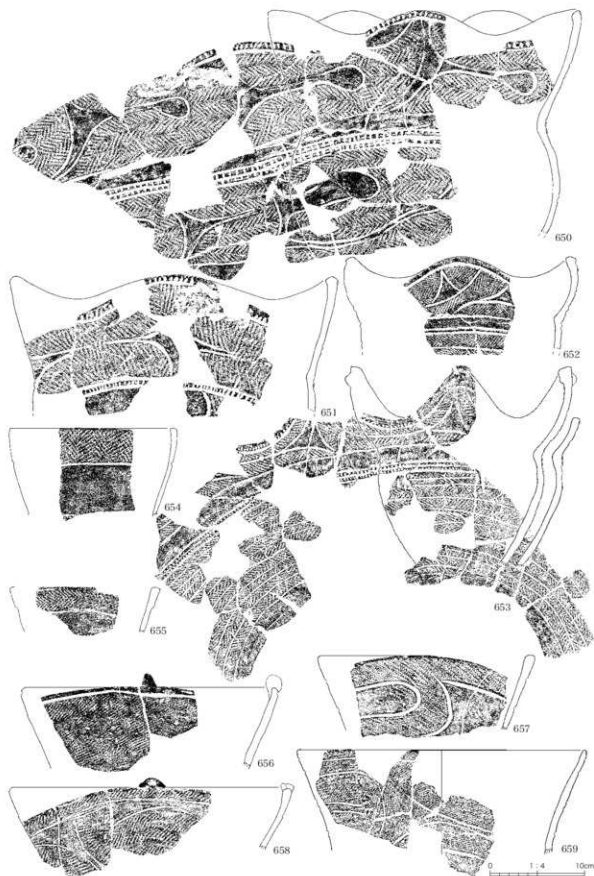
第111・112図には口縁部から縄文が施される深鉢形土器・鉢形土器などをまとめた。深鉢形土器は口縁部の形状が直立するもの、内彎するもの、外傾するものがある。いずれも口縁部付近が最大径となり、底部に向かって窄まる器形である。施文原体は単節縄文(0段多条)と無節縄文が用いられ、口縁部から体部上位では横方向施文を基本とするものが多く、これ以下では斜方向や横方向など多方向から施文するものも目立つ。また、0段多条の2段LRとRLの異種原体を用いた同方向施文による羽状縄文を施す土器も多い。913は破片であるが、口縁部から底部まで復元可能な土器である。器面はナデ調整の後、口縁部付近に1段Lの縄を横方向に浅く施文している。914・915・917・919・921・924・925・927は1段Lの横位施文。916・920・923は2段LRの縄を用い、横ないしは斜位に施文する。918は0段多条の2段LRの縄を横方向に施文する。920は堅く太い縄を用いている。926・928～931は異種原体を横方向に施文し羽状構成をとるものである。926は1段の縄文、928～931は0段多条の2段の縄文を用いている。932～937は鉢で口縁部が内彎するものが多い。932・933・936が1段Lの横位施文、体部がソロバン形をなす937は1段Rの縄を横ないしは斜位に施文する。934・935は異種原体を横方向に施文し羽状構成をとるものであるが、935は0段多条2段LRの縄文と単節2段RLの縄文を用い原体の種類を変えている。938は台付土器の底部付近の破片で、体部には1段Rの横位施文、脚台部の外面には矢羽根状の沈線が施される。本群に含めたが精製土器の可能性のある。これらの土器は、概ね晩期に伴う粗製土器と考えられる。

第2類 無文土器(第110図908、第113図、図版二七・二八)

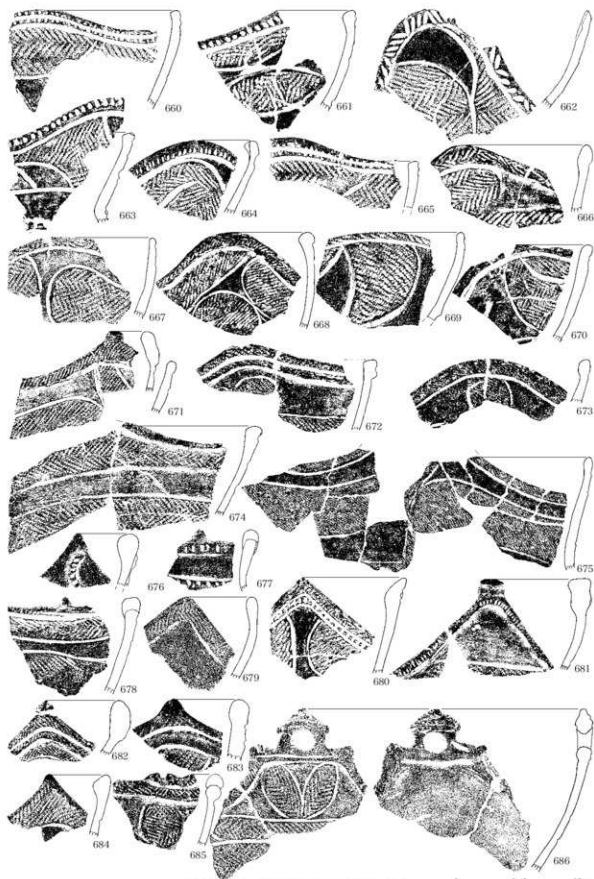
器種は深鉢形土器・鉢形土器・壺形土器・高坏形土器などがある。器面の調整はケズリ痕を残すもののみられるが、全体的にナデ整形が施されている。深鉢形土器は、口縁部が内傾気味の器形をなすものが多く、素口縁のほかに折り返し口縁のもの、端部に押捺の施されるものがある。943は口縁部に連続刺突を施し、その下に半截竹管による横位の沈線を巡らせている。以下、体部上半は横方向、下半は縦方向のナデが施される。945は内外面とも斜方向の粗いナデが施される。貫通する補修孔が1孔、内面に未貫通孔が1孔ある。947は広口口の壺形土器と思われる。鉢形土器は口縁部から体部が外傾する坏形状のもの(948・949・952・956)、内彎する碗形状のもの(952・953・954・957・958)がある。第110図908は口縁部に山形の突起を配し、内面に稜を持つ。961は台付土器の底部、962は高坏形土器である。これら小型品には光沢のある丁寧なナデ整形が施されているものが多くみられる。

第16群 底部資料(第114・115図)

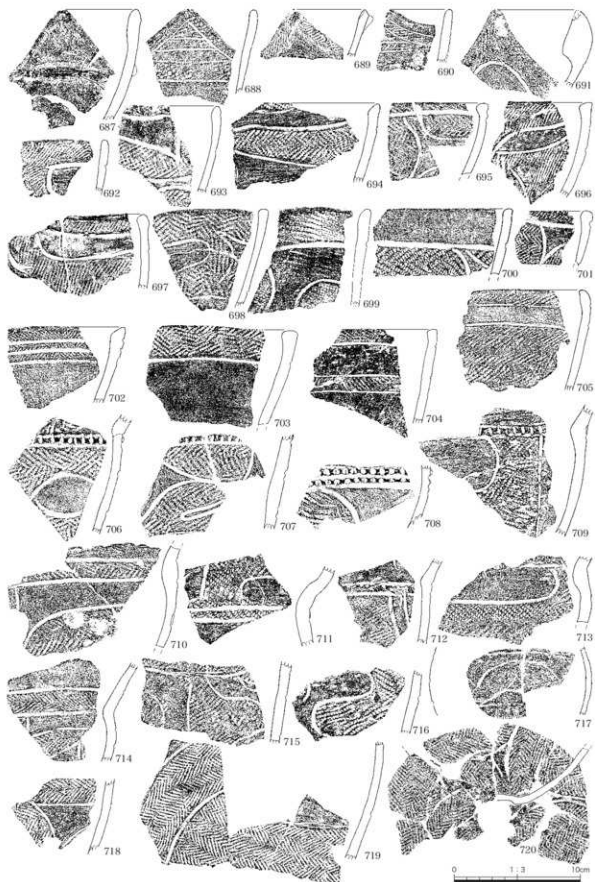
後期から晩期に属する底部資料を一括した。精製と粗製がある。平底のものは、底面に痕跡があるものを掲載した。963～1023は網代痕、1024～1041は木葉痕が認められるもので、主に深鉢形土器の底部である。底面に痕跡がないものは掲載していないが平坦なものが殆どで、ナデやケズリによって整形される。小型の土器には上げ底気味のものもみられる。1042～1065は台付土器の底部を一括した。外面は無文のものが多く、有文のものは曲線的な磨消縄文や入組文、連続刺突文、沈線文などがある。



第99図 遺構外出土土器実測図(21)

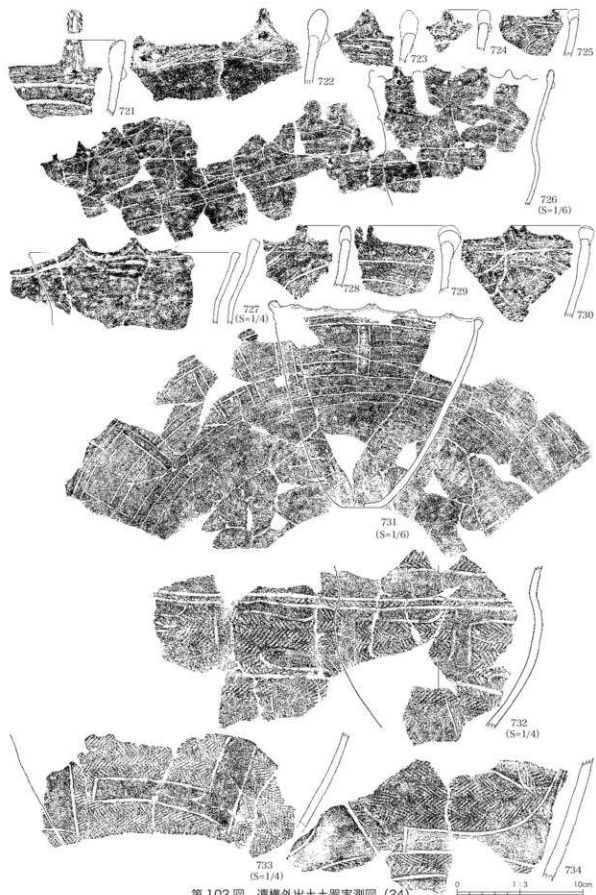


第100図 遺構外出土土器実測図(22)

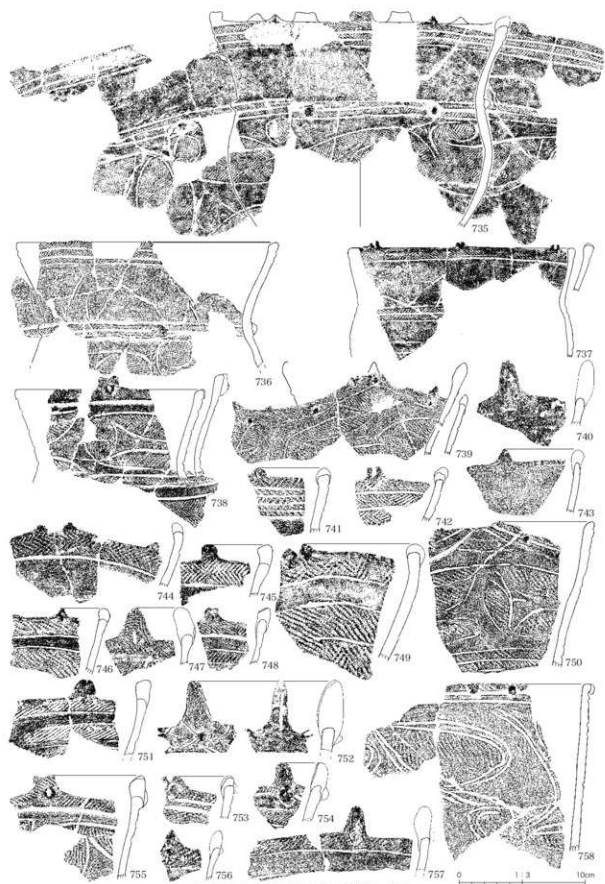


第101図 遺構外出土土器実測図(23)

717・720はS=1/4

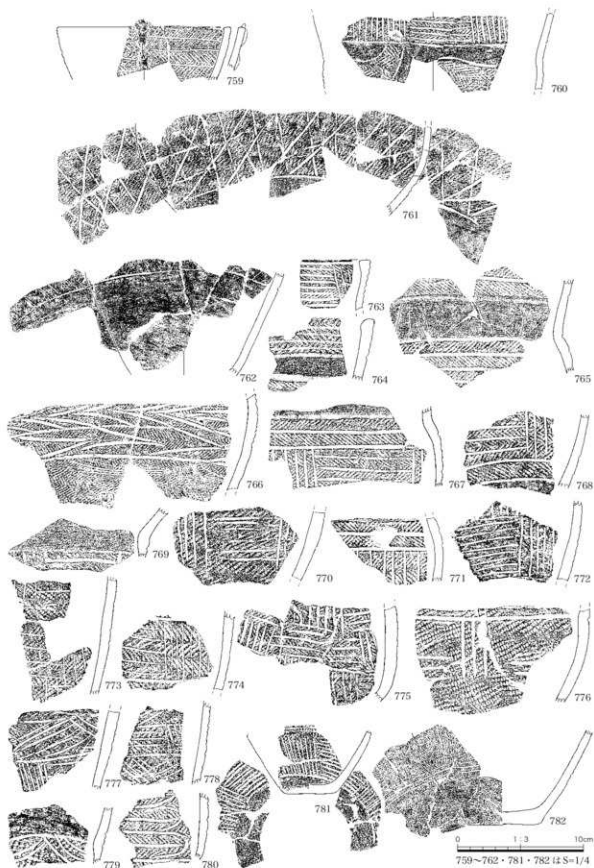


第102図 遺構外出土土器実測図(24)



第103図 遺構外出土土器実測図(25)

735~739はS=1/4

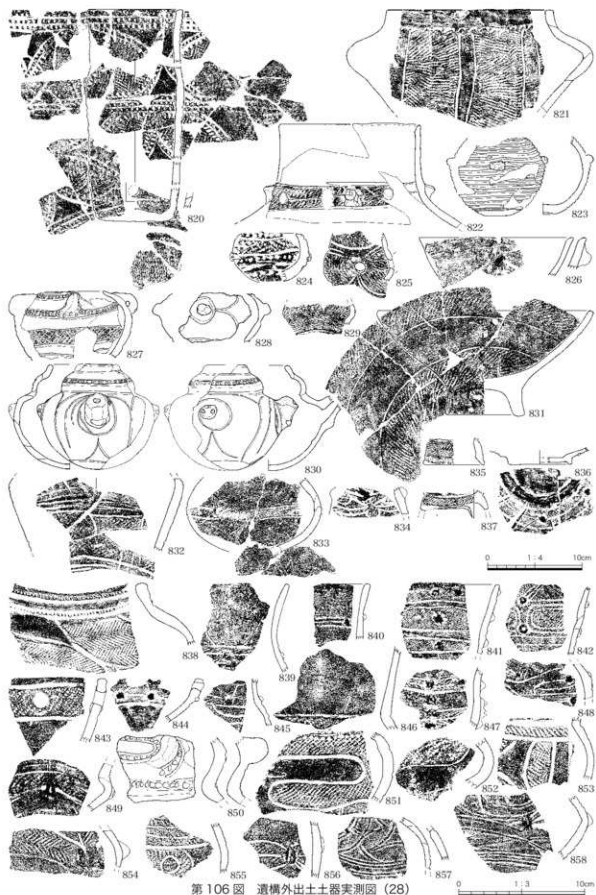


第104図 遺構外出土土器実測図(26)

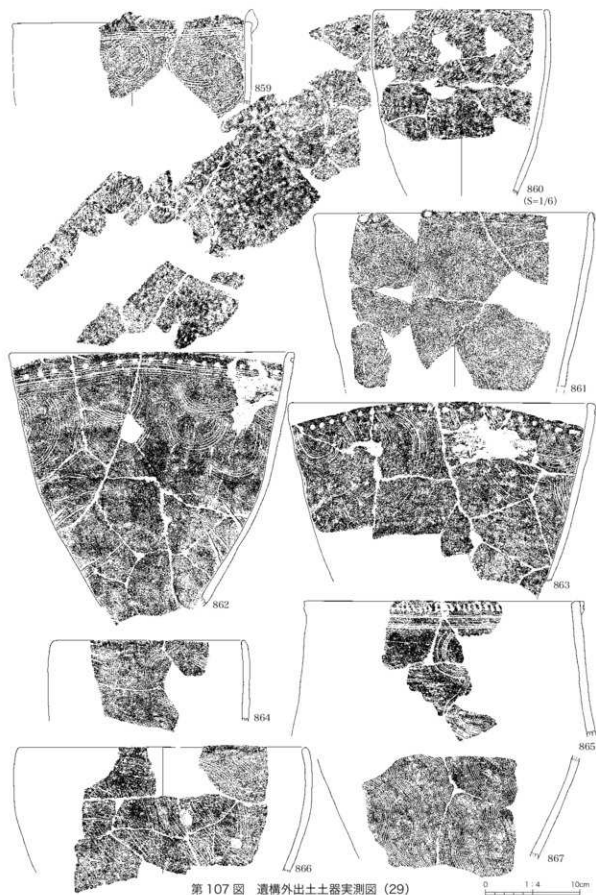


第105図 遺構外出土土器実測図(27)

783~790はS=1/4



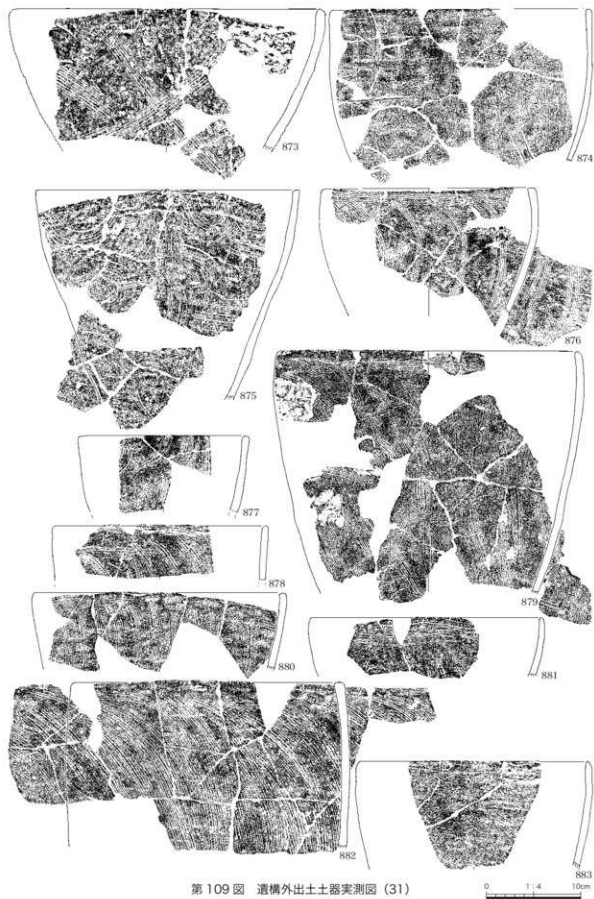
第106図 遺構外出土土器実測図(28)



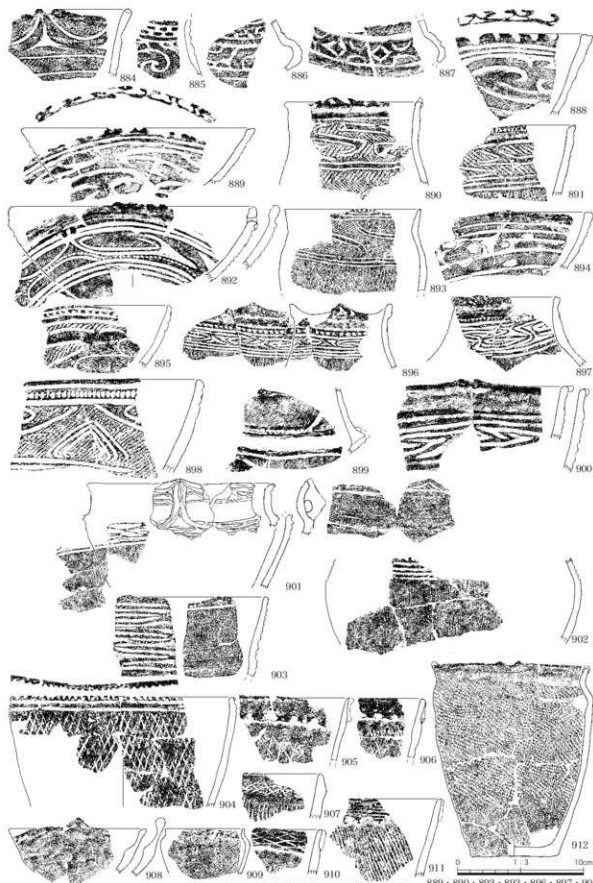
第107図 遺構外出土土器実測図(29)



第108図 遺構外出土土器実測図(30)

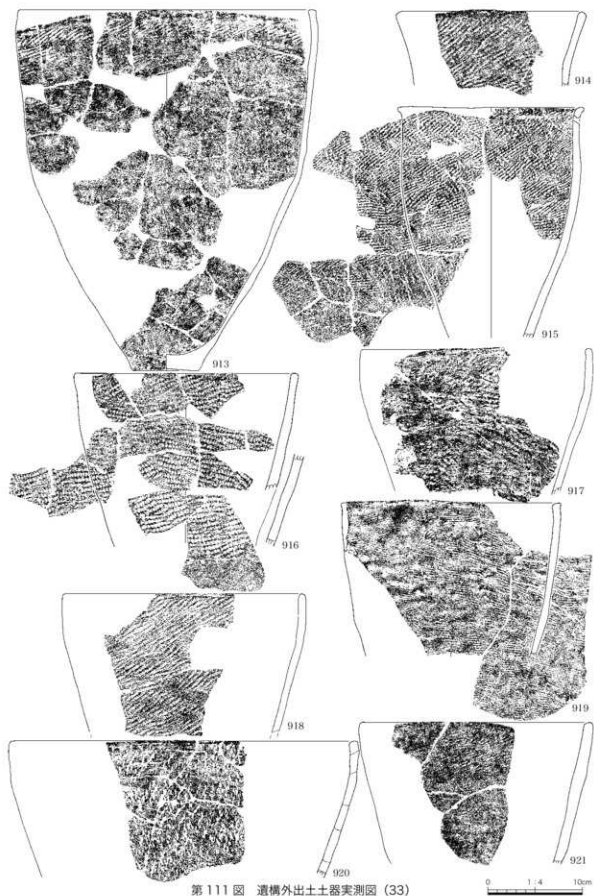


第109図 遺構外出土器実測図(31)

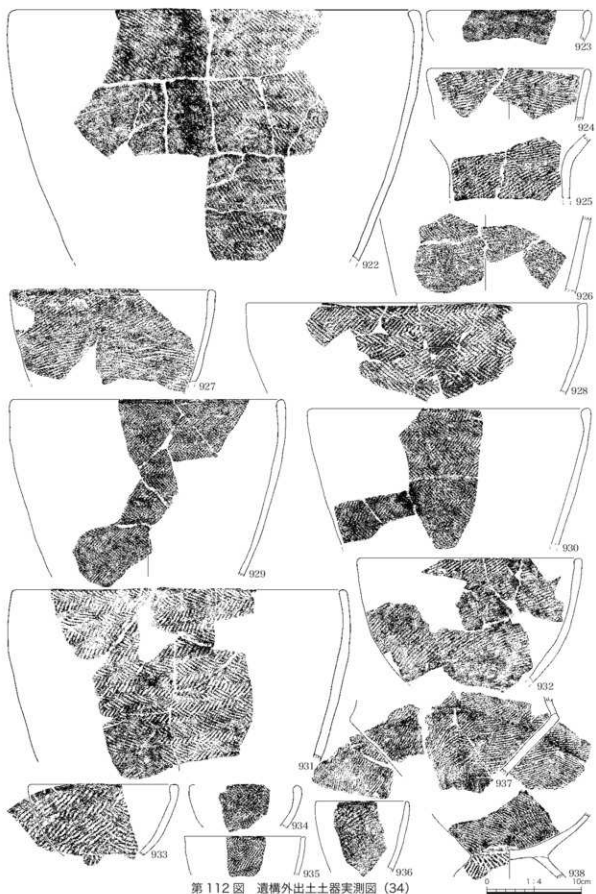


第110図 遺構外出土土器実測図(32)

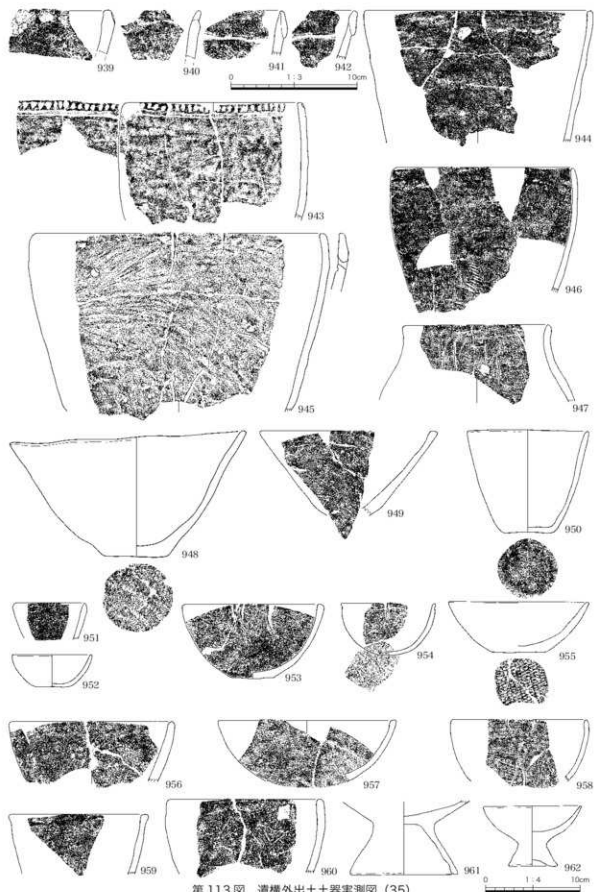
889・890・892・893・896・897・901
902・904・908・909・912はS=1/4



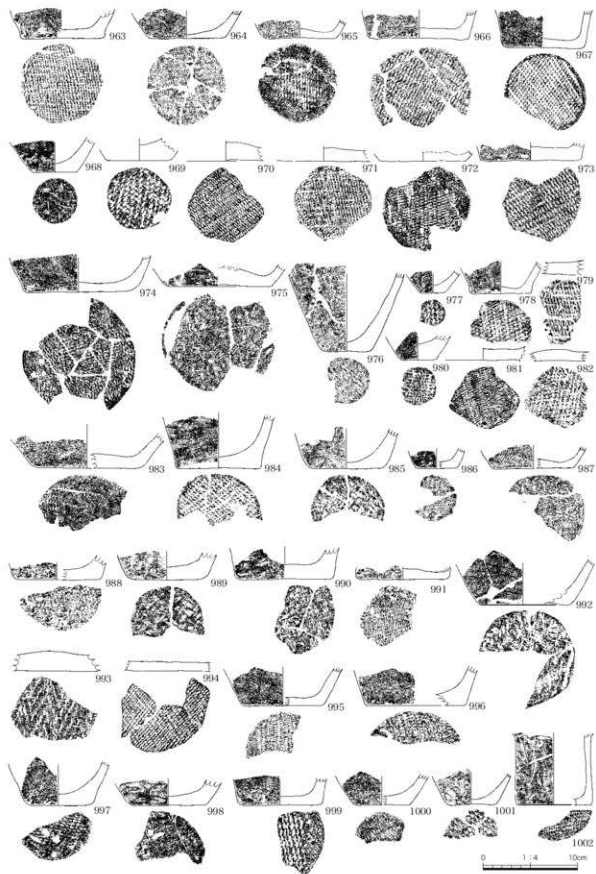
第111図 遺構外出土土器実測図(33)



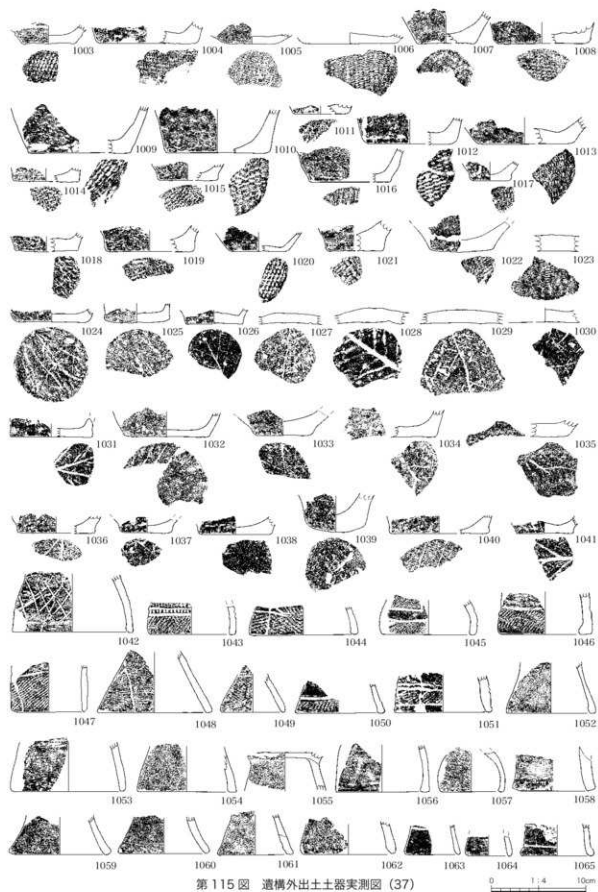
第112図 遺構外出土実測図(34)



第113図 遺構外出土土器実測図(35)



第114図 遺構外出土土器実測図(36)



第115図 遺構外出土土器実測図(37)

(2) 土製品

ここでは、遺構外として取り扱った土器以外の土製品について記す。出土した土製品には、土偶、有孔円盤、蓋形土製品、土鍾、土版、土製耳飾り、土製円盤などがある。また、注口土器や釣手土器の一部分、ミニチュア土器についてもここで扱うこととした。計測表については、遺構出土のものと同合わせて掲載する。

土偶 (第116図1～7、図版二八)

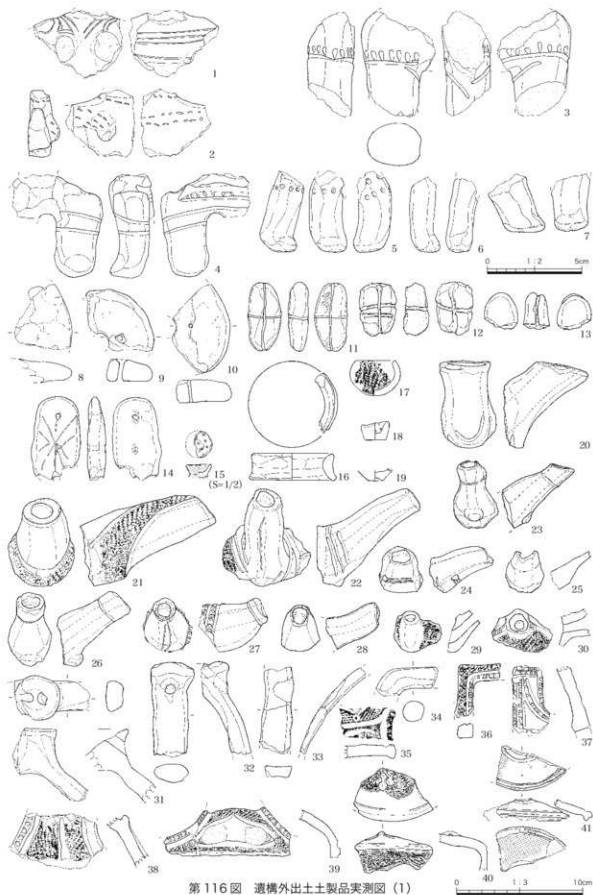
遺構内から2点、遺構外から7点の合計9点が出土した。遺構外のもの、H13(a)及びH15(a)地区の遺物包含層内から散在して出土したもので、意図的に埋納されたものは認められない。完存するものではなく、部位としては胸部2点、脚部5点で全て中実土偶の破片である。脚部はいずれも右足のみが出土している。1は胸部の破片で左肩部と両乳房を欠損する。文様は沈線で表現されており、表面の首下にはV字状、肩部には弧状、肩部裏面には横位の平行沈線が施される。2は胸部の右半部が遺存するもので、表裏面ともに細かなキザミにより文様を描出する。3の脚部上端は横位の沈線に沿って角状の刺突文が巡り、股の内側にはV字状の沈線が施される。4は胴部が括れて腰部が大きく張り出す形状をなし、端部に三叉文を伴う腰部裏面の沈線間には細かなキザミが施される。脚部上位には平行沈線が巡り、先端部にはつま先が備わる。5・6・7は右脚部片で、円柱状の粘土を内側に彎曲させてつま先を貼り付けている。5は上端に円形の刺突が施される。

有孔円盤・蓋形土製品・土鍾・土版・土製耳飾り (第116図8～16・40・41、図版二八)

8～10は表面にナデ整形が施された大型の有孔土製円盤で、図示したものを含め遺構外から4点出土している。いずれも約1/4が遺存しており、復元径が約6cmほどの円形になるものと思われる。9・10は同形態で中心の大きな孔を取り巻くように小さな孔が穿たれる。40・41は蓋形土製品である。復元径は9cm前後で約1/5が遺存する。40は外面に付された橋状の小把手を起点に弧状の区画を配し、その内部に縄文を充填する。41は中央に大きな孔を有するもので、外面端部には沈線が巡り内面にはかえりが備わる。器面には丁寧なミガキ整形がなされた後、下地に漆を施しその上に赤彩がなされている。土鍾は鍾具全体として、石鍾41点に対し遺構内外を合わせ4点と非常に少ない。11は短軸と長軸を十字に浅い沈線が一周するもの、12は土器の底部破片を転用したもので、短軸と長軸を十字に浅い沈線が一周するが表面のみ二重となる。13は側面と短軸に沈線を巡らせるもので、短軸の沈線部分から欠損する。土版は遺構内3点、遺構外1点の合計4点が出土した。14は中央に引かれた縦線の両端に円孔が、中央には縦長の孔が穿たれる。表面は中央の孔を中心に上下・左右にV字状の沈線を施したモチーフが描かれる。土製の耳飾りは遺構の内外から都合5点の出土がある。形態的には、中央に穿孔があり文様裝飾が施されるもの2点(SI-380-52・53)、内側に稜を有する滑車形が2点(SI-403-292、遺構外16)、小型で鼓状のもの1点(遺構外15)である。15は上下とも断面が彎曲する極めて小型の耳栓である。薄い作りで、内外面に赤彩が施される。16は約1/4が残る耳環で、内外面ともにナデ整形が施されるが器面調整は粗い。

ミニチュア土器・注口土器・釣手土器 (第116図17～39)

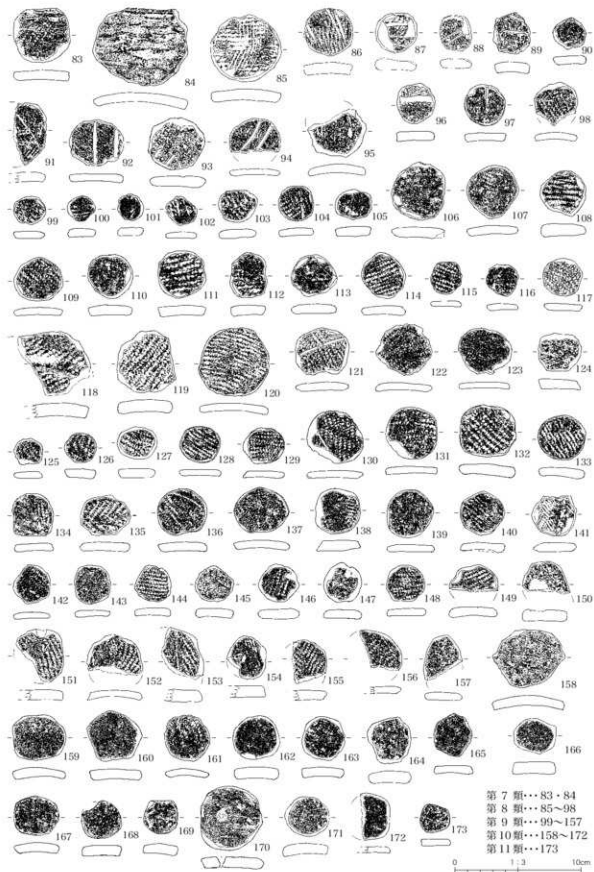
遺構及び包含層出土で取り扱った以外のものを集めて図示した。時期的には概ね縄文時代後期後半のものと思われる。17～19は手握ねによって形成されたミニチュア土器である。17は半球状で外面に縄文が施され、18の内面には赤彩が残る。20～30は注口土器の注口部分をまとめた。注口の作りは粘土紐を巻き上げたものを主としている。外面は丁寧なナデ及びミガキが施されており、内面は指ないしは工具による縦方向のナデ整形のものが大型品に多くみられ、小型のものは棒状工具の回転により形を整えている。接合部においては、体部と綺麗に剥離する20・21・23～28があり、体部に直接貼り付けたものと理解できる。これに対し、22・29・30は体部に注口を差し込み接合部を粘土で補強したため、体部を伴う欠損状態となる。形態的には



第116図 遺構外出土製品実測図(1)



第117図 遺構外出土土製品実測図(2)



第118図 遺構外出土土製品実測図(3)

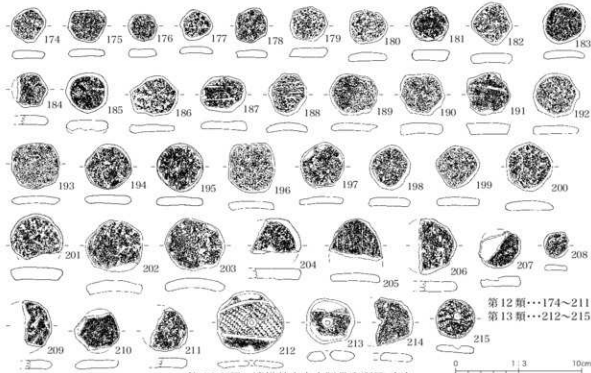
根本から口先へ直線的に延びるものが殆どであるが、22のように先端でやや下向きになるものもある。また、23・26・27は先端付近が括れる形状である。裝飾は沈線と貼瘤があり、根本に貼瘤がなされるものが5点ある。20の根本にはU字状の隆帯とそれに沿う沈線が施される。21は沈線区画内に縄文を充填する。24は小さな2つの貼瘤間に沈線を施す。27は付け根部を巡る沈線間にキザミが施される。25は体部との接合面に修復に使用されたと思われるアスファルトの付着が認められる。31～38は鈎手土器の鈎手部破片である。31・32は頂部から斜方向に孔が穿たれる。37～39は沈線と刺突で文様を描出するものである。

土製円盤 (第117～119図)

土器片を転用して円形に作り出されたもので、遺構内から20点、遺構外から321点の合計341点が出土している。遺構外ではこのうちの215点を図示した。分類については、素材として使用された土器の時期や地文などを重視し、以下の13類に大別した。なお、() 内の数は分類中における出土点数を表している。

使用される土器片の時期については、縄文時代早期の条痕文系土器が1点認められ最も古い特徴を示すが、後期後葉のものが多いと思われる。土器の部位は、板状となる胴部破片が殆どであり、底部(底面)破片は確認できなかった。また、口縁部破片を用いたものは、口唇部に調整加工を加えずそのまま残す傾向があり、特に第2類に多く認められた。周縁部の調整加工は、打ち欠きによって形状を整えるものが全体の半数以上を占めるほか、打ち欠きに加え一部に研磨が施されるもの、研磨が全周するものがある。形状は、円形や楕円形を主体とし、方形や不整形をなすものもある。口縁部片を用いるものは、口縁を残して他の三面に調整を加えるため、方形を基調とした形状となるものが多い。

- | | | |
|--------------------------|--------------------------|-------------------------|
| 第1類：加曾利B式～曾谷式土器 (5点) | 第2類：安行1式精製土器 (26点) | 第3類：安行式系粗製土器 (4点) |
| 第4類：新地式精製土器 (2点) | 第5類：新地式粗製土器 (16点) | 第6類：後期後葉の精製土器 (37点) |
| 第7類：後期後葉前後の粗製土器 (5点) | 第8類：地文以外の文様がみられる破片 (18点) | |
| 第9類：縄文のみがみられる破片 (94点) | 第10類：無文土器 (45点) | 第11類：研磨のため文様が不明なもの (1点) |
| 第12類：摩耗のため文様が不明なもの (83点) | 第13類：中央に孔を有するもの (5点) | |



第119図 遺構外出土土製品実測図(4)

第4表 土製品計測表

(1) 土偶										() : 残存個
番号	(残存) 部位	長軸 (cm)	短軸 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	押込	出土位置	備考		
SI-379-254	(右足を欠く) 腹部以下	(6.3)	(5.0)	2.7	(67.7)	第28区	覆土	胎土小確多い、腰部彫形文をナーフ		
SI-395-150	右足根部	(2.7)	(2.4)	2.3	(13.6)	第41区	〃	表面ナデ、正面付け根に横位の刺突		
遺構外1	胸部	(3.5)	(4.6)	1.8	(23.1)	第116区	H13(a)区	表面斜部弧状沈線、表面横平行沈線		
2	胸右半部	(3.4)	(3.6)	1.6	(15.4)	〃	H15(a)区	表表面とも刺突文によって文様縁出		
3	右足	(5.8)	(4.0)	2.3	(41.6)	〃	H13(a)区	上端横位沈線に添って角状の刺突文		
4	腰右半部～右足	(5.6)	(4.6)	(2.2)	(34.1)	〃	H15(a)区	腰部裏面に沈線と刺突による文様		
5	右足	(4.3)	(2.0)	(1.8)	(14.8)	〃	H13(a)区	上位に円形の刺突文が巡る		
6	右足	(3.9)	(1.5)	(1.5)	(7.6)	〃	H15(a)区	彎曲する円柱状の粘土で脚部を表現		
7	右足	(2.9)	(2.0)	(1.8)	(10.8)	〃	H13(a)区	彎曲する円柱状の粘土で脚部を表現		

(2) その他の土製品

番号	種別	長軸 (cm)	短軸 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	押込	出土位置	備考	
SI-104-220	土版	6.3	3.3	0.7	17.2	第15区	覆土	上下の貫通孔に胎状の残存痕	
221	土版	(4.7)	3.5	0.9	(18.2)	〃	〃	下端の貫通孔より欠損、表面無彫文	
SI-379-259	土罐	4.0	2.5	1.5	13.2	第28区	〃	長軸を沈線が一週し、中央に円孔が貫通	
SI-380-52	耳環	(3.7)	(2.4)	(1.0)	(4.5)	第33区	〃	中央穿孔、沈線と刺突で彫刻的モチーフを描出	
53	耳環	(3.7)	(1.2)	1.2	(3.1)	〃	〃	中央穿孔、沈線で渦巻文モチーフを描出	
SI-403-292	耳環	(3.7)	(1.2)	2.1	(8.6)	第50区	〃	1/4 残存、帯車形で内面に横をもつ、表面ナデ	
293	土版	7.6	3.9	1.1	32.8	〃	〃	縦・横曲線モチーフ、土端1、下端2穿孔	
遺構外8	有孔円盤	(5.1)	(4.6)	(1.6)	(30.7)	第116区	H13(a)区	約1/4が残る、表面はナデ整形	
9	有孔円盤	(5.9)	(4.7)	1.9	(41.6)	〃	H11(a)区	約1/4が残る、中心に大きな孔、周囲に小孔	
10	有孔円盤	(6.9)	(4.5)	(1.8)	(51.8)	〃	H13(a)区	約1/4が残る、中心に大きな孔、周囲に小孔	
11	土罐	5.4	2.7	1.7	25.1	〃	H15(a)区	短軸と長軸を浅い溝が十字に巡る、表面縦文	
12	土罐	4.1	2.9	2.0	22.1	〃	H15(a)区	土割片形用、短軸と長軸を浅い溝が十字に巡る	
13	土罐	(2.9)	2.5	(1.9)	(12.7)	〃	H13(a)区	1/2欠損、側面に短軸と長軸を巡らす	
14	土版	(6.6)	3.7	1.3	(35.0)	〃	H19区	長軸の中心に3孔、沈線によるV字状モチーフ	
15	耳栓	1.4	(1.0)	(0.7)	(0.6)	〃	H13(a)区	小型で鼓状の耳飾り、内外面に赤彩	
16	耳環	(4.4)	(1.4)	2.2	(10.9)	〃	H19区	1/4 残存、帯車形で内面に横をもつ、表面ナデ	
40	蓋形土製品	2.8	(3.2)	5.0	(7.6)	〃	表土中	中心に大きな孔、外面には胎状の小把手を配す	
41	蓋形土製品	1.7	2.5	0.6	6.9	〃	H19区	内面端部にかえり、内外面に漆及び赤彩残る	

(3) 土製円盤

番号	分類	縦軸 (cm)	横軸 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	部位	押込	出土位置	備考	
SI-104-222	9 類	2.7	2.8	0.6	5.3	胴部	第15区	覆土	周縁打ち欠き	
SI-379-255	10 類	4.0	4.6	0.6	13.3	胴部	第28区	〃	周縁打ち欠き	
256	10 類	2.8	2.6	0.7	5.3	胴部	〃	〃	周縁打ち欠き	
257	9 類	4.1	4.7	(0.8)	14.3	胴部	〃	〃	周縁打ち欠き	
258	10 類	(4.5)	(4.8)	0.7	(17.0)	胴部	〃	〃	周縁打ち欠き、一部に研磨痕	
SI-380-48	12 類	2.7	3.0	0.7	6.8	胴部	第33区	〃	周縁打ち欠き、一部に研磨痕	
49	12 類	(2.0)	3.5	0.8	(5.6)	胴部	〃	〃	周縁に研磨痕、一部打ち欠き残る	
50	8 類	(2.8)	(2.3)	0.6	(4.6)	胴部	〃	〃	研磨痕が全周する	
51	12 類	(2.6)	(1.4)	0.6	(2.6)	胴部	〃	〃	研磨痕が全周する	
SI-381-71	9 類	2.6	3.1	1.0	8.5	胴部	第36区	〃	研磨痕が全周する	
72	8 類	4.1	(4.4)	0.6	(13.4)	胴部	〃	〃	周縁打ち欠き	
73	8 類	(3.1)	(2.4)	0.7	(6.0)	胴部	〃	〃	周縁打ち欠き	
SI-395-151	10 類	2.3	2.4	0.8	4.6	胴部	第41区	〃	研磨痕が全周する	
SI-403-291	10 類	(3.2)	3.2	0.9	(8.1)	胴部	第50区	〃	周縁打ち欠き	
SI-404-145	2 類	3.5	3.9	0.9	13.6	口縁部	第58区	〃	周縁打ち欠き	
146	13 類	2.4	2.0	(0.4)	2.0	胴部	〃	〃	周縁打ち欠き(摩滅) 中央に補修孔	
遺構外1	1 類	3.7	4.3	1.0	20.0	口縁部	第117区	H15(a)区	研磨痕が全周する	
2	1 類	4.5	5.0	1.0	23.0	胴部	〃	H13(a)区	周縁打ち欠き、一部に研磨痕	
3	1 類	4.3	3.9	0.7	14.8	胴部	〃	H13(a)区	周縁打ち欠き、中央に補修孔	
4	1 類	4.4	4.7	1.0	28.0	口縁部	〃	H13(a)区	周縁打ち欠き	
5	1 類	4.5	4.7	0.9	27.3	胴部	〃	H13(a)区	周縁打ち欠き	
6	2 類	5.2	5.2	1.7(1.3)	32.9	口縁部	〃	H15(a)区	周縁打ち欠き、一部に研磨痕	
7	2 類	4.0	4.6	0.7(1.5)	24.8	口縁部	〃	H15(a)区	周縁打ち欠き、一部に研磨痕	
8	2 類	4.6	5.2	0.8	26.0	口縁部	〃	H15(a)区	周縁打ち欠き	
9	2 類	4.2	4.7	0.8(1.5)	20.0	胴部	〃	H15(a)区	研磨痕が全周する、補修孔	
10	2 類	4.0	4.7	0.7	19.7	胴部	〃	H15(a)区	研磨痕が全周する	
11	2 類	4.1	4.2	0.5(1.0)	15.3	口縁部	〃	H15(a)区	周縁打ち欠き、一部に研磨痕	
12	2 類	3.5	3.6	0.7	9.4	胴部	〃	H15(a)区	研磨痕が全周する	
13	2 類	3.4	3.7	0.5	10.1	胴部	〃	H15(a)区	周縁打ち欠き	

第4節 縄文時代の遺構と遺物

14	2期	3.5	3.4	1.8(1.5)	(14.4)	口縁部	第117図	H15(a)区	研磨痕が全周する
15	2期	3.3	3.5	0.6	10.4	口縁部	〃	H15(a)区	周縁打ち欠き、一部に研磨痕
16	2期	5.4	5.4	0.7(1.7)	35.4	口縁部	〃	H13(a)区	周縁打ち欠き
17	2期	5.6	6.5	0.7(1.5)	44.3	口縁部	〃	H15(a)区	周縁打ち欠き
18	2期	5.6	4.8	0.9(1.8)	29.1	胴部	〃	H13(a)区	周縁打ち欠き、一部に研磨痕
19	2期	3.0	3.0	0.8	10.6	胴部	〃	表土中	周縁に研磨痕、一部打ち欠き残る
20	2期	3.1	3.1	0.5(1.0)	7.1	胴部	〃	H11(a)区	周縁打ち欠き
21	2期	2.6	3.1	0.5	5.8	胴部	〃	H15(a)区	周縁打ち欠き
22	2期	3.6	3.9	0.8	18.3	口縁部	〃	H13(a)区	周縁打ち欠き
23	2期	3.6	4.0	0.4	10.8	胴部	〃	H13(a)区	周縁打ち欠き、一部に研磨痕
24	2期	3.8	3.9	0.4	7.5	胴部	〃	H13(a)区	周縁打ち欠き
25	2期	4.1	4.8	0.7	18.9	胴部	〃	H13(a)区	周縁打ち欠き、一部に研磨痕
26	2期	3.5	3.5	0.6	11.3	胴部	〃	H13(a)区	研磨痕が全周する
27	2期	4.1	4.8	0.7(1.8)	29.9	口縁部	〃	H13(a)区	周縁打ち欠き、一部に研磨痕
28	2期	3.5	4.7	1.0	18.8	口縁部	〃	H13(a)区	周縁打ち欠き
29	2期	3.5	4.4	1.1(1.8)	25.7	口縁部	〃	H13(a)区	周縁打ち欠き、一部に研磨痕
30	2期	3.4	3.8	0.8(1.3)	14.2	口縁部	〃	H15(b)区	周縁打ち欠き
31	3期	3.0	2.9	0.7	8.3	口縁部	〃	H15(a)区	周縁打ち欠き
32	3期	3.1	3.6	0.5	8.2	胴部	〃	H15(a)区	周縁打ち欠き
33	3期	2.9	3.5	0.9	11.0	口縁部	〃	H15(a)区	周縁打ち欠き
34	3期	5.0	5.4	0.7	22.2	胴部	〃	H13(a)区	周縁打ち欠き、一部に研磨痕
35	4期	5.5	5.9	0.6(0.8)	21.6	胴部	〃	H15(a)区	周縁打ち欠き、一部に研磨痕
36	4期	3.4	3.3	0.7	9.8	口縁部	〃	H13(a)区	周縁打ち欠き、一部に研磨痕
37	5期	4.6	4.8	0.7	17.0	口縁部	〃	H15(a)区	周縁打ち欠き
38	5期	4.0	4.2	1.0	19.4	口縁部	〃	H15(a)区	周縁打ち欠き
39	5期	3.0	2.7	0.6	5.4	胴部	〃	H15(a)区	研磨痕が全周する
40	5期	2.5	3.2	0.5	5.8	口縁部	〃	H15(a)区	周縁打ち欠き
41	5期	2.5	2.8	0.6	4.4	胴部	〃	H15(a)区	周縁打ち欠き
42	5期	3.2	3.3	0.7	8.9	胴部	〃	H13(a)区	研磨痕が全周する
43	5期	3.2	3.6	0.8	10.1	胴部	〃	H13(a)区	周縁打ち欠き
44	5期	3.6	3.6	0.9	13.2	胴部	〃	H13(a)区	周縁打ち欠き
45	5期	3.4	3.3	0.9	10.9	胴部	〃	表土中	周縁に研磨痕、一部打ち欠き残る
46	5期	3.3	3.4	0.8	9.7	胴部	〃	H15(b)区	周縁打ち欠き
47	5期	4.0	3.6	0.6	10.6	胴部	〃	H13(a)区	周縁に研磨痕、一部打ち欠き残る
48	5期	3.6	4.1	0.8	12.7	胴部	〃	H13(a)区	周縁打ち欠き、一部に研磨痕
49	5期	4.8	4.6	0.8	20.7	胴部	〃	H13(a)区	周縁打ち欠き
50	5期	3.0	3.1	0.9	9.4	胴部	〃	表土中	研磨痕が全周する
51	6期	3.5	3.9	0.7	12.3	胴部	〃	H15(a)区	周縁打ち欠き
52	6期	4.3	4.3	0.7	13.8	胴部	〃	H15(a)区	周縁に研磨痕、一部打ち欠き残る
53	6期	3.8	5.0	0.7	15.2	胴部	〃	H15(a)区	周縁打ち欠き
54	6期	3.4	3.9	0.8	12.2	口縁部	〃	H15(a)区	周縁打ち欠き
55	6期	3.0	3.4	(0.7)	(6.7)	胴部	〃	H15(a)区	周縁打ち欠き
56	6期	3.1	3.1	0.5	6.1	胴部	〃	H15(a)区	周縁打ち欠き
57	6期	2.3	2.6	0.6	4.5	胴部	〃	H15(a)区	周縁打ち欠き
58	6期	2.8	2.7	0.7	5.8	胴部	〃	H15(a)区	周縁に研磨痕、一部打ち欠き残る
59	6期	2.6	2.6	0.5	4.0	胴部	〃	H15(a)区	周縁打ち欠き
60	6期	2.3	2.5	0.6(0.8)	4.7	胴部	〃	H13(a)区	周縁打ち欠き
61	6期	2.8	2.9	0.8	7.4	胴部	〃	H13(a)区	周縁打ち欠き
62	6期	3.9	4.0	0.9	14.6	胴部	〃	H13(a)区	周縁打ち欠き
63	6期	3.4	4.4	0.7	12.7	口縁部	〃	H13(a)区	周縁打ち欠き、一部に研磨痕
64	6期	3.5	3.8	0.8	11.2	胴部	〃	H13(a)区	周縁打ち欠き、一部に研磨痕
65	6期	3.2	3.3	0.7	8.6	胴部	〃	H15(a)区	周縁打ち欠き、一部に研磨痕
66	6期	2.7	4.5	0.9	13.1	口縁部	〃	H13(a)区	周縁打ち欠き
67	6期	3.1	3.0	0.6(0.5)	6.6	胴部	〃	H13(a)区	周縁打ち欠き、中央に補修孔
68	6期	4.0	(2.5)	0.7	(9.7)	口縁部	〃	H13(a)区	周縁に研磨痕、一部打ち欠き残る
69	6期	4.2	4.1	0.8	15.2	胴部	〃	H15(a)区	周縁打ち欠き
70	6期	2.9	3.9	0.9	12.0	口縁部	〃	H13(a)区	周縁打ち欠き
71	6期	2.8	3.2	0.6	6.0	口縁部	〃	H13(a)区	周縁打ち欠き
72	6期	3.3	3.3	0.7	9.5	口縁部	〃	H13(a)区	周縁打ち欠き
73	6期	2.8	2.9	0.7	7.2	胴部	〃	H13(a)区	周縁打ち欠き、一部に研磨痕
74	6期	(4.1)	4.0	0.6	(10.4)	胴部	〃	H13(a)区	周縁打ち欠き
75	6期	3.9	4.4	0.8	14.4	胴部	〃	H13(a)区	周縁打ち欠き
76	6期	5.8	6.3	0.8	41.8	口縁部	〃	H13(a)区	周縁打ち欠き
77	6期	2.8	2.9	0.6	5.8	胴部	〃	H13(a)区	周縁打ち欠き
78	6期	2.4	2.3	1.0	6.3	胴部	〃	H13(a)区	周縁打ち欠き
79	6期	2.6	2.3	0.7	4.9	胴部	〃	H13(a)区	周縁打ち欠き
80	6期	2.8	2.7	0.6	6.3	胴部	〃	H13(a)区	周縁に研磨痕、一部打ち欠き残る
81	6期	3.7	3.6	0.8	13.0	胴部	〃	H17(a)区	周縁打ち欠き

第3章 川戸釜八幡道跡

82	6期	3.9	4.4	0.8	11.1	胴部	第117図	H13(a)区	周縁打ち欠き
83	7期	4.2	4.4	0.9	21.6	口縁部	第118図	H13(a)区	周縁打ち欠き
84	7期	6.1	7.4	0.7	40.0	口縁部	〃	H13(a)区	周縁打ち欠き
85	8期	5.4	5.6	1.0	30.0	胴部	〃	H15(a)区	周縁に研磨痕、一部打ち欠き残る
86	8期	3.7	4.0	0.9	17.6	胴部	〃	H15(a)区	周縁打ち欠き、一部に研磨痕
87	8期	3.2	3.3	0.8	10.5	口縁部	〃	H15(a)区	周縁打ち欠き、一部に研磨痕
88	8期	2.9	2.5	0.8	5.8	胴部	〃	H15(a)区	周縁打ち欠き
89	8期	3.3	2.8	0.8	8.8	胴部	〃	H13(a)区	周縁打ち欠き
90	8期	2.4	2.6	0.7	4.5	胴部	〃	H13(a)区	周縁打ち欠き
91	8期	4.9	(2.6)	0.7	(8.6)	胴部	〃	H15(a)区	周縁打ち欠き
92	8期	3.6	4.2	0.6	11.3	胴部	〃	H13(a)区	周縁打ち欠き
93	8期	4.0	4.3	0.9	17.0	胴部	〃	H13(a)区	周縁打ち欠き
94	8期	(2.7)	4.0	0.5	(7.1)	胴部	〃	H15(a)区	研磨痕が全周する
95	8期	(3.5)	4.7	0.8	(12.7)	胴部	〃	H15(a)区	周縁打ち欠き
96	8期	3.3	3.0	0.8	9.6	胴部	〃	H13(a)区	周縁打ち欠き、一部に研磨痕
97	8期	3.3	3.2	0.7	8.5	胴部	〃	H13(a)区	周縁打ち欠き、一部に研磨痕
98	8期	(3.4)	3.4	0.6	(7.9)	胴部	〃	H15(a)区	周縁打ち欠き
99	9期	2.3	2.6	0.7	4.3	胴部	〃	H15(a)区	周縁に研磨痕、一部打ち欠き残る
100	9期	2.1	2.3	0.7	3.6	胴部	〃	H15(a)区	周縁に研磨痕、一部打ち欠き残る
101	9期	2.1	2.1	0.7	3.6	胴部	〃	H15(a)区	周縁打ち欠き
102	9期	2.3	2.4	0.5	3.9	胴部	〃	H13(a)区	周縁打ち欠き
103	9期	2.6	3.1	0.7	6.6	胴部	〃	H15(a)区	研磨痕が全周する
104	9期	2.8	2.8	0.6	5.7	胴部	〃	H15(a)区	研磨痕が全周する
105	9期	2.5	2.9	0.8	6.1	胴部	〃	H15(a)区	周縁打ち欠き
106	9期	4.4	4.2	1.0	17.2	胴部	〃	H15(a)区	周縁打ち欠き、一部に研磨痕
107	9期	4.2	4.1	0.7	13.3	胴部	〃	H15(a)区	スリ痕が全周する
108	9期	3.6	3.7	1.0	13.4	口縁部	〃	H15(a)区	周縁打ち欠き、一部に研磨痕
109	9期	3.5	3.9	0.6	9.8	胴部	〃	H15(a)区	周縁打ち欠き
110	9期	3.5	3.7	0.9	11.4	胴部	〃	H15(a)区	周縁に研磨痕、一部打ち欠き残る
111	9期	3.8	3.8	0.9	15.2	胴部	〃	H15(a)区	周縁に研磨痕、一部打ち欠き残る
112	9期	3.6	2.9	0.8	11.0	胴部	〃	H15(a)区	周縁打ち欠き
113	9期	3.2	3.6	0.8	10.3	胴部	〃	H15(a)区	周縁打ち欠き、一部に研磨痕
114	9期	3.8	3.4	0.7	10.4	胴部	〃	H15(a)区	周縁打ち欠き
115	9期	2.6	2.5	0.5	3.7	胴部	〃	H15(a)区	周縁打ち欠き
116	9期	2.8	2.6	0.5	3.8	胴部	〃	H15(a)区	周縁打ち欠き
117	9期	3.0	3.1	0.6	6.7	胴部	〃	H13(a)区	周縁に研磨痕、一部打ち欠き残る
118	9期	5.1	4.9	1.2	31.9	胴部	〃	H13(a)区	周縁打ち欠き
119	9期	5.0	4.7	1.0	26.4	胴部	〃	H13(a)区	周縁打ち欠き
120	9期	5.4	5.5	0.6	21.3	胴部	〃	H13(a)区	研磨痕が全周する
121	9期	3.6	4.2	0.7	13.1	胴部	〃	H13(a)区	周縁に研磨痕、一部打ち欠き残る
122	9期	4.1	4.4	0.7	11.0	胴部	〃	H13(a)区	周縁打ち欠き
123	9期	3.7	4.1	0.5	9.0	胴部	〃	H13(a)区	周縁に研磨痕、一部打ち欠き残る
124	9期	3.1	3.4	0.8	9.3	胴部	〃	H13(a)区	周縁打ち欠き
125	9期	2.0	2.2	0.5	2.6	胴部	〃	H13(a)区	周縁打ち欠き
126	9期	2.3	2.5	0.7	4.3	胴部	〃	H13(a)区	周縁打ち欠き
127	9期	2.6	3.1	0.8	7.3	胴部	〃	H15(b)区	研磨痕が全周する
128	9期	2.8	3.1	0.6	6.1	胴部	〃	H13(a)区	研磨痕が全周する
129	9期	2.7	3.2	0.6	5.7	胴部	〃	H13(a)区	周縁打ち欠き
130	9期	4.3	4.4	0.6	11.0	胴部	〃	H13(a)区	周縁打ち欠き
131	9期	4.1	4.0	0.5	9.4	胴部	〃	H13(a)区	研磨痕が全周する
132	9期	4.2	4.4	0.9	19.0	胴部	〃	H13(a)区	周縁に研磨痕、一部打ち欠き残る
133	9期	3.5	3.6	0.7	10.0	胴部	〃	H13(a)区	研磨痕が全周する
134	9期	3.4	3.3	0.6	7.5	胴部	〃	H13(a)区	周縁に研磨痕、一部打ち欠き残る
135	9期	3.1	4.0	0.8	9.0	胴部	〃	H13(a)区	周縁打ち欠き、一部に研磨痕
136	9期	3.7	3.8	0.7	12.9	胴部	〃	H13(a)区	研磨痕が全周する
137	9期	3.5	4.2	0.6	10.9	胴部	〃	H13(a)区	研磨痕が全周する
138	9期	3.6	3.5	0.9	12.7	胴部	〃	表土中	周縁打ち欠き、一部に研磨痕
139	9期	3.8	3.6	0.6	8.5	胴部	〃	H13(a)区	研磨痕が全周する
140	9期	3.3	3.2	0.7	6.9	胴部	〃	H13(a)区	研磨痕が全周する
141	9期	3.3	3.6	0.8	9.1	胴部	〃	H15(b)区	周縁打ち欠き
142	9期	3.1	2.9	0.5	5.0	胴部	〃	H15(a)区	周縁打ち欠き
143	9期	3.0	2.7	0.6	5.7	胴部	〃	H13(a)区	研磨痕が全周する
144	9期	3.0	2.8	0.6	5.4	胴部	〃	H13(a)区	周縁打ち欠き
145	9期	2.7	3.0	0.6	6.0	胴部	〃	H13(a)区	周縁打ち欠き
146	9期	3.0	3.2	0.7	7.1	胴部	〃	表土中	周縁に研磨痕、一部打ち欠き残る
147	9期	3.1	3.0	0.7	6.1	胴部	〃	H13(a)区	研磨痕が全周する
148	9期	2.8	3.0	0.6	5.6	胴部	〃	H13(a)区	研磨痕が全周する
149	9期	(2.3)	3.8	0.7	(6.8)	胴部	〃	H15(a)区	研磨痕が全周する

第4節 縄文時代の遺構と遺物

150	9期	(2.6)	(3.8)	0.9	(9.4)	胴部	第118図	H15(a)区	研磨痕が全周する
151	9期	4.4	(3.7)	0.8	(13.8)	胴部	〃	H15(a)区	周縁打ち欠き
152	9期	(3.5)	4.3	0.6	(8.4)	胴部	〃	H15(a)区	周縁打ち欠き
153	9期	(4.5)	(3.1)	1.0	(12.8)	胴部	〃	H15(a)区	周縁打ち欠き
154	9期	3.5	3.1	1.0	(11.1)	胴部	〃	H15(a)区	周縁打ち欠き
155	9期	(3.5)	(2.9)	0.8	(8.0)	胴部	〃	H15(a)区	周縁打ち欠き
156	9期	(3.6)	(3.0)	0.6	66.4	胴部	〃	H15(a)区	研磨痕が全周する
157	9期	(3.8)	3.0	0.6	66.8	胴部	〃	H15(a)区	研磨痕が全周する
158	10期	4.6	5.7	0.8	22.0	胴部	〃	H13(a)区	周縁打ち欠き
159	10期	3.6	4.2	0.7	13.5	胴部	〃	H15(a)区	研磨痕が全周する
160	10期	4.0	4.4	0.8	15.3	胴部	〃	H13(a)区	周縁打ち欠き
161	10期	3.6	3.6	0.6	9.3	胴部	〃	H13(a)区	周縁打ち欠き
162	10期	3.5	3.6	0.9	12.9	胴部	〃	H17(a)区	研磨痕が全周する
163	10期	3.4	3.3	0.7	9.5	胴部	〃	H13(a)区	周縁打ち欠き
164	10期	3.5	3.2	0.9	12.3	胴部	〃	H13(a)区	周縁打ち欠き
165	10期	3.4	3.0	0.6	7.8	胴部	〃	H13(a)区	周縁打ち欠き
166	10期	2.8	3.4	1.0	11.4	胴部	〃	H15(a)区	周縁打ち欠き
167	10期	3.1	3.6	0.8	11.2	胴部	〃	H13(a)区	周縁打ち欠き
168	10期	3.1	3.2	0.9	9.3	胴部	〃	H13(a)区	周縁打ち欠き
169	10期	2.7	2.7	0.8	7.0	口縁部	〃	H13(a)区	周縁打ち欠き
170	10期	5.0	4.9	1.0	26.4	口縁部	〃	H13(a)区	周縁打ち欠き、補修孔あり
171	10期	3.1	3.7	0.9	12.0	底部付近	〃	H15(a)区	周縁打ち欠き
172	10期	3.7	(2.3)	0.4	(5.2)	胴部	〃	H15(a)区	研磨痕が全周する
173	11期	2.1	2.3	0.6	3.4	胴部	〃	H11(b)区	研磨痕が全周する
174	12期	2.7	2.7	0.7	5.3	胴部	第119図	表土中	周縁打ち欠き
175	12期	2.5	3.0	0.7	6.3	胴部	〃	H13(a)区	周縁打ち欠き
176	12期	2.2	2.3	0.7	3.7	胴部	〃	H13(a)区	周縁打ち欠き
177	12期	2.3	2.4	0.5	2.8	胴部	〃	H13(a)区	周縁打ち欠き
178	12期	2.8	2.5	0.6	5.2	胴部	〃	H13(a)区	周縁打ち欠き
179	12期	2.9	3.1	0.8	7.4	胴部	〃	H15(a)区	周縁打ち欠き
180	12期	2.7	3.1	0.7	6.7	胴部	〃	H15(a)区	周縁研磨痕、一部打ち欠き残る
181	12期	2.6	3.0	0.8	7.0	胴部	〃	H13(a)区	周縁打ち欠き
182	12期	3.4	3.3	0.8	9.8	胴部	〃	H15(a)区	研磨痕が全周する
183	12期	3.0	3.3	0.6	6.9	胴部	〃	H13(a)区	研磨痕が全周する
184	12期	2.8	(2.4)	0.8	(5.8)	胴部	〃	H15(a)区	周縁打ち欠き
185	12期	3.1	3.3	0.7	7.2	底部	〃	H15(a)区	研磨痕が全周する
186	12期	3.3	3.9	0.7	9.0	胴部	〃	H15(a)区	周縁打ち欠き
187	12期	2.9	3.6	0.8	8.4	口縁部	〃	H15(a)区	周縁打ち欠き
188	12期	3.5	3.0	0.6	6.6	胴部	〃	H15(a)区	周縁打ち欠き
189	12期	3.3	3.8	0.6	9.1	胴部	〃	H15(a)区	周縁打ち欠き
190	12期	3.4	3.7	0.9	11.4	胴部	〃	H15(a)区	周縁打ち欠き
191	12期	3.5	3.6	0.9(1.1)	13.8	口縁部	〃	H15(a)区	周縁打ち欠き
192	12期	3.5	3.7	0.7	9.4	胴部	〃	H15(a)区	周縁研磨痕、一部打ち欠き残る
193	12期	3.6	3.8	0.6	9.1	胴部	〃	H13(a)区	周縁打ち欠き
194	12期	3.5	3.6	0.7	8.6	胴部	〃	表土中	周縁打ち欠き、一部研磨痕
195	12期	3.7	3.5	0.9	11.7	胴部	〃	H17(a)区	周縁打ち欠き
196	12期	4.0	3.8	0.7	13.3	胴部	〃	H15(a)区	周縁打ち欠き
197	12期	3.6	3.5	0.7	8.9	胴部	〃	H15(a)区	周縁打ち欠き
198	12期	3.6	3.3	0.7	9.6	胴部	〃	H15(a)区	周縁打ち欠き
199	12期	3.4	3.4	0.8	8.7	胴部	〃	H15(a)区	周縁打ち欠き
200	12期	4.0	3.8	0.9	13.3	胴部	〃	H15(a)区	周縁打ち欠き
201	12期	(3.5)	4.0	1.0	(14.0)	胴部	〃	H11(a)区	周縁打ち欠き、織物土器、表面に染織文
202	12期	4.2	4.6	1.0	20.9	胴部	〃	H15(a)区	周縁打ち欠き
203	12期	4.3	4.9	1.0	21.6	胴部	〃	H15(a)区	周縁打ち欠き
204	12期	(2.7)	(4.0)	0.9	(10.4)	胴部	〃	H15(a)区	研磨痕が全周する
205	12期	(3.2)	(4.1)	0.6	(9.1)	胴部	〃	H15(a)区	周縁打ち欠き
206	12期	4.4	(3.1)	0.8	(11.5)	胴部	〃	H15(a)区	周縁打ち欠き
207	12期	(3.2)	3.5	0.9	(8.5)	胴部	〃	H15(a)区	周縁打ち欠き
208	12期	2.2	2.1	0.5	2.5	口縁部?	〃	H15(a)区	周縁打ち欠き
209	12期	(3.8)	(2.2)	0.7	(6.1)	胴部	〃	H15(a)区	周縁打ち欠き
210	12期	(2.9)	3.6	0.6	(7.5)	胴部	〃	H15(a)区	周縁打ち欠き
211	12期	(3.4)	(2.9)	0.7	(7.7)	胴部	〃	H15(a)区	周縁打ち欠き
212	13期	5.0	5.3	0.5	17.6	胴部	〃	H15(a)区	周縁打ち欠き
213	13期	3.7	3.8	0.8	11.4	胴部	〃	H15(a)区	周縁打ち欠き
214	13期	3.9	(3.1)	0.7	(7.8)	胴部	〃	H15(a)区	周縁打ち欠き
215	13期	3.1	3.1	0.5	6.1	胴部	〃	H13(a)区	周縁打ち欠き、未貫通孔

(3) 石器・石製品

川戸釜八幡遺跡からは縄文時代後・晩期を中心とする石器群が出土している。ここでは、出土石器の器種分類と細分を行いたい(第120・121図)。

1. 石鏃

尖頭器との区別が難しい形態のものも存在するが、ここでは全長4.5cm以下のものを石鏃、4.5cm以上のものを尖頭器として分類した。(註1)

- A-1類 凹基で抉りが深いもの。
 A-2類 凹基で抉りが浅いもの。
 B-1類 凸基で、体部と基部が明確に屈曲するもの。
 B-2類 凸基で、体部と基部の境界が明確でないもの。
 B-3類 凸基で、体部下半が丸く仕上げられるもの。
 B-4類 凸基で、先端部の両側縁がわずかに膨らむもの。
 B-5類 凸基で、基部がわずかに突出するもの。
 C-1類 尖基で、菱形あるいは木葉形に近いもの。
 C-2類 尖基で、柳葉型のもの。
 D類 基部が丸く仕上げられるもの。
 E類 左右が著しく非対称なもの。
 F類 欠損などで、形態が不明なもの。

総数160個の石鏃を実測したが、多数を占めるのはB-1類であり、有茎の石鏃が全体の2/3を占める。また、流紋岩を素材とするものが多く、次いで頁岩、玉髄、赤玉などが使われている。

1. 石鏃	A-1類	A-2類	B-1類	B-2類	B-3類	B-4類	B-5類	C-1類	C-2類	D類	E類	F類	計
遺構外	8	7	24	3	1	3	3	18	6	4	3	8	88
SI-104		1	4	3				1				1	10
SI-379			3	1				4	1	2			11
SI-380				3				1		1		1	6
SI-381							1						1
SI-395			5	5					1	2	2	3	18
SI-403	2	1	8	4				1	1		1	4	22
SI-404			2					1					3
	10	9	46	19	1	3	4	26	9	9	6	17	159

2. 尖頭器

A類 表裏の周縁を加工した尖頭器。

B類 両面加工尖頭器。

周縁加工の尖頭器と両面加工の尖頭器は数的に拮抗する。石質は頁岩が大半を占める。

2. 尖頭器	A類	B類	計
遺構外	5	2	7
SI-379		2	2
SI-395		1	1
SI-403	2	1	3
	7	6	13

3. 石錐

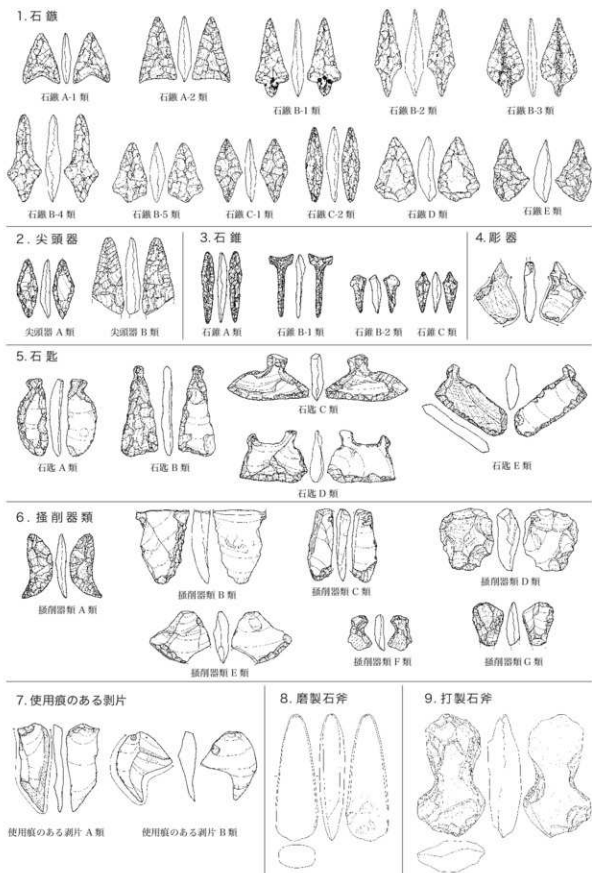
A類 棒状で先端部、基部ともに整形されるもの

B-1類 錐部とつまみ部の境界が明瞭で、つまみ部が丁寧に整形されるもの

B-2類 錐部とつまみ部の境界がやや不明瞭で、つまみ部の整形が入念でないもの。

C類 石鏃を石錐に転用したもので、

A類、B-1類は定型的な石錐である。C類は石鏃を転用して石錐としたもので、総数9点を確認している。



第120図 川戸釜八幡遺跡石器分類図(1)

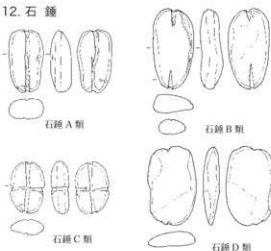
10. 石核



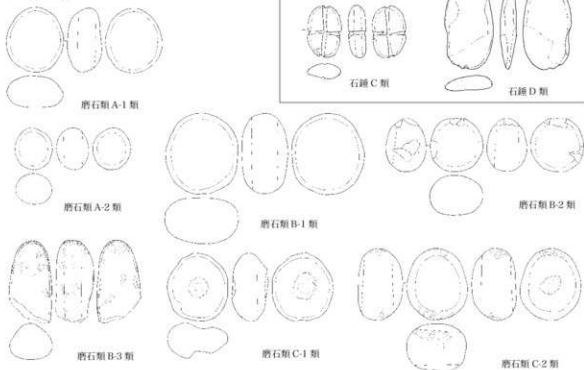
11. 籠状石器



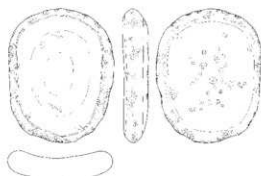
12. 石錘



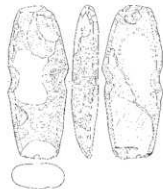
13. 磨石類



14. 石皿



16. 独鈷石



18. 玉類



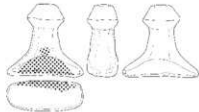
15. 石剣・石棒類



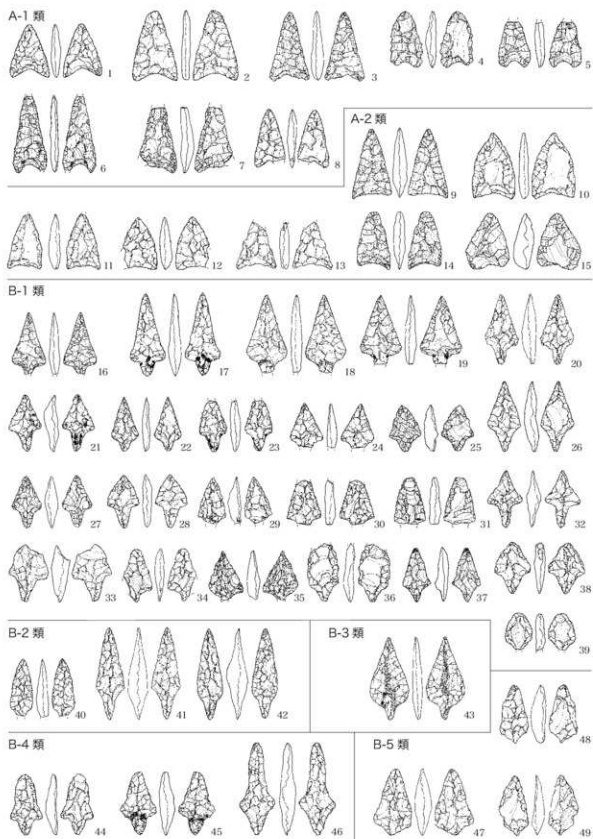
19. 石製品



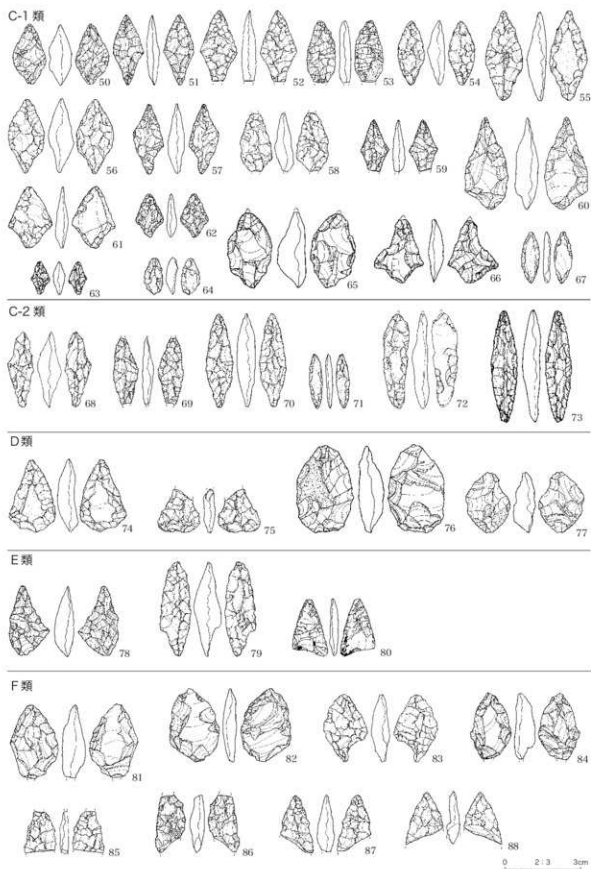
17. 石冠



第 121 図 川戸釜八幡遺跡石器分類図 (2)



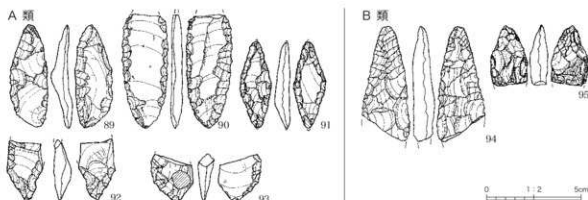
第 122 図 遺構外出土石器（石鏃）実測図（1）



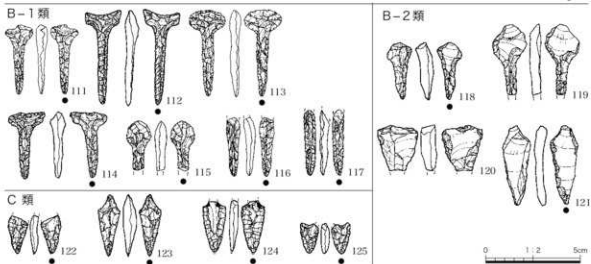
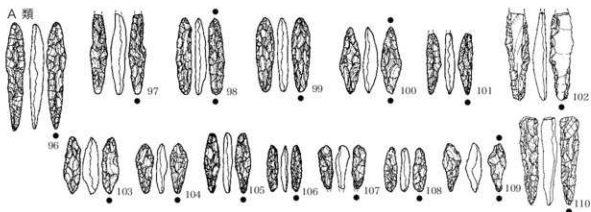
第123図 遺構外出土石器(石鏃)実測図(2)

そのうち、石鏃の基部を錐部とするものが3点、石鏃の先端部を錐部とするものが5点、先端と基部の両端を錐部とするものが1点認められた。これらの石鏃転用錐は、顕微鏡による使用痕の観察で確認したものである。石質は流紋岩が最も多く、頁岩、玉髓などが次いで多数を占める。

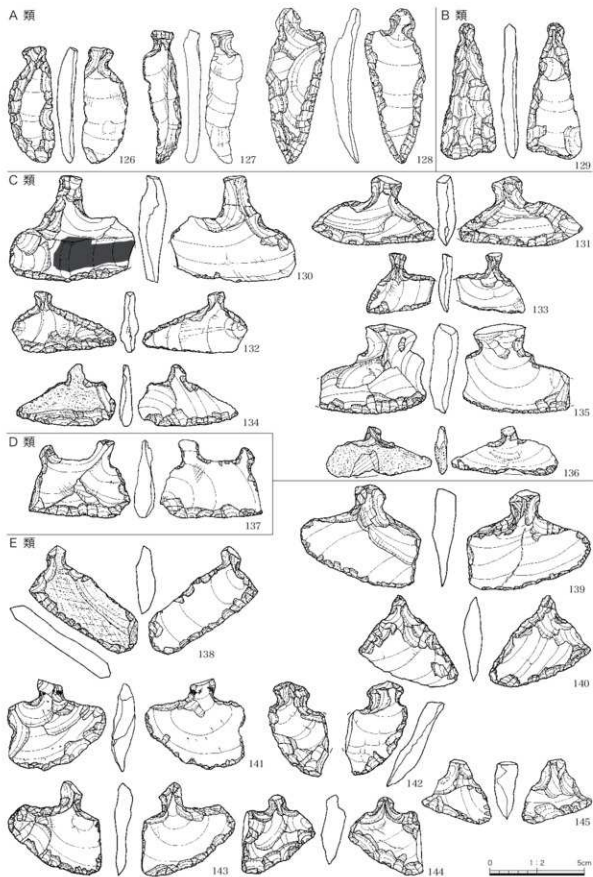
3. 石鏃	A類	B-1類	B-2類	C類	計
遺構外	15	7	4	4	30
SI-104	1				1
SI-379			1	1	2
SI-380				1	1
SI-395				1	1
SI-403			1	2	3
SI-413			1	1	1
	16	7	7	9	39



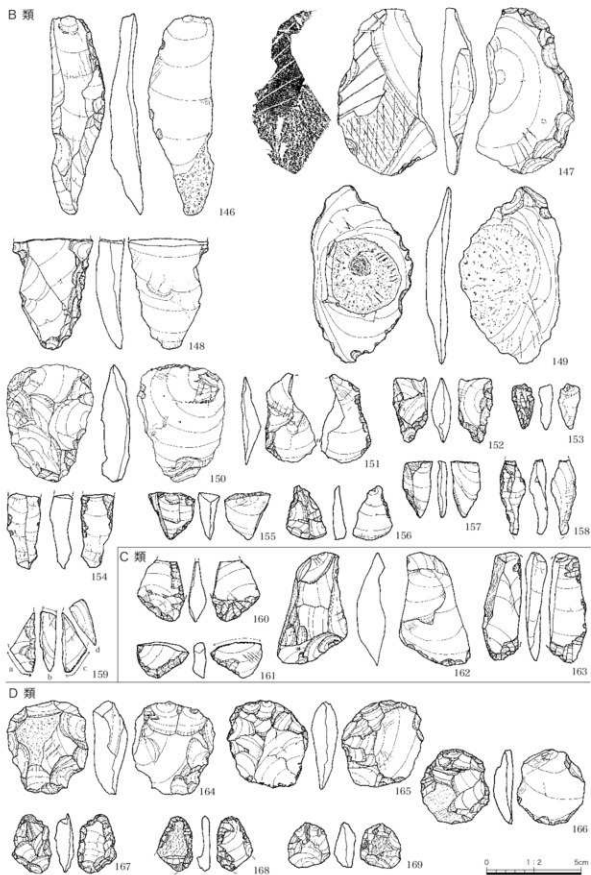
第124図 遺構外出土石器(尖頭器)実測図



第125図 遺構外出土石器(石鏃)実測図



第126図 遺構外出土石器(石匙)実測図

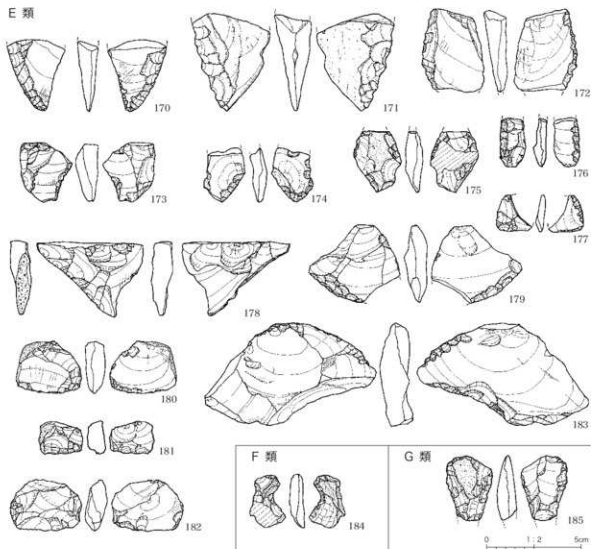


第127図 遺構外出土石器(掻削器類)実測図(1)

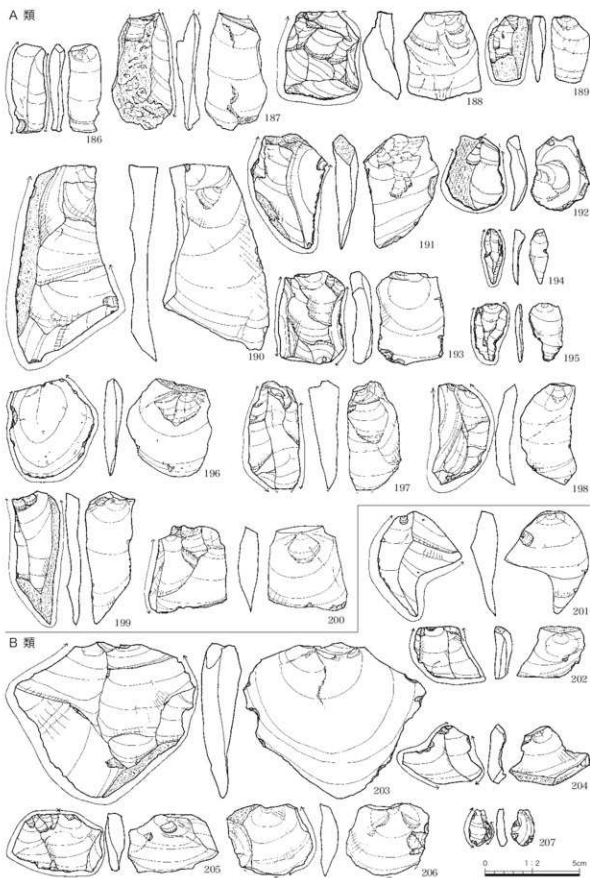
4. 彫器

SI-403から1点だけ出土している。表面に自然面を残す、やや不整形な縦長剥片を素材とする。図上左側面の節理面に数回の細かな打面調整を施し、その剥離面の稜上を打面として、2回の挿状剥離に似た調整を施す。器体の縁辺には掻削的調整も施されている。栃木県内の縄文時代後・晩期の主要な遺跡(註2)には類例が認められないが、形状や調整剥離は旧石器時代の彫器とは異なるので、本遺跡の主たる時期である縄文時代後・晩期の石器と推定しておきたい。関東地方の類例については調査することができなかったため不明確である。また、地域が大きく異なるが、西北九州地方の縄文時代後・晩期遺跡では、黒曜石の縦長剥片を素材とする彫器の類例が知られており、これを分析された橘昌信氏は、「組み合わせ道具としての石鋸やサイドブレードを考える上で、必要不可欠な石器として「彫器」Graving-toolの存在が問題となる。すなわち、骨や木のシャフトの側縁に沿って細い溝を彫るための道具である。」(橘1982)と考えられている。製作技法や形態は異なっているが、この石器も同様な使われ方をしたものと推定される。

4. 彫器	計
SI-403	1



第128図 遺構外出土石器(掻削器類)実測図(2)



第129図 遺構外出土石器（使用痕のある剥片）実測図（1）

5. 石匙

A類 縦型石匙。つまみ部に対して刃部が垂直方向につけられるもの。

B類 縦長の石匙で、末端部が台形に広がる形状のもの。

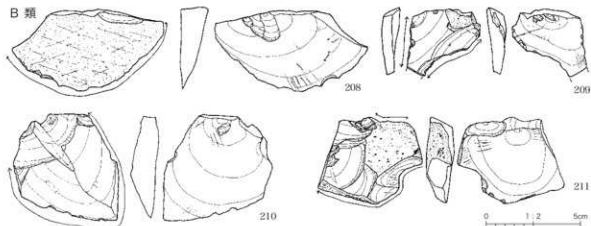
C類 横型石匙。つまみ部に対して刃部が直行する方向につけられるもの。

D類 つまみ部が2つあるもの。

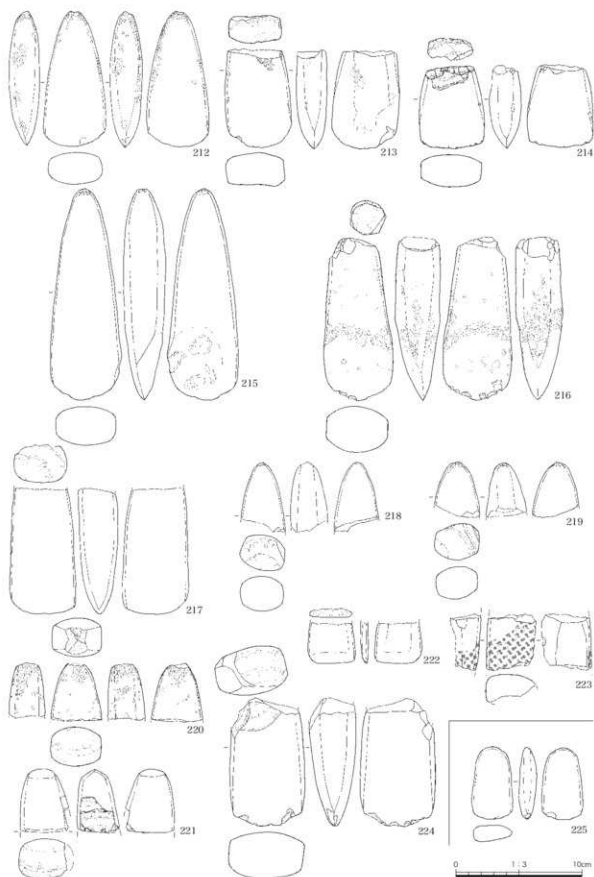
E類 斜刃型石匙。つまみ部に対して刃部が斜め方向につけられるもの。

5. 石匙	A類	B類	C類	D類	E類	計
遺構外	3	1	7	1	8	20
SI-104		1	1		1	3
SI-379	1					1
SI-381			1			1
SI-403	1		1		3	5
	5	2	10	1	12	30

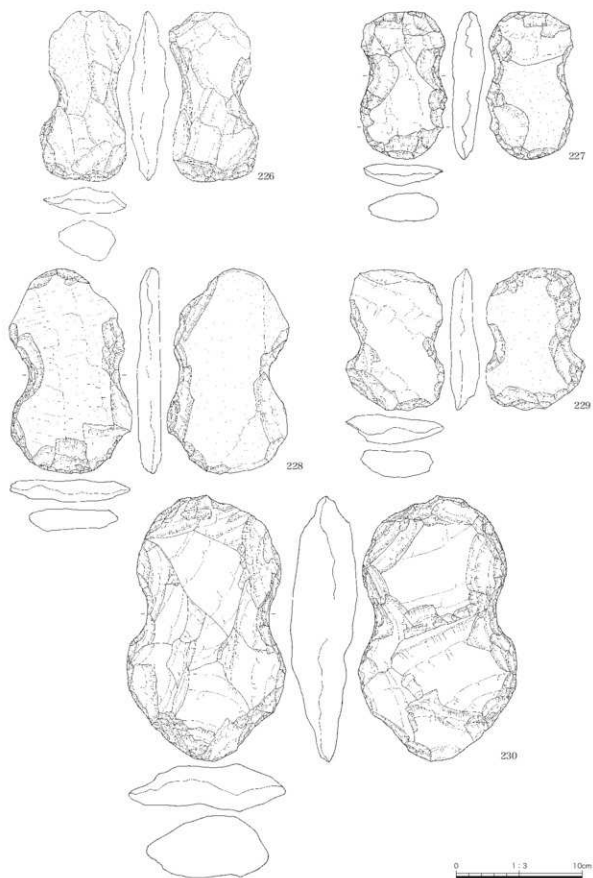
A・C・D・E類は、いずれも定型的な比較的整った形態である。このうち、B類としたものはSI-104-234（第16図）と遺構外-129の2点の出土が認められる。両者は製作技法が異なるが、形態が類似するため、同類とした。SI-104-234は表面に自然面を大きく残し、左側縁に調整を施している。裏面は主要剥離面を大きく残し、右側縁と端部に調整を加えている。表裏側縁の調整は裏面→表面の順で行われている。一方、遺構外-129は表面全体を周縁からの平坦剥離で覆い、裏面は主要剥離面を大きく残して、左側縁と端部に調整を加えている。調整の順序は裏面左側縁→表面右側縁の順である。表面は左側縁→右側縁の順で調整されている。左側縁の刃部は急斜で、右側縁はなだらかに仕上げられている。両者とも縦長剥片の打面側部につまみを作りだしており、つまみ側が小さく端部が広がる形態である。遺構外-129は表面全体が平坦な調整で覆われており、他の石匙が表面の周縁が、表裏面の周縁に調整を加えて石匙に仕上げている特徴と大きく異なっている。この特徴はいわゆる松原型石匙に類似している。（秦 1991）松原型石匙は北海道から東北地方にその分布が確認されており、早期後葉～前期前葉に製作された石器と考えられている。松原型石匙は、縦長の形態で、表面は素材面を残さないように調整で覆われ、裏面は素材面を大きく残すことが特徴とされる。また、その製作は縦長の剥片の左側縁全体に表面→裏面の剥離を施し、その剥離面を打面として、裏面→表面に平坦な調整剥離を施す。さらに表面右側縁にやや急斜な調整剥離を加え、つまみを作り出す手順で行われる特徴的な石匙である。遺構外-129は形態や表面の調整剥離の特徴は松原型石匙に類似するが、表面の平坦剥離の打面が裏面の左側縁に作られる点は合致しない。また、川戸釜八幡遺跡では早期後半の条痕文系土器群が一定量出土しているが、中心は縄文時代後・晩期と考えられるため、時期的にも齟齬がある。さらに、松原型石匙分布圏の南端からはずれていることなど、肯定する材料は少ないが、川戸釜八幡遺跡において、特徴的な石匙である点には注意が必要と思われる。栃木県内の縄文時代後・晩期の主要な遺跡（註2）で、類例の有無



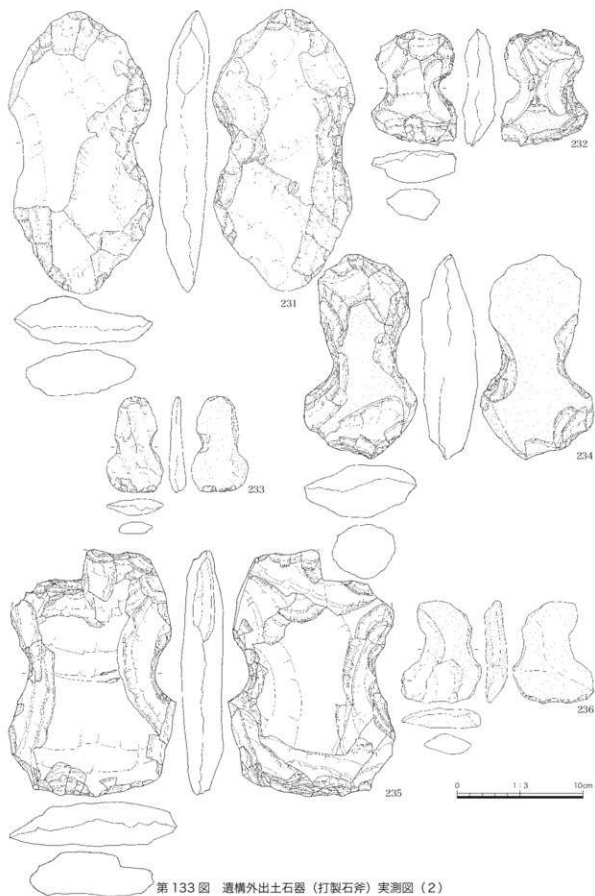
第130図 遺構外出土石器（使用痕のある剥片）実測図（2）



第131図 遺構外出土石器（磨製石斧）実測図



第 132 図 遺構外出土石器 (打製石斧) 実測図 (1)



第133図 遺構外出土石器(打製石斧)実測図(2)

を確認したが、存在は確認されなかった。

6. 掻削器類

刃部と思われる部分に二次加工があるものを掻削器として一括した。

A類 三日月型の形状で表裏面とも剝離面に覆われるもの。

B類 剥片の長軸方向の側縁部を中心に二次加工が施されるもの。

C類 剥片の末端部を中心に二次加工が施されるもの。

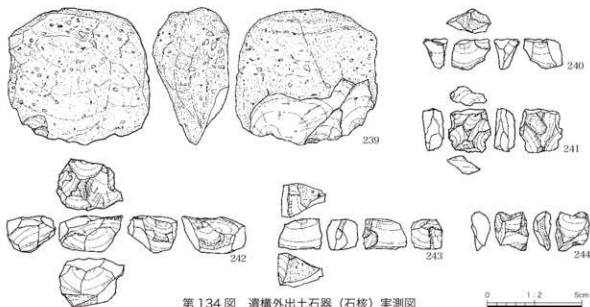
D類 剥片の周縁部に二次加工が施されるもの。

E類 剥片の一端の表裏に二次加工が施されるもの。

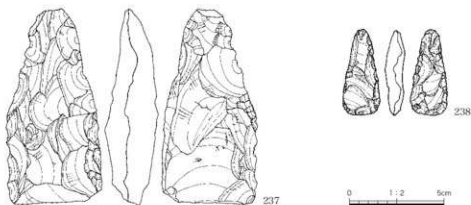
F類 挟り込み状に二次加工が施されるもの。

G類 他器種の破損品を再加工したもの。

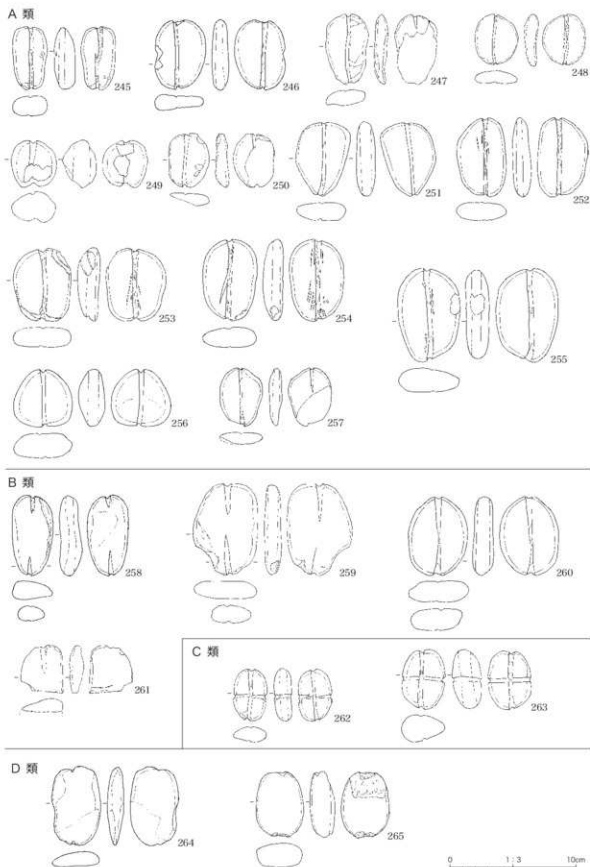
なお、B類とした資料の内、遺構外-147は頁岩製の削器に木葉の化石痕が認められる珍しい例である。付編第3節に理化学的な分析結果を表示したが、木葉の種類は、葉脈や外形の特徴からブナ科のコナラ属かブナ属と推定されている。また、この頁岩は中新世中期～後期の海成層(約1500～700万年前)として生成されたと考えられている。



第134図 遺構外出土石器(石核)実測図

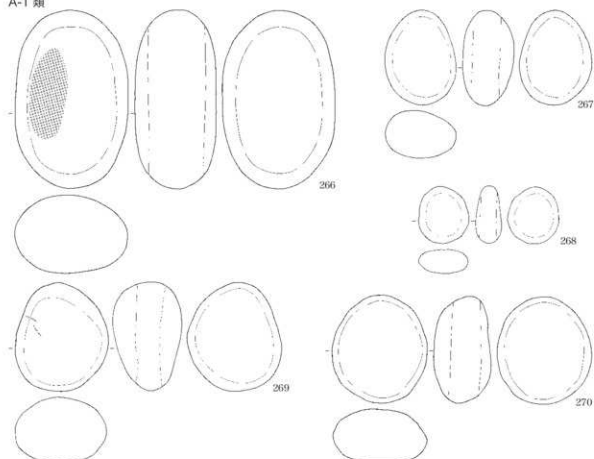


第135図 遺構外出土石器(籠状石器)実測図

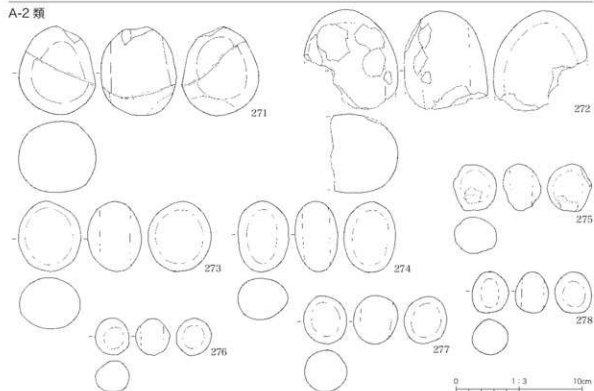


第 136 図 遺構外出土石器（石錘）実測図

A-1類



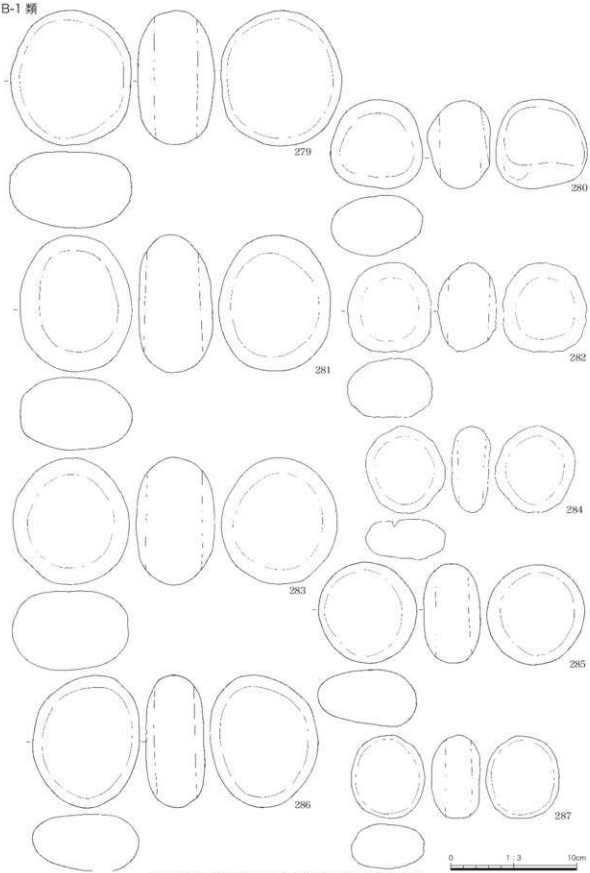
A-2類



第137図 遺構外出土石器(磨石類)実測図(1)

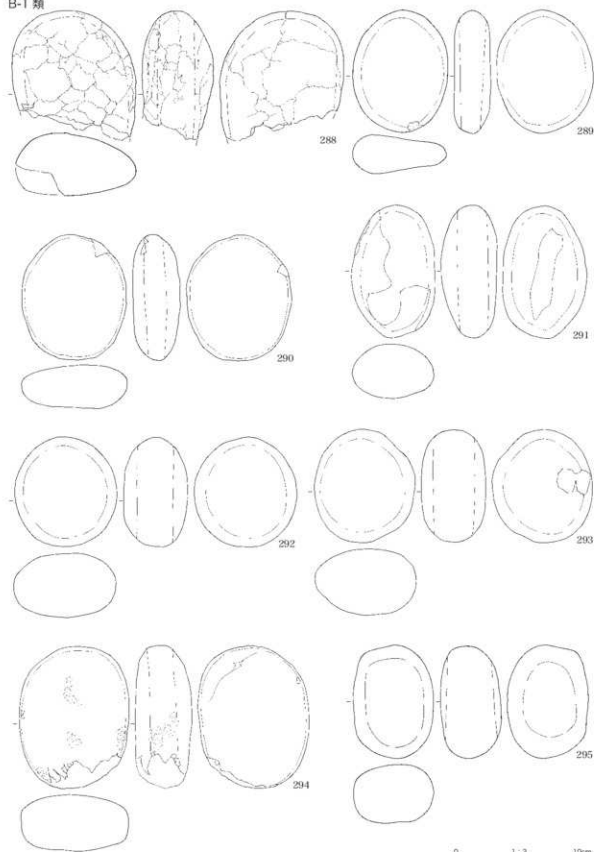
0 1:3 10cm

B-1類

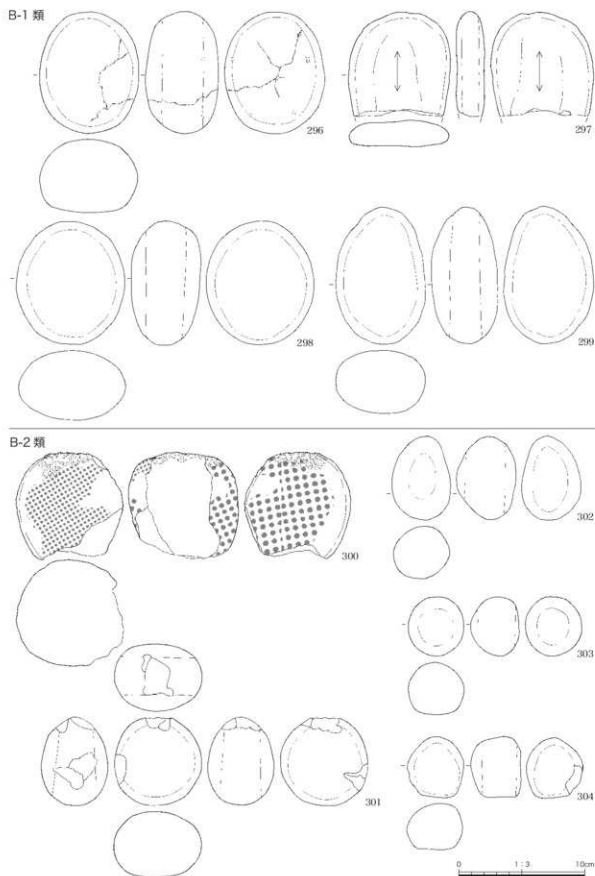


第138図 遺構外出土石器(磨石類)実測図(2)

B-1類

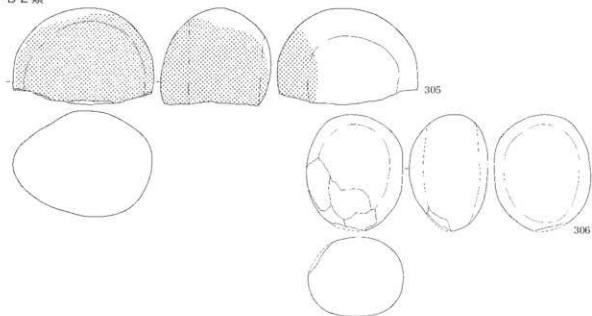


第139図 遺構外出土石器（磨石類）実測図（3）

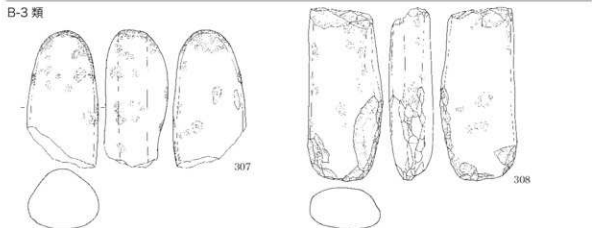


第140図 遺構外出土石器(磨石類)実測図(4)

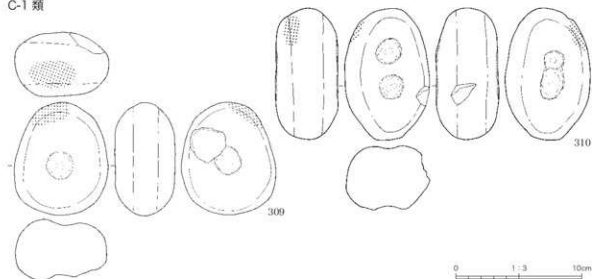
B-2類



B-3類



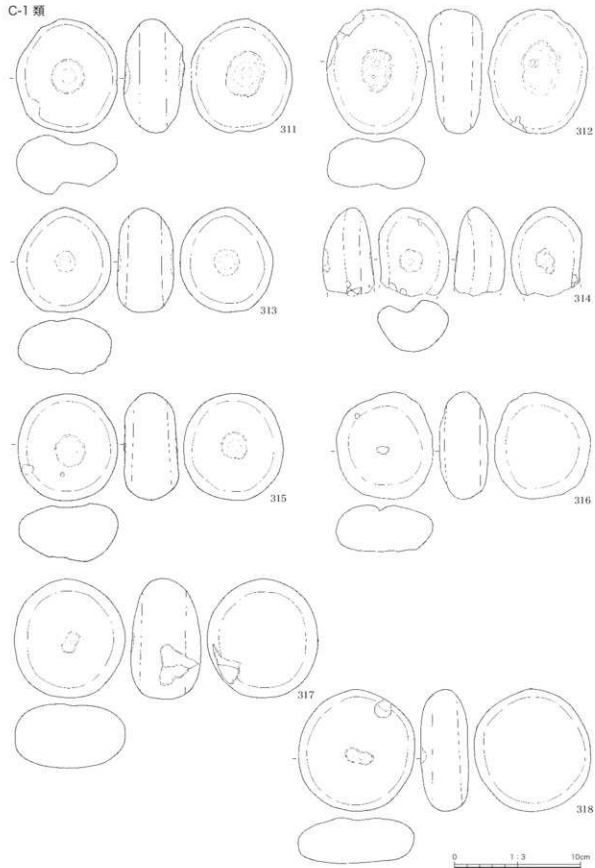
C-1類



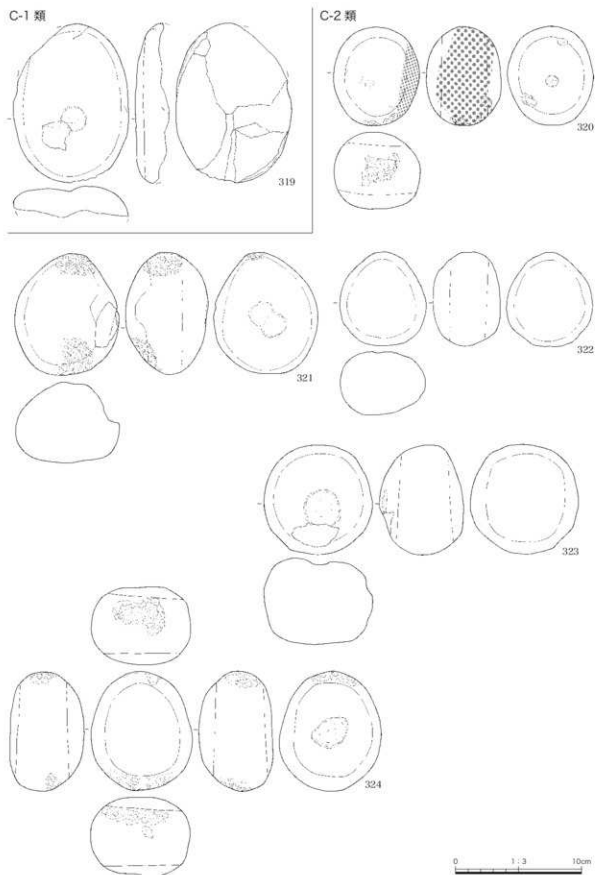
0 1:3 10cm

第141図 遺構外出土石器(磨石類)実測図(5)

C-1類



第142図 遺構外出土石器(磨石類)実測図(6)



第143図 遺構外出土石器(磨石類)実測図(7)

また、G類の他器種から転用されたものとしては、遺構外-185がある。形態の特徴から元々は石錐B-2類の石錐であったと推定されるが、錐部を破損したため、破損面に裏面→表面方向の調整を加えて搔削器としたものである。

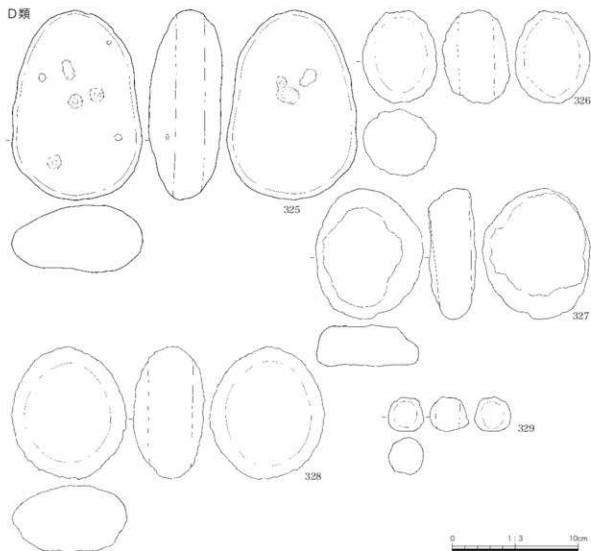
6. 搔削器類	A類	B類	C類	D類	E類	F類	G類	計
遺構外		14	4	6	14	1	1	40
SI-104	1	2	2					5
SI-379		2	1		2			5
SI-380		5						5
SI-395		4	1	2	3			10
SI-403		7	2	1	1			11
SI-404					2			2
SK-413			1					1
	1	34	11	11	20	1	1	79

7. 使用痕のある剥片

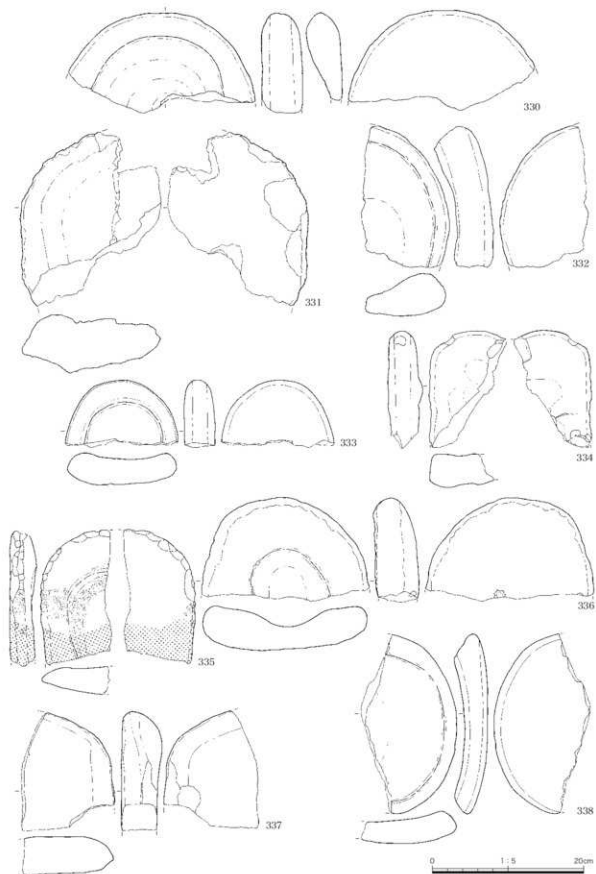
A類 縦長剥片の周縁に使用痕が認められるもの。

B類 横長あるいは不定形の剥片の周縁に使用痕が認められるもの。

7. 使用痕のある剥片	A類	B類	計
遺構外	15	11	26
SI-395	2	4	6
SI-403	3	1	4
SI-404	2	2	4
	22	18	40



第144図 遺構外出土石器（磨石類）実測図（8）



第145図 遺構外出土石器(石皿類)実測図(1)

8. 磨製石斧

磨製石斧は遺構外から14点(未製品1点(遺構外-225)含む)、各遺構から4点の計18点を図示した。いわゆる定角式の磨製石斧である。このうち遺構外-222(第131図)は蛇紋岩を素材とした小形の精製品である。

9. 打製石斧

打製石斧は遺構外から11点、各遺構から5点の計16点を図示した。SI-403-348(第52図)が平面楕円形であることを除いて、すべて分銅形の形態である。

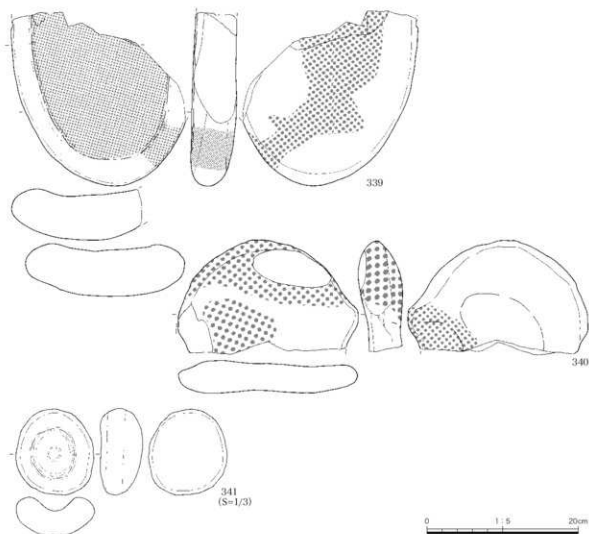
10. 石核

遺構外で6点、遺構出土の1点を図化した。このうち遺構外-239(第134図)は黒曜石製で、礫器の刃部を作出するように、鋭角的な稜上から剥片剥離をおこなっている。これ以外は小形で打面転移を繰り返して小形の不定形剥片を剥出している。石質は黒曜石、流紋岩、玉髄、赤玉があり、7点中4点は玉髄である。

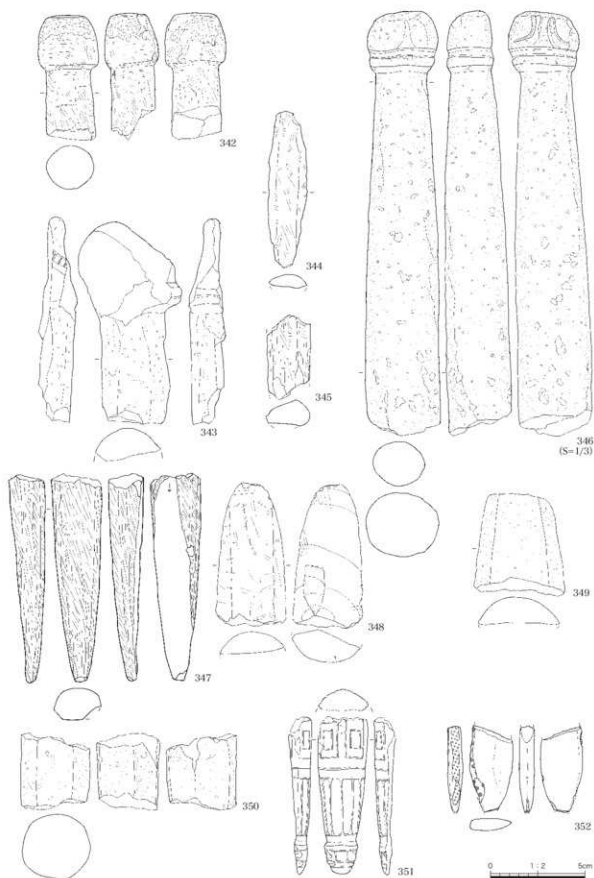
8. 磨製石斧	計
遺構外	14
SI-104	1
SI-379	1
SI-403	2
	18

9. 打製石斧	計
遺構外	11
SI-104	1
SI-381	1
SI-403	2
SK-413	1
	16

10. 石核	計
遺構外	6
SI-403	1
	7



第146図 遺構外出土石器(石皿類)実測図(2)



第147図 遺構外出土石器(石剣・石棒類)実測図

11. 鹿状石器

遺構外から2点が出土している。237(第135図)はやや大形で、撥形の打製石斧との区別が不明瞭であるが、鹿状石器として分類した。

11. 鹿状石器	計
遺構外	2
	2

12. 石錘

A類 表裏の長軸方向に溝が一周するもの。

B類 表裏の長軸方向に溝を刻むが、溝が一周しないもの。

C類 表裏に十字の溝が刻まれるもの。

D類 長軸方向の端部に切り込みを施すもの。

遺構外から21点、各遺構から20点の計41点を図示した。遺構外-264(第136図)が端部の打ち欠きであるのを除いて、すべて擦り切りで溝が刻まれている。

12. 石錘	A類	B類	C類	D類	計
遺構外	13	4	2	2	21
SI-104	1				1
SI-379	6	2			8
SI-380	1				1
SI-381	1				1
SI-395	2	1			3
SI-403	2				2
SK-407	1				1
SK-413	3				3
	30	7	2	2	41

13. 磨石類

A-1類 全体が摩滅し、断面形が楕円形に近いもの。

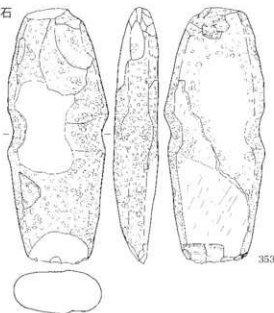
A-2類 全体が摩滅し、断面形が円形に近いもの。

B-1類 全体が摩滅し、側縁などに敲打痕が認められるもの。断面形が楕円形に近いもの。

B-2類 全体が摩滅し、側縁などに敲打痕が認められるもの。断面形が円形に近いもの。

B-3類 棒状の形態で、全体が摩滅し、端部に敲打痕が認められるもの。

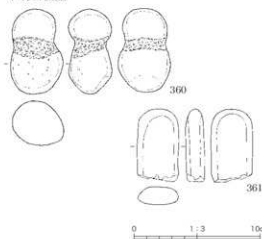
独鈷石



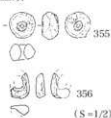
石製品



不明石製品



玉類



軽石製品



第148図 遺構外出土石器(独鈷石・石製品・軽石製品・玉類・不明石製品)実測図

C1類 全体が摩滅し、表裏面に凹みが認められるもので、断面が楕円形に近いもの。

C2類 全体が摩滅し、表裏面に凹みが認められるもので、断面が円形に近いもの。

13. 磨石類	A1類	A2類	B1類	B2類	B3類	C1類	C2類	D類	計
遺構外	5	8	21	7	2	11	5	5	64
SI-104				2	2		2	1	7
SI-379		1	4	2		2			9
SI-380			1						1
SI-381						1			1
SI-403	1	1	2						4
SI-404			1						1
SK-409						1			1
SK-413				1					1
	6	10	29	12	4	15	7	6	89

D類 表面の剥落が著しく、摩痕、敲打痕、凹みが不明瞭なもの。

形態と使用痕のあり方で分類した。B-3類はハンマーストーンと推定される。

14. 石皿

15点を図示した。SK-409-5(第65図)と遺構外出土の341(第146図)が完形で、残りは破損している。

14. 石皿	計
遺構外	12
SI-379	1
SK-409	1
SX-232	1
	15

15. 石剣・石棒類

総数で13点確認された。全て破損品で、頭部が4点、胴部が5点、端部が4点である。このうち、遺構外-352は片刃であるので石刀と推定される。鋒部分は敲打により薄くつぶされている。また、遺構外-351とSI-380-68は両刃であるので石剣と推定される。遺構外-351は両頭の石剣の端部の破損品で、沈刻による文様があり精巧なつくりである。

これら3点以外は断面が円形あるいは楕円形であり、石棒類として一括した。石剣・石棒類の石質は粘板岩が多く、デイサイト、ドレライトなどが少数認められるがいずれも緻密な石質が選択されている。一方、最も大形の遺構外-346は安山岩質溶結凝灰岩を素材としており、やや粗放な石質である。大形であることも併せ、縄文時代中期の石棒に類似する。

15. 石剣・石棒類	計
遺構外	11
SI-379	1
SI-380	1
	13

16. 独鈷石

遺構外-353の1点だけ出土している。

16. 独鈷石	計
遺構外	1
	1

17. 石冠

石鋸型で、底面に浅い溝が刻まれるもの(第43図205)と、頭部が石棒状で、底面が平坦なもの(第43図206)の2点が同じSI-392から出土した。205は図上、薄いトーンで示した部分に黒漆を塗り、さらに黒漆を重ねて、濃いトーンで示した部分にベンガラの赤色を付着させている。

また、206は正面下端に大きな半月形と小さい楕円形の文様が黒色物質で描かれている。黒色物質の種類は黒漆ではなく、種類不明である。

17. 石冠	計
SI-395	2
	2

18. 玉類

遺構外から2点が出土した。2点とも石製で、1点は平面円形(第148図355)で、緑泥片岩を素材としている。もう1点は楕円形(第148図356)で、碧玉を素材としている。器体の約半分を欠損している。

18. 玉類	計
遺構外	2
	2

19. 石製品

遺構外から3点出土している。1点は剣形(第148図357)、2点は円形(第148図358・359)である。

19. 石製品	計
遺構外	3
	3

20. 礫器

SI-379-301(第31図)は表面の自然面が著しく摩滅しており、器体の厚さからみても、破損した石皿片の周縁に粗い剥離を加えて平面楕円形の礫器状の製品を作成したものである。重量が3.89kgもあるため、片手で使うことは困難と思われる。

20. 礫器	計
SI-379	1
	1

21. 不明石製品

遺構外から出土した2点を図示した。遺構外-360は、だるま形の形状で、括れる部分の石質が異なっている。括れ部は敲打により抉られており、他の部分は全体に摩滅している。また、361は隅丸長方形の形状で、器体の半分を欠損する。全体は摩滅している。両者とも用途不明である。

21. 不明石製品	計
遺構外	2
	2

22. 軽石製品

軽石を素材とする製品が、SI-104から1点、遺構外から1点の計2点出土した。SI-104-252(第17図)は不整な楕円形で完形。遺構外-354はやや丸みを帯びた方形で下半部を欠損している。両者とも全体的に摩滅しているが、用途等は不明である。

22. 軽石製品	計
遺構外	1
SI-104	1
	2

23. 小礫

SI-403-354(第53図)は小形不整形の小礫である。完形で図上表面上端の凹んだ部分に赤色顔料が付着する。反対面にもごく薄く赤色顔料の付着が認められる。顔料の分析は実施していないが、ベンガラの可能性が考えられる。

23. 小礫	計
SI-403	1
	1

(註1)「奥三面ダム関連遺跡発掘調査報告書XIV 元屋敷遺跡Ⅱ(上段)本文編」平成14年3月 新潟県朝日村教育委員会・新潟県での石鏃と尖頭器の区分にしたがって設定した。

(註2) 栃木県内の主要な縄文時代後・晩期の遺跡としては、寺野東遺跡、御霊前遺跡、八剣遺跡、藤岡神社遺跡、乙女不動原遺跡、野沢石塚遺跡、鳴井上遺跡などがある。

〈引用・参考文献〉

秦 昭繁 1991「特殊な調整技法をもつ東日本の石鏃」考古学雑誌76-4 日本考古学会

橋 昌信 1982「彫器：西北九州における縄文時代の石器研究 五」史学論叢No13 別府大学史学研究会

第5表 遺構出土石器計測表

(1) 剥片石器・磨石類・石製品等

単位: cm・g

遺構	遺物番号	器種	分類	石質	長さ	幅	厚さ	重さ	特徴
SI-104	223	石鏃	A-2類	流紋岩	2.4	1.8	0.5	1.3	完形。
SI-104	224	石鏃	B-1類	玉髄	2.3	1.5	0.6	1.7	先端部を欠損。器体の左右は非対称形。
SI-104	225	石鏃	B-1類	流紋岩	3.0	1.6	0.9	2.5	完形品。
SI-104	226	石鏃	B-1類	流紋岩	3.7	1.7	0.9	3.8	完形。器体の左右は非対称形。
SI-104	227	石鏃	B-1類	流紋岩	2.2	1.1	0.5	0.7	先端部を欠損。
SI-104	228	石鏃	B-2類	玉髄	3.3	1.0	0.9	2.5	先端部を欠損。器体の左右は非対称形。
SI-104	229	石鏃	B-2類	流紋岩	3.0以上	1.1	0.7	1.2以上	先端部を欠損。
SI-104	230	石鏃	B-2類	流紋岩	3.2	1.0	0.7	1.0	完形。
SI-104	231	石鏃	C-1類	流紋岩	2.6	1.3	0.5	1.4	先端部を欠損。器体の左右は非対称形。
SI-104	232	石鏃	F類	流紋岩	3.5以上	1.6	0.8	3.2以上	基部を欠損。
SI-104	233	石鏃	A類	流紋岩	5.5	1.2	1.0	5.5	完形。基部の先端は回転運動による摩滅が認められる。
SI-104	234	石鏃	B類	流紋岩	7.8	4.1	1.5		縦形石鏃。表面に自然面残す。つまみ部にアスファルト付着。
SI-104	235	石鏃	C類	珪質頁岩(新第三紀)	5.2	5.9	1.2	24.9	円形の横型石鏃。執り部に鉢巻状にアスファルト付着。
SI-104	236	石鏃	E類	流紋岩	5.2	3.6	1.0	18.5	不整形剥片を素材とし、不整形な石鏃に仕上げる。下部部に節理面残す。
SI-104	237	搔削器類	B類	頁岩	5.3	3.1	1.1	17.2	打面は自然面。表面にも自然面を残す。
SI-104	238	搔削器類	C類	流紋岩	5.4	2.4	0.9	13.1	完形。
SI-104	239	搔削器類	B類	頁岩(黒色頁岩)	10.4	9.2	1.5	149.8	横長剥片を素材とする。表面と片側の側縁は節理面を残す。
SI-104	240	搔削器類	A類	チャート	5.2	1.9	0.7	7.4	三日月形に仕上げられる。
SI-104	241	搔削器類	C類	流紋岩	3.5	2.0	1.3	10.1	表面に自然面残す。表面とも周縁からの調整磨面に覆われる。
SI-104	245	磨石類	B-3類	砂岩	11.3	2.6	2.5	104.2	棒状で細い方の先端に敲打痕。
SI-104	246	磨石類	B-3類	輝石デイスait	17.6	7.6	6.7	1346.1	トーン部分が著しく摩滅する。上下両端に敲打痕。
SI-104	247	磨石類	B-2類	デイスait	8.3以上	6.9	5.6	440.0以上	約半分を欠損する。全体が摩滅する。トーン部分は敲打痕と赤色物質の付着が認められる。
SI-104	248	磨石類	C-2類	砂岩	7.1	5.1	4.7	270.9	全体が摩滅。表面にわずかに敲打痕。
SI-104	249	磨石類	B-2類	流紋岩質凝灰岩	4.4	4.2	3.5	78.1	完形。
SI-104	250	磨石類	D類	黒雲母花崗岩	6.5	5.3	4.7	211.9	表面が剥落して痕跡不鮮明。
SI-104	251	磨石類	C-2類	玄武岩(新第三紀)	10.2以上	9.6	7.5	1042.7以上	被熱のため表面の剥落が著しい。
SI-104	252	軽石製品	-	軽石(斜長石、輝石 製品あり。)	7.9	6.0	2.3	22.2	平面楕円形で、片面が平坦。片面は弧状に仕上げられる。平坦面は摩滅する。
SI-379	261	石鏃	B-1類	珪化頁岩(黄玉質)	2.4	1.1	0.4	0.8	完形。
SI-379	262	石鏃	B-1類	流紋岩	3.0	1.3	0.5	1.3	完形。
SI-379	263	石鏃	B-1類	流紋岩	2.4以上	1.8	0.7	2.7以上	先端部を欠損。
S-379	264	石鏃	B-2類	玉髄	2.1	0.9	0.4	0.6	完形。
SI-379	265	石鏃	C-1類	チャート	2.0	1.5	0.4	0.8	完形。
SI-379	266	石鏃	C-1類	赤玉	2.0	1.0	0.5	1.0	先端をわずかに欠損。
SI-379	267	石鏃	C-1類	チャート	2.9	1.6	0.8	2.9以上	片面の基部を欠損。
SI-379	268	石鏃	C-1類	珪化岩(赤玉質)	3.3	1.5	0.8	2.5	一部に節理面残す。
SI-379	269	石鏃	D類	赤玉	3.0以上	1.5	1.0	4.2以上	先端部を欠損。
SI-379	270	石鏃	C-2類	頁岩	4.0	0.7	0.5	1.7以上	上下両端をわずかに欠損。
SI-379	271	石鏃	D類	流紋岩	2.1	1.4	0.6	1.6	先端を欠損。
SI-379	272	尖頭器	B類	流紋岩質的凝灰岩	4.2	1.6	1.0	4.1	両面加工。
SI-379	273	尖頭器	B類	赤玉	3.0以上	2.0	1.0	6.1以上	両面加工。先端を欠損。
SI-379	274	石鏃	C類	流紋岩	2.9	1.3	0.7	1.4	先端と基部の両端は著しく摩滅しており、石鏃に転用されている。
SI-379	275	石鏃	B-2類	流紋岩	4.6	1.6	1.0	5.1	基部の先端は薄く仕上げられており、使用痕は不鮮明。
SI-379	276	石鏃	A類	珪化岩(黄色)	5.0	2.8	0.8	14.0	端部を欠損。
SI-379	277	搔削器類	E類	玉髄	3.8	2.3	0.6	4.8	横長剥片を素材とする。表面に自然面を残す。
SI-379	278	搔削器類	C類	チャート	2.4	2.2	0.8	3.5	一部欠損。

第4節 縄文時代の遺構と遺物

SI-379	279	挿筒器類	B類	流紋岩	7.4	3.7	1.2	34.6	横長薄片を素材とし、表面の周縁に調整を加える。
SI-379	280	挿筒器類	B類	頁岩	5.7	4.4	1.6	28.9	表面に自然面残す。裏面は2回の潤磨で刃部を作り出す。
SI-379	281	挿筒器類	E類	流紋岩	3.0	2.0	0.5	2.6	横長薄片を素材とする。
SI-379	291	磨石類	A-2類	玄武岩(新第三紀)	11.8	8.6	7.0	1127.4	一部欠損。
SI-379	292	磨石類	B-1類	輝石安山岩	8.2	5.8	3.8	260.2	長軸方向の端部に敲打痕有り。
SI-379	293	磨石類	B-1類	輝石安山岩	8.1	7.4	4.9	364.4	
SI-379	294	磨石類	B-1類	玄武岩(新第三紀)	11.0以上	8.0	5.4	817.4以上	鋼線部に敲打痕。長軸方向の端部に強い敲打痕。トーンの部分は黒色物質付着。半分を欠損。
SI-379	295	磨石類	B-2類	輝石安山岩	8.6	6.5	5.5	477.1	鋼線にわずかに敲打痕。
SI-379	296	磨石類	B-2類	輝石安山岩	10.1	8.6	6.6	923.6	鋼線に敲打痕。長軸の両端は特に強い敲打痕。トーンの部分は黒色物質付着。
SI-379	297	磨石類	B-1類	花崗閃緑岩	10.2	7.3	4.6	497.4	完形。
SI-379	298	磨石類	C-1類	流紋岩質凝灰岩	10.8	7.1	4.6	427.8	表裏面に数か所の凹み。
SI-379	299	磨石類	C-1類	流紋岩質凝灰岩	8.8	7.0	4.5	317.8	表面に径1.2cm、深さ1cmの穿孔有り。有頭の石棒で、頭部と頸部、胴部の一部が遺存する。胴部は短軸方向に破損する。横断面は長楕円形。頸部は明瞭な段をなす。全体的に研磨される。
SI-379	300	石剣・石棒類	-	粘板岩	9.2以上	3.8	2.0	72.2以上	表面の周縁から粗い潤磨を施して大形楕円形の礫器状に加工されている。表裏面の状態から石面の再加工と思われる。重量から手持ちの石器と考えがたい。
SI-379	301	礫器	-	花崗閃緑岩	24.5	17.0	6.4	3890.8	
SI-380	54	石鏝	B-2類	碧玉	3.6	1.0	0.4	1.5	完形。
SI-380	55	石鏝	B-2類	柱状頁岩	2.8	1.0	0.6	1.2	先端部を欠損。
SI-380	56	石鏝	B-2類	流紋岩	2.4以上	1.0	0.6	1.2以上	先端部と基部を欠損。
SI-380	57	石鏝	C-1類	流紋岩	1.9以上	1.2	0.5	0.7以上	先端部を欠損。
SI-380	58	石鏝	D類	赤玉	2.7	1.7	0.6	2.4	先端と基部の一部を欠損。
SI-380	59	石鏝	F類	玉髄	1.6以上	1.4	0.5	0.9以上	下半部を欠損。
SI-380	60	石鏝	C類	頁岩(新第三紀)	3.1	1.4	0.8	2.2	先端部は欠損後わずかに摩研。石鏝を石鏝に彫用。
SI-380	61	挿筒器類	B類	流紋岩	2.8以上	2.0	0.8	4.6以上	打面部を欠損する。
SI-380	62	挿筒器類	B類	流紋岩	6.4	2.1	0.9	10.9	表面に自然面残す。
SI-380	63	挿筒器類	B類	流紋岩	3.9	2.7	1.4	10.6	表面に自然面残す。
SI-380	64	挿筒器類	B類	流紋岩	2.0以上	1.6	0.4	1.1以上	上半を欠損する。
SI-380	65	挿筒器類	B類	デイサイト	2.5	1.9	0.4	2.5	小形の縦長薄片を素材とする。表裏の周縁に調整施す。
SI-380	67	磨石類	B-1類	黒雲母流紋岩	9.3	7.2	3.7	274.7	一部欠損。
SI-380	68	石剣・石棒類	-	粘板岩	11.3以上	3.2	1.2	55.4以上	石剣。器体は胴部で短軸方向に欠損する。横断面は凸レンズ状で、両端は鋭角に作り出される。
SI-381	74	石鏝	B-5類	赤玉	2.4	1.6	0.9	3.1	表面に節理面残す。
SI-381	75	石虎	C類	赤玉	3.4	5.3	0.9	14.6	横型石鏝。裏面は節理面。
SI-381	78	磨石類	C-1類	輝石安山岩	9.3	8.5	5.2	643.1	片面の中央に浅い凹み。鋼線に敲打痕。
SI-395	166	石鏝	B-1類	流紋岩	2.1以上	1.6	0.7	1.2以上	先端を欠損。
SI-395	167	石鏝	B-1類	赤玉	1.4	0.4	0.7	1.3	先端をわずかに欠損。
SI-395	168	石鏝	B-2類	流紋岩	2.1以上	1.2	0.4	0.9以上	先端を欠損。基部にアスファルト付着。
SI-395	169	石鏝	B-1類	赤玉	1.9以上	1.7	0.4	1.2以上	基部を欠損。
SI-395	170	石鏝	B-1類	頁岩	3.0	1.9	0.7	2.6	先端を欠損。
SI-395	171	石鏝	B-1類	頁岩(新第三紀)	3.2	1.2	0.5	1.8	先端を欠損。
SI-395	172	石鏝	B-2類	頁岩(新第三紀)	3.9	1.6	0.8	3.7	完形。
SI-395	173	石鏝	B-2類	流紋岩質凝灰岩	3.9以上	1.6	0.8	3.4以上	先端を欠損。
SI-395	174	石鏝	B-2類	玉髄	1.9以上	1.0	0.4	0.7以上	先端を欠損。
SI-395	175	石鏝	B-2類	玉髄	2.1	0.9	0.4	0.4	完形。
SI-395	176	石鏝	C-2類	流紋岩(赤玉質)	3.3以上	1.5	0.9	4.4以上	先端を欠損。
SI-395	177	石鏝	D類	玉髄	2.2以上	1.0	0.6	1.4以上	先端と基部を欠損。
SI-395	178	石鏝	D類	流紋岩	3.0	1.7	0.8	4.0	表面に自然面残す。
SI-395	179	石鏝	E類	頁岩	3.3	0.9	0.4	1.0	完形。
SI-395	180	石鏝	E類	流紋岩	3.6	0.7	0.7	1.2	完形。
SI-395	181	石鏝	F類	流紋岩	2.3以上		0.3	0.5以上	基部を欠損。

第3章 川戸釜八幡遺跡

SI-395	182	石蔵	F 類	流紋岩 (赤玉質)	2.0	1.5 以上	0.3	0.8 以上	下半部を欠損。
SI-395	183	石蔵	F 類	玉髄	1.4 以上	1.2	0.3	0.5 以上	下半部を欠損。
SI-395	184	尖頭器	B 類	頁岩	2.6 以上	2.0	0.5	2.1	両面加工。器体の大半を欠損。
SI-395	185	石蔵	C 類	流紋岩	2.3	1.1	0.4	0.8	先端部は摩滅する。石蔵を石蔵に転用。
SI-395	186	播磨器類	B 類	頁岩	6.2	3.3	1.3	25.6	横長割片を素材とする。表面の周縁に調整を加える。
SI-395	187	播磨器類	B 類	頁岩	4.3 以上	3.1 以上	1.0	13.0 以上	表面に自然面残す。上半を欠損。
SI-395	188	播磨器類	B 類	頁岩	3.8	5.9	1.4	30.8	表面に自然面残す。打面部を欠損する。不整形な横長割片を素材とする。打面部の表裏に調整を加える。
SI-395	189	播磨器類	D 類	頁岩	2.5	3.0	0.9	6.0	縦長割片を素材とする。周縁に細かい調整を施す。
SI-395	190	播磨器類	C 類	流紋岩	5.1	3.3	1.1	17.3	縦長割片を素材とする。表面に自然面を大きく残す。
SI-395	191	播磨器類	B 類	頁岩	4.4	2.5	0.7	8.0	打面部を欠損する。
SI-395	192	播磨器類	E 類	頁岩	4.1 以上	4.8	1.6	36.6 以上	不整形な割片を素材とし、周縁の表裏から調整を行う。
SI-395	193	播磨器類	E 類	頁岩	4.0 以上	4.4	1.5	28.9 以上	器体の大半を欠損。
SI-395	194	播磨器類	E 類	玉髄	1.0 以上	2.3	0.3	1.1 以上	割片を切削し、切断面から調整調整を加える。また、下端部縁辺の表裏にも調整を行う。
SI-395	195	播磨器類	D 類	流紋岩	3.2	1.7	0.7	3.6	不整形な縦長割片を素材とする。下半部を欠損。
SI-395	196	使用痕のある割片	A 類	頁岩	8.0 以上	7.2	1.6	72.9 以上	縦長割片を素材とする。打面部を欠損する。
SI-395	197	使用痕のある割片	A 類	頁岩	3.3	4.4	0.8	8.6	不整形な横長割片。
SI-395	198	使用痕のある割片	B 類	頁岩	3.8	4.7	1.1	16.1	表面に自然面残す。
SI-395	199	使用痕のある割片	B 類	玉髄	4.4	2.8	0.7	7.9	不整形な横長割片を素材とする。
SI-395	200	使用痕のある割片	B 類	頁岩	4.4	5.6	1.3	32.0	両側縁に使用痕。打面部を欠損する。
SI-395	201	使用痕のある割片	B 類	頁岩	4.5 以上	4.2	1.0	13.4 以上	石製の石冠。側面の一端に寄った位置に表裏両面から穿孔される。底面は中央に溝が刻まれる。薄いトーンで示した部分に黒線を塗り、さらに濃いトーンで示した部分にベンガラを重ねている。
SI-395	205	石冠	-	ドレライト (新三紀)	13.8	4.7 以上	7.0	495.9	頭部が石棒状で底面が平坦な石冠。薄いトーンの部分には黒色物質が付着し、半月形と小さい円を描いている。黒色物質の種類は不明。
SI-395	206	石冠	-	斑岩	10.0	4.0	9.5	393.1	先端をわずかに欠損。
SI-403	294	石蔵	A-1 類	赤玉	2.4	1.0	0.4	1.0	先端を欠損。
SI-403	295	石蔵	A-1 類	流紋岩	1.7 以上	1.9	0.6	1.2 以上	完形。
SI-403	296	石蔵	A-2 類	流紋岩	2.0	1.0	0.4	0.6	先端と基部を欠損。基部にアスファルト付着。
SI-403	297	石蔵	B-1 類	流紋岩	2.0 以上	1.3	0.4	0.9 以上	完形。
SI-403	298	石蔵	B-1 類	流紋岩	2.4	1.2	0.6	1.2	先端を欠損。
SI-403	299	石蔵	B-1 類	赤玉	1.9 以上	1.3	0.4	0.8 以上	先端と基部を欠損。器体の下端から基部にアスファルト付着。
SI-403	300	石蔵	B-1 類	流紋岩	2.2 以上	1.1	0.5	1.0 以上	完形。
SI-403	301	石蔵	B-2 類	流紋岩	3.4	0.9	0.7	1.3	先端を欠損する。基部にアスファルト付着する。
SI-403	302	石蔵	B-1 類	流紋岩	2.6 以上	1.4	0.5	1.3 以上	横長割片を素材とする。基部を欠損する。上半部を欠損。破損面にアスファルト付着。
SI-403	303	石蔵	B-1 類	頁岩	2.2 以上	1.3	0.4	1.0 以上	上半部を欠損。破損面にアスファルト付着。
S-403	304	石蔵	B-1 類	赤玉	2.3 以上	1.2	0.5	1.2 以上	上半部を欠損。
SI-403	305	石蔵	B-1 類	赤玉	1.6 以上	1.6	0.5	1.3 以上	上半部を欠損。

第4節 縄文時代の遺構と遺物

SI-403	306	石蔵	B-2類	流紋岩	3.4以上	1.3	0.5	1.7	先端と基部を欠損。器体の下端にアスファルト付着。
SI-403	307	石蔵	B-2類	流紋岩	2.7	0.8	0.6	0.8	基部に散置のアスファルト付着。
SI-403	308	石蔵	B-2類	玉髄	1.7以上	0.9	0.4	0.5以上	先端を欠損。全体的にわずかなアスファルトの付着あり。
SI-403	309	石蔵	C-2類	珪化頁岩	3.5	1.2	0.6	2.1	完形。
SI-403	310	石蔵	E類	流紋岩	3.0以上	1.0	0.9	2.1以上	左右非対称形。基部を欠損。
SI-403	311	石蔵未製品	F類	流紋岩	2.4	1.5以上	0.5以上	1.3以上	不整形な剥片を素材とする。片面の周縁に調整が施される。石蔵の未製品か。
SI-403	312	石蔵	F類	頁岩	1.9以上	1.6以上	0.4	1.0以上	先端部をわずかに欠損する。下半部を欠損する。
SI-403	313	石蔵	F類	流紋岩	2.8以上	1.6	0.5	2.2以上	横長剥片を素材とする。先端と基部を欠損する。表裏面の周縁に調整施す。
SI-403	314	石蔵	F類	赤玉	1.7以上	1.1	0.5	0.9以上	先端と下平を欠損。
SI-403	315	石蔵	C-1類	流紋岩	2.7	1.8	0.6	2.3	完形。周縁に微細な調整を行う。
SI-403	316	尖頭器	A類	頁岩	2.3以上	2.2	0.9	5.1以上	器体の上半部を欠損する。横長剥片を素材とする。両面の周縁に調整を施す。
SI-403	317	尖頭器	A類	頁岩	3.6以上	2.1	0.9	7.7以上	上半部を欠損する。
SI-403	318	尖頭器	B類	頁岩	3.7以上	1.9	1.1	7.7以上	先端部と基部を欠損する。基部は節理面で破損する。
SI-403	319	石鏝	B-2類	玉髄	2.6	1.5	0.6	2.5	小形の縦長剥片を素材とする。先端に使用痕。
SI-403	320	石鏝	C類	流紋岩	2.9以上	1.0以上	0.5	1.4以上	器体が縦方向に欠損する。残存した基部の先端にわずかに使用痕が認められる。石蔵の破損品か未製品を石鏝に転用したもの。
SI-403	321	石鏝	C類	流紋岩	3.2	1.2	0.6	2.0	基部の先端は使用による摩滅が認められる。石蔵を石鏝に転用。基部にアスファルト付着。
SI-403	322	彫器		頁岩	4.8	3.4	1.1	11.7	先端部は両側縁から抉りを入れて作り出す。先端部の片側（節理面）に数回の打面調整を入れ、鋭角をなす反対面に彫刻刀面を2回の打撃で作れ出す。縁辺に使用痕も認められるので、部分的な使用方も想定される。左下の端部を欠損。
SI-403	323	石匙	A類	頁岩（新第三紀マキヤマナクニイあり）	5.0	2.6	0.9	10.5	横長剥片を素材とし、縦形石匙に仕上げる。
SI-403	324	石匙	E類	珪化流紋岩（赤玉質）	4.3	3.4	1.1	17.6	横型石匙。中央で縦に欠損する。欠損面から再調整を加える。
SI-403	325	石匙	C類	流紋岩	4.2	7.4	1.0	19.6	横長剥片を素材とする横形石匙。
SI-403	326	石匙	E類	流紋岩	3.7以上	3.2	1.3	17.6以上	斜刃形石匙。器体の半分を欠損。
SI-403	327	石匙	E類	流紋岩	6.1	7.2	1.7	47.7	横長剥片を素材とする斜刃形石匙。表面に自然面と節理面を残す。
SI-403	328	搔削器類	B類	流紋岩	4.3	4.4	1.1	21.9	不整形な剥片を素材とする。端部を欠損する。
SI-403	329	搔削器類	B類	頁岩	4.1	1.7	0.6	3.3	横長剥片を素材とする。打面部を除く調整を施す。表面に節理面を残す。
SI-403	330	搔削器類	B類	流紋岩	4.3	3.9	1.2	20.8	不整形な縦長剥片を素材とする。表面に自然面を大きく残す。
SI-403	331	搔削器類	B類	頁岩	3.6	2.1	0.9	4.2	不整形な縦長剥片を素材とする。末端部を欠損する。
SI-403	332	搔削器類	B類	流紋岩	3.9	1.9	0.8	5.6	完形。縦長剥片を素材とする。表裏の縁辺部に微細な調整が施される。
SI-403	333	搔削器類	E類	頁岩	5.6	8.7	1.5	87.6	横長剥片を素材とする。
SI-403	334	搔削器類	B類	頁岩	6.5	3.8	1.0	26.4	やや不整形な縦長剥片を素材とし、打面と表面に自然面を残す。
SI-403	335	搔削器類	B類	流紋岩	4.6	3.1	1.1	17.1	完形。縦長剥片を素材とし、打面に自然面を残す。

第3章 川戸釜八幡遺跡

SI-403	336	挿削器類	C 類	流紋岩	1.7	2.6	0.7	2.3	上端部を欠損する。表面とも調整面残りが施される。
SI-403	337	挿削器類	C 類	赤玉	1.5	1.3	0.2	0.9	完形で、小形の縦長測片を素材とする。
SI-403	338	挿削器類	D 類	赤玉	4.0	2.4	0.8	9.6	縦長測片を素材とし、周縁全体が調整される。
SI-403	339	使用痕のある測片	A 類	玉髓	2.9	1.4	0.6	1.6	打面に自然面、表面に節理面残す。
SI-403	340	使用痕のある測片	A 類	珪質頁岩 (古期)	4.3	2.0	0.9	7.7	不整形な縦長測片を素材とする。
SI-403	341	使用痕のある測片	A 類	頁岩	5.0	2.6	1.0	11.2	縦長測片を素材とする。打面部、右側縁部、末端部を破損する。
SI-403	342	使用痕のある測片	B 類	流紋岩	3.3	5.1	1.1	21.0	横長測片を素材とする。周縁に使用痕。
SI-403	343	石核	-	赤玉	3.2	1.9	1.8	10.3	小形で不整形な測片を測離。各面に節理面残す。
SI-403	350	磨石類	B-1 類	流紋岩質溶結凝灰岩	13.1	9.2	5.0	741.6	側縁に敲打痕。
SI-403	351	磨石類	B-1 類	輝石安山岩	10.1	6.9	4.4	473.7	両端にわずかに敲打痕。
SI-403	352	磨石類	A-2 類	流紋岩	6.0 以上	4.1	4.2	122.4 以上	一部欠損。
SI-403	353	磨石類	A-1 類	輝石安山岩	8.0	5.1	2.3	119.3	
SI-403	354	小礫	-	頁岩	3.2	1.6	0.7	4.2	完形。片面の凹んだ部分に赤色顔料が遺存する。反対面にもごく薄く赤色顔料の付着が認められる。
SI-404	147	石鏝	B-1 類	流紋岩	2.8	1.1	0.3	0.8	完形。
SI-404	148	石鏝	B-1 類	頁岩	2.6	1.4	0.4	1.0	完形。
SI-404	149	石鏝	C-1 類	赤玉	1.9	1.0	0.5	0.9	表面の周縁に調整。裏面は主要測離面のまま残される。
SI-404	150	挿削器類	D 類	頁岩	3.0	5.0	1.3	20.4	表裏面の縁辺に粗い調整を施す。表面に自然面残す。
SI-404	151	挿削器類	D 類	頁岩	3.7	4.7	1.4	20.4	不整形な横長測片を素材とする。表面に自然面残す。
SI-404	152	使用痕のある測片	A 類	頁岩	6.5	3.6	1.1	17.1	縦長測片を素材とする。打面に自然面残す。両側縁に使用痕。
SI-404	153	使用痕のある測片	A 類	頁岩	4.9 以上	3.0	1.5	19.9 以上	やや不整形な縦長測片を素材とする。両側縁に使用痕。
SI-404	154	使用痕のある測片	B 類	流紋岩	4.6	2.1	1.3	7.4	表面にアスファルト付着。
SI-404	155	使用痕のある測片	B 類	流紋岩	4.2	6.4	1.6	33.6	横長測片。表面に自然面残す。
SI-404	156	磨石類	B-1 類	流紋岩質凝灰岩	6.7	5.7	3.8	159.9	側縁に敲打痕。
SK-409	4	磨石類	C-1 類	デイサイト	12.3	8.0	5.0	647.8	表裏に浅い凹み。側縁に敲打痕。被熱で全体にひび割れ。
SK-413	32	石礫	B-2 類	頁岩 (新第三紀)	3.5	1.3	0.6	1.4	先端はわずかに摩滅する。片面の基部にアスファルト付着。
SK-413	33	挿削器類	C 類	頁岩	6.0	3.8	1.4	28.8	やや不整形な縦長測片を素材とする。
SK-413	38	磨石類	B-2 類	花崗閃緑岩	5.3	4.6	4.1	117.8	

(2) 磨製石斧

遺構	遺物番号	石質	長さ	幅	厚さ	重さ	特徴	刃部角度
SI-104	243	玄武岩 (新第三紀)	8.4 以上	4.6	2.5	152.5 以上	基部を欠損する。	77
SI-379	282	輝石安山岩 (新第三紀)	8.7 以上	5.2	3.0	234.4 以上	基部を欠損する。	85
SI-403	346	玄武岩 (新第三紀)	15.0 以上	7.0	4.9	762.8 以上	刃部、基部を欠損する。	-
SI-403	347	玄武岩 (新第三紀)	12.7 以上	6.4	3.8	467.6 以上	基部を欠損する。	85

(3) 打製石斧

遺構	遺物番号	石質	長さ	幅	厚さ	重さ	特徴	刃部角度	刃部幅	括れ部幅	頭部幅
SI-104	242	董青石ホルンフェルス	14.8	7.2	3.5	440.4	不整形な分刺形。表面に自然面残す。上端を欠損。	90	7.2	5.8	6.2

SI-381	76	頁岩	5.1	5.6	2.1	60.6	節理面で破損し、刃部のみ遺存する。切創形。表面に大きく自然面を残す。	-	-	-	-
SI-403	348	閃緑斑岩	13.7	7.8	3.0	452.0	縦長薄片を素材とする。平面楕円形で、表面の刃部付近に自然面を残す。	-	-	-	-
SI-403	349	頁岩	12.2	7.6	1.2	89.4	小型の分削形。	44	7.5	4.4	5.8
SK-413	34	頁岩	15.5	8.7	1.9	265.9	分削形石斧。	55	8.6	5.5	7.9

(4) 石錘

遺構	遺物番号	分類	石質	長さ	幅	厚さ	重さ	特徴	組掛け部径	組掛け部全周	溝の幅	溝の深さ
SI-104	244	A類	頁岩	5.3	3.2	2.1	64.7	長軸方向に1条の沈線を含む。石棒の転用。	4.7	13.7	0.2	0.1
SI-379	283	A類	頁岩	6.2	4.7	2.1	89.4	長軸方向に1条の溝。	5.8	13.0	0.4	0.3
SI-379	284	A類	砂岩	4.2	3.5	1.4	35.8	長軸方向に1条の溝。	4.5	10.5	0.2	0.1
SI-379	285	A類	頁岩	5.3	4.5	1.5	67.1	長軸方向に1条の溝。	5.4	12.2	0.1	0.1
SI-379	286	A類	頁岩	5.3	4.6	1.0	40.7	長軸方向に1条の溝。	4.9	10.8	0.2	0.1
SI-379	287	A類	頁岩	4.6 以上	2.6 以上	1.1	21.5	長軸方向に1条の溝。一部欠損。	4.2	9.4	0.2	0.1
SI-379	288	A類	輝石安山岩 (新第三紀)	5.0 以上	3.3 以上	1.3	28.8	長軸方向に1条の溝。一部欠損。	4.3	9.9	0.2	0.1
SI-379	289	B類	頁岩	5.8	4.1	1.4	57.6	長軸方向の両端に切り込み。	5.3	11.9	-	-
SI-379	290	B類	頁岩	7.3	4.7	1.3	70.1	長軸方向の両端に切り込み。	6.6	13.9	-	-
SI-380	66	A類	頁岩	5.6	4.7	1.3	48.3	長軸方向に1条の溝。一部欠損。	5.0	11.2	0.1	0.4
SI-381	77	A類	頁岩	6.3	4.1	1.6	56.3	長軸方向に1条の溝。	6.0	13.4	0.4	0.1
SI-395	202	A類	頁岩	5.4	4.8	1.4	58.4	長軸方向に溝1条。	4.9	10.9	0.3	0.1
SI-395	203	A類	頁岩	5.2 以上	3.8	0.8	17.6	長軸方向に溝1条。片面が全面的に剥落。	4.5	9.6	0.2	0.1
SI-395	204	B類	頁岩	4.6	3.8	1.0	28.8	長軸方向の端部に切り込み。	3.9	9.0	-	-
SI-403	344	A類	砂質頁岩	4.9	3.7	1.9	46.5	長軸方向に溝1条を含む。	4.4	10.7	0.3	0.2
SI-403	345	A類	頁岩	5.0	3.3	1.2	29.6	長軸方向に溝1条を含む。	4.5	10.0	0.2	0.1
SK-407	11	A類	頁岩	5.4	5.0	1.2	53.1	長軸方向に溝1条。	4.8	11.0	0.3	0.1
SK-413	35	A類	頁岩	6.5	4.0	1.3	44.7	長軸方向に溝1条。	6.0	13.2	0.2	0.1
SK-413	36	A類	頁岩	4.0	2.9	1.1	21.8	長軸方向に溝1条。	4.0	9.4	0.2	0.1
SK-413	37	A類	頁岩	4.3	3.5	1.0	23.2	長軸方向に溝1条。	3.9	9.0	0.1	0.1

(5) 石皿

遺構	遺物番号	石質	長さ	幅	厚さ	重さ	特徴	機能面長さ	機能面幅	機能面厚さ	機能面の深さ
SI-379	302	スコリア 質安山岩 (第四紀)	20.7以上	21.4以上	11.6	2720.5 以上	平面形は方形か。裏面に多数の凹みあり。大半を欠損。	-	-	-	-
SK-409	5	輝石安山岩 (第四紀)	29.6	23.0	5.9	4700.0	表面ともよく摩滅する。表面は全体が凹む。裏面は中央部に10ヵ所以上の浅い凹みが認められる。	18.9	13.3	4.1	1.8
SX-232	8	多孔質 安山岩 (第四紀)	15.3以上	20.2	6.5	2616.3	器体の半分が欠損。平面形は楕円形。	12.4以上	13.9	3.5	3.0

第6表 遺構外出土石器計測表

(1) 剥片石器・磨石類・石製品等

単位: cm・g

遺物番号	出土位置	器種	分類	石質	長さ	幅	厚さ	重さ	特徴
1	H13(a)区	石鏃	A-1類	頁岩	2.0	1.5	0.4	0.8	完形。
2	H13(a)区	石鏃	A-1類	埴貫頁岩 (新第三紀)	2.8	1.8	0.3	1.4	完形。
3	表土中	石鏃	A-1類	頁岩	2.7	1.5	0.5	1.3	完形。
4	表土中	石鏃	A-1類	流紋岩	2.2	1.3	0.3	1.0	完形。
5	包含層	石鏃	A-1類	赤玉	1.9	1.3	0.4	0.9	先端を欠損。先端付近にアスファルト付着。
6	包含層	石鏃	A-1類	頁岩 (新第三紀)	3.2以上	1.4	0.4	1.2 以上	先端と脚部をわずかに欠損。基部付近にアスファルト付着。
7	表土中	石鏃	A-1類	頁岩	2.6以上	1.5以上	0.5	1.6以上	先端部と脚部の片方を欠損。
8	H16区	石鏃	A-1類	赤玉	2.3	1.2	0.4	0.8以上	脚部の片方を欠損。
9	H15(a)区	石鏃	A-2類	頁岩	2.7	1.6	0.6	1.6	完形。
10	H13(a)区	石鏃	A-2類	チャート	2.6	1.7	0.3	1.7	完形。
11	H13(a)区	石鏃	A-2類	頁岩	2.2	1.4	0.4	1.1	先端を欠損。表面に自然面残す。
12	H13(a)区	石鏃	A-2類	流紋岩	2.1	1.4以上	0.4	1.1以上	脚部の片方を欠損。
13	H13(a)区	石鏃	A-2類	頁岩	1.8以上	1.6	0.4	0.8以上	先端部を欠損。
14	表土中	石鏃	A-2類	流紋岩	2.3以上	1.3	0.4	1.0以上	完形。
15	包含層	石鏃	A-2類	変質流紋岩 (貫貫頁岩)	2.3	1.8	0.8	2.6	完形。
16	H11(a)区	石鏃	B-1類	デイスサイト	2.4	1.3	0.4	0.9	基部先端を欠損。
17	H15(a)区	石鏃	B-1類	頁岩 (新第三紀)	3.2	1.4	0.5	1.3	基部にアスファルト付着。
18	H11(a)区	石鏃	B-1類	チャート	3.1	1.6	0.4	1.6以上	基部先端欠損。基部にアスファルト付着。
19	H11(a)区	石鏃	B-1類	頁岩	2.7	1.6	0.4	1.3	基部先端欠損。基部にアスファルト付着。
20	H17(b)区	石鏃	B-1類	赤玉	2.8	1.3	0.6	1.3	完形。
21	H17(b)区	石鏃	B-1類	流紋岩	2.3	1.3	0.5	0.8	表裏面にアスファルト付着。
22	H15(a)区	石鏃	B-1類	チャート	2.1	1.1	0.3	0.4	完形。
23	H15(b)区	石鏃	B-1類	流紋岩	2.0	1.1	0.4	0.7	基部にアスファルト付着。先端を欠損。
24	H13(a)区	石鏃	B-1類	流紋岩	1.8以上	1.3	0.4	0.7以上	基部を欠損。
25	H13(a)区	石鏃	B-1類	玉髓	1.9	1.3	0.4	0.9	完形。
26	H17(b)区	石鏃	B-1類	流紋岩	2.8	1.3	0.5	1.2	完形。
27	H11(a)区	石鏃	B-1類	玉髓	2.1	1.2	0.5	0.7	完形。
28	H13(a)区	石鏃	B-1類	流紋岩	2.1	1.3	0.4	0.7	完形。先端部にアスファルト付着
29	H15(a)区	石鏃	B-1類	玉髓	1.9以上	1.0	0.5	0.7以上	基部欠損。器体下部にアスファルト付着。
30	H17(b)区	石鏃	B-1類	玉髓	1.8以上	1.4	0.4	0.8以上	先端と基部を欠損。
31	H11(a)区	石鏃	B-1類	流紋岩	1.9以上	1.2以上	0.4	0.9以上	基部を欠損。基部にアスファルト付着。
32	H17(b)区	石鏃	B-1類	流紋岩	2.3	1.4	0.5	0.7	全体に微量の黒色物質が付着。
33	H13(a)区	石鏃	B-1類	流紋岩	2.3以上	1.6	0.7	1.4以上	先端部を欠損。
34	H13(a)区	石鏃	B-1類	赤玉	2.1	1.2以上	0.0	0.7	基部の片方を欠損。
35	H13(a)区	石鏃	B-1類	チャート	1.9以上	1.3	0.4	1.0以上	基部を欠損。
36	H17(b)区	石鏃	B-1類	流紋岩	2.3以上	1.3	0.4	1.1以上	先端を欠損。
37	包含層	石鏃	B-1類	玉髓	2.3	1.2	0.5	0.8	先端部にアスファルト付着。
38	H17(b)区	石鏃	B-1類	流紋岩	2.0	1.4	0.4	0.9	完形。
39	H15(b)区	石鏃	B-1類	流紋岩質 凝灰岩	1.4以上	1.0以上	0.3	0.3以上	基部を欠損。表面に自然面残す。風化が著しい。
40	H13(a)区	石鏃	B-2類	流紋岩	2.3以上	0.8	0.5	0.7以上	基部を欠損。
41	H17(b)区	石鏃	B-2類	頁岩	3.6	1.1	0.8	1.8	完形。
42	H17(b)区	石鏃	B-2類	玉髓	3.6	1.0	1.0	1.9	全体に微量のアスファルト付着。
43	H13(a)区	石鏃	B-3類	頁岩	3.2	1.5	0.4	1.4	完形。アスファルト付着。
44	H17(b)区	石鏃	B-3類	流紋岩	2.4以上	1.3	0.4	0.8以上	完形。
45	H17(b)区	石鏃	B-4類	流紋岩	2.5以上	1.4以上	0.6	1.3以上	基部の表裏面にアスファルト付着。
46	H15(a)区	石鏃	B-4類	頁岩	3.6	1.5	0.6	1.8	完形。先端の両側縁がわずかに膨らむ。
47	H15(a)区	石鏃	B-5類	頁岩	2.6	1.5	0.7	1.9	完形。
48	H17(b)区	石鏃	B-5類	流紋岩	2.3以上	1.2	0.6	1.3以上	完形。
49	H13(a)区	石鏃	B-5類	赤玉	2.3	1.1	0.3	0.9	完形。
50	表土中	石鏃	C-1類	玉髓	2.4	1.3	0.9	2.1	完形。
51	包含層	石鏃	C-1類	珪化岩	2.9	1.2	0.5	1.2	完形。
52	H15(a)区	石鏃	C-1類	頁岩	2.8以上	1.4	0.6	1.8以上	基部を欠損。
53	表土中	石鏃	C-1類	珪化岩	2.4	1.1	0.4	1.3	基部を欠損。
54	H16区	石鏃	C-1類	流紋岩	2.6	1.0	0.7	1.2	完形。
55	H17(b)区	石鏃	C-1類	頁岩	3.6	1.5	0.7	3.0	完形。
56	H13(a)区	石鏃	C-1類	玉髓	3.0	1.5	0.9	3.0	完形。基部に微量のアスファルト付着。

第4節 縄文時代の遺構と遺物

57	表採	石鏝	C-1類	玉軸	2.8	1.2	0.7	1.5	左右が非対称。
58	H15(a)区	石鏝	C-1類	玉軸	2.3	1.2	0.7	1.8	先端を欠損。
59	包含層	石鏝	C-1類	玉軸	2.2以上	1.2	0.5	0.9以上	基部を欠損。
60	包含層	石鏝	C-1類	流紋岩	3.8	1.8	0.9	5.1以上	完形。
61	H13(a)区	石鏝	C-1類	流紋岩	2.4	1.7	0.5	1.3	完形。
62	H15(a)区	石鏝	C-1類	玉軸	1.7	1.1	0.3	0.5	完形。
63	H11(a)区	石鏝	C-1類	玉軸	1.3	0.7	0.5	0.3	完形。
64	H17(b)区	石鏝	C-1類	玉軸	1.5	0.7	0.4	0.4以上	一部を欠損。
65	H13(a)区	石鏝	C-1類	赤玉	3.0	1.8	1.1	5.1	先端をわずかに欠損。
66	包含層	石鏝	C-1類	赤玉	2.4以上	2.2以上	0.6	2.0以上	先端部をわずかに欠損。
67	H13(a)区	石鏝	C-1類	流紋岩	2.0	0.7	0.2	0.4	完形。
68	H17(b)区	石鏝	C-2類	流紋岩	3.0	1.0	1.0	1.8	端部に摩滅が認められないので石鏝とする。
69	包含層	石鏝	C-2類	玉軸	2.8以上	1.1	0.5	1.1以上	先端と基部をわずかに欠損。
70	H13(a)区	石鏝	C-2類	流紋岩	3.7	1.0	0.7	2.4	完形。基部に微量のアスファルト付着。
71	H17(b)区	石鏝	C-2類	玉軸	2.2	0.5	0.2	0.3	表面に自然面を残す。
72	H13(a)区	石鏝	C-2類	砂質頁岩	3.7	1.0	0.6	1.7	先端部に摩滅が認められないので石鏝に分類。
73	H13(a)区	石鏝	C-2類	埴質頁岩 (新第三紀)	4.4	1.0	0.7	2.9	完形。使用痕が認められないので、石鏝に分類。
74	H13(a)区	石鏝	D類	流紋岩	2.9	1.8	0.7	3.2	完形。
75	H15(a)区	石鏝	D類	玉軸	1.7以上	1.7	0.4	1.1以上	先端を欠損。
76	H17(b)区	石鏝	D類	砂質頁岩	3.4	2.2	0.8	完形	両面加工。表面に自然面を残す。
77	H19区	石鏝	D類	赤玉	2.4	1.7	0.8	2.6	表面に磨理面を残す。
78	包含層	石鏝	E類	流紋岩	2.9	1.7以上	0.9	2.7以上	左右が非対称な形態。
79	H17(b)区	石鏝	E類	流紋岩	3.7	1.2	1.0	3.3	片削形の形態。
80	H15(a)区	石鏝	E類	頁岩	2.3	1.4以上	0.3	0.8以上	完形。器体の左右は非対称形。基部にアスファルト付着。
81	H14(b)区	石鏝	F類	玉軸	2.9	1.9以上	0.9	4.5以上	基部を欠損。
82	H13(a)区	石鏝	F類	チャート (赤色 チャート)	3.0	2.0	0.5	3.2	基部を欠損。
83	H17(b)区	石鏝	F類	赤玉	2.6	1.4	0.7	2.5	基部を欠損。
84	H13(a)区	石鏝	F類	砂質頁岩	2.6以上	1.6	0.8	2.9以上	基部を欠損。
85	H17(b)区	石鏝	F類	流紋岩	1.7以上	1.3	0.3	0.7以上	先端と基部を欠損。
86	包含層	石鏝	F類	玉軸	2.3以上	1.4	0.6	1.7以上	先端と基部を欠損。
87	H17(b)区	石鏝	F類	玉軸	2.3	1.3以上	0.7	1.4以上	下半部を欠損。
88	H13(a)区	石鏝	F類	赤玉	2.3以上	1.5以上	0.4	0.8以上	下半部を欠損。
89	H13(a)区	尖頭器	A類	頁岩	5.4	1.9	0.8	6.1	完形。左右はやや非対称形。
90	表土中	尖頭器	A類	頁岩 (新第三紀)	6.0以上	2.4	0.5	9.4以上	縦長割片を素材とし、両面の周縁部を加工する。先端を欠損。
91	包含層	尖頭器	A類	頁岩	4.7	1.7	0.8	6.4	小形の両面加工尖頭器。先端と基部をわずかに欠損。
92	包含層	尖頭器	A類	頁岩	3.2以上	1.9	0.8	4.7以上	両面の周縁を加工する尖頭器。器体の上半部を欠損。
93	H13(a)区	尖頭器	A類	頁岩	2.7以上	2.1	0.8	2.9	縦長割片を素材とし表面の周縁を加工。器体の上半部を欠損。
94	H16区	尖頭器	B類	頁岩	5.9以上	2.5	1.0	14.2以上	両面加工。器体の半分を欠損。
95	H17(b)区	尖頭器	B類	赤玉	3.1以上	1.9	0.9	5.2以上	器体上半部を欠損。
96	包含層	石鏝	A類	流紋岩	5.9	1.1	0.8	3.8	先端部に使用痕有り。先端部付近にアスファルト付着。
97	表土中	石鏝	A類	流紋岩	4.2以上	0.9	0.8	2.5以上	基部を欠損。端部の先端は回転運動による摩滅が認められる。
98	H15(a)区	石鏝	A類	頁岩 (新第三紀)	4.0	0.8	0.5	2.0	両端はわずかに摩滅する。
99	H15(a)区	石鏝	A類	頁岩	3.8	0.9	0.5	2.1	先端部が摩滅する。
100	H14(b)区	石鏝	A類	流紋岩	3.5	1.1	0.8	2.3	両端部の摩滅する。
101	H11(a)区	石鏝	A類	流紋岩	3.2以上	0.6	0.5	1.2以上	基部を欠損するが、先端に使用痕あり。
102	H13(a)区	石鏝	A類	頁岩	4.6以上	1.1	0.7	3.9以上	縦長割片を素材とする。基部を欠損する。先端部に摩滅が認められる。
103	H17(b)区	石鏝	A類	流紋岩	3.0	0.9	0.8	2.0	両端が著しく摩滅する。

第3章 川戸釜八幡道跡

104	H15(a)区	石籬	A類	玉髄	2.6	0.9	0.5	1.2	先端部が摩滅。
105	H17(b)区	石籬	A類	頁岩 (新第三紀)	3.0	0.8	0.5	1.1	両端が著しく摩滅する。
106	表土中	石籬	A類	流紋岩	2.4	0.6	0.3	0.5	完形。籬部の先端は回転運動による摩滅が認められる。
107	H17(b)区	石籬	A類	玉髄	2.3以上	0.6	0.7	1.0以上	先端部を欠損。
108	H15(a)区	石籬	A類	埴貫頁岩 (新第三紀)	2.3	0.7	0.5	0.8	上下両端が摩滅する。
109	包含層	石籬	A類	玉髄	2.7	1.0	0.9	1.5	先端は摩滅。
110	H15(a)区	石籬	A類	埴貫頁岩 (古期)	4.6以上	0.9	0.7	以上	先端部が著しく摩滅する。上端部を欠損。
111	H13(a)区	石籬	B-1類	頁岩	3.7	1.5	0.6	1.5	先端部は摩滅する。
112	H17(b)区	石籬	B-1類	流紋岩	4.7	1.8	0.7	2.4	先端は著しく摩滅。
113	H15(a)区	石籬	B-1類	埴貫頁岩 (新第三紀)	4.6	1.9	0.6	2.3	先端部が摩滅。
114	H17(b)区	石籬	B-1類	頁岩	3.4	1.9	0.7	1.7	先端は著しく摩滅。
115	H15(a)区	石籬	B-1類	チャート	2.6以上	1.2	0.6	1.7以上	表面に自然面残る。籬の下半部を欠損。
116	H17(b)区	石籬	B-1類	玉髄	3.1	0.8	0.6	1.2以上	先端は著しく摩滅する。基部を欠損。
117	H17(b)区	石籬	B-1類	流紋岩	3.4以上	0.5	0.5	0.8以上	籬部は断面三角形。使用痕不鮮明。基部欠損。
118	包含層	石籬	B-2類	玉髄	3.1	1.4	0.8	2.4	先端は摩滅。
119	H13(a)区	石籬	B-2類	頁岩	3.6以上	1.8	0.4	2.8以上	籬部の先端を欠損する。
120	H13(a)区	石籬	B-2類	赤玉	2.4以上	2.1	0.7	3.8以上	籬部全体を欠損する。
121	表土中	石籬	B-2類	頁岩 (新第三紀)	4.3	1.4	0.5	2.9	縦長薄片を素材とする。先端部にわずかに摩滅が認められる。
122	H14(b)区	石籬	C類	頁岩	2.0以上	1.1以上	0.4	0.7以上	石籬を石籬に転用。先端部が摩滅。石籬の状態での基部を欠損する。
123	H17(b)区	石籬	C類	流紋岩	3.2	1.2	0.7	1.8	先端は著しく摩滅する。石籬からの転用。石籬の破損品を石籬に転用。先端は摩滅する。先端と基部を欠損。基部にアスファルト付着。
124	包含層	石籬	C類	流紋岩	2.9以上	1.3	0.5	1.7以上	先端は著しく摩滅しており、破損後石籬に転用可。基部を欠損。
125	H15(a)区	石籬	C類	頁岩 (新第三紀)	1.6	1.0以上	0.5	0.6以上	先端は著しく摩滅しており、破損後石籬に転用可。基部を欠損。
126	H13(a)区	石籬	A類	頁岩	6.0	2.3	0.8	13.1	縦長薄片を素材とする縦形石籬。
127	H15(a)区	石籬	A類	頁岩	7.0	1.8	0.7	7.2	縦長薄片を素材とする縦形石籬。
128	H13(a)区	石籬	A類	頁岩	8.2	2.9	1.1	23.2	縦長薄片を素材とする縦形石籬。
129	H11(a)区	石籬	B類	頁岩	6.9	2.9	0.7	12.5	縦長薄片を素材とする縦形石籬で、表面は周縁からの全面的な調整。裏面はつまみ部の周辺と、左側縁に人念な調整を加える。横形石籬。一部欠損。表面の広い範囲にアスファルト付着。
130	H15(a)区	石籬	C類	頁岩	5.6	6.6	1.4	24.3	横形石籬。
131	H15(a)区	石籬	C類	頁岩	3.6	6.4	0.9	16.3	横形石籬。
132	H13(a)区	石籬	C類	頁岩	3.2	5.4	0.6	8.6	縦長薄片を素材とする横形石籬。
133	H11(a)区	石籬	C類	頁岩 (礫状頁岩)	3.0	4.0以上	0.6	以上	横長薄片を素材とする横形石籬。一部を欠損する。
134	包含層	石籬	C類	流紋岩	3.2	5.1	0.5	7.1	横形石籬で表面に自然面残す。裏面の打点は調整段階で除去される。
135	H17(b)区	石籬	C類	頁岩	4.8	5.7以上	1.3	30.1以上	縦長薄片を素材とする縦形石籬。
136	表土中	石籬	C類	流紋岩	2.6	5.4	0.5	4.6	縦長薄片を素材とする縦形石籬。刃部の一部を欠損。
137	包含層	石籬	D類	頁岩	4.1	5.3	0.8	14.9	つまみが2カ所作り出される。横形石籬。
138	H17(b)区	石籬	E類	頁岩	3.0	6.5	0.9	20.4	表面に自然面残す。斜方形石籬。
139	包含層	石籬	E類	流紋岩	4.8	6.4	1.1	24.4	横形石籬。
140	H13(a)区	石籬	E類	流紋岩 (赤玉質)	4.1	5.4	1.0	17.1	斜方形石籬。つまみは先端が鋭利に仕上げられており、わずかに摩耗が認められる。籬としても使用した可能性がある。
141	包含層	石籬	E類	流紋岩	4.8	5.2	1.0	18.9	斜方形石籬。つまみ部にアスファルト付着。
142	H17(b)区	石籬	E類	埴貫流紋岩	5.1	2.7	1.0	14.8	縦長薄片を素材とする斜方形石籬。一部欠損。
143	包含層	石籬	E類	頁岩	4.4	5.5	0.9	14.9	斜方形石籬。
144	H17(b)区	石籬	E類	流紋岩	4.2	4.1	1.1	14.6	縦長薄片の端部を切断して素材とする斜方形石籬。

第4節 縄文時代の遺構と遺物

145	H19区	石造	E類	赤玉	3.4	3.1	1.1	9.2	斜刃形石造。
146	H11(a)区	掻削器類	B類	砂岩	10.6	3.3	1.3	38.5	縦長剥片を素材とする。表面の右側縁に調整。
147	H15(a)区	掻削器類	B類	頁岩	8.7	5.0	1.3	61.6	表面の節理面に化石化した木葉痕有り。
148	H13(a)区	掻削器類	B類	流紋岩	5.8以上	4.0	1.3	31.0以上	縦長剥片を素材とし、両側縁に調整を行う。上半部を欠損。
149	包含層	掻削器類	B類	頁岩	9.4	5.1	0.9	41.4	剥片の中央部に垂直方向から与えられた打撃により剥離された剥片を素材とする。
150	表土中	掻削器類	B類	頁岩	6.2	4.6	1.3	40.1	やや不整な縦長剥片を素材とする。
151	H17(b)区	掻削器類	B類	頁岩	4.7以上	2.6	0.9	8.0以上	縦長剥片を素材とする。器体が縦方向に欠損。
152	表土中	掻削器類	B類	流紋岩	3.4	1.8	1.0	5.4	縦長剥片を素材とする。
153	包含層	掻削器類	B類	玉髓	2.5	1.2	0.7	1.8	小形の縦長剥片を素材とする。
154	包含層	掻削器類	B類	頁岩	3.9	1.7	1.0	5.9	縦長剥片。打面部分を欠損する。
155	包含層	掻削器類	B類	頁岩	2.5	2.4	1.0	4.4	不整形な剥片を素材とする。打面は自然面。
156	包含層	掻削器類	B類	玉髓	1.5以上	1.1	0.3	0.4以上	完形。
157	包含層	掻削器類	B類	玉髓	3.0	1.5	0.5	2.3	やや不整形な縦長剥片を素材とする。
158	H15(a)区	掻削器類	B類	頁岩	3.9	1.3	0.8	2.5	縦長剥片の打面側を切断し、周縁に調整を施す。
159	包含層	掻削器類	B類	流紋岩	0.0	1.3以上	0.8	3.0	縦長剥片を縦方向に切断し(b面)、切断面の縁部から表面(a面)へ調整調整を施す。さらにd面で切断する。b面とd面の形成する鋭角の縁は刃こぼれが認められる。
160	包含層	掻削器類	C類	流紋岩	3.1以上	2.5	0.9	6.5	左側縁を切断し、表面に調整を加える。末端部を欠損する。
161	H19区	掻削器類	C類	流紋岩	2.0	2.8	0.6	3.0	剥片の打面部分を欠損するが、欠損部の縁辺にも使用痕が認められる。
162	表土中	掻削器類	C類	流紋岩	5.8	3.6	1.4	28.3	不整形な剥片を素材とする。左側縁に自然面を残す。
163	表層	掻削器類	C類	頁岩	5.7	2.0	1.0	11.4	縦長剥片を素材とする。器体の中心で、縦方向に破損する。表面に節理面を残す。
164	H15(a)区	掻削器類	D類	流紋岩	4.8	4.0	1.6	36.9	表面に自然面を残す。表裏の周縁に加工。
165	244 覆土	掻削器類	D類	チャート	5.0	4.0	1.4	22.7	縦長剥片を素材とし楕円形に仕上げ。円形の剥片を素材とし、表面の周縁と、裏面の一部に調整を加える。表面に自然面を残す。
166	H17(b)区	掻削器類	D類	頁岩	4.0	3.7	1.1	14.0	縦長剥片を素材とし、周縁に調整を加える。
167	H13(a)区	掻削器類	D類	流紋岩	3.1	2.0	0.8	5.1	不整形な縦長剥片を素材とする。表面に節理面を残す。周縁に表裏から調整。
168	包含層	掻削器類	D類	玉髓	2.9	2.0	0.3	2.6	周縁に微細な調整を施す。
169	H15(a)区	掻削器類	D類	玉髓	2.4	2.2	1.1	5.5	縦長剥片を素材とする。打面部分を欠損する。
170	包含層	掻削器類	E類	流紋岩	3.6以上	3.0以上	1.0	7.8以上	表面に自然面を残す。器体の下平部を欠損。
171	H17(b)区	掻削器類	E類	流紋岩	2.5以上	2.0	0.9	3.4以上	右側縁の表面に調整。端部を欠損。
172	H17(b)区	掻削器類	E類	流紋岩質 溶結凝灰岩	4.2	3.2	0.8	11.2	一端に表裏から調整を加える。
173	包含層	掻削器類	E類	流紋岩	3.1	2.7	1.0	7.9	縦長剥片を素材とする。器体の一部を欠損する。
174	包含層	掻削器類	E類	赤玉	2.9	2.1	0.7	4.6	裏面が大きく欠損する。表面に自然面を残す。一部を欠損する。
175	包含層	掻削器類	E類	デイスサイト	3.0以上	2.5	0.8	6.8以上	縦長剥片を素材とする。打面部分を欠損する。
176	包含層	掻削器類	E類	流紋岩	2.6以上	1.4	0.7	2.4以上	器体の半分を欠損。
177	包含層	掻削器類	E類	頁岩	1.5以上	2.2	0.4	1.2	下縁に自然面を残す。
178	包含層	掻削器類	E類	流紋岩	3.9	5.7	0.9	15.4	不整形な剥片を素材とし、末端部に調整を行う。端部を欠損する。
179	H13(a)区	掻削器類	E類	頁岩	4.0	4.7	1.2	14.9	打面、側縁部に自然面を残す。一端を表裏から調整する。表面に自然面を残す。
180	H13(a)区	掻削器類	E類	頁岩	2.8	3.5	1.1	10.2	不整形な縦長剥片を素材とする。
181	包含層	掻削器類	E類	玉髓	2.3	1.8	0.9	4.0	完形。打面に自然面を残す。
182	表土中	掻削器類	E類	頁岩	3.7	2.6	1.0	10.4	表裏面に自然面を残す。一部欠損。
183	H17(b)区	掻削器類	E類	流紋岩	4.4	9.0	1.2	54.9	
184	H15(a)区	掻削器類	F類	赤玉	2.8	1.9	0.7	3.0	

第3章 川戸釜八幡遺跡

185	H13(a)区	顔部断類	G類	流紋岩	3.4	2.4	1.0	6.8	石壁の踵部を欠損後、欠損面を調整してスケイパーに再加工する。
186	H13(a)区	使用痕のある測片	A類	庄貫頁岩(新第三紀化石あり)	4.6	1.7	0.6	6.0	整った形態の縦長測片を素材とする。両側縁に使用痕。
187	包含層	使用痕のある測片	A類	頁岩	6.2以上	3.2	1.1	16.4以上	縦長測片を素材とする。打面部を欠損。表面に自然面残す。
188	H17(b)区	使用痕のある測片	A類	流紋岩	4.7	3.8	1.5	27.6	完形。縦長測片を素材とする。
189	H13(a)区	使用痕のある測片	A類	黒曜石	3.3	2.0	0.7	4.7	縦長測片を素材とする。表面に自然面残す。
190	表土中	使用痕のある測片	A類	頁岩	10.5	5.5	1.1	71.2	不整形な縦長測片を素材とする。表面に自然面残す。左側縁と下端部に使用痕。
191	H15(a)区	使用痕のある測片	A類	頁岩	5.9	4.0	1.1	24.0	打面と表面に自然面残す。
192	表土中	使用痕のある測片	A類	頁岩	4.2	3.1	0.9	9.0	不整形な横長測片を素材とする。周縁に使用痕。
193	包含層	使用痕のある測片	A類	頁岩	5.0	3.5	1.0	20.2	縦長測片を素材とする。両側縁に使用痕。
194	包含層	使用痕のある測片	A類	頁岩	2.9	1.0	0.5	1.1	縦長測片。
195	包含層	使用痕のある測片	A類	流紋岩	3.0	1.7	0.3	1.7	縦長測片。
196	包含層	使用痕のある測片	A類	頁岩	5.5	4.7	1.0	22.4	やや不整形な縦長測片を素材とする。打面は節理面。
197	表土中	使用痕のある測片	A類	頁岩	5.9以上	2.7	1.3	20.2以上	縦長測片を素材とする。末端部を欠損する。両側縁に使用痕。
198	表土中	使用痕のある測片	A類	チャート	5.4	2.9	1.0	15.5	やや不整形な縦長測片を素材とする。両側縁に使用痕。
199	表土中	使用痕のある測片	A類	流紋岩	7.1	2.5	0.8	13.0	縦長測片を素材とする。表面に自然面残す。両側縁に使用痕。
200	表土中	使用痕のある測片	A類	頁岩	4.7	4.2	1.1	21.8	縦長測片を素材とする。左側縁に使用痕。
201	表土中	使用痕のある測片	B類	流紋岩	5.6	4.3	1.3	18.7	不整形な測片を素材とする。両側縁に使用痕。
202	表土中	使用痕のある測片	B類	流紋岩	2.8	4.0	0.9	7.8	不整形な縦長測片。打面は自然面。
203	H11(a)区	使用痕のある測片	B類	頁岩	8.2	9.6	2.0	115.2	横長測片を素材とし、表面に自然面残す。
204	包含層	使用痕のある測片	B類	流紋岩	3.1	4.2	0.9	7.4	不整形な測片。末端部に自然面残す。
205	包含層	使用痕のある測片	B類	流紋岩	3.1	4.8	1.0	13.1	不整形な横長測片。
206	表土中	使用痕のある測片	B類	頁岩	3.8	4.5	1.0	19.1	不整形な測片を素材とする。周縁に使用痕。末端をわずかに欠損。
207	表土中	使用痕のある測片	B類	玉髓	2.0	1.3	0.5	1.2	小形の横長測片を素材とする。
208	包含層	使用痕のある測片	B類	流紋岩	7.7	4.2	1.3	35.2	表面に節理面残す。打点を除去する。
209	表土中	使用痕のある測片	B類	頁岩	3.4	4.4	0.8	9.5	不整形な測片を素材とする。周縁に使用痕。
210	表土中	使用痕のある測片	B類	頁岩	7.0	5.5	1.4	41.8	不整形な測片を素材とする。周縁に使用痕。
211	表土中	使用痕のある測片	B類	頁岩	4.6	5.0	1.4	36.6	不整形な測片。表面に自然面残す。
237	表採	隕状石器	-	緻密貫安山岩(新第三紀)	10.1	4.9	2.7	110.1	平面形は縦長の白形で、両側縁の表裏から調整跡を加える。
238	H17(b)区	隕状石器	-	頁岩	4.6	2.0	1.0	7.1	表裏面の周周から調整を加えて、形態を整える。
239	H13(a)区	石核	-	黒曜石	7.9	6.7	3.6	219.1	横線上を片面だけ測片剥離する。全体的に自然面残す。高原山虎か。

第4節 縄文時代の遺構と遺物

240	包含層	石核	-	玉髄	2.4	1.6	1.1	3.2	上面の打面から不整形小形の剥片を得ている。
241	包含層	石核	-	玉髄	2.2	2.2	1.0	6.1	打面転移を繰り返して多方向から小形不整形な剥片を得ている。
242	包含層	石核	-	流紋岩	2.1	3.4	1.9	17.4	打面転移を繰り返して多方向から小形不整形な剥片を得ている。側面に節理面残す。小形不整形の剥片を得ている。上下面に自然面残す。
243	H19区	石核	-	玉髄	2.3	1.7	1.6	7.5	
244	包含層	石核	-	玉髄	2.0	1.7	0.9	2.8	打面転移を繰り返して多方向から小形不整形な剥片を得ている。側面に節理面残す。長軸の両端は敲打後摩滅する。片面のトーン部分に黒色物質付着。
266	包含層	磨石類	A-1類	多孔質輝石安山岩	14.1	8.9	6.2	1252.8	完形。
267	H16区	磨石類	A-1類	砂岩	7.5	5.6	3.8	238.1	完形。
268	H15(a)区	磨石類	A-1類	砂岩	4.5	4.0	1.9	51.8	完形。
269	H13(a)区	磨石類	A-1類	流紋岩	8.6	7.4	5.2	419.8	完形。
270	包含層	磨石類	A-1類	頁岩	8.5	7.5	4.2	391.8	完形。
271	H17(b)区	磨石類	A-2類	砂岩	6.9	6.1	5.7	306.2	部分的に赤色物質が付着。
272	表土中	磨石類	A-2類	輝石安山岩	7.8以上	7.5以上	6.2	472.2以上	半分以上を欠損。
273	H13(a)区	磨石類	A-2類	輝石安山岩	5.5	4.9	4.1	164.1	完形。
274	H15(a)区	磨石類	A-2類	玄武岩 (新第三紀)	5.6	4.0	3.3	128.0	完形。
275	H11(a)区	磨石類	A-2類	流紋岩質 凝灰岩	3.7	3.5	2.8	38.5	一部欠損。
276	H11(a)区	磨石類	A-2類	チャート	3.0	2.8	2.4	29.9	黒色物質がわずかに付着する。
277	H13(a)区	磨石類	A-2類	流紋岩質 溶結凝灰岩	3.8	3.4	3.3	57.2	完形。
278	H17(b)区	磨石類	A-2類	流紋岩質 凝灰岩	3.3	2.9	2.8	23.9	小形球形。
279	表土中	磨石類	B-1類	輝石安山岩	10.6	9.5	6.1	923.3	側面に敲打痕。
280	H17(b)区	磨石類	B-1類	流紋岩質 凝灰岩	7.0	7.4	4.8	293.3	側面に敲打の痕跡。
281	H17(b)区	磨石類	B-1類	玄武岩 (新第三紀)	10.7	8.8	5.8	845.5	側面に敲打痕。被熱して全体が未変する。表面が剥落する。
282	H16区	磨石類	B-1類	花園閃緑岩	7.0	6.6	4.7	317.9	完形。
283	H13(a)区	磨石類	B-1類	輝石安山岩	9.9	9.2	6.2	895.2	側面に敲打痕。
284	表土中	磨石類	B-1類	軽石質凝灰岩	6.9	6.3	3.2	170.1	側面に敲打痕。
285	H15(a)区	磨石類	B-1類	輝石安山岩	7.9	7.8	4.5	407.1	表裏面とも著しく摩滅。側面に敲打痕。
286	包含層	磨石類	B-1類	輝石安山岩	10.4	8.5	4.5	573.6	完形。
287	H17(b)区	磨石類	B-1類	流紋岩質 凝灰岩	6.6	5.8	3.5	180.7	側面に敲打痕。
288	H15(a)区	磨石類	B-1類	玄武岩 (新第三紀)	10.3以上	9.5	5.0	695.1以上	被熱のため全体にクラックが入る。約半分の欠損。
289	H11(a)区	磨石類	B-1類	流紋岩質 凝灰岩	9.7	7.5	3.1	244.2	側面に敲打痕。
290	H13(a)区	磨石類	B-1類	火山礫凝灰岩	10.0	803.0	3.5	365.7	一部欠損。側面に敲打痕。
291	H13(a)区	磨石類	B-1類	砂岩	10.5	6.5	4.3	396.7	一部欠損。
292	H13(a)区	磨石類	B-1類	輝石安山岩	8.6	8.1	5.1	545.2	完形。
293	H15(a)区	磨石類	B-1類	輝石安山岩	8.9	7.9	5.2	543.2	一部欠損。
294	H15(a)区	磨石類	B-1類	閃緑岩	11.2	8.6	4.5	732.0	一部欠損。
295	包含層	磨石類	B-1類	多孔質輝石安山岩	9.0	6.4	4.7	377.8	側面に敲打痕。
296	H13(a)区	磨石類	B-1類	輝石安山岩	9.6	7.9	5.8	609.8	被熱により亀裂が認められる。
297	H17(b)区	磨石類	B-1類	流紋岩質 凝灰岩	8.2以上	8.0	2.1	220.9以上	表裏面とも中央部が狭く凹み、長軸方向の研磨痕があり。側面にわずかに敲打痕。
298	H15(a)区	磨石類	B-1類	輝石安山岩	9.7	8.6	5.5	692.4	完形。
299	表土中	磨石類	B-1類	花園閃緑岩	10.8	7.1	5.0	368.0	側面に敲打による平坦面あり。
300	包含層	磨石類	B-2類	多孔質輝石安山岩	8.5以上	8.4以上	8.4	821.8以上	被熱していると思われる。トーン部分は黒色物質付着。一部欠損。
301	包含層	磨石類	B-2類	細粒花園閃緑岩	7.0以上	6.9	5.2	330.9以上	側縁部に敲打痕。
302	H11(a)区	磨石類	B-2類	花園閃緑岩	6.6	4.6	4.2	197.0	完形。

第3章 川戸釜八幡遺跡

303	包含層	磨石類	B-2類	流紋岩質 溶結凝灰岩	4.7	4.5	4.1	94.6	完形。
304	H11(a)区	磨石類	B-2類	多孔質安山岩	4.8	4.5	3.6	126.3	全体が摩滅。
305	H17(b)区	磨石類	B-2類	玄武岩 (新第三紀)	7.7以上	11.2	8.4	1034.6 以上	端部に敲打痕。欠損面も磨石類として使用している。敲打後、トーン部分に黒色物質が付着。
306	H13(a)区	磨石類	B-2類	黒雲母流紋岩	9.3	7.7	6.4	627.8	一部が剥離欠損。
307	H17(b)区	磨石類	B-3類	砂岩	11.0 以上	5.7	4.8	394.7 以上	残存する一端に敲打痕。半分を欠損する。
308	H15(a)区	磨石類	B-3類	砂岩	13.7 以上	5.9	3.3	486.5 以上	全体が摩滅するが、残存する端部と側縁部には複数回の敲打痕が認められる。
309	H13(a)区	磨石類	C-1類	流紋岩質 溶結凝灰岩	9.0	7.5	4.9	378.1	表裏面に1カ所ずつの凹み。トーンの部分が赤変。
310	H16区	磨石類	C-1類	流紋岩質 溶結凝灰岩	10.5	6.7	5.0	411.9	表裏面に数カ所の凹み。
311	H13(a)区	磨石類	C-1類	流紋岩質 溶結凝灰岩	8.9	8.0	4.7	373.4	両面中央に凹み。
312	H15(a)区	磨石類	C-1類	流紋岩質凝灰岩	9.8	7.9	4.0	425.7	表裏の中央2カ所に凹み。一部欠損。
313	H13(a)区	磨石類	C-1類	流紋岩質 結晶凝灰岩	8.2	7.4	4.4	291.9	表裏の中央に残り凹み・側縁に敲打痕。
314	H15(a)区	磨石類	C-1類	砂岩	7.0以上	5.5	4.0	179.2 以上	片面に深い凹み、片面に残り凹み。一部欠損。
315	H15(a)区	磨石類	C-1類	砂岩	8.4	7.9	4.6	380.8	両面に凹み。
316	H13(a)区	磨石類	C-1類	花崗岩	9.3	8.8	5.2	578.4	片面の中央部に残り凹み。側縁部に敲打痕。表裏面は著しく摩滅。
317	H15(a)区	磨石類	C-1類	流紋岩質 凝灰岩	7.4	6.8	5.0	309.9	表裏面の中央に凹み。
318	H15(a)区	磨石類	C-1類	流紋岩質 溶結凝灰岩	8.4	7.6	3.7	318.7	片面の中央に残り凹み。
319	表土中	磨石類	C-1類	軽石質凝灰岩	8.1	8.6	6.9	514.5	片面に凹み。
320	H13(a)区	磨石類	C-2類	輝石安山岩	7.8	6.9	6.2	467.5	トーン部分は黒色物質付着。
321	H11(a)区	磨石類	C-2類	砂岩	9.5	8.2	6.4	594.8	一部欠損。片面に凹み。
322	H13(a)区	磨石類	C-2類	輝石安山岩	9.5	8.0	6.3	676.4	片面中央に残り凹み。
323	H11(a)区	磨石類	C-2類	流紋岩質 溶結凝灰岩	9.6	9.2	3.7	426.6	片面に1カ所の凹み。側縁に敲打痕。
324	H15(b)区	磨石類	C-2類	流紋岩質 凝灰岩	12.5	9.1	2.5	277.5	片面に凹部1カ所。片面の全体を欠損。
325	表土中	磨石類	D類	流紋岩質 溶結凝灰岩	25.4	17.4	9.5	4950.0	表面が風化して不明確。表裏面に数カ所の凹み。
326	H16区	磨石類	D類	黒雲母花崗岩	7.4	5.9	5.3	297.3	表面が剥落して痕跡不鮮明。
327	包含層	磨石類	D類	花崗岩	10.3	8.6	3.3	455.0	表面の風化が著しく不明確。
328	H15(a)区	磨石類	D類	輝石安山岩	10.1	9.2	5.3	585.3	表面が剥落して痕跡不鮮明。
329	H11(a)区	磨石類	D類	多孔質流紋岩 (溶結凝灰岩)	2.7	2.8	3.0	26.7	表面が剥落して痕跡不鮮明。
342	H15(a)区	石剣・石棒類	-	粘板岩	6.5以上	3.2	2.8	77.6 以上	有頭の石棒で、胴部で短軸方向に破損する。胴部は明確な段差をもつ。胴部、頭部ともに断面は円に近い楕円形。頭部の先端部は幅約1cmの部分に敲打痕が全周する。敲打後研磨する。
343	H15(a)区	石剣・石棒類	-	粘板岩	10.5 以上	5.5	1.7	82.0 以上	有頭の石棒で、各部分で欠損するが、欠損後の被熱で全体が赤変している。胴部で短軸方向に欠損する。裏面は欠損面からの数回の打撃により、長軸方向に破損する。また、図上表面は頭部が先端方向からの打撃により破損している。図上左側縁には2条の沈線に挟まれた幅6mmの突帯が斜方向に認められる。突帯上は爪形上の文様が刻まれる。右側縁は胴部に突帯による明確な段差が認められ、突帯に平行する沈線が刻まれる。

第4節 縄文時代の遺構と遺物

344	H13(a)区	石剣・石棒類	-	粘板岩	8.3	2.0	0.8以上	11.7以上	胴部から薄く剥離した破片。胴体の大半を欠損するため、形状等は不明瞭。被熱している。
345	H13(a)区	石剣・石棒類	-	粘板岩	4.4以上	2.3	1.3以上	18.2以上	胴部の破片で、上下両端が破損し、裏面も全面が薄く破損している。全体は被熱のため赤変しているが、上端の破損面は赤変せず、下端の破損面は赤変している。このため、上下両端の破損・裏面の破損→全体が被熱→上端の破損という経過を踏んだものと推定される。胴部の横断面はややゆがんだ楕円形。
346	H13(a)区	石剣・石棒類	-	安山岩質 凝結凝灰岩	33.3以上	5.8	5.0	1187.4以上	有頭の石棒で、胴部下半を短軸方向に欠損する。頭部は断面楕円形。胴部は円に近い楕円形。頭部の段差は明瞭で、頭部下端に1本の沈線が刻まれる。頭部裏面に「八」状の沈線。全体に敲打と研磨痕が認められる。
347	H13(a)区	石剣・石棒類	-	粘板岩	10.7以上	2.6	1.7	56.7以上	胴部は短軸方向に欠損し、さらに欠損面からの打撃により長軸方向に欠損する。長軸方向の欠損面は節理面を含んでいる。横断面は楕円形で、面取りされている。全体は研磨されている。
348	表土中	石剣・石棒類	-	粘板岩	7.7以上	3.7	1.1以上	45.3以上	胴部の破損品。短軸方向に欠損後、欠損面からの打撃により縦方向にも欠損する。全体は丁寧に研磨されている。
349	H13(a)区	石剣・石棒類	-	ドレライト	5.5以上	4.8以上	1.5以上	54.3以上	胴部の破損品。短軸方向に上下両端を欠損し、さらに長軸方向にも欠損する。
350	H13(a)区	石剣・石棒類	-	デイサイト	4.1以上	3.2	3.4	68.8以上	胴部の破片で、上下両端を破損する。横断面は円形。
351	H19区	石剣・石棒類	-	粘板岩	8.2以上	2.6	1.0以上	26.5以上	両頭の石剣の下端部。胴部は短軸方向に破損し、さらに長軸方向にも破損している。破損の順番は不明瞭。下端部と胴部は明確な段差をもつ。全体に文様が沈線されており、上部から順に、連続する二重の重四角文、短軸方向の沈線2条、1字文、沈線が刻まれる。また、端部は短軸方向の沈線に挟まれた1字文が刻まれている。全体によく研磨されて精巧な作りである。
352	包含層	石剣・石棒類	-	砂岩	6.9以上	3.4	1.1	29.3以上	石刀と推定される。胴体の半分を欠損する。先端部と鋒部分の大半(頭のトーン部分)は、敲打によると思われる打撃により、薄く欠損している。刃部は片刃状。
353	H19区	独鈷石	-	ドレライト	20.4	7.9	3.5	860.1	表面に自然面残す。長軸方向、短軸方向とも中軸線に対して対称形である。全体の形状は粗い調整段階で整えられている。括弧部は脚線部分では跨状の隆帯が明瞭だが、表裏面の平坦面では隆帯は表現されない。両端は石棒の刃部と同様に仕上げられている。
354	H13(a)区	輝石製品	-	軽石(斜長石、輝石両品あり)	6.3以上	4.8	2.0	23.1以上	平面形は両脚線が並行し、端部は丸く仕上げられる。断面形は長楕円形。全体に摩滅している。下半部を欠損する。
355	H15(a)区	玉類	-	変質流紋岩 (緑泥片岩)	1.4	1.4	0.9	2.3	ほぼ完形の白玉。両側から穿孔される。
356	H15(b)区	玉類	-	碧玉	1.4以上	1.0以上	0.5以上	0.5以上	半分を欠損。楕円形の碧玉を素材とし、中央に穿孔する。側縁は多面体状に研磨される。

第3章 川戸釜八幡遺跡

357	H15(a)区	石製品	-	流紋岩質凝灰岩	4.2	2.5	0.6	7.3	三角形の石製品あるいは砥石。
358	H15(a)区	石製品	-	砂質頁岩	2.6	2.5	0.5	5.4	
359	包含層	石製品	-	頁岩	2.6	2.6	0.5	5.2	網緯に研磨による面取りの痕跡。表裏面とも研磨される。
360	H13(a)区	不明石製品	-	流紋岩質溶結凝灰岩	6.7	4.2	3.3	106.1	小形の球と大形の球が縦に連結した雪だるま形の外形。二つの球を繋ぐ頸部は、石質の異なる膜の部分に当たり、敲打によりくびれている。頸部以外は全体が摩滅している。
361	H15(a)区	不明石製品	-	苦鉄質片岩	5.9以上	3.3	1.4	51.4以上	全体が摩滅する。器体を欠損する。

(2) 磨製石斧

遺物番号	出土位置	石質	長さ	幅	厚さ	重さ	特徴	刃部角度
212	H13(a)区	ドレライト	10.7	4.9	2.5	200.5	小形の完形品。	76
213	H13(a)区	玄武岩(新第三紀)	7.8以上	5.2	2.5	166.7以上	基部を欠損する。	82
214	包含層	玄武岩(新第三紀)	6.6以上	5.1	2.5	133.2以上	基部を欠損する。	75
215	H17(b)区	玄武岩(新第三紀)	16.8	5.6	3.1	399.2	裏面の刃部は敲打後に再研磨されている。	77
216	H17(b)区	ドレライト	12.8以上	5.4	3.7	381.5以上	刃部は使用により著しく刃こぼれている。基部をわずかに欠損。	60
217	H17(b)区	閃緑斑岩	10.0以上	5.2	3.0	280.0以上	基部を欠損する。	83
218	H17(b)区	閃緑斑岩	5.5以上	3.4以上	2.8以上	74.6以上	刃部を欠損する。	-
219	H17(b)区	輝石安山岩	4.4以上	3.5以上	2.6以上	53.5以上	刃部を欠損する。	-
220	H17(b)区	輝石安山岩	4.6以上	4.0以上	3.1以上	82.5以上	刃部を欠損する。	-
221	包含層	玄武岩(新第三紀)	5.0以上	3.9以上	3.2以上	85.4以上	基部のみ遺存。	-
222	H14(c)区	蛇紋岩	3.3以上	3.8以上	0.7以上	16.8以上	片刃。小形で精巧なつくり。基部を欠損する。	49
223	包含層	ドレライト	4.5以上	3.8以上	2.2以上	52.1以上	基部と刃部を欠損。トーン部分はタール状の黒色物質付着。	-
224	包含層	ドレライト	10.1以上	5.9以上	3.7以上	333.6以上	基部を欠損。	66
225	H15(a)区	頁岩	5.8	3.3	1.3	35.7	刃部を含め全体が仕上げられていない。未製品か。	-

(3) 打製石斧

遺物番号	遺構	石質	長さ	幅	厚さ	重さ	特徴	刃部角度	刃部幅	括れ部幅	頭部幅
226	H13(a)区	頁岩	13.5	6.7	3.1	209.6	分割形。表面に自然面残す。	73	6.5	4.5	6.4
227	H15(a)区	ドレライト	11.7	6.7	2.2	261.4	分割形。表面に自然面残す。	77	6.3	5.5	6.6
228	H16区	砂岩	16.3	9.5	1.7	408.8	分割形。表面に自然面残す。	90	9.5	7.1	9.0
229	H16区	頁岩	11.1	7.8	2.1	246.1	分割形。表面に自然面残す。	65	7.8	5.8	7.3
230	H13(a)区	重曹石ホルンフェルス	21.1	12.7	5.0	1550.3	分割形大形打製石斧。	70	12.3	9.6	11.4
231	H13(a)区	頁岩	22.3	11.4	3.5	1156.3	分割形大形打製石斧。	78	11	8.7	11.4
232	表土中	頁岩	9.2	6.8	2.5	166.0	分割形。表面に自然面残す。	72	6.8	4.1	6.1
233	H15(a)区	頁岩	7.6	4.5	1.3	41.3	小形の分割形。表面に自然面残す。	90	4.4	2.6	3.3
234	H15(a)区	重曹石ホルンフェルス	16.3	8.9	4.2	620.9	分割形。表裏面に自然面残す。	81	8.9	5	7.1
235	H13(a)区	重曹石ホルンフェルス	19.7	13.2	3.5	1160.1	不整形な分割形の大形打製石斧。上端部を欠損。	90	12.9	10	12.5
236	表土中	輝石安山岩(新第三紀)	8.1	6.3	1.6	80.1	不整形な分割形。表面の風化が著しい。	55	6.2	3.8	4.0

(4) 石錘

遺物番号	出土位置	分類	石質	長さ	幅	厚さ	重さ	特徴	組掛け部径	組掛け部全周	溝の幅	溝の深さ
245	H13(a)区	A類	流紋岩質凝灰岩	5.0	2.7	1.6	30.9	長軸方向に1条の沈線を刻む。	4.7	10.6	0.3	0.2
246	H15(a)区	A類	砂岩	5.6	3.9	1.3	32.7	長軸方向に1条の溝。一部欠損。	5	11.2	0.2	0.1
247	H15(a)区	A類	粘板岩	5.6	3.3	1.2	34.0	長軸方向に1条の溝。	5.3	11.6	0.2	0.2
248	H15(a)区	A類	流紋岩	4.0	3.1	1.0	16.3	長軸方向に1条の溝。	3.8	8.6	0.1	0.1
249	H15(a)区	A類	流紋岩	3.7	3.5	2.5	35.4	長軸方向に1条の溝。一部欠損。	3	8.4	0.3	0.2
250	H15(a)区	A類	頁岩	4.3	3.2	1.0	18.9	長軸方向に1条の溝。一部欠損。	4.8	8.8	0.2	0.1
251	H16区	A類	頁岩	5.9	4.0	1.4	53.5	長軸方向に溝1条。	5.6	12.8	0.2	0.2
252	H17(b)区	A類	頁岩	6.3	3.9	1.5	53.8	長軸方向に溝1条。	5.8	13	0.2	0.1
253	H17(b)区	A類	頁岩	5.8	4.6	1.6	80.8	長軸方向に溝1条。一部欠損。	5.3	12.3	0.3	0.1
254	H13(a)区	A類	頁岩	6.5	4.3	1.6	71.6	長軸方向に溝1条。一部欠損。	5.9	13.4	0.3	0.2
255	表土中	A類	頁岩	7.5	5.0	1.9	116.3	長軸方向に溝1条。	6.9	16	0.3	0.1
256	H13(a)区 (新第三紀)	A類	玄武岩	4.5	4.7	1.9	56.0	長軸方向に溝1条。	4	10.1	0.4	0.2
257	H13(a)区	A類	頁岩	4.6	3.4	0.9	23.6	長軸方向に溝1条。一部欠損。	4.3	9.8	0.2	1
258	H15(b)区	B類	頁岩	6.4	3.2	1.5	47.2	長軸方向の両端に切り込み。	5.8	13.1	-	-
259	H15(a)区	B類	頁岩	7.3	5.1	1.4	94.5	長軸方向の端部に切り込み。	6.8	14.9	0.3	0.2
260	H17(b)区	B類	頁岩	6.3	4.7	1.7	76.4	長軸方向に溝1条。	5.8	13.2	0.3	0.2
261	H15(a)区	B類	頁岩	3.8 以上	3.4	1.1	17.1	表面の長軸方向に溝1条。	3.3	7.8	-	-
262	H15(a)区	C類	頁岩	4.1	2.6	1.2	19.6	十字の溝。	3.7	8.7	0.3	0.1
263	H15(a)区	C類	流紋岩質凝灰岩	4.8	3.4	2.2	39.9	十字の溝。	4.2	10.2	0.3	0.2
264	H15(a)区	D類	頁岩	6.3	3.8	1.1	42.9	長軸方向の両端に切り込み。	5.7	12.4	-	-
265	H13(a)区	D類	輝石安山岩	5.3	3.7	1.9	44.6	長軸方向の端部に切り込み。一部欠損。	-	-	-	-

(5) 石皿

遺物番号	遺構	石質	長さ	幅	厚さ	重さ	特徴	機能面長さ	機能面幅	機能面厚さ	機能面の深さ
330	H15(a)区	多孔質輝石安山岩 (第四紀)	13.2以上	24.6以上	4.7以上	1886.1以上	大平を欠損。表面はよく使われて、深く凹む。	10.2以上	17.4以上	2.0以上	2.7
331	H14(b)区	流紋岩質溶結凝灰岩	22.9以上	18.6以上	7.7以上	2724.7以上	大平を欠損し、形態不明。	14.0以上	15.8以上	6.5	1.2
332	H15(a)区	多孔質輝石安山岩	18.6以上	17.7以上	5.6	1505.6以上	大平を欠損。表面中央はよく使われて深く凹む。	14.5以上	9.6以上	2.0	3.6
333	H15(a)区	多孔質輝石安山岩 (第四紀)	8.9以上	14.9以上	4.2	616.4以上	大平を欠損。	6.0以上	10.3以上	3.3	0.9
334	H13(a)区 (新第三紀)	輝石安山岩	15.5以上	10.1以上	4.4以上	804.5以上	器体の半分以上を欠損。平面形は方形。	-	-	-	-

第3章 川戸釜八幡遺跡

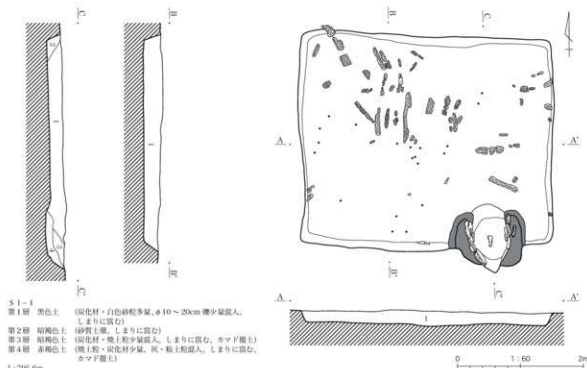
335	H13(a)区	輝石安山岩 (新第三紀)	17.7以上	9.4以上	3.7 以上	793.8 以上	大半を欠損する。 薄い作りで、破損 後、トーン部分が わずかに赤変。被 熱などが原因か。 器体の平分が欠 損。平面形は円 形。表面中央はよ く使われて凹む。	10.5以上	5.4以上	3.6以上	0.2
336	H13(a)区	多孔質輝石 安山岩 (第四紀)	13.7以上	22.2以上	5.9	1986.0 以上	器体の平分が欠 損。平面形は円 形。表面中央はよ く使われて凹む。	6.9以上	10.2以上	3.0	2.9
337	H17(b)区	玄武岩 (新第三紀)	15.7以上	12.5以上	5.0	1765.9 以上	表面面とも著し く磨滅する。	-	-	-	-
338	H17(b)区	多孔質輝石 安山岩	23.7以上	12.6以上	4.1	1182.8 以上	表面面とも著し く磨滅する。	-	-	-	-
339	H14(b)区	多孔質輝石 安山岩	22.9以上	22.9以上	6.9	4150.0 以上	図のトーンの部 分に黒色の物質 が付着している。 的平分を欠損。	16.5以上	17.3以上	6	0.9
340	H17(b)区	流紋岩質溶 結凝灰岩	15.1以上	23.7以上	4.3	2,593 以上	平分を欠損する。 部分的に煤が付 着する。	-	-	-	-
341	SK-83 覆土	流紋岩	6.8	6.1	3.2	150.8	片面中央に凹み。	-	-	-	-

第5節 古代以降の遺構と遺物

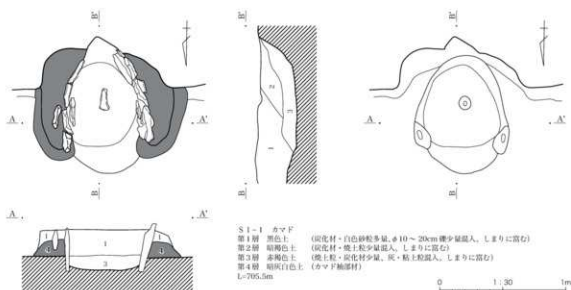
1. 竪穴住居跡

SI-1 (第149～151図、図版一・二・五四)

位置 G・15・16グリッドにまたがって発見した竪穴住居跡で、古代の住居群のなかで最も北に位置している。重複関係 他の遺構との切り合いはない。規模・形状 東西4m、南北3.4mで、各辺の長さは南北壁が4m、東西壁が3.5m前後の各コーナーが直角に掘り込まれる比較的整った長方形である。南北の主軸方向はN-2°-Eである。壁・壁溝 壁は確認面から20cmほどの深さがあり、床面からほぼ垂直に立ち上がる。床面の状況 第IV層を床面として構築しており、地山に含まれる礫の露出により凸凹がある。特に踏み締めなどによって硬化した状況を窺うことはできないが、全体的に締まりがある。柱穴 明確に柱穴と判断できるものは確認できなかった。覆土 レンズ状の自然堆積で、大きく2層に分けられる。全体的に礫を少量含む黒土上に覆われるが、北壁周辺には砂質の暗褐色土の流入が観察できる。また、床面直上には多量の炭化材が出土しており、火災住居と考えられる。カマド跡 南壁の南東コーナー寄りに構築されている。規模は焚口から煙道の先端部まで1.1m、両袖の最大幅は1.2mである。煙道は壁外へ40cmほど掘り込み、奥壁の立ち上がりは比較的急傾斜である。燃焼部は長軸70cm、短軸60cm、深さ5cmほど楕円形状に掘り窪め火床としている。カマド内の覆土は流入土と天井崩落土の3層に分けられ、火床上位の第3層には多量の焼土ブロックや粘土状の黄褐色土が堆積する。袖は心材として板状節理凝灰岩の板石を2・3個立てて並べ、黄褐色土をその周囲に積み固めている。出土遺物 住居内から土師器片18点(口縁部2点、胴部16点)、鉄鍬1点が出土している。土師器片はいずれも壘形土器の破片で、このうちの口縁部から頸部の破片2点を図示した。出土状態に関しては、住居の中央部と南壁及び西壁際の床面に集中が認められる。鉄鍬は鐵身が両丸造で胴状が発達した長三角形式鍬で、カマド前面の床面直上から出土した。住居跡の時期については、出土遺物から概ね9世紀後半頃と考えられる。

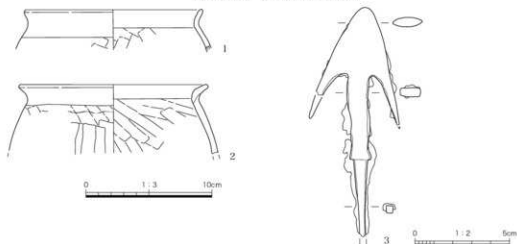


第149図 SI-1実測図



SI-1 カマド
 第1層 赤色土 (原土材・白色砂粒多量、φ10～20mm 礫少量混入、しまりに密む)
 第2層 暗褐色土 (原土材・焼土粒少量混入、しまりに密む)
 第3層 赤褐色土 (焼土粒・炭化材少量、灰・粘土粒混入、しまりに密む)
 第4層 暗灰白色土 (カマド軸部材)
 L=705.5m

第150図 SI-1 カマド実測図

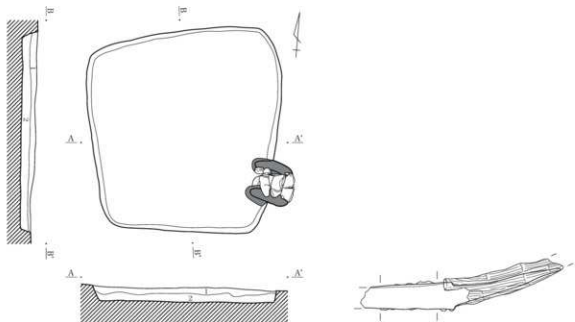


第151図 SI-1 遺物実測図

SI-382 (第152図、図版一・二・一三・五四)

位置 H-20グリッド内で確認した竪穴住居跡で、今回の調査で発見した古代住居群で最も東側に位置する。北西約40mにはSI-1が、また南西約40mにはSI-406が存在する。重複関係 他の遺構との切り合いはない。規模・形状 東西2.7m、南北3.3mの南北に長い方形プランである。各辺の長さは3m前後であるが、南壁がやや短い台形状をなし、各コーナーはやや丸みを帯びる。南北の主軸方向はN-1°-Wである。壁・壁溝 壁は確認面から15cmほど浅く、床面からはほぼ垂直に立ち上がる。壁溝は確認できなかった。床面の状況 第IV層を床面として平坦に構築しているが、地山に含まれる礫の露出により凸凹がある。踏み締めなどにより硬化した状況は認められない。柱穴 柱穴と考えられるピットは確認できなかった。覆土 第II層のHr-Fp粒を含む黒褐色土と暗褐色土の2層に分層できる。カマド跡 南壁の南東コーナー寄りに構築されている。規模は焚口部から煙道の先端部まで75cm、両袖の最大幅は74cmである。煙道は壁外へ37cmほど掘り込み、奥壁の立ち上がりはなだらかである。燃焼部は長軸50cm、短軸40cm、深さ5cm

ほど楕円形状に掘り窪め火床としており、表面が火熱により僅かに硬化する。カマド内の覆土は、流入土（第1～4層）とカマド材（第5・6層）の6層に分けられる。袖は第V層の黄褐色シルトと黒色土の混合土を構築材としている。北側袖及び煙道部には、内側の支えとして板状節理凝灰岩の板石が用いられており、焚き口部には長さ40cmほどの河原石2個が差し渡しに使用されている。出土遺物 住居内から出土した遺物は、縄文土器片数点と刀子1点のみであり、本住居跡に伴う遺物は極めて少ない。1の刀子は住居中央の北壁に寄った位置の床面から約5cmほど浮いた覆土第2層中から出土した。刃部の先端を欠損する。両角間で棟側はほぼ直線的で、刃部の断面は棟側が平坦である。基部には木質が残る。



SI-382

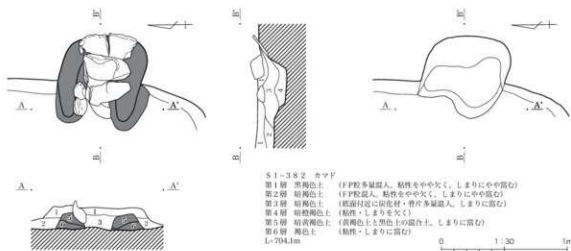
第1層 黒褐色土 (F/F粒多量混入、粘性をやや欠く、しまりにやや密な)

第2層 暗褐色土 (F/F粒混入、粘性をやや欠く、しまりにやや密な)

L=704.2m

0 1:60 2m

0 1:2 5cm



SI-382 カマド

第1層 黒褐色土 (F/F粒多量混入、粘性をやや欠く、しまりにやや密な)

第2層 暗褐色土 (F/F粒混入、粘性をやや欠く、しまりにやや密な)

第3層 暗褐色土 (板面付近に灰化材・骨片多量混入、しまりに密な)

第4層 暗褐色土 (粘性・しまりを欠く)

第5層 暗褐色土 (黄褐色土と黒色土の混合土、しまりに密な)

第6層 褐色土 (粘性・しまりに密な)

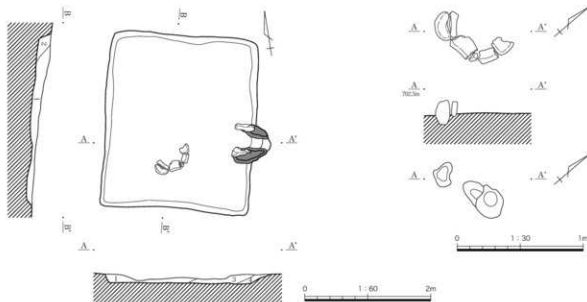
L=704.1m

0 1:30 1m

第152図 SI-382実測図

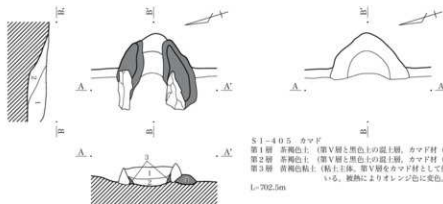
SI-405 (第153図、図版一三・一四)

位置 K-17とL-17グリッドにまたがった位置で確認した竪穴住居跡である。東側約5mにはSI-406が存在する。重複関係 他の遺構との切り合いはななく、単独で確認した。規模・形状 東西2.8m、南北2.5mの東西にやや長い方形プランである。各辺の長さは南北壁が2.4m、東西壁が2.8mで各コーナーは直角に掘り込まれる。南北の主軸方向はN-13°-Eである。壁・壁溝 壁は確認面から最も深い北側で20cm、南側で10cmほどと浅く、床面からほぼ垂直に立ち上がる。壁溝は確認できなかった。床面の状況 第IV層を床面として平坦に構築しているが、地山に含まれる礫の露出により凸凹がある。特に踏み締めなどにより硬化した状況は認められない。住居中央の南壁寄りには幅40cm、長さ30cmほどの板石を立てて組んだ石組の施設を確認した。南側半分が遺存するもので、本来は方形ないしは円形状に組まれていたものと思われる。石組内面は火熱による赤化がみられ、底面は僅かに硬化が認められる。柱穴 柱穴と考えられるピットは確認できなかった。覆土 2層に分層できる。第1層には多量の河原石が混入する。カマド跡 東壁の



SI-405

- 第1層 黒色土 (φ20~30cm河原石・白色砂粒少量、大きい黒色粒・P粒混入。しまりにやや高凸)
 第2層 暗褐色土 (小砂粒多量混入。しまりを欠く)
 第3層 茶褐色土 (第V層と黒色土の混土層、φ10cm河原石・内礫多量混入。しまりに高凸。カマド材の側面上か)
 第4層 赤褐色土 (第V層と黒色土の混土層、カマド材(粘土状)多量混入。しまりに高凸)
 L=702.5m



SI-405 カマド

- 第1層 赤褐色土 (第V層と黒色土の混土層、カマド材(粘土状)・小礫少量混入。しまりに高凸)
 第2層 茶褐色土 (第V層と黒色土の混土層、カマド材(粘土状)多量混入。しまりに高凸)
 第3層 黄褐色粘土 (粘土土床、第V層をカマド材として敷用。芯材(石)の周りに張り付けられている。縦熱によりオレンジ色に赤化。しまりに高凸)
 L=702.5m

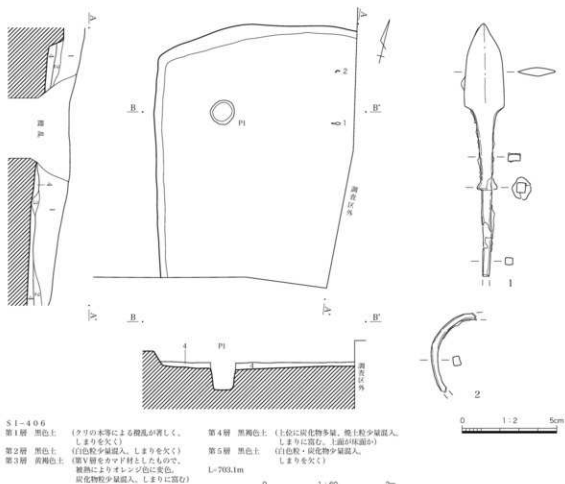
第153図 SI-405実測図

南東コーナー寄りに構築されている。規模は焚口部から煙道の先端部まで64cm、両袖の最大幅は60cmである。煙道は壁外へ27cmほど掘り込み、奥壁の立ち上がりはなだらかである。燃燒部は地山を僅かに削り火床としており、底面は火熱により若干硬化する。カマド内の覆土は、第V層の黄褐色シルトと黒色土の混合土主体の2層（第1・2層）に分けられる。袖は芯材として長さ40cmほどの細長い礫を横に設置し、その周囲に黄褐色シルトと黒色土の混合土を積み固めている。出土遺物 本住居跡に伴う遺物は出土していない。

SI-406（第154図、図版一四・五四）

位置 K-17・18及びL-17・18グリッドにまたがった位置で確認した竪穴住居跡である。西側約5mにはSI-405が存在する。住居の東及び南側は調査区外に延びるため未調査である。重複関係 調査した部分においては、他の遺構との切り合いは認められない。規模・形状 住居の形状は調査区内において確認した部分からの判断となるが、一辺の長さが4m前後の方形プランを想定する。南北の主軸方向はN-21°-Wである。壁・壁溝 壁は確認面から25cmほどで、床面からほぼ垂直に立ち上がる。壁溝は確認できなかった。

床面の状況 第V層を床面として構築しており、貼床は第4層の黒褐色土で住居のほぼ全体になされている。特に踏み締めなどによって硬化した状況を窺うことはできないが、全体的に締まりがある。柱穴 住居北西コーナー部から直径38cm、床面からの深さが40cmほどの円形ピットを1個確認したのみである。



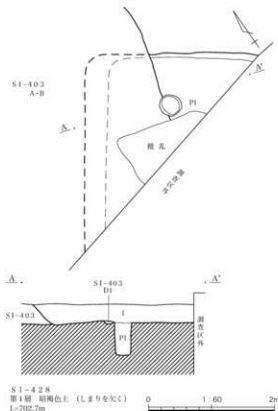
第154図 SI-406実測図

覆土 大きく黒色土主体の2層に分けられる。壁際から白色粒子を含む第2層の黒褐色土が流入した後、締めりを欠く黒色土が全体を覆っている。カマド跡 調査部分においてカマドは確認できなかったが、南側で焼土や炭化材のほか、カマド材と思われる黄褐色土の広がりが見られることから、調査区外の住居南東コーナー付近に存在するものと思われる。出土遺物 遺物は鉄製品2点が出土している。1は鎌身が両丸造の柳葉式鉄鎌、2は部分的であるため明確ではないが刀装具(資金)の可能性がある。1・2とも住居北東側の床面から出土した。住居跡の時期については、鉄鎌の年代から概ね10世紀前半頃と考えられる。

SI-428 (第155図、図版四)

位置 L-16・17グリッド内で確認した。古代住居群の最も南に位置しており、北側約2mにはSI-405が近接する。住居の東側及び南側は調査区外に延びるため未調査である。重複関係 縄文時代の住居跡SI-403A・Bを切って構築している。規模・形状 調査区内において確認した部分及び他の住居跡の形状から、一辺の長さが4m前後の方形プラン想定する。南北の主軸方向はN-36°-Eである。壁・壁溝 住居の中央部付近は後世の覆乱を受けており、また殆どの壁がSI-403A・Bと同時に掘り下げてしまい消滅させてしまったが、土層観察時に本住居に係わる床と壁の立ち上がりの一部を確認することができた。確認した壁高は30cmほどで床面から緩やかな立ち上がりが認められ、住居構築時は竪穴の形態を示している。壁溝は確認できなかった。床面の状況 第IV層を床面として平坦に構築しているが、地山に含まれる礫の露出により凸凹がある。特に踏み締めなどによって硬化した状況を窺うことはできないが、全体的に締めりがある。

柱穴 調査範囲内においては、住居北西コーナー部から直径36cm、床面からの深さが50cmほどの円形ピットを1個確認したのみである。覆土 暗褐色土主体の1層によって全体的に覆われている。カマド跡 調査区外に存在する可能性がある。出土遺物 本住居跡に伴う遺物は出土していない。



第155図 SI-428実測図

第7表 古代以降竪穴住居跡一覧

(): 残存 単位: m

遺構番号	位置	主軸	平面形	規模(長軸・短軸)	柱穴	カマド		備考
						位置	規模(南北×東西)	
SI-1	G-15・16	N-2°-E	隅丸長方形	4.0×3.4	-	南側東壁寄	1.1×1.2	土師器類、鉄鎌1
SI-382	H-20	N-1°-W	不整形	3.3×2.7	-	東側南壁寄	0.68×0.75	刀子1
SI-405	K・L-17	N-13°-E	隅丸長方形	2.8×2.4	-	東側中央	0.6×0.6	石組施設あり
SI-406	K・L-17・18	N-21°-W	不明	(4.1×3.2)	(1)	-	-	鉄鎌1、資金1
SI-428	L-16・17	N-36°-E	隅丸方形か	(3.2×2.7)	(1)	-	-	

第8表 SI-1 出土土器観察表

[] : 推定値、() : 残存値

番号	器種	法量 (cm)	形状の特徴	色調・胎土・焼成	遺存状態	出土位置・状態	備考
1	土師器 甕	口径: [19.0] 器高: (4.5)	内) 口縁部: ココナデ 外) 口縁部: ココナデ 胴部: ヘラナデ	胴部: ヘラナデ 褐色を基調とし、砂粒を少量含む。焼成は良好。	口~胴部 上半1/8	住居中央部、床面	口縁部短く外反
2	土師器 甕	口径: [20.0] 器高: (7.5)	内) 口縁部: ココナデ 外) 口縁部: ココナデ 胴部: ヘラナデ 後ケズリ	胴部: ヘラナデ 褐色を基調とし、砂粒を少量含む。焼成は良好。	口~胴部 上半1/4	住居中央部、床面	口縁部短く外反

第9表 古代以降竪穴住居跡出土鉄製品観察表

() : 残存値

遺構番号	遺物番号	器種	材質	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	裨因	図版	備考
SI-1	3	鉄鏃	鉄	(11.7)	4.3	4.5	(34.4)	第151図	五七	両丸造で髭状が発達した長三角形鉄鏃。
SI-382	1	刀子	鉄	(10.8)	1.7	1.2	(15.1)	第152図	〃	両角間で刃部の側面は開削が平坦な造り。基部に木質。
SI-406	1	鉄鏃	鉄	(13.3)	2.1	5.0	(21.5)	第154図	〃	両丸造髭状鉄鏃。
SI-406	2	貴金	鉄	(4.2)	4.0	4.5	(4.4)	〃	〃	刀装具(柄縁か鞘口の貴金)と思われる。

2. 土坑・墓坑

遺構の掘り込み面や覆土の状態などから、古代以降の所産と判断した土坑は300基である。平面形は概ね円形・長方形・楕円形に大別でき、円形ないしは楕円形の土坑が圧倒的に多い。また、覆土は単層のものが多くを占め、埋め戻されたものと判断できるものも少なくない。このうち、特徴的なものとしては、平面形が円形で、覆土内に多量の河原石や礫が底面付近で密に纏まったSK-111・266・301・302・303・383・384・394がある。口径1〜1.5m、深さ70cm前後の比較的大型のもので、なかには単に礫を廃棄した状況ではなく、意図的に多量の礫を埋めたと思われるものも認められる。

これらの土坑のうち遺物の伴出するものはSK-388・353・307・309・310・321の僅か6基のみで、出土遺物からSK-321・353以外は近世の墓坑と考えられる。その他の土坑については、出土遺物を伴わない遺構が殆どであるため、細かな時期の決定は困難であるが、概ね近世以降の所産と思われる。ここでは、全ての土坑について実測図を掲載し、形状・計測値・出土遺物などについては一覧表に提示する。

第10表 古代以降土坑一覧

[] : 推定値、() : 残存値 単位: cm

遺構番号	位置	平面形	長軸	短軸	深さ	重複関係	裨因	備考
SK-2	G-16	楕円形	132	122	33	なし	第156図	
SK-3	F-15	隅丸長方形	200	116	44	〃	第156図	
SK-4	G-14・15	楕円形	126	106	79	〃	第156図	
SK-5	F-16・17	楕円形	[212]	174	75	SK-18	第156図	
SK-6	F-16・17	楕円形	68	[30]	93	なし	第156図	
SK-7	G-16・17	楕円形	146	126	55	〃	第156図	
SK-8	G-16・17	楕円形	124	111	54	〃	第156図	
SK-9	F-18	楕円形	126	72	9	〃	第156図	
SK-10a	F-17	楕円形	80	66	13	SK-10bより新	第156図	
SK-10b	F-17	楕円形	(78)	88	12	SK-10aより古	第156図	
SK-11a	F-17	不整形	92	82	15	SK-11bより新	第157図	
SK-11b	F-17	隅丸方形	(52)	66	10	SK-11aより古	第157図	
SK-12a	F-17	円形	132	122	30	SK-12cより新	第157図	
SK-12b	F-17	円形	88	74	16	SK-12cより新	第157図	
SK-12c	F-17	不明	(28)	42	10	SK-12a・bより古	第157図	
SK-13	F-17	楕円形	122	116	10	なし	第157図	
SK-14	F-17	円形	68	64	9	〃	第157図	
SK-15	F-17	楕円形	104	72	56	SK-30より古	第157図	
SK-16	F-17	楕円形	94	68	10	なし	第157図	
SK-17	F-17	楕円形	94	74	8	〃	第157図	

第3章 川戸釜八幡道跡

SK-18	F・G-17	溝状	628	46	101	SK-5	第157図
SK-19a	F-17	楕円形	94	84	19	SK-19bより古	第158図
SK-19b	F-17	円形	30	26	16	SK-19aより新	第158図
SK-20	F-17	楕円形	48	36	14	なし	第158図
SK-21	F-17	楕円形	94	74	12	〃	第158図
SK-22	F-17	不整楕円形	162	84	11	〃	第158図
SK-23	G-17	円形	104	90	12	〃	第158図
SK-24	G-17	円形	124	124	80	〃	第158図
SK-25	G-17	楕円形	114	102	6	〃	第158図
SK-26	F・G-17	不整楕円形	78	64	9	〃	第158図
SK-27	G-17	円形	52	52	20	〃	第158図
SK-28	F-17	楕円形	110	82	13	〃	第158図
SK-29	F-17	隅丸長方形	58	36	8	〃	第158図
SK-30	F-17	隅丸長方形	(218)	46	59	SK-15より新	第157図
SK-34	G-16	隅丸長方形	194	148	103	なし	第159図
SK-35	G・H-16	円形	128	122	90	SK-39より古	第159図
SK-36	G-15	楕円形	118	100	80	なし	第158図
SK-37	G-15	楕円形	104	94	54	〃	第159図
SK-38	G-15	楕円形	94	86	16	〃	第159図
SK-39	H-16	円形	124	124	58	SK-35より新	第159図
SK-40	H-16	円形	68	66	45	なし	第159図
SK-41	H-16	楕円形	74	66	17	〃	第159図
SK-42	H-16	楕円形	132	120	77	〃	第159図
SK-43	H-16	楕円形	112	100	49	〃	第160図
SK-44	H-16	楕円形	52	40	23	〃	第160図
SK-45	H-16	円形	110	106	57	〃	第160図
SK-46	H・I-15・16	楕円形	(130)	110	74	〃	第160図
SK-47	F-10	楕円形	(62)	96	43	〃	第160図
SK-48	H・I-16	楕円形	96	68	13	〃	第160図
SK-49	F-10	楕円形	134	114	37	〃	第160図
SK-50	H-10	楕円形	134	124	34	〃	第160図
SK-51	H-10	円形	114	(64)	39	〃	第160図
SK-65	I-11	隅丸長方形	(128)	68	68	〃	第161図
SK-66	I-11	楕円形	144	108	20	SK-68より古	第161図
SK-67	J-11	隅丸長方形	148	(46)	65	なし	第161図
SK-68	I-10	隅丸長方形	(507)	79	71	SK-66より新	第161図
SK-69	I-10	楕円形	152	110	59	なし	第161図
SK-74	I-10	楕円形か	112	(50)	48	〃	第161図
SK-77	J-17	円形	34	30	32	〃	第161図
SK-78	J-16・17	不整楕円形	39	34	31	SK-95より新	第161図
SK-81	J-17	円形	36	32	27	なし	第161図
SK-82	J-17	不整楕円形	152	85	22	SK-83より古	第161図
SK-83	J-17	不整円形	42	36	22	SK-82より新	第161図
SK-85	J-17	楕円形	44	38	32	なし	第162図
SK-86	J-17	円形	42	40	38	SI-104より新	第162図
SK-87	J-17	不整楕円形	38	31	36	なし	第162図
SK-88	J-17	不整円形	34	28	34	〃	第162図
SK-90	J-17	楕円形	52	42	11	〃	第162図
SK-91	J-17	円形	35	32	18	〃	第162図
SK-94	I・J-16	隅丸長方形	152	62	30	〃	第162図
SK-95	J-16・17	楕円形	(46)	27	17	SK-78より古	第161図
SK-96	J-16	楕円形	30	21	14	なし	第162図
SK-98	J-16	不整楕円形	36	26	14	〃	第162図
SK-99	J-17	楕円形	45	35	23	SI-404より新	第162図
SK-100	J-17	不整円形	50	45	58	なし	第162図
SK-101	I・J-17	不整楕円形	62	35	49	〃	第162図
SK-102	I-17	楕円形	108	76	37	〃	第162図
SK-103	J-17	不整形	84	64	58	〃	第162図

第5節 古代以降の遺構と遺物

SK-106	I-19	円形	30	26	45	なし	第162図
SK-107	I-19	楕円形	30	27	55	〃	第162図
SK-108	I-19	楕円形	41	33	45	〃	第162図
SK-109	I-19	楕円形	31	24	54	〃	第162図
SK-111	I・J-4	円形	135	131	62	〃	第163図 底面に河原石・礎多量
SK-112	J-4	楕円形	92	62	26	〃	第163図
SK-113	H-4	不整楕円形	56	29	21	〃	第163図
SK-114	H-4	楕円形	31	31	15	〃	第163図
SK-115	H-4	不整楕円形	34	34	15	〃	第163図
SK-116	H-4	不整楕円形	53	34	22	〃	第163図
SK-117	H・I-4	円形	43	41	10	〃	第163図
SK-118	I-4	楕円形	75	61	18	〃	第163図
SK-119	I-4	円形	40	35	15	〃	第163図
SK-120	I-5	不整隅丸方形	80	75	42	〃	第163図
SK-121	I-5	円形	122	120	49	〃	第164図
SK-122	J-4・5	楕円形	166	80	85	〃	第164図
SK-123	I-4	楕円形	67	52	12	〃	第163図
SK-124	I-4	不整楕円形	31	30	28	〃	第164図
SK-126	I-4	楕円形	31	20	36	〃	第164図
SK-127	I-4	楕円形	38	29	12	〃	第164図
SK-128	J-5	楕円形	213	79	72	〃	第164図
SK-131	I-18	楕円形	43	29	57	〃	第164図
SK-132	I-18	楕円形	61	40	30	〃	第164図
SK-134	I-18	円形	38	37	62	SI-267Aより新	第164図
SK-135	I-18	楕円形	44	36	66	SI-267A-Bより新	第164図
SK-136	I-18	楕円形	39	31	40	なし	第164図
SK-137	I-19	楕円形	32	24	9	〃	第164図
SK-139	I-19	円形	109	108	75	〃	第164図
SK-140	I-19	楕円形	43	32	59	SI-267Aより新	第164図
SK-141	I-19	楕円形	44	34	48	なし	第164図
SK-142	I-19	円形	122	119	85	SK-236より新	第165図
SK-144	I-18	楕円形	32	24	9	SI-267A-Bより新	第165図
SK-146	I-18	楕円形	35	28	39	SI-267A-Bより新	第165図
SK-147	I-18	円形	36	36	105	SI-267A-Bより新	第165図
SK-148	I-18	楕円形	54	46	68	SI-267A-Bより新	第165図
SK-149	I-19	楕円形	38	31	39	なし	第165図
SK-150	I-19	円形	30	30	47	〃	第165図
SK-151	I-19	円形	31	28	12	〃	第165図
SK-152	H-19	楕円形	69	53	58	〃	第165図
SK-153	H-19	楕円形	34	25	51	〃	第165図
SK-155	H-19	楕円形	37	30	19	〃	第165図
SK-156	H-19	楕円形	36	29	22	〃	第165図
SK-157	I-18	円形	106	104	64	〃	第165図
SK-158	I-17	不整楕円形	56	50	55	〃	第165図
SK-159	I-17	円形	40	36	36	〃	第165図
SK-160	I-17	楕円形	41	31	26	〃	第165図
SK-161	I-17	楕円形	162	138	36	〃	第166図
SK-162	H-19	楕円形	80	76	39	〃	第166図
SK-163	H-19	円形	36	33	30	〃	第166図
SK-164	H-19	楕円形	44	38	13	〃	第166図
SK-165	H-18	楕円形	47	32	41	SI-267A-Bより新	第166図
SK-166	H-19	楕円形	54	42	49	なし	第166図
SK-167	H-18	円形	31	30	37	〃	第166図
SK-168	H-18	不整楕円形	42	37	18	〃	第166図
SK-171	H-19	不整楕円形	32	26	33	〃	第166図
SK-173	I-17	楕円形	48	41	19	〃	第166図
SK-174	I-19	楕円形	34	29	56	〃	第166図
SK-180	I-17	楕円形	38	24	11	〃	第166図

第3章 川戸釜八幡遺跡

SK-182	I-17	不整円形	40	36	19	なし	第166図
SK-184	I-17	楕円形	33	24	12	〃	第166図
SK-185	J-17	不整円形	39	37	37	〃	第166図
SK-186	J-17	不整円形	32	28	25	〃	第166図
SK-187	J-17	不整楕円形	42	31	14	〃	第166図
SK-191	J-17	円形	36	31	12	〃	第166図
SK-193	J-17	楕円形	36	31	42	〃	第166図
SK-194	I-17	円形	31	31	25	〃	第166図
SK-196	I-16	楕円形	38	30	41	〃	第166図
SK-211	G-19	楕円形	48	41	27	〃	第166図
SK-212	H-18・19	楕円形	52	40	19	〃	第167図
SK-213	G・18・19	不整楕円形	152	94	28	〃	第167図
SK-214	G-18	不整楕円形	111	67	37	〃	第167図
SK-215	G・H-18	楕円形	68	59	31	〃	第167図
SK-216	G・H-18	不整楕円形	137	87	26	〃	第167図
SK-217	G-18	不整楕円形	181	118	50	〃	第167図
SK-218	G-19	不整円形	39	38	20	〃	第167図
SK-219	G-18	隅丸長方形	190	98	19	SK-448より古	第167図
SK-220	H-18	不整隅丸長方形	210	172	43	SK-225・226・456・457	第168図
SK-221	H-17・18	不明	195	不明	46	SK-222・227・457	第168図
SK-222	H-17・18	楕円形か	258	不明	29	SK-221・227・457	第168図
SK-223	H-18	隅丸長方形か	(105)	86	25	SK-224より古	第167図
SK-224	H-17・18	楕円形か	122	75	23	SK-223より新	第167図
SK-225	H-18	楕円形	50	34	(22)	SK-220・456	第168図
SK-226	H-18	不整楕円形	117	78	(26)	SK-220・456	第168図
SK-227	H-17・18	不整隅丸長方形	90	64	43	SK-221・222	第168図
SK-228	H-18	楕円形	52	46	20	なし	第167図
SK-229	H-18	不整楕円形	140	80	17	〃	第168図
SK-230	H-18	不整楕円形	118	88	19	〃	第168図
SK-233	H-18	隅丸長方形	130	90	42	〃	第168図
SK-236	I-19	不整円形	61	56	21	SK-142より古	第168図
SK-242	I-17	楕円形	35	24	39	なし	第168図
SK-243	I-17	楕円形	31	22	43	〃	第169図
SK-244	I-17	不整形	126	120	38	SK-248より新	第169図
SK-245	I-17	楕円形	31	27	11	なし	第168図
SK-246	I-17	不整楕円形	54	42	24	〃	第169図
SK-248	I-17・18	不整楕円形	76	53	18	SK-244より古	第169図
SK-249	I-17	不整楕円形	54	42	32	なし	第169図
SK-251	I-17	円形	34	31	44	〃	第169図
SK-253	I-17	楕円形	36	32	44	〃	第169図
SK-254	I-17	楕円形	50	40	31	〃	第169図
SK-255	I-17	不整楕円形	30	25	16	〃	第169図
SK-257	I-17	不整楕円形	78	53	36	〃	第169図
SK-258	I-17	不整楕円形	64	50	24	〃	第169図
SK-263	I-17	楕円形	35	26	50	〃	第169図
SK-264	I-17	楕円形	34	17	11	〃	第169図
SK-266	I-19	楕円形	111	90	23	SI-267A・Bより新、SK-140・149・174より古	第169図 底面に多量の河原石・確認入
SK-301	E-16・17	円形	160	146	57	なし	第170図 底面に多量の河原石・確認入
SK-302	D-17	円形	109	103	70	〃	第170図 底面に多量の河原石・確認入
SK-303	D-17	不整形	110	102	73	〃	第170図 底面に多量の河原石・確認入
SK-304	E-18	不整楕円形	158	118	57	〃	第171図
SK-305	E-16	溝状	530	46	65	SK-306より新	第171図
SK-306	E-16	不整楕円形	73	61	95	SK-305より古	第171図
SK-307	I-5	楕円形	140	42	56	なし	第171図 墓坑(埋葬人骨・永楽通寶)
SK-308	I-5	楕円形	110	36	48	〃	第170図
SK-309	G-20	不整隅丸長方形	132	93	58	SK-310より古	第171図 墓坑(埋葬人骨・寛永通寶)
SK-310	G-20	不整隅丸長方形	115	73	47	SK-309より新	第171図 墓坑(埋葬人骨・寛永通寶・漆器)

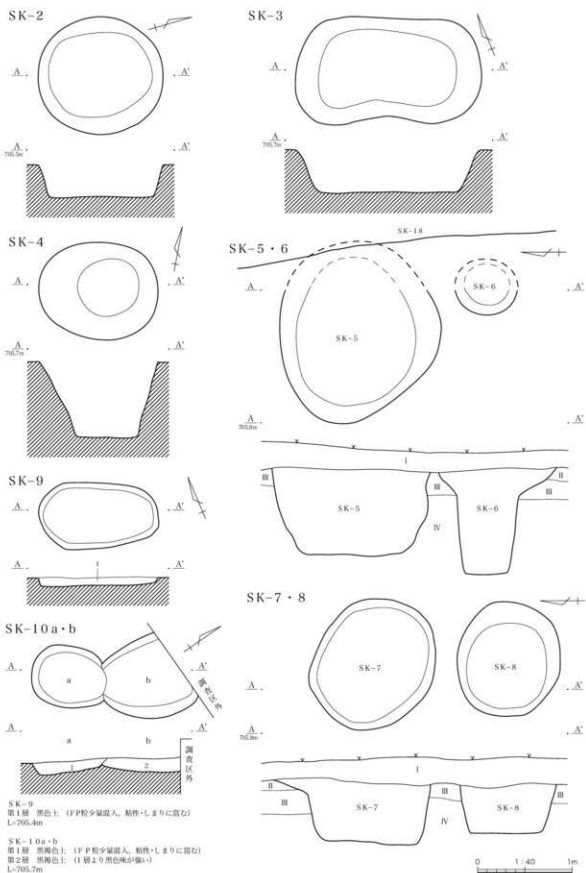
第5節 古代以降の遺構と遺物

SK-311	H-24・25	楕円形	132	110	64	なし	第172図	
SK-312	H-25	円形	83	83	40	〃	第172図	
SK-313	H-25	円形	92	90	53	〃	第172図	
SK-314	H-26	円形	122	122	28	SK-315・316より古	第172図	
SK-315	H-26	不整楕円形	41	18	48	SK-314より新	第172図	
SK-316	H-26	楕円形	46	39	63	SK-314より新	第172図	
SK-317	H・I-25	不整隅丸長方形	140	80	32	なし	第172図	
SK-318	H-26	楕円形	44	30	32	SK-319より新	第172図	
SK-319	H-26	楕円形	[38]	37	26	SK-318より古	第172図	
SK-320	H-26	楕円形	53	43	48	なし	第172図	
SK-321	H-26	円形	35	32	40	〃	第172図	治平元寶
SK-323	H-26	楕円形	35	25	28	SK-324より新	第172図	
SK-324	H-26	不整楕円形	[30]	18	14	SK-323より古	第172図	
SK-325	H-26	円形	36	33	32	なし	第172図	
SK-326	H-26	不整楕円形	58	58	67	〃	第172図	
SK-327	H-26	円形	42	41	50	〃	第173図	
SK-328	H-26	不整隅丸長方形	51	49	53	〃	第173図	
SK-329	H-26	楕円形	38	30	20	〃	第173図	
SK-332	I-25	楕円形	64	44	42	〃	第173図	
SK-333	I-25	楕円形	48	38	25	〃	第173図	
SK-334	I-25	楕円形	55	32	24	〃	第173図	
SK-335	I-25	楕円形	44	38	32	〃	第173図	
SK-336	H-25	楕円形	36	29	43	〃	第173図	
SK-337	H-25	円形	36	33	41	〃	第173図	
SK-339	H-25	円形	33	30	22	〃	第173図	
SK-340	H-25	楕円形	105	82	29	〃	第173図	
SK-341	H-26	円形	47	44	46	〃	第173図	
SK-342	H-26	楕円形	36	31	57	〃	第173図	
SK-344	H-26	円形	33	31	23	〃	第173図	
SK-345	H-26	楕円形	33	25	21	〃	第173図	
SK-346	H-26	楕円形	32	24	35	〃	第173図	
SK-348	H-26	円形	32	29	35	〃	第173図	
SK-349	H-25	楕円形	48	43	37	〃	第173図	
SK-350	H-25	円形	56	56	43	〃	第173図	
SK-351	H-25	円形	35	32	38	〃	第173図	
SK-352	H-25	不整楕円形	52	44	21	〃	第174図	
SK-353	H-25	不整楕円形	101	71	28	〃	第174図	石臼
SK-354	H-25・26	楕円形	82	25	16	〃	第174図	
SK-356	I-26	楕円形	44	32	38	〃	第174図	
SK-357	I-26	不整円形か	92	(46)	15	〃	第174図	
SK-359	I-25	円形	[42]	40	15	SK-371より古	第174図	
SK-374	H-26	楕円形	41	26	23	なし	第174図	
SK-375	I-26	楕円形	55	33	32	〃	第174図	
SK-376	H-25	楕円形	34	30	36	〃	第174図	
SK-377	I-25	溝状	(152)	36	19	SK-365・378より古	第174図	
SK-378	I-25	不整楕円形	48	34	16	SK-377より新	第174図	
SK-383	H-21	円形	100	100	81	なし	第175図	底面に多量の河原石・礫混入
SK-384	H-21	円形	101	(66)	21	〃	第175図	底面に多量の河原石・礫混入
SK-385	H-15	楕円形	123	94	13	〃	第174図	
SK-386	H・I-15	楕円形	112	96	27	〃	第174図	
SK-387	I-15	楕円形	135	119	53	〃	第174図	
SK-388	I-15	楕円形	174	137	40	〃	第174図	墓坑(砥石・刀子)
SK-389	I-15・16	楕円形	86	80	28	〃	第174図	
SK-390	I-14	円形	110	107	34	〃	第175図	
SK-391	I-15	楕円形	117	100	38	SK-392より古	第175図	
SK-392	I-15	円形	96	88	28	SK-391より新	第175図	
SK-393	I-14・15	円形	109	104	19	なし	第175図	
SK-394	F-21	円形	124	121	55	〃	第175図	底面に多量の河原石・礫混入

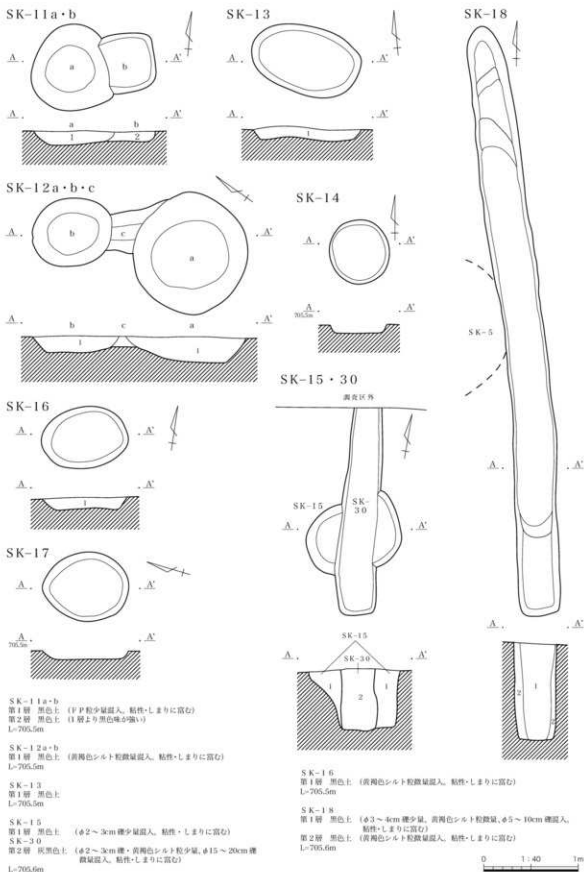
第3章 川戸釜八幡遺跡

SK-414	K-16	楕円形	43	32	40	なし	第175図
SK-416	K-16	楕円形	58	36	62	〃	第175図
SK-417	K-16	楕円形	81	76	69	〃	第175図
SK-418	K-16	円形	88	80	72	〃	第176図
SK-419	K-16	不整楕円形	(57)	64	37	SK-420	第176図
SK-420	K-16	不整楕円形	102	57	39	SK-419	第176図
SK-421	K-16	楕円形	45	38	55	なし	第176図
SK-422	K-16	楕円形か	(42)	56	39	SK-423	第176図
SK-423	K-16	不整楕円形か	66	58	57	SK-422	第176図
SK-424	K-16	楕円形	65	53	54	なし	第176図
SK-425	K-16	不整円形	66	60	51	SK-426	第176図
SK-426	K-16	円形か	(66)	66	31	SK-425・427	第176図
SK-427	K-16	不整楕円形	69	59	51	SK-426	第176図
SK-429	F-17	楕円形	82	42	16	なし	第176図
SK-430	F-17	楕円形	64	40	28	SK-431	第176図
SK-431	F-17	楕円形	(42)	42	16	SK-430	第176図
SK-432	F-17	円形	40	40	30	なし	第176図
SK-433	F-17	円形	34	32	19	〃	第176図
SK-434	F-17	楕円形	50	34	13	〃	第176図
SK-435	F-17	楕円形	32	28	13	〃	第176図
SK-440	G-10	楕円形	90	76	15	〃	第176図
SK-442	H・I-10	隅丸長方形	708	98	127	〃	第177図
SK-448	G-18	楕円形	76	47	26	SK-219より新	第167図
SK-449	H-18	不明	不明	145	34	SK-220・225・226より古?	第168図
SK-450	H-18	不明	不明	88	22	SK-220～222より古?	第168図
SK-451	I-17	楕円形	41	34	39	なし	第176図
SK-452	H-24・25	楕円形	96	89	64	〃	第176図
SK-453	H・I-23	隅丸長方形	134	91	52	〃	第177図
SK-454	J-17	楕円形	40	33	31	〃	第176図
SK-455	J-17	不整楕円形	52	38	30	〃	第176図
SK-456	J-17	不整楕円形	64	49	52	〃	第176図
SK-457	J-17	不整円形	44	42	28	〃	第176図
SK-458	J-17	不整円形	62	57	67	〃	第176図
SK-459	J-17	楕円形	30	26	8	〃	第176図
SK-460	J-17	不正楕円形	58	36	25	〃	第176図
SK-461	G-25	楕円形か	(26)	46	90	〃	第176図
SK-462	I-23	隅丸長方形	199	(54)	29	〃	第177図
SK-463	I-23	円形か	(52)	100	38	〃	第177図
SK-464	I-18	楕円形	39	31	65	SI-267A-Bより新	第177図
SK-465	I-18	円形	30	30	65	SI-267A-Bより新	第177図
SK-466	I-18	不整楕円形	56	42	34	なし	第177図
SK-467	I-18	不整楕円形	115	64	34	〃	第178図
SK-468	I-17・18	不整楕円形	55	39	50	〃	第177図
SK-469	I-18	不整楕円形	32	27	16	〃	第178図
SK-470	I-17	楕円形	41	34	56	〃	第178図
SK-471	I-17	不整形	46	41	21	〃	第178図
SK-472	I-17	楕円形	46	40	22	〃	第178図
SK-473	I-17	楕円形	36	31	24	〃	第178図
SK-474	J-18	楕円形	(108)	84	25	SI-380より新	第178図

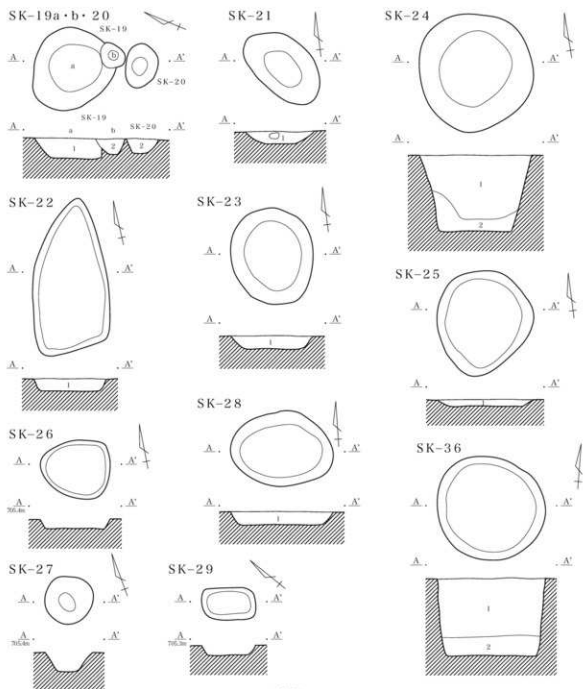
墓坑（頭部の下、胸・脚部の上に大型の長い河原石を置く）



第156図 SK-1～10実測図



第157図 SK-11~18・30実測図



SK-19a・b・20

第1層 黒色土 (黄褐色シルト粒の中多量、 $\phi 10 \sim 15\text{cm}$ 礫少量混入、粘性に中や弱凸、しなりに富む、SK-19a 腹上)
 第2層 黒色土 (黄褐色シルト粒少量混入、粘性・しなりに富む、SK-19b・20 腹上)
 L=705.4m

SK-21
 第1層 黒色土
 L=705.4m

SK-22
 第1層 黒色土
 L=705.4m

SK-23
 第1層 黒色土
 L=705.4m

SK-24

第1層 黒色土 ($\phi 2 \sim 5\text{cm}$ 礫・黄褐色シルト粒少量混入、粘性・しなりに富む)
 第2層 黒色土 ($\phi 10 \sim 20\text{cm}$ 礫多量、黄褐色シルト粒少量混入、粘性・しなりに中や富む)
 L=705.4m

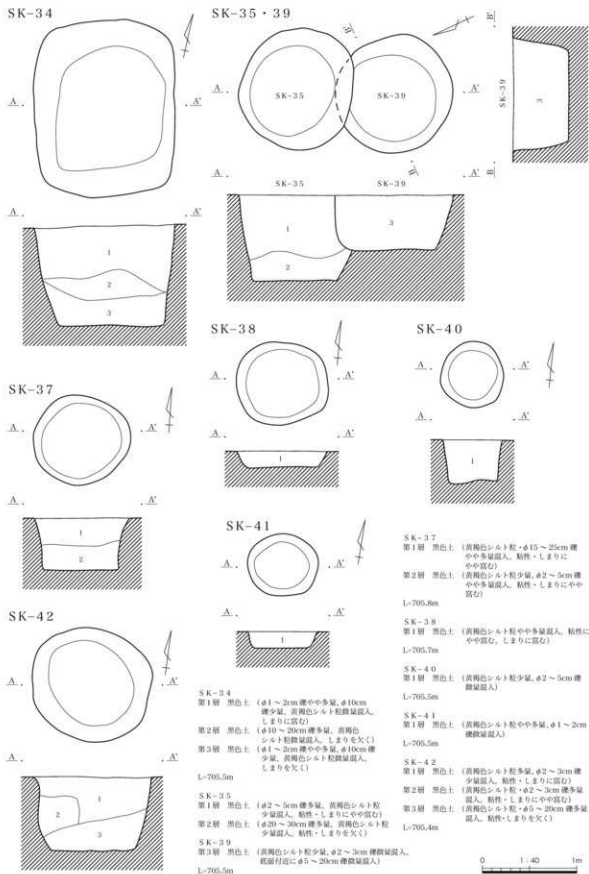
SK-25
 第1層 黒色土 (黄褐色シルト粒少量混入、粘性・しなりに富む)
 L=705.4m

SK-28
 第1層 黒色土
 L=705.3m

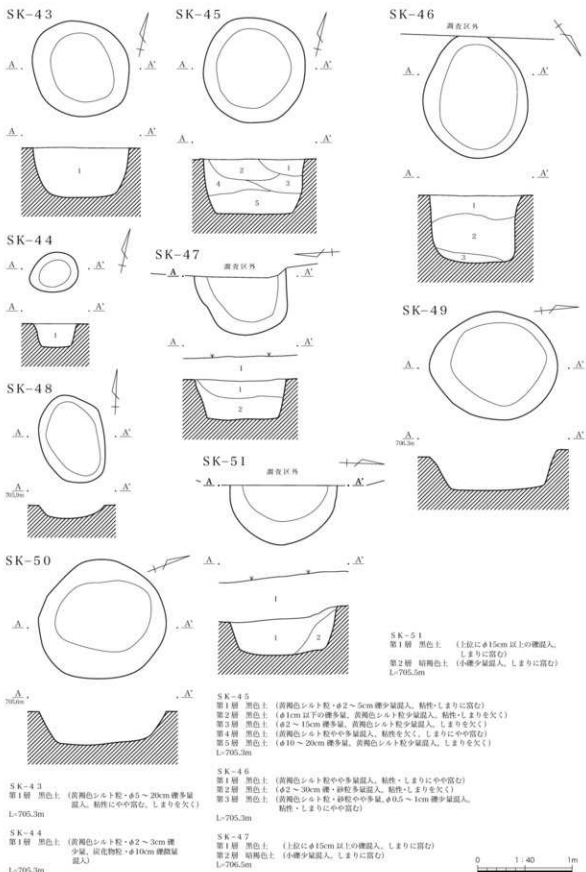
SK-36
 第1層 黒色土 ($\phi 1\text{cm}$ 礫多量、黄褐色シルト粒の中多量、 $\phi 2 \sim 3\text{cm}$ 礫少量混入、粘性・しなりに中や富む)
 第2層 黒色土 (黄褐色シルト粒・ $\phi 5 \sim 10\text{cm}$ 礫の中多量混入、粘性・しなりに欠く)
 L=705.8m

第158図 SK-19～29・36実測図

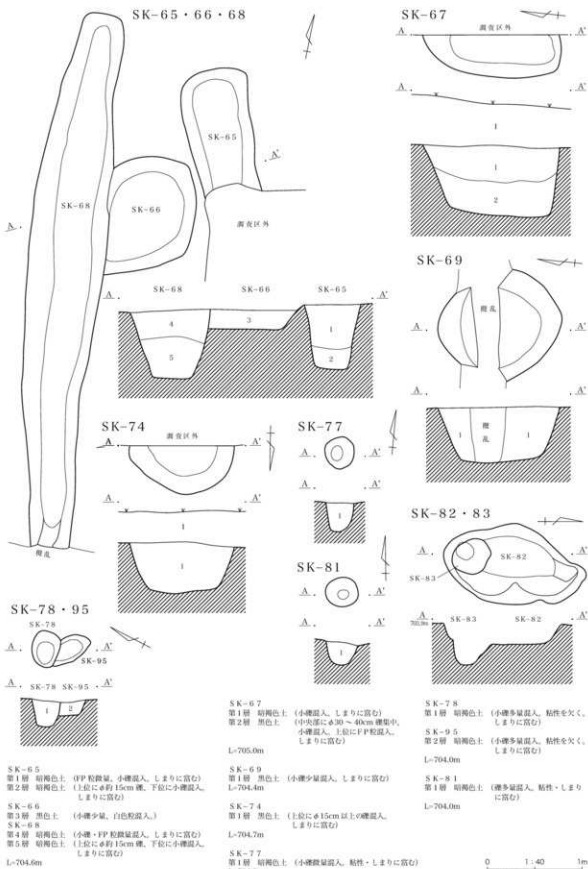
0 1:40 1m



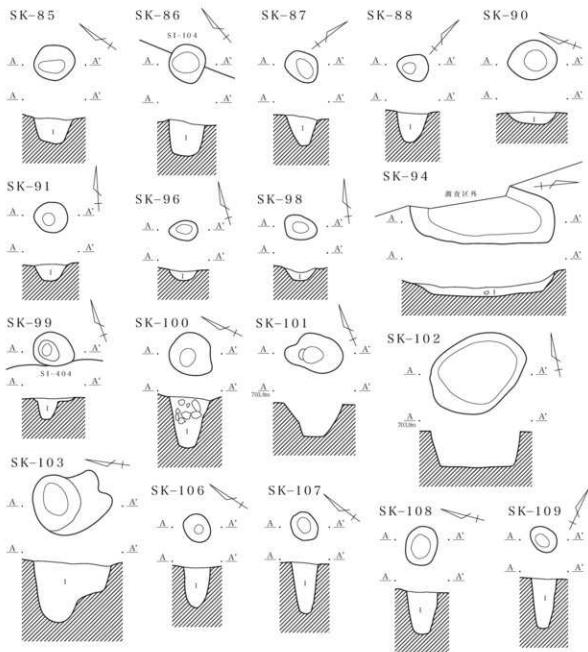
第159図 SK-34・35・37~42実測図



第160図 SK-43～51実測図



第161図 SK-65～69・74・77・78・81～83・95実測図



SK-85~87
第1層 暗褐色土 (小礫少量混入、粘性・しまりを欠く)
L=703.8m

SK-88
第1層 暗褐色土 (φ2~3cm 礫少量混入、粘性・しまりを欠く)
L=703.9m

SK-90
第1層 暗褐色土 (小礫少量混入、粘性・しまりに富む)
L=704.0m

SK-91
第1層 暗褐色土 (小礫少量混入、粘性・しまりに富む)
L=704.0m

SK-94
第1層 暗褐色土 (礫混入混入、粘性・しまりに富む)
L=704.0m

SK-96
第1層 暗褐色土 (小礫少量混入、粘性に富む、しまりを欠く)
L=704.0m

SK-98
第1層 暗褐色土 (小礫混入、粘性に富む、しまりを欠く)
L=704.1m

SK-99
第1層 暗褐色土 (小礫少量混入、粘性を欠く、しまりに富む)
L=703.9m

SK-100
第1層 暗褐色土 (大礫混入、粘性に富む、しまりを欠く)
L=703.9m

SK-103
第1層 暗褐色土 (大礫混入、粘性を欠く、しまりに富む)
L=703.8m

SK-106
第1層 黒色土 (φ2~3cm 礫混入、粘性・しまりをやや欠く)
L=703.9m

SK-107
第1層 暗褐色土 (φ3~8cm 礫混入、粘性・しまりに富む)
L=704.0m

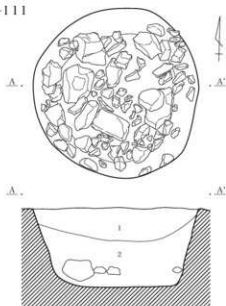
SK-108
第1層 暗褐色土 (小礫混入、粘性・しまりに富む)
L=704.1m

SK-109
第1層 暗褐色土 (小礫混入、粘性・しまりに富む)
L=704.1m

第162図 SK-85~88・90・91・94・96・98~103・106~109 実測図

0 1:40 1m

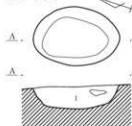
SK-111



SK-111
第1層 黒色土 (大～小河原石・礫中～多量混入。粘性を中～欠く。しまりに富む)
第2層 黒褐色土 (下部に大～小河原石・礫多量、F.P.粒少量混入。粘性・しまりを欠く。)
L:705.1m

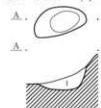
0 1:30 1m

SK-112



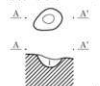
SK-112
第1層 黒褐色土 (F.P.粒中～多量、大～中礫混入。粘性を中～欠く。しまりに富む)
L:704.9m

SK-113



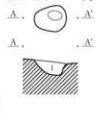
SK-113
第1層 黒色土 (大～中礫中～多量混入。粘性を中～欠く。しまりに富む)
L:705.0m

SK-114



SK-114
第1層 暗褐色土 (礫中～多量、黄褐色シルト粒混入。)
L:705.6m

SK-115



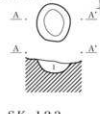
SK-115
第1層 暗褐色土 (礫中～多量、黄褐色シルト粒混入。)
L:705.6m

SK-116



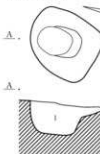
SK-116
第1層 暗褐色土 (礫中～多量、黄褐色シルト粒混入。)
L:705.6m

SK-119

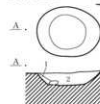


SK-117
第1層 暗褐色土 (F.P.粒少量混入。粘性に富む。しまりを欠く)
L:705.3m

SK-120



SK-123



SK-118
第1層 黒褐色土 (中～小礫多量、F.P.粒中～多量混入。粘性に中～富む。しまりに富む)
L:705.3m

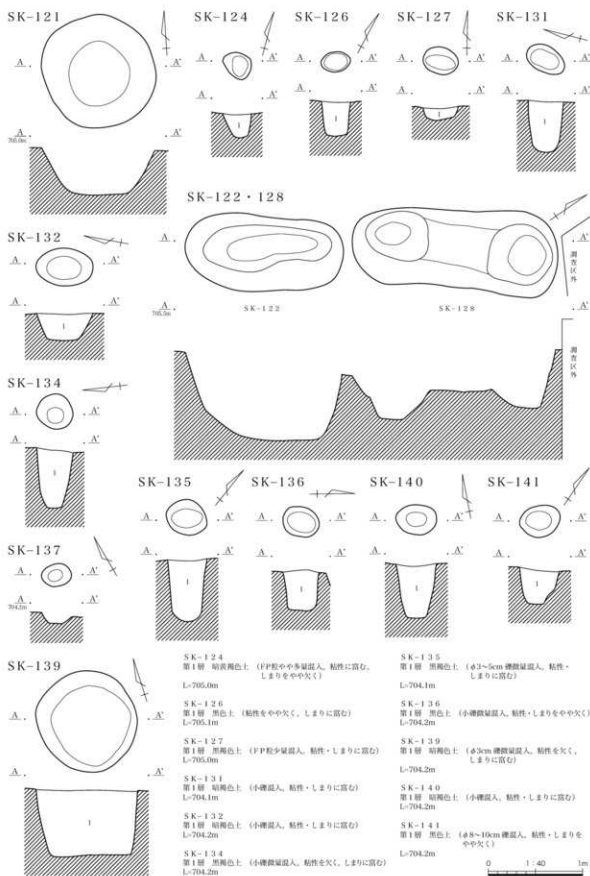
SK-119
第1層 黒色土 (粘性・しまりに富む)
L:705.1m

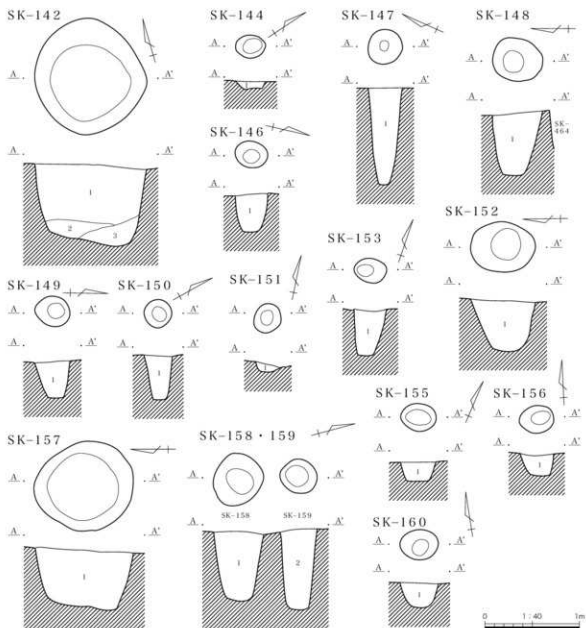
SK-120
第1層 暗褐色土 (F.P.粒中～多量混入。粘性に富む。しまりを中～欠く)
L:705.0m

SK-123
第1層 黄褐色土 (F.P.粒主体。粘性を欠く。しまりに富む)
第2層 黒褐色土 (F.P.粒少量混入。粘性・しまりに富む)
L:705.0m

0 1:40 1m

第163図 SK-111～120・123実測図





SK-142
第1層 暗褐色土 (溝状畚入, 粘性を欠く, しまりに富む)
第2層 暗褐色土 (φ2~3cm 礫多量混入, 粘性・しまりに富む)
第3層 黒褐色土 (溝状畚入, 粘性・しまりに富む)
L-704.1m

SK-144
第1層 暗褐色土 (小礫混入, 粘性・しまりに富む)
L-704.2m

SK-146
第1層 黒褐色土 (粘性・しまりに富む)
L-704.3m

SK-148
第1層 暗褐色土 (φ4~6cm 礫混量混入, 粘性・しまりに富む)
L-704.4m

SK-149
第1層 暗褐色土 (溝状畚混入, 粘性・しまりに富む)
L-704.2m

SK-150
第1層 暗褐色土 (φ2~3cm 礫混量混入, 粘性・しまりに富む)
L-704.3m

SK-151
第1層 黒色土 (φ8~10cm 礫混入, 粘性・しまりに富む)
L-704.2m

SK-152
第1層 黒褐色土 (φ10cm 炭灰混量混入, 粘性・しまりに富む)
L-704.3m

SK-153
第1層 暗褐色土 (φ2~3cm 礫混量混入, 粘性・しまりに富む)
L-704.3m

SK-155
第1層 暗褐色土 (φ1~2cm 礫混量混入, 粘性・しまりに富む)
L-704.3m

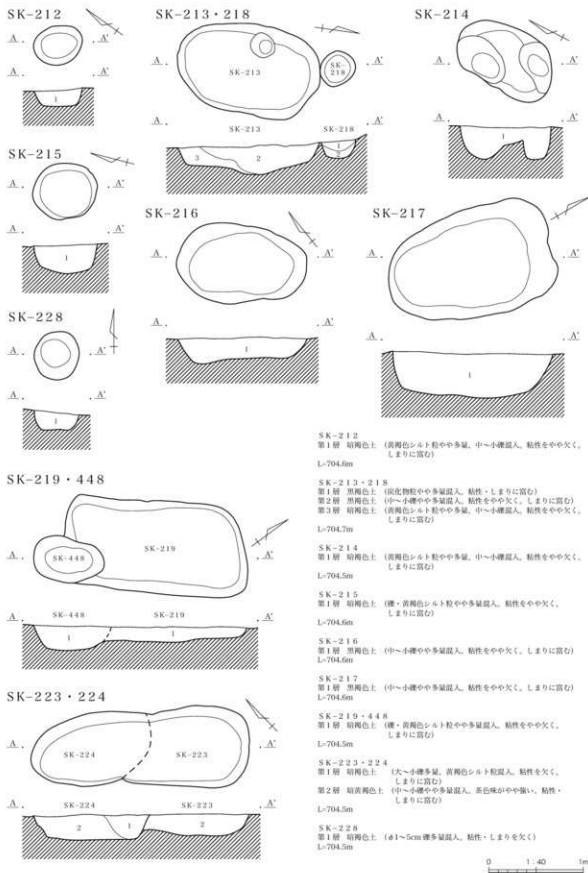
SK-156
第1層 暗褐色土 (φ2~5cm 礫混量混入, 粘性・しまりに富む)
L-704.3m

SK-157
第1層 暗褐色土 (φ10~15cm 礫多量混入, 粘性・しまりに富む)
L-704.5m

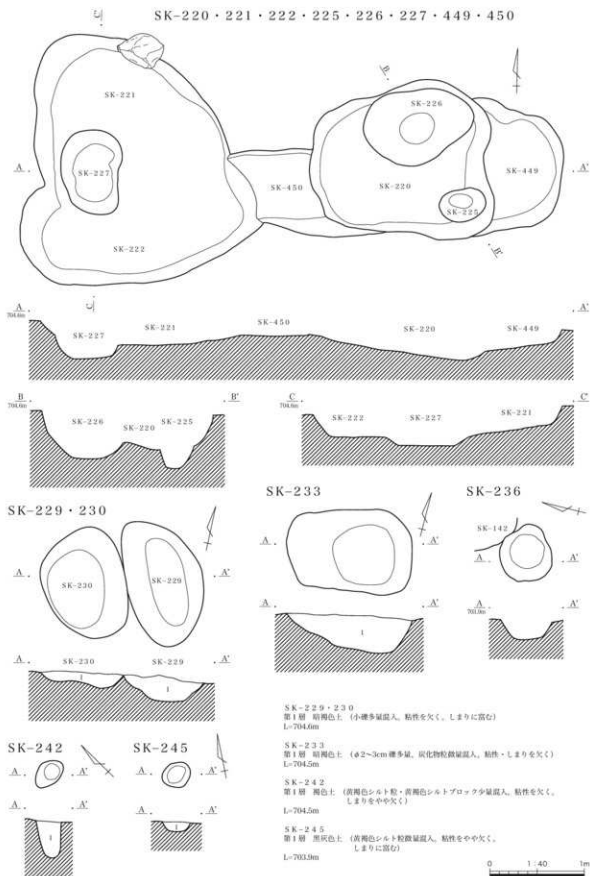
SK-158
第1層 黒色土 (φ2cm 礫混入, しまりに富む)
SK-159
第2層 黒色土 (φ2cm 礫混入, しまりに富む)
L-704.5m

SK-160
第1層 黒色土 (φ2cm 礫混入, しまりに富む)
L-704.6m

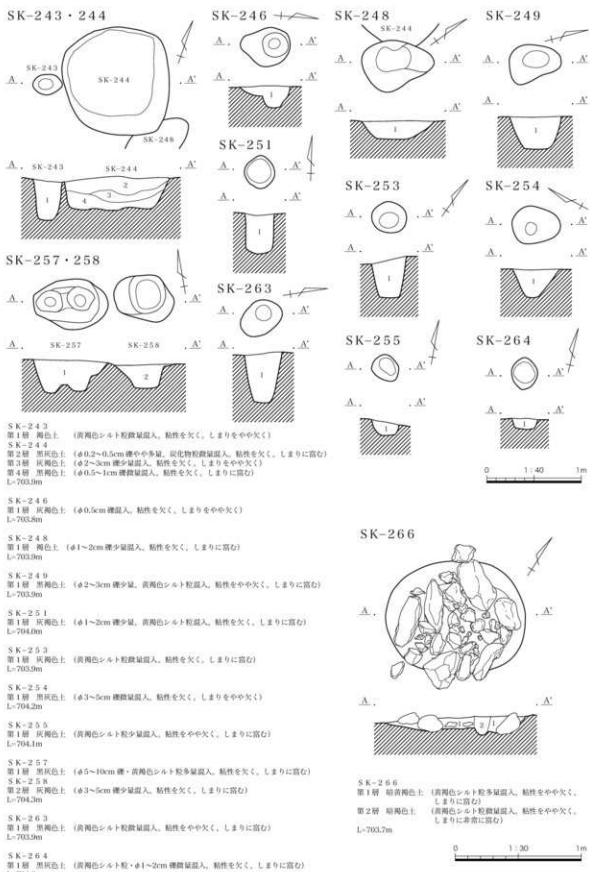
第165図 SK-142・144・146~153・155~160実測図



第167図 SK-212～219・223・224・228・448実測図

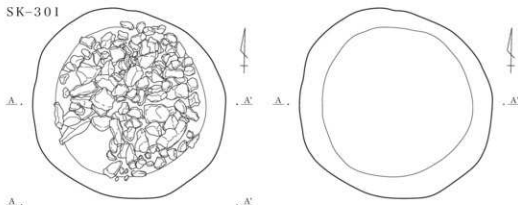


第168図 SK-220~222・225~227・229・230・233・236・242・245・449・450実測図



第169図 SK-243・244・246・248・249・251・253~255・257・258・263・264・266実測図

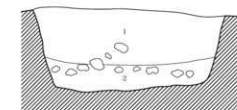
SK-301



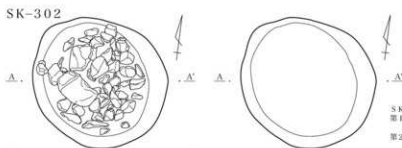
SK-301

第1層 黒褐色土 (F.P.粒少量・下位に大~小河原石・礫混入。粘性を中や欠く。しまりに富む)
第2層 黒褐色土 (小礫主体。上位に大~小河原石・礫混入。粘性に富む。しまりを中や欠く)

L=705.9m



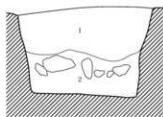
SK-302



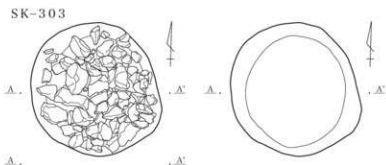
SK-302

第1層 黒褐色土 (F.P.粒少量・下位に大~小河原石・礫混入。粘性を中や欠く。しまりに富む)
第2層 黒褐色土 (小礫主体。上位に大~小河原石・礫混入。粘性に富む。しまりを中や欠く)

L=705.8m



SK-303

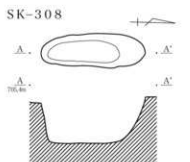


SK-303

第1層 黒褐色土 (F.P.粒少量・下位に大~小河原石・礫混入。粘性を中や欠く。しまりに富む)
第2層 黒褐色土 (小礫主体。上位に大~小河原石・礫混入。粘性に富む。しまりを中や欠く)

L=705.7m

SK-308

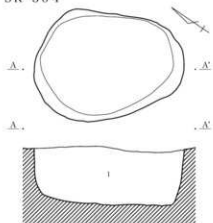


0 1:40 1m

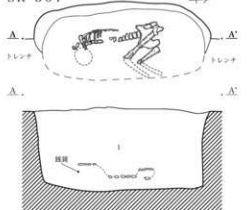
0 1:30 1m

第170図 SK-301~303・308実測図

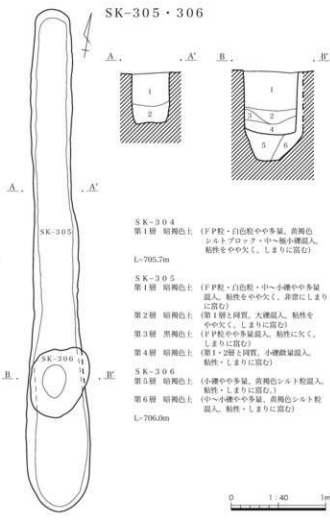
SK-304



SK-307



SK-305・306



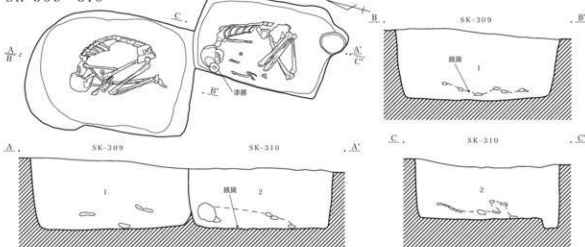
SK-304
第1層 暗褐色土 (F.P.粒・白色粒や中多量、黄褐色シルトブロックや中～細小礫混入、粘性をやや欠く、しまりに富む)
L=705.7m

SK-305
第1層 暗褐色土 (F.P.粒・白色粒・中～小礫や中多量混入、粘性をやや欠く、非常にしまりに富む)
第2層 暗褐色土 (第1層と同質、大礫混入、粘性をやや欠く、しまりに富む)
第3層 黒褐色土 (F.P.粒や中多量混入、粘性に欠く、しまりに富む)
第4層 暗褐色土 (第1・2層と同質、小礫混入量混入、粘性・しまりに富む)

SK-306
第5層 暗褐色土 (小礫や中多量、黄褐色シルト粒混入、粘性・しまりに富む)
第6層 暗褐色土 (中～小礫や中多量、黄褐色シルト粒混入、粘性・しまりに富む)
L=706.0m



SK-309・310

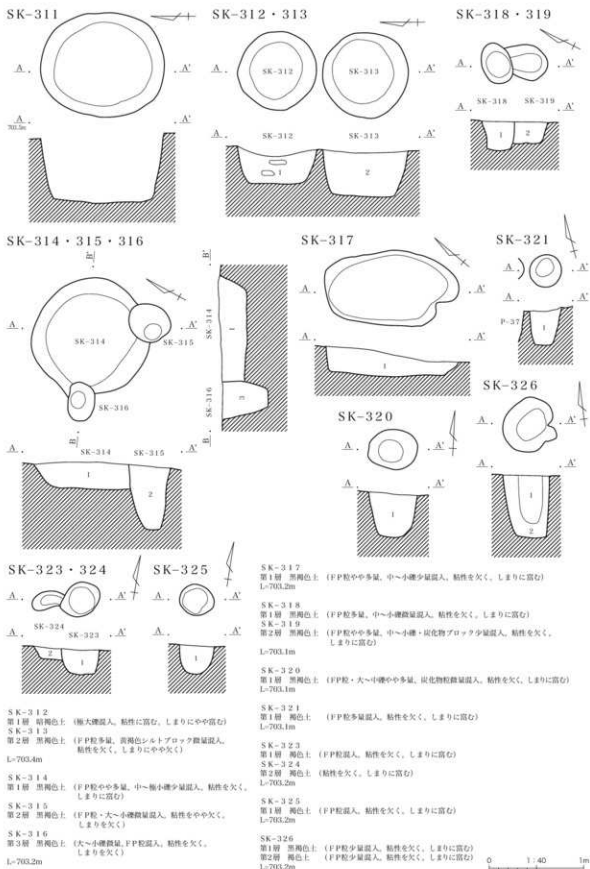


SK-307
第1層 黒褐色土 (F.P.粒多量、小礫混入、粘性をやや欠く、しまりにやや中欠く)
L=705.4m

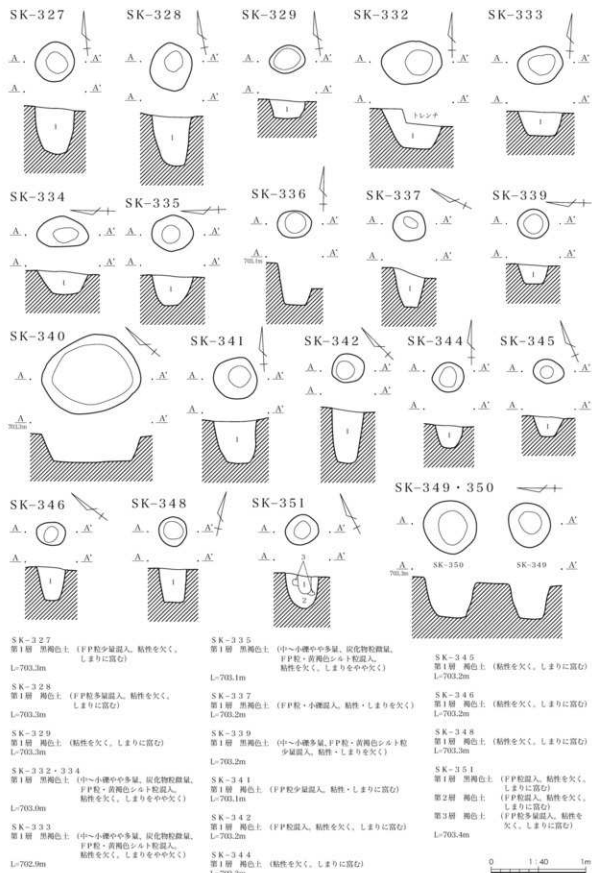
SK-309
第1層 黒褐色土 (小礫混入、黄褐色シルトブロック・暗褐色ブロック混入、粘性をやや欠く、しまりにやや富む)
SK-310
第2層 黒褐色土 (小礫・黄褐色シルトブロック混入量混入、粘性をやや欠く、しまりに富む)
L=705.1m



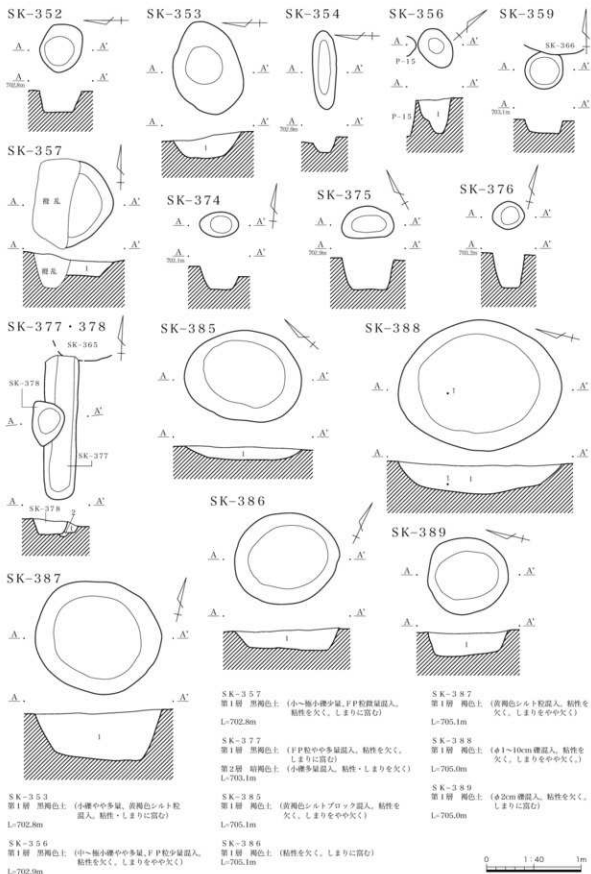
第171図 SK-304～307・309・310実測図



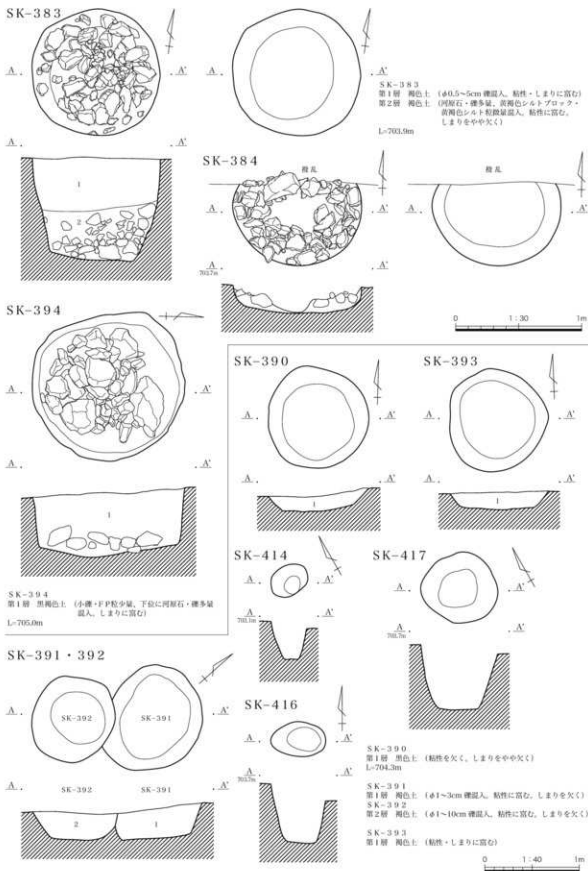
第172図 SK-311～321・323～326実測図



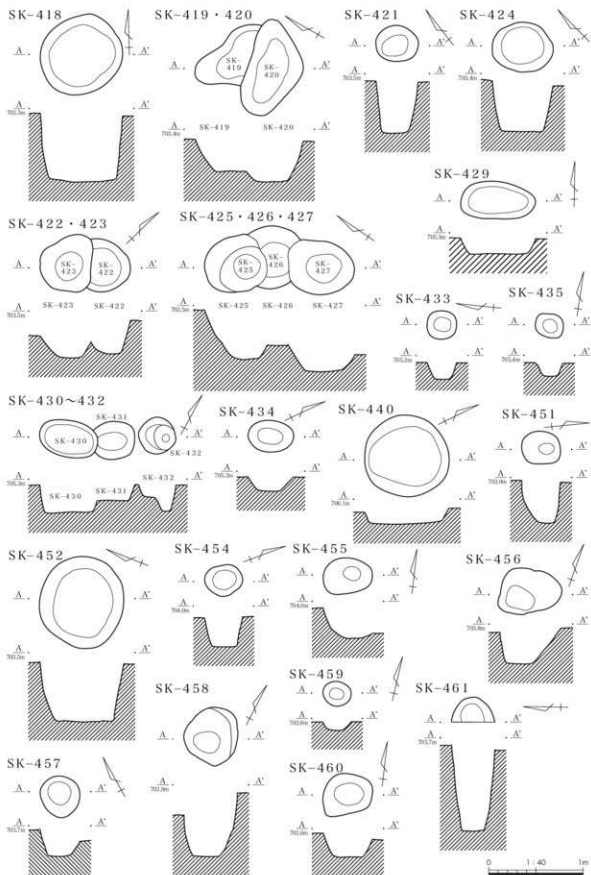
第173図 SK-327～329・332～337・339～342・344～346・348～351 実測図



第174図 SK-352~354・356・357・359・374~378・385~389実測図

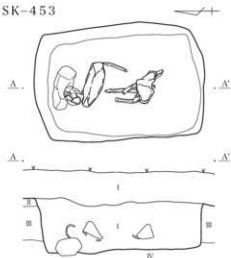


第175図 SK-383・384・390~394・414・416・417実測図



第176図 SK-418～427・429～435・440・451・452・454～461実測図

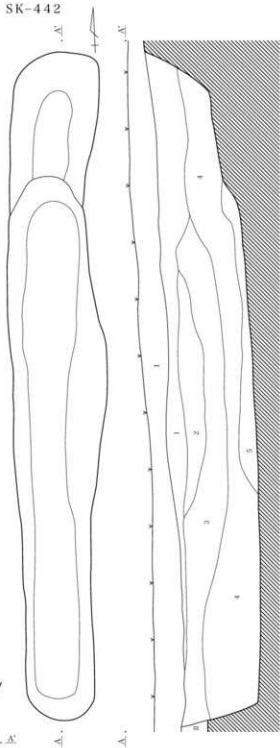
SK-453



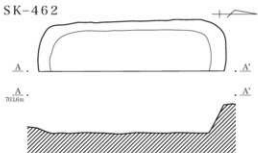
SK-453
第1層 黒褐色土 (小礫多量、下段に炭化材少量混入、しまりに腐む)
L=703.9m

0 1:30 1m

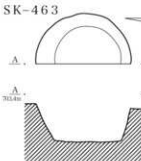
SK-442



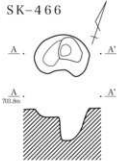
SK-462



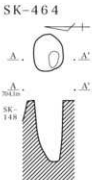
SK-463



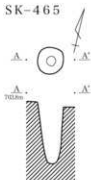
SK-466



SK-464



SK-465



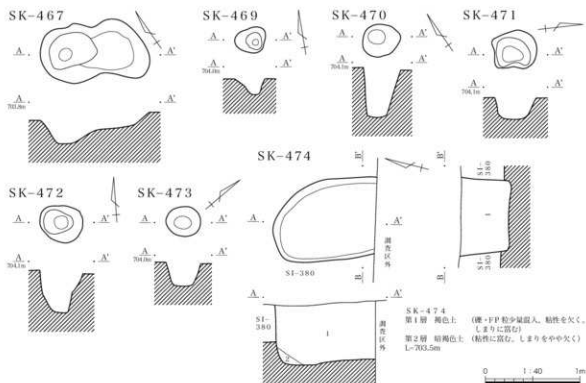
SK-468



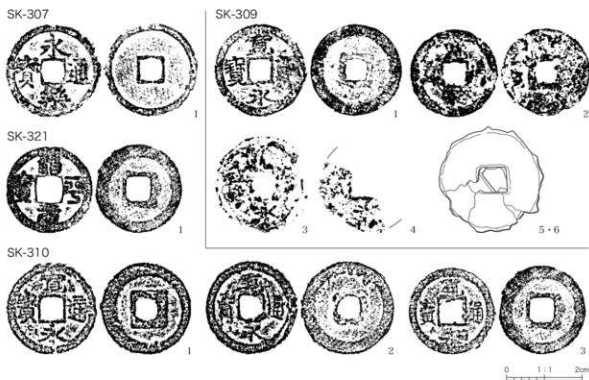
SK-442
第1層 黒色土 (φ6~10cm 礫多量, φ5cm 礫少量混入)
第2層 黒色土 (φ5~10cm 礫多量混入)
第3層 黒褐色土 (F P粒少量混入)
第4層 黒褐色土 (φ5~5cm 礫多量混入)
第5層 黒色土 (F P粒多量混入)
L=705.2m

0 1:40 1m

第177図 SK-442・453・462~466・468実測図

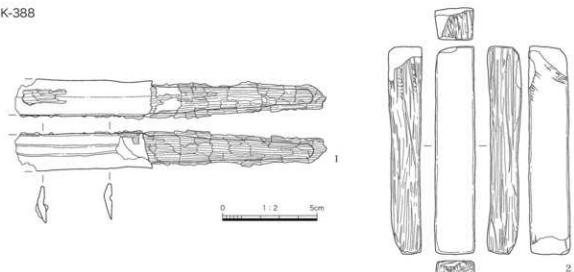


第178図 SK-467・469～474 実測図

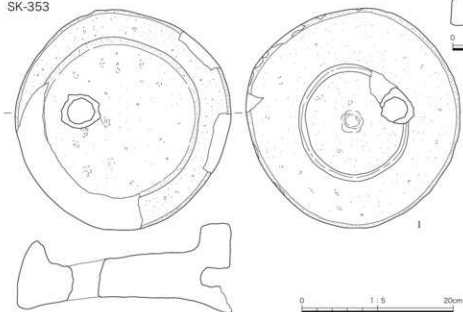


第179図 SK-307・309・310・321 遺物実測図

SK-388



SK-353



第180図 SK-353・388 遺物実測図

第11表 古代以降土坑出土銭貨観察表

(): 残存像

遺物番号	遺物番号	銭貨名	材質	外縁径 (mm)	外縁幅 (mm)	外縁厚 (mm)	孔径 (mm)	重量 (g)	背文	押印	国版	備考
SK-307	1	水菜通寶	銅	24.9	2.2	1.4	5.9	3.0	なし	第179図	五四	幕坑、腕付近出土の六道銭
SK-309	1	寛永通寶	銅	24.7	2.4	1.2	5.6	2.9	なし	〃	〃	〃
SK-309	2	寛永通寶	銅	24.1	3.0	1.7	5.9	3.7	なし	〃	〃	〃
SK-309	3	寛永通寶	鉄	25.7	3.0	3.0	5.7	2.7	なし	〃	〃	〃
SK-309	4	寛永通寶	鉄 (23.7)	2.9	2.4	(5.4)	0.7	なし	〃	〃	〃	〃
SK-309	5・6	寛永通寶	鉄	28.7	3.0	9.6	6.0	5.9	なし	〃	〃	〃 2枚が揃により總着
SK-310	1	寛永通寶	銅	24.1	2.5	1.2	5.9	2.7	なし	〃	〃	幕坑、腕付近出土の六道銭
SK-310	2	寛永通寶	銅	24.6	2.6	1.3	5.8	2.6	なし	〃	〃	幕坑、腕付近出土の六道銭
SK-310	3	寛永通寶	銅	23.5	2.5	1.1	6.4	2.3	なし	〃	〃	幕坑、腕付近出土の六道銭
SK-321	1	治平元寶	銅	23.5	2.7	1.3	6.9	3.7	なし	〃	〃	北東銭、篆書

第12表 古代以降土坑出土遺物観察表

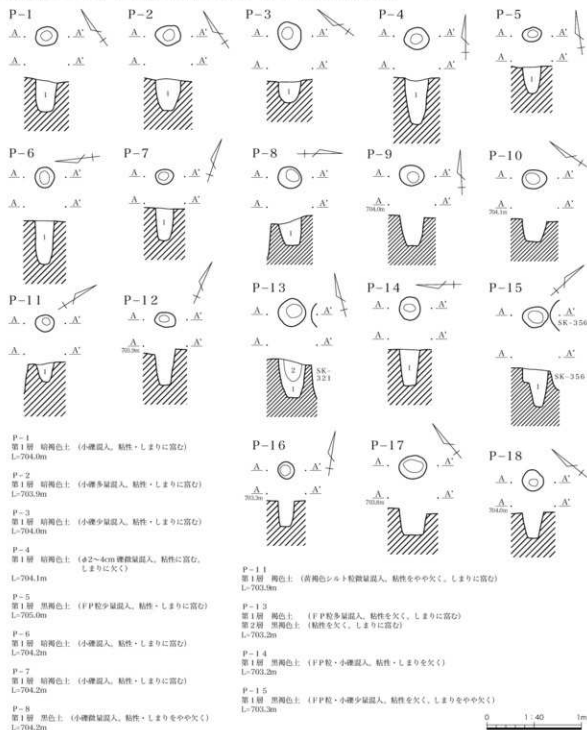
(): 残存像

遺物番号	遺物番号	器種	材質 (石質)	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	押印	国版	備考
SK-388	1	小刀	鉄	16.3	2.0	0.7	25.8	第180図	五四	幕坑、底面+5cm覆土出土
SK-388	2	砥石	頁岩	16.4	3.1	2.2	253.6	〃	〃	〃
SK-353	1	石臼	禪石安山岩	29	28	11.9	(8,900)	〃	〃	底面~覆土中位、一部欠損

3. 小穴

調査区内からは土坑以外に柱穴状の小穴を確認した。小穴はいずれも第II層上で確認したもので、規則的な配置をとるものは少なく、調査前まで利用されていた農作業に係わるものが多く含まれている。

ここでは平面図と断面図、計測値などの一覧表を示す。なお、遺構内に位置する小穴の規模や深さなどの計測値については、それぞれの遺構で示しているため本項では除外した。



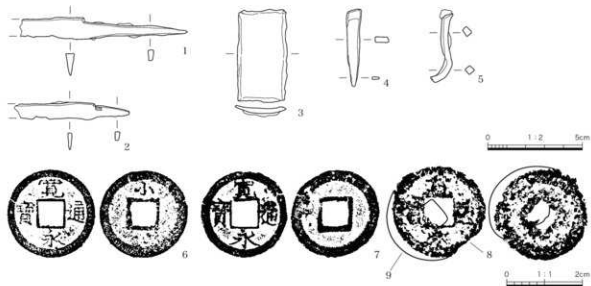
第181図 P-1～18実測図

第13表 古代以降小穴一覧

単位: cm

遺構番号	位置	平面形	長径	短径	深さ	重複関係	押図
P-1	J-17	楕円形	23	20	33	なし	第181図
P-2	J-17	不整楕円形	28	21	33	〃	〃
P-3	J-17	不整楕円形	29	24	22	〃	〃
P-4	I-18	楕円形	26	24	46	〃	〃
P-5	I-4	楕円形	20	15	28	〃	〃
P-6	I-19	円形	21	21	46	〃	〃
P-7	I-18	楕円形	19	16	34	SI-267Aより新	〃
P-8	I-18	不整円形	25	24	27	SI-267Aより新	〃
P-9	J-17	楕円形	26	22	31	なし	〃
P-10	J-16	楕円形	26	20	24	〃	〃
P-11	I-17	楕円形	20	18	20	〃	〃
P-12	I-17	楕円形	22	15	34	SI-443より新	〃
P-13	H-26	円形	35	32	36	なし	〃
P-14	H-25	円形	25	23	38	SK-353より新	〃
P-15	I-26	楕円形	28	22	35	なし	〃
P-16	H-26	円形	18	18	26	〃	〃
P-17	J-17	楕円形	28	24	26	〃	〃
P-18	J-17	不整円形	23	22	27	〃	〃

4. 遺構外出土遺物



第182図 古代以降遺構外出土遺物実測図

第14表 古代以降遺構外出土遺物観察表

(): 残存値

遺物番号	器種	材質	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	押図	図版	備考	
1	刀子	鉄	(8.7)	1.2	5.8	7.6	第182図	五四	H13(a)区出土。刃部先端部の半分欠損。両側が平坦な造り	
2	刀子	鉄	(6.0)	0.9	4.0	4.1	〃	〃	H13(a)区出土。刃部先端部の半分欠損。木質残る	
3	鉄板	鉄	5.0	2.6	5.5	22.2	〃	〃	H13(a)区出土	
4	釘	鉄	4.1	0.7	4.0	2.2	〃	〃	H13(b)区出土	
5	釘	鉄	3.8	0.7	4.6	2.8	〃	〃	H13(a)区出土	

遺物番号	銭貨名	材質	外縁径 (mm)	外縁幅 (mm)	外縁厚 (mm)	孔径 (mm)	重量 (g)	背文	押図	図版	備考	
6	寛永通寶	銅	23.7	2.5	1.2	6.6	2.3	小	第182図	五四	H11(b)区西側南北トレンチ出土	
7	寛永通寶	銅	23.2	2.3	1.1	6.9	2.0	無し	〃	〃	H16区出土	
8	寛永通寶	銅	24.8	2.5	1.6	7.3	6.4	無し	〃	〃	H11(a)区出土。錆により8と磨着	
9	寛永通寶	銅	24.2	3.4	1.6	6.3	〃	無し	〃	〃	〃。錆により8と磨着	